

中央自動車道長野線  
埋蔵文化財発掘調査報告書11

—明科町内—

北 村 遺 跡

本 文 編

1 9 9 3

日本道路公団名古屋建設局  
長野県教育委員会  
（財）長野県埋蔵文化財センター

中央自動車道長野線  
埋蔵文化財発掘調査報告書11

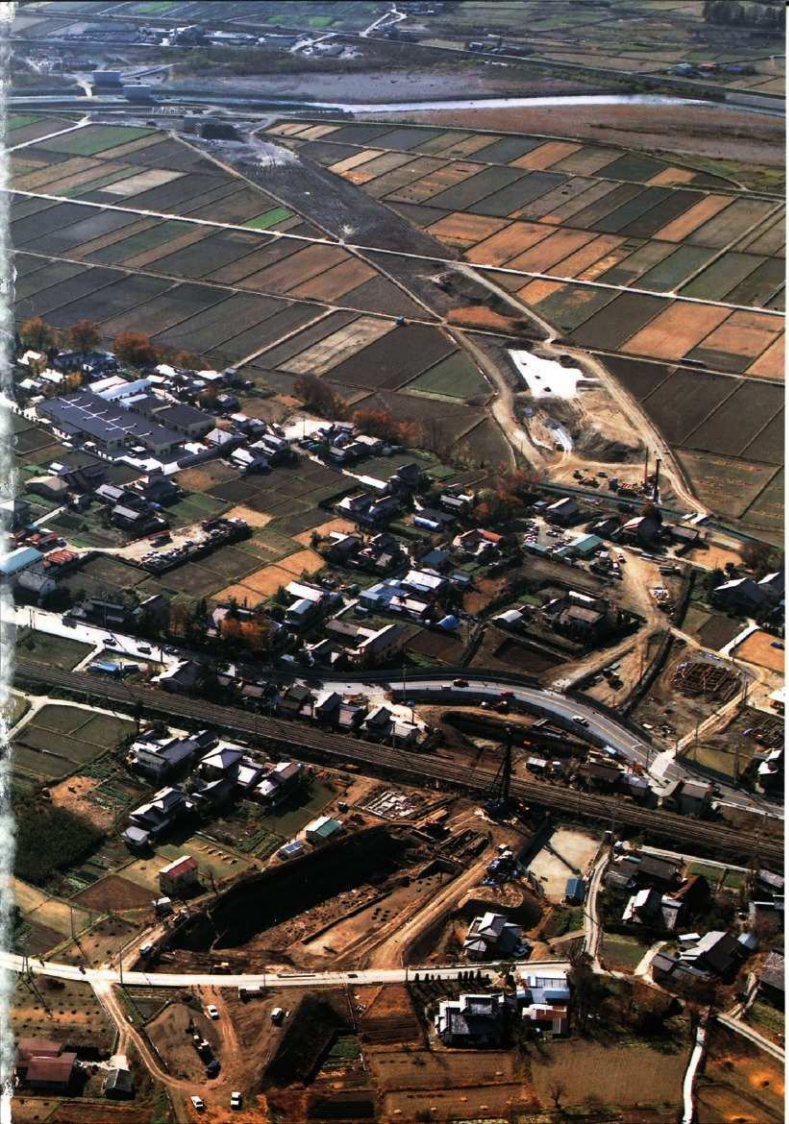
—明科町内—

北 村 遺 跡

本 文 編

1 9 9 3

日本道路公団名古屋建設局  
長野県教育委員会  
(財)長野県埋蔵文化財センター





# 序

松本平の中央部を北進する中央自動車道長野線は、東筑摩郡明科町から進路を東に向け筑摩山地を抜け、筑北盆地を通過し善光寺平へ入っていきます。北村遺跡は、この自動車道が豊科ICをすぎ北アルプス連峰を左手にみながら犀川をわたり、間もなく筑摩山地を抜けるトンネル直前のJ R篠ノ井線・国道19号線と交差する部分に位置しております。

発掘調査は、貴重な遺構が続出したため、大巾な期間延長となり、昭和62年度から2年間にわたりました。その結果、整理作業も調査終了の後、4年間を費し実施してまいりました。すでに長野線関係の発掘報告書も10冊を刊行しましたが、この北村遺跡が松本平での最後の報告書となります。

調査成果の概要については、現地説明会・遺物展示会・勸長野県埋蔵文化財センター年報・長野県埋蔵文化財ニュース等によって公開してまいりました。特に、調査された縄文時代後期の墓とそこから出土した人骨資料は、長野県内のみならず、全国的にみても希有な例として注目を浴び、現地説明会には県内外から3000人をも越える見学者に参会していただきました。その後の整理も、考古学的分野、人類学的分野に大きく分けて行い、それを統合するという形で今回の報告書となりました。大きな成果としては、縄文時代の300基を越える墓や多数の人骨資料の分析を通し、当時の人々の暮らしぶりをはじめとした生活環境や、物の流通や人の交流などの社会組織の一端を明らかにすることができました。今後の縄文時代研究の、大きな道しるべとなることが期待されております。

おわりにあたり、発掘作業から本書刊行に至るまで、深い御理解と御協力をいただいた、日本道路公団名古屋建設局・同豊科工事事務所・長野県高速道局・同豊科高速道事務所・地元明科町・地区用地被買収組合(者)等関係機関及び地元協力者、並びに調査や整理に多大な御指導をいただいた明治大学・獨協医科大学・東京大学や発掘や整理作業に従事御協力された多くの方々、そして、この発掘調査を受託し適切な指導をされた長野県教育委員会文化課と、幾多の難関を乗り越り今日を迎えた当埋蔵文化財センター職員

平成5年3月31日

財団法人長野県埋蔵文化財センター

理事長 宮崎 和順

## 例 言

- 1 本書は、中央自動車道長野線建設工事に係る、長野県東筑摩郡明科町内北村遺跡（EKM）発掘調査報告書の本文編である。
- 2 北村遺跡の概要については、すでに、当センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』4～9および『長野県埋蔵文化財ニュース』No22・24～26、『日本考古学協会年報』43で報告している。それらと本書の記述に相違があるが、本報告を最終とする。
- 3 本書は、考古学・形質人類学・環境生態学・考察の4部構成をとり、遺構・遺物の実測図と写真は図版編として別冊に一括した。ただし、第2部6・7章の写真のみは本文中に含めてある。
- 4 報告書作成にあたり、以下の方々から玉稿を賜った。記して厚くお礼申し上げたい。  
金沢大学 鈴木三男氏、農林省森林総合研究所 能城修一氏・・・第1部第3章第2節付録  
獨協医科大学 茂原信生氏・・・・・・・・・・・・・・・・第2部第6章  
獨協医科大学 櫻井秀雄氏、茂原信生氏・・・・・・・・第2部第7章  
東京大学 赤沢威氏、米田稔氏、吉田邦夫氏・・・・・・・・第3部第8章  
明治大学 戸沢充則氏・・・・・・・・・・・・・・・・第4部第10章  
上記以外の執筆分担は、第2章第2節・第3章第2節2(3)が関全寿、第3章第3節2(2)・第9章第2節が町田勝則、第5章が原明芳、その他は平林彰である。
- 5 巻頭で使用した航空写真は（株）新日本航業、第1章で用いた写真は調査担当職員ならびに明治大学考古学研究室、第6・7章の写真は獨協医科大学第一解剖学教室が、撮影した。
- 6 本書に掲載した実測図の縮尺は、該当箇所のスケールの上に記してある。
- 7 遺構の番号は種別ごとに付けたが、発掘調査時の番号を変更しなかったため欠番が生じている。遺物の番号は、土器は遺構ごと、石器・土製品・石製品は器種ごとの通し番号とした。なお、この番号は本文・挿図・表・実測図・写真のすべてに共通する。
- 8 註および参考文献は、第1部～第3部については各章末に、第4部は節ごとにまとめている。
- 9 本書ならびに図版編の編集・校正は、樋口昇一・平林・町田が行なった。なお、第2部・第3部は、執筆された方々の意向を尊重し、参考文献の記述方法など、一部不統一な部分がある。
- 10 本遺跡に係る記録および出土遺物は、（財）長野県文化財センターが保管している。

# 本文目次

巻頭図版 北村遺跡全景  
北村縄文人の顔 (SH1172:人骨と土偶)

序  
例言

## 第1部 考古学

第1章 調査の契約と方法	1
第1節 調査の契約	1
1 調査に至る経緯	1
2 契約業務の経過	1
(1) 昭和62年度〈1〉 (2) 昭和63年度〈3〉 (3) 平成元年度〈4〉	
(4) 平成2年度 (5) 平成3年度〈5〉 (6) 平成4年度	
第2節 調査の方法	6
1 発掘調査の方法	6
(1) 遺跡の調査と測量・写真撮影の方法	6
ア 遺構確認調査〈6〉 イ 全面調査 ウ 測量 エ 写真撮影〈7〉	
(2) 主な遺構の調査方法	7
ア 竪穴住居の調査〈7〉 イ 掘立柱建物の調査〈8〉 ウ 配石の調査	
エ 土坑の調査	
(3) 発掘作業時の安全対策の方法	8
ア 湧水処理〈8〉 イ 掘削ノリ面の保護 ウ 鉄道・国道および生活道路の	
安全確保〈9〉 エ 地域住民への安全確保	
2 整理作業の方法	9
(1) 人骨の整理	10
ア 人骨の取り上げ〈9〉 イ 出土状態の記録〈10〉 ウ 人骨の鑑定と分析	
(2) 発掘記録の整理	11
(3) 遺物の整理	11
3 指導者・協力者	11
4 調査に参加した補助員	12
第2章 位置と環境	13
第1節 遺跡の位置	13
第2節 自然環境	13
1 地形と地質	13
(1) 基盤の地形と地質〈13〉	
(2) 段丘の形成期〈15〉	
(3) 北村遺跡付近の堆積過程〈16〉	
(4) 配石に用いられた巨礫〈18〉	
2 気 候	18
3 動・植物	19
(1) 植物〈19〉	
(2) 動物〈20〉	

第3節	歴史環境	21
1	集落の立地状況	21
2	時代別の遺跡分布	21
	ア 旧石器時代から縄文時代草創期 (22) イ 縄文時代早期から後期	
	ウ 縄文時代晩期から弥生時代 (22) エ 古墳時代 オ 古代	
	カ 中世 (23) キ 近世 ク 近・現代	
	松本平北半部の遺跡地名表	25
第3章	縄文時代	31
第1節	概観	31
第2節	遺構	33
1	竪穴住居	33
(1)	総論	33
	ア 住居形態と規模 (33) イ 主軸の方向 ウ 床面の状況と敷石のタイプ (34)	
	エ 炉の位置と形態 オ 柱穴 (35) カ その他の施設	
	キ 遺物の出土状態と特徴的な遺物	
(2)	各論	35
	SB101 (35) SB102 (36) SB103 (37) SB104 SB105 (38) SB106 SB107	
	SB108 (39) SB109 SB110 SB111 SB112 (40) SB551A・B SB552 (41)	
	SB553A・B、554 (42) SB555A・B・C SB557 (43) SB558 (44)	
	SB559・564 SB560 (45) SB561 (46) SB562 SB563 (47) SB566 SB567 (48)	
	SB568 (49) SB570A・B SB571 (50) SB572・574 SB573A・B (51)	
	SB578 (52) SB580 SB581・583 SB582 (53) SB584 (54) SB587・588	
	SB589 SB590・595 (55) SB577・591・594 SB592・593A・B (57) SB598	
	SB599	
	竪穴住居一覧	58
2	墓坑	60
(1)	総論	60
	ア 上面配石 (60) イ 墓坑 (61) ウ 人骨 (62) エ 出土遺物 (64)	
(2)	各論	64
	SH501 (64) SH502 SH503 (66) SH504 (66) SH505 (67) SH507 (68)	
	SH508 SH512 (69) SH515 SH517 (70) SH518 (71) SH519 (72) SH520	
	SH521 SH522 (74) SH523 SH524 (75) SH529 SH534 SH536 (76)	
	SH538 SH540 SH542 (77) SH545 SH549 (78) SH550 SH552 (79)	
	SH555 (80) SH558 SH559 (81) SH567 SH573 SH578 (82) SH580	
	SH596 (83) SH599 SH606 (84) SH607 SH616 (85) SH627 SH638	
	SH644 (86) SH646 SH652 (87) SH657 SH659 SH682 (88) SH686	
	SH690 SH692 SH693 (89) SH698 SH700 (90) SH703 SH709 SH711 (91)	
	SH714 SH717 SH735 (92) SH739 SH741 SH742 SH743 (93) SH751	
	SH752 (94) SH753 SH761 SH762 SH763 (95) SH764 SH767 SH768 (96)	
	SH771 SH773 SH775 SH777 (97) SH782 SH784 SH785 (98) SH786	
	SH794 SH796 (99) SH799 SH801 (100) SH803 SH805 SH808 (101)	
	SH814 SH815 SH818 SH824 (102) SH842 SH851 SH852 (103)	
	SH853 (105) SH854・858 SH855 (106) SH856 SH857 (107) SH859 (108)	
	SH864 SH872 (109) SH879 SH908 SH924 (110) SH938 SH952	



SH958 (11)	SH973 (112)	SH979	SH1006	SH1012 (113)	SH1021	SH1023	
SH1047	SH1048	SH1049 (114)	SH1066	SH1068	SH1081	SH1082 (115)	
SH1129	SH1136	SH1143 (116)	SH1144 (117)	SH1149	SH1155		
SH1156 (118)	SH1157 (119)	SH1158	SH1160	SH1161 (120)	SH1162		
SH1163 (121)	SH1165	SH1166	SH1168	SH1172 <sub>1</sub> (122)	SH1172 <sub>2</sub>	SH1174	
SH1176 (123)	SH1177 (124)	SH1178	SH1179	SH1180 (125)	SH1181 (126)		
SH1182	SH1183	SH1184 (127)	SH1185	SH1186	SH1187 (128)	SH1188	
SH1189	SH1190 (129)	SH1191	SH1192	SH1193 (130)	SH1195		
SH1198 (131)	SH1199	SH1200	SH1201 (132)	SH1202	SH1203	SH1204	
SH1205 (133)	SH1206	SH1207	SH1208 (134)	SH1211	SH1212		
SH1213 (135)	SH1214	SH1215	SH1216	SH1217 (136)	SH1221	SH1222	
SH1224	SH1228	SH1229 (137)	SH1230	SH1232	SH1233	SH1234 (138)	
SH1236	SH1237	SK2029					
(3) 補論—人骨を保存した立地							139
墓坑一覧							140
3 埋設土器							158
(1) 総論							158
(2) 各論							158
SK1273 (158)	SK1302	SK2018	SK2020	SK2232	SK2371		
SK2419	SK2813 (160)	SK3071	SK3142				
4 配石遺構							160
(1) 総論							160
(2) 各論							160
SH 5配石群 (160)	SH33配石群	SH506配石群 (161)	SH510配石群				
SH511配石群	SH1111配石群	SH 1 (162)	SH17・18	B区その他の配石遺構			
				C区その他の配石遺構 (163)			
				SH525 SH528・530～532・588 SH1140			
				E区その他の配石遺構			
5 その他の遺構							163
(1) ビット群							163
ビット群A (163)	ビット群B (164)	ビット群C・D・E					
(2) 土坑							164
SH744・745 (164)	SH959・980						
(3) 遺物集中区							167
SQ 1 (167)	SQ 2	SQ 5	SQ501・502	SQ503			
[付] 長野県北村遺跡出土炭化材の樹種							167
第3節 遺物							169
1 はじめに							169
2 遺物各説							169
(1) 土器							169
ア 概観							169
イ 竪穴住居出土の土器							169
SB101 (169)	SB102 (170)	SB103	SB104	SB108	SB110 (171)		
SB551	SB552	SB553	SB554	SB555 (172)	SB557	SB558	
SB559 (173)	SB560	SB561	SB562	SB563	SB566 (174)	SB570	
SB571	SB572	SB573 (175)	SB574	SB578	SB580	SB581	SB582 (176)

SB583 SB584 SB588 SB590 SB591 SB592 (177) SB594 SB595 SB599	
ウ 墓坑出土の土器	178
SH500番代 (178) SH 600番代 SH 700番代 (179) SH 800番代 (180)	
SH900番代 SH1000番代 (181) SH1100番代 SH1200番代 (182)	
エ 配石遺構出土の土器	183
オ 土坑出土の土器・埋設土器	184
カ 遺物集中区出土の土器	184
SQ 1 (184) SQ 2 (185) SQ 5 SQ501 SQ503	
キ 遺構外出土の土器	185
(2) 石 器	187
ア 概観 (187) イ 原石 (188) ウ 石核 エ 剥片・砕片 (189)	
オ 石鏃 (191) カ 打製石斧 (193) キ 磨石・凹石・敲石 (196)	
ク 多孔石 (199) ケ 丸石 コ 台石・石皿 (200) サ 石鏢 (202)	
シ 磨製石斧 (204) ス 刃器 (206) セ 砥石 (208) ソ 石鏢・土鏢 (209)	
タ 加工痕跡を留める石屑 (210) チ 石剣・石棒 ツ 小結 (212)	
(3) 土製品・石製品など	215
ア 概観 (215) イ 土偶 ウ 小形土器 (216) エ 土製蓋 オ 土製匙 (217)	
カ 土製耳飾り キ キのご状土製品・土製玉・土鈴・不明土製品	
ク 石製玉類・ヒスイ石核・剥片・有孔礫・研磨礫 ケ 有孔土器片	
コ 土器片円板 (218) サ 骨・角・牙製品	
石器関係一覧表	220
土偶一覧表	228
小形土器一覧表	230
有孔土器片一覧表	231
土器片円板一覧表	232
<b>第4章 弥生時代</b>	233
第1節 概 観	233
第2節 遺構と遺物	233
SB511 (233)	
第3節 小 結	233
<b>第5章 古代以降</b>	235
第1節 遺 構	235
(1) 竪穴住居	235
SB1 (235) SB2 SB3 SB4 SB5 (236) SB6 SB7 SB8 SB9	
SB10 (237) SB11 SB12 SB13 SB501 SB502 SB503 SB504 (238) SB506	
SB507	
(2) 掘立柱建物	238
ST1 (238) ST2 (240) ST3 ST4 (240) ST5 ST6 (241) ST7 ST8	
ST9 (241) ST10 ST11 ST12 ST13 ST14 ST15 (242) ST16 ST17 ST18	
ST19 (243) ST20 ST21 ST22 ST23 ST24・25・26 (243) ST27	
ST28 ST29 ST30 ST31 ST32・33 ST34 (244) ST35 ST36 ST37	
ST38 (245) ST501・502・504・505・506・507 (245) ST503 ST508	
ST509 ST510	

(3) 堀	245
西地区 (A-D区) (245) 東地区 (E区) (246)	
(4) 溝	246
西地区 (A-D区) (246) 東地区 (E区) (248)	
(5) 井戸	248
(6) 馬墓	249
(7) 遺物集中区	250
SQ501 (250) SX 1	
(8) 土坑ほか (SK, SQ, SX)	250
第2節 遺物	251
(1) 土器の分類及び記述の方法	251
(2) 遺構出土の土器・土製品	251
ア 竪穴住居出土品 (251) イ 掘立柱建物出土品 (253) ウ 溝出土品	
エ 土坑出土品 オ 遺物集中区、不明遺構出土品 (250) カ 遺構外出土品	
(3) 土器のまとめ	254
第3節 小 結	256

## 第2部 形質人類学

第6章 人骨の形質	259
第1節 はじめに	259
(1) 性別の判定	259
(2) 埋葬姿勢	259
(3) 年齢判定	260
(4) 年齢区分	260
(5) エナメル質減形成	261
(6) 墓坑の面積	261
第2節 各 論	262
1 竪穴住居出土の人骨	262
SB555 (262) SB557	
2 墓坑出土の人骨	262
SH501 (262) SH502 (263) SH503 (264) SH504 (265) SH505 (266) SH507	
SH508 (267) SH512 SH515 (268) SH517 (269) SH518 (270) SH520	
SH521 (271) SH522 SH523 (272) SH524 SH534 SH536 (273) SH538	
SH540 SH542 SH545 (274) SH549 (275) SH550 SH555 (276) SH558 (277)	
SH559 SH573 (278) SH580 (279) SH606 SH607 SH616 (280) SH620	
SH627 SH638 (282) SH644 SH652 SH659 (283) SH674 SH692	
SH693 (284) SH694 (285) SH703 SH709 SH711 (286) SH714 SH717 (287)	
SH730 SH735 SH739 (288) SH741 (289) SH743 SH751 (290) SH753	
SH761 SH762 (291) SH763 SH764 (292) SH768 SH771 SH775 (293)	
SH782 (294) SH784 SH785 (295) SH794 (296) SH796 SH799 (297) SH800	
SH803 (298) SH805 (299) SH814 SH815 SH818 (300) SH824 SH828 (301)	
SH842 SH851 SH852 (302) SH853 SH854 (303) SH855 SH856 (304)	
SH857 SH858 (305) SH859 (306) SH864 (307) SH872 SH879 SH908 (308)	
SH924 SH938 (309) SH952 SH958 SH979 (310) SH1048 (311) SH1049	
SH1066 SH1068 SH1129 (312) SH1136 SH1143 (313) SH1144 SH1149 (314)	

SH1155 (315)	SH1156	SH1157 (317)	SH1158	SH1160	SH1161 (318)
SH1162 (319)	SH1163	SH1165 (321)	SH1166 (322)	SH1168	SH1172 <sub>1</sub>
SH1172 <sub>2</sub>	SH1174 (323)	SH1176	SH1177 (324)	SH1178	SH1179 (325)
SH1180	SH1181 (326)	SH1182	SH1183 (327)	SH1184	SH1185 (328)
SH1186 (329)	SH1187	SH1188 (330)	SH1189	SH1190 (331)	SH1191
SH1192 (332)	SH1193	SH1195	SH1198 (333)	SH1199 (334)	SH1200
SH1201 (335)	SH1202	SH1203 (336)	SH1204	SH1205 (337)	SH1206
SH1207 (338)	SH1208	SH1211	SH1213 (340)	SH1215	SH1216
SH1220	SH1228	SH1229	SH1232 (342)	SH1233	SK2029
3	土坑出土の人骨				343
	SK2309 (343)	SK2398			
4	遺構外出土の人骨				343
	L区Na6 (343)	L-D11区No.8	L-L7区No.43	L-C10区No.3	
5	出土地不明の人骨				343
	SH587 (不明) (343)				
第3節	北村人の形態的特徴				345
1	北村人の特徴と他の縄文人骨との比較				345
(1)	頭蓋骨の特徴				345
	ア 計測値にみられる特徴 (345)				
(2)	歯の特徴				347
	ア 一般的な形態とその特徴 (347)	イ 歯の計測値からみた北村人 (348)			
	ウ エナメル質減形成の頻度 (349)	エ 咬耗の特徴	オ 他地域の縄文時代人との比較 (352)	カ 歯の特徴のまとめ (354)	
(3)	四肢骨に関する特徴				355
	ア 上肢骨 (355)	イ 下肢骨 (356)	ウ 上半身と下半身の頑丈さの違い (358)		
(4)	墓坑の広さと埋葬人骨との関係				358
2	北村集団としてのまとめ				359
(1)	身長				359
(2)	性比				359
(3)	死亡年齢				359
(4)	抜歯に関する考察				360
(5)	出産の年齢				361
(6)	離乳時期、あるいは母乳から独立する時期				361
(7)	健康状態 (病変)				361
(8)	むし歯 (齲歯)				362
(9)	外耳道骨腫				363
3	長野県の他の遺跡との関係				363
4	山の縄文時代人と海の縄文時代人				364
5	北村人の形態的な特徴のまとめ				364
6	北村人の占める位置				365
	人骨関係写真				369
	人骨関係一覧表				386

第7章 哺乳動物遺存体	403
第1節 はじめに	403
第2節 動物骨の同定と出土状況	403
1 出土した動物の種類	403
2 出土した哺乳類の特徴	404
3 遺標別の出土状況	406
第3節 他の遺跡との比較	407
第4節 まとめ	409
哺乳動物遺存体関係写真	411
哺乳動物遺存体関係一覧表	422

### 第3部 環境生態学

第8章 北村縄文人骨の同位体食性分析	445
第1節 はじめに	445
第2節 研究の理論	445
1 同位体食性分析の基本的原理	445
2 食糧資源の同位体分析	450
第3節 古人骨の同位体分析	452
第4節 北村縄文人骨の分析結果	454
1 北村縄文人の食性	454
2 北村縄文人と同地域他遺跡との比較	456
3 北村遺跡と日本列島各地の遺跡との比較	457
第5節 結 論	463

### 第4部 考 察

第9章 調査の成果と課題	469
第1節 縄文土器の系統と変遷	469
1 はじめに	469
2 分析の方法	469
3 I期～III期の土器について	470
(1) 器形・器種・文様の分類	470
ア 器形について	470
イ 器種について	470
ウ 文様について	470
(2) 器種と文様の組み合わせ	472
(3) 主な類型の変遷	472
(4) 各類型の遺構内でのあり方	474
(5) 千曲川・犀川水系の遺跡との対比と編年的位置付け	475
4 IV期～VI期の土器について	476
(1) 器形・器種・文様の分類	476
ア 器形について	476
イ 器種について	476
ウ 文様について	476
(2) 器種と文様の組み合わせ	476
(3) 主な類型の変遷	476
(4) 各類型の遺構内でのあり方	480
(5) 県内の遺跡との対比と編年的位置付け	481
5 まとめ	482
第2節 石器と生産活動 —総合的研究—	484

1	製作技術	484
2	器種の形態と時期	484
3	器種の機能と用法	485
4	使用場と廃棄場	487
5	石器の組成	489
6	まとめ 一北村人の生産活動一	490
第3節	北村縄文人の精神的側面	493
1	はじめに	493
2	分析の方法	493
3	遺構について	493
(1)	敷石住居	493
	ア 構築時の属性 <494> イ 使用時の属性 ウ 廃棄時の属性	
	エ 敷石住居の特徴とその意味	
(2)	墓	495
	ア 構築時の属性 <495> イ 使用時の属性 <496> ウ 廃棄時の属性	
	エ 墓の特徴とその意味	
(3)	配石	497
4	遺物について	497
(1)	土偶	497
	ア 製作時の属性 <497> イ 使用時の属性 ウ 廃棄時の属性 <498>	
	エ 土偶の特徴とその意味	
(2)	小形土器	499
	ア 製作時の属性 <499> イ 使用時の属性 ウ 廃棄時の属性	
	エ 小形土器の特徴とその意味	
(3)	石棒・石剣	500
	ア 製作時の属性 <500> イ 使用時の属性 ウ 廃棄時の属性	
	エ 石棒・石剣の特徴とその意味	
(4)	装身具類	500
	ア 製作時の属性 <501> イ 使用時の属性 ウ 廃棄時の属性	
	エ 装身具類の特徴とその意味	
5	死者の扱いについて	501
(1)	葬法	501
(2)	埋葬状態	502
(3)	埋葬姿勢	502
(4)	覆被り・抱き石	503
6	まとめ	504
第4節	北村縄文集落とそれを取り巻く諸問題	506
1	はじめに	506
2	集落の性格について	506
(1)	分析の方法	506
(2)	周辺の環境と遺構・遺物との関係	506
(3)	遺構の変遷	507
	ア 住居数と墓数の関係 <507> イ 遺構の分布 ウ 住居群と石器の分布 <508>	
(4)	まとめ	510
3	北村集落の領域について	510

(1) 分析の方法	510
(2) 遺跡分析	510
(3) 主な周辺遺跡の概況	511
ア こや城遺跡 <511> イ ほうろく屋敷遺跡 ウ 井刈遺跡 <512>	
エ 塚田若宮遺跡 オ 宮の下遺跡	
(4) まとめ	512
4 社会組織について	513
(1) 分析の方法	513
(2) 頭位方向の分析	513
ア 分布のまとまり方 <513> イ まとまりができた要因 <515>	
(3) 埋葬区別にみた頭位方向の分析	516
ア 分布のまとまりと男女の構成比 <516> イ 分布のまとまりと男女比の変遷	
(4) W群内の小群の性格	516
(5) まとめ	518
5 成果と課題	520

#### 第10章 総括 —北村遺跡の六年間—522

苦闘の発掘 よみがえる縄文人骨 先端科学が骨を生かす 未完の研究  
可能性と夢の多いこれからの北村遺跡

## 挿 図 目 次

図1 調査区划図	2	図44 SH538上面配石、人骨出土状態	76
図2 中地区・小地区の設定	7	図45 SH519・540上面配石、人骨出土状態	77
図3 大地区の設定、トレンチ・グリッドの配置	7	図46 SH549人骨出土状態	78
図4 光殿丘付近の地形	13	図47 SH550・552上面配石、人骨出土状態	78
図5 奥沢下流部の柱状断面	14	図48 SH555上面配石、人骨出土状態	79
図6 北村遺跡付近の地形断面模式図	15	図49 SH558・559上面配石、人骨出土状態	80
図7 No 9地点の柱状断面、古代面・縄文面の地形	17	図50 SH573上面配石、人骨出土状態	82
図8 北村遺跡の土層断面	17	図51 SH580上面配石、人骨出土状態	83
図9 明科町東川手の気象	18	図52 SH606人骨出土状態	84
図10 花粉試料採集地点およびA地点の柱状断面	19	図53 SH607人骨出土状態	84
図11 松本平北半部の遺跡分布	24	図54 SH616人骨出土状態	85
図12 竪穴住居の主軸方向	34	図55 SH627人骨出土状態	85
図13 柄鏡形住居の敷石箇所	34	図56 SH638人骨出土状態	86
図14 SB101出土遺物分布	36	図57 SH652上面配石、人骨出土状態	86
図15 SB102炉体上器出土状態	37	図58 SH657人骨出土状態	87
図16 SB551A・B柱穴配置	40	図59 SH659人骨出土状態	87
図17 SB552・558柱穴配置	41	図60 SH692上面配石、人骨出土状態	88
図18 SB555出土遺物分布	43	図61 SH693上面配石、人骨出土状態	89
図19 SB559・564柱穴配置	44	図62 SH703人骨出土状態	90
図20 SB560埋甕出土状態	45	図63 SH709人骨出土状態	90
図21 SB561炉内土器出土状態	46	図64 SH711人骨出土状態	91
図22 SB562埋甕出土状態	46	図65 SH717人骨出土状態	91
図23 SB566出土遺物分布	48	図66 SH735人骨出土状態	92
図24 SB570出土遺物分布	49	図67 SH743上面配石、人骨出土状態	93
図25 SB572炉・埋甕出土状態、SB574炉	50	図68 SH751人骨出土状態	93
図26 SB581・583柱穴配置	52	図69 SH753人骨出土状態	94
図27 SB583炉内土器・埋甕出土状態	53	図70 SH762人骨出土状態	94
図28 SB590・595出土遺物分布	55	図71 SH763人骨出土状態	95
図29 SB577・591・594柱穴配置	56	図72 SH764人骨出土状態	95
図30 SB592・593A・B柱穴配置	56	図73 SH782人骨出土状態	97
図31 SB599出土遺物分布	57	図74 SH784人骨出土状態	97
図32 上面配石および墓坑内配石の類型	61	図75 SH785人骨出土状態	98
図33 埋葬姿勢のパターン（一部）	63	図76 SH786人骨出土状態	98
図34 SH502上面配石、人骨出土状態	65	図77 SH794人骨出土状態	98
図35 SH503上面配石、人骨出土状態	66	図78 SH739・796人骨出土状態	99
図36 SH504・505上面配石、人骨出土状態	67	図79 SH799人骨出土状態	99
図37 SH507上面配石、人骨出土状態	68	図80 SH803人骨出土状態	100
図38 SH512上面配石、人骨出土状態	69	図81 SH805人骨出土状態	100
図39 SH515・542上面配石、人骨出土状態	70	図82 SH815人骨出土状態	101
図40 SH517・518上面配石、人骨出土状態	71	図83 SH842人骨出土状態	102
図41 SH520・521上面配石、人骨出土状態	73	図84 SH851・872上面配石、人骨出土状態	103
図42 SH522上面配石、人骨出土状態	74	図85 SH852上面配石、人骨出土状態	104
図43 SH534上面配石、人骨出土状態	75	図86 SH853上面配石、人骨出土状態	104



図87	SH854・858上面配石、人骨出土状態	105	図132	SH1204人骨出土状態	133
図88	SH855上面配石、人骨出土状態	106	図133	SH1206人骨出土状態	133
図89	SH856・857上面配石、人骨出土状態	107	図134	SH1208人骨出土状態	134
図90	SH859上面配石、人骨出土状態	108	図135	SH1211人骨出土状態	134
図91	SH864人骨出土状態	108	図136	SH1215人骨出土状態	135
図92	SH879人骨出土状態	109	図137	SH1216人骨出土状態	135
図93	SH908人骨出土状態	110	図138	SH1217人骨出土状態	136
図94	SH924人骨出土状態	110	図139	SH1228人骨出土状態	137
図95	SH938人骨出土状態	110	図140	SH1233人骨出土状態	138
図96	SH958上面配石、人骨出土状態	111	図141	SK2029人骨出土状態	138
図97	SH973墓坑内配石	112	図142	埋設土器	159
図98	SH979人骨出土状態	112	図143	SH17・18、SQ2出土遺物分布	162
図99	SH1049人骨出土状態	114	図144	SH1140上面配石、イノシシ下顎骨出土状態	163
図100	SH1068人骨出土状態	114	図145	SQ1出土遺物分布	165
図101	SH1129・1143人骨出土状態	115	図146	縄文土器の部位名称	169
図102	SH1136人骨出土状態	115	図147	原石・石核法量相関	188
図103	SH1144人骨出土状態	116	図148	原石・石核出土分布	188
図104	SH1149人骨出土状態	117	図149	剥片A類法量相関	189
図105	SH1155人骨出土状態	117	図150	剥片A類出土分布	189
図106	SH1156上面配石、人骨出土状態	118	図151	剥片・破片出土分布(その1・2)	190・191
図107	SH1157人骨出土状態	119	図152	石鍬法量相関(材質別)	191
図108	SH1158・1161・1165人骨出土状態	119	図153	石鍬法量相関(製品と失敗品)	192
図109	SH1160上面配石、人骨出土状態	120	図154	石鍬出土分布	193
図110	SH1162人骨出土状態	120	図155	打製石斧法量相関	194
図111	SH1163(A・B)人骨出土状態	121	図156	打製石斧出土分布	195
図112	SH1166人骨出土状態	121	図157	磨石・凹石法量相関	196
図113	SH1172人骨出土状態	122	図158	敲打痕類型による長さ・幅	197
図114	SH1172 <sub>2</sub> 人骨出土状態	122	図159	敲打部の長さ・幅・深さ	197
図115	SH1174・1177・1179上面配石、人骨出土状態	123	図160	磨石・凹石・敲石出土分布	199
図116	SH1176上面配石、人骨出土状態	123	図161	多孔石・丸石法量相関	199
図117	SH1178・1180上面配石、人骨出土状態	125	図162	多孔石・丸石出土分布	200
図118	SH1181人骨出土状態	126	図163	台石・石皿法量相関	201
図119	SH1182人骨出土状態	126	図164	台石・石皿出土分布	202
図120	SH1184・1185人骨出土状態	127	図165	石鍬法量相関	203
図121	SH1186人骨出土状態	127	図166	錐部の法量相関	203
図122	SH1188上面配石、人骨出土状態	128	図167	石錘出土分布	203
図123	SH1189人骨出土状態	128	図168	磨製石斧法量相関	205
図124	SH1190人骨出土状態	129	図169	磨製石斧出土分布	206
図125	SH1191人骨出土状態	129	図170	刃器法量相関	207
図126	SH1192・1193人骨出土状態	130	図171	刃器出土分布	208
図127	SH1195人骨出土状態	130	図172	砥石法量相関	209
図128	SH1199人骨出土状態	131	図173	砥石出土分布	209
図129	SH1200人骨出土状態	131	図174	石鍬法量相関	210
図130	SH1201人骨出土状態	132	図175	石錘出土分布	210
図131	SH1202・1207人骨出土状態	132	図176	石刺・石棒出土分布	211

図177	土器片円板の重さ・直径と出土分布	218	図216	女性の上肢骨に関する示数の偏差折線	356
図178	SB511および出土遺物	234	図217	男性の下肢骨計測値の偏差折線	357
図179	A-D区掘立柱建物配置	238	図218	女性の下肢骨計測値の偏差折線	357
図180	北村遺跡周辺の小字名	239	図219	男性の下肢骨に関する示数の偏差折線	357
図181	E区掘立柱建物配置	240	図220	女性の下肢骨に関する示数の偏差折線	357
図182	A-D区溝配置	247	図221	時代毎の歯蝕数の変化	363
図183	E区溝配置	248	図222	獣骨の重量比	403
図184	E区権・井戸・馬墓・遺物集中区	249	図223	イノシシとシカの大まかな部位別の重量	404
図185	SK1209馬骨出土状態	249	図224	人間の身体を作る主要元素の重量比	446
図186	古代の土製品	254	図225	植物種による $\delta^{13}C$ 値の分布	446
図187	遺構単位の食膳具の種類	254	図226	自然界における食物連鎖と炭素・窒素安定同位体比の変動	448
図188	7世紀末～8世紀前半の遺構	256	図227	現代人と現代食品の炭素・窒素安定同位体の分布	449
図189	北村人骨の歯の咬耗による年齢判定	260	図228	北米の諸民族の炭素・窒素安定同位体分析の結果	450
図190	モルナーの咬耗度判定	263	図229	古人骨同位体分析結果を解釈するために仮定する食糧資源の炭素・窒素同位体環境	451
図191	プロカの基準による外後頭隆起の発達状態の6段階	263	図230	北村縄文人の炭素・窒素安定同位体分布結果と食糧資源の同位体環境との関係を示すダイアグラム	454
図192	ヘリチカによる脛骨の中央付近の断面形態の分類	265	図231	モンテカルロ法で復元した北村縄文人のタンパク源	455
図193	脛骨後面の鉛直線に關係した分類	267	図232	縄ノ平平安時代人の炭素・窒素同位体分析結果と食糧資源の同位体環境との関係を示すダイアグラム	456
図194	歯の形態の変異	269	図233	北村縄文人の時期別にみた炭素同位体分析結果	457
図195	椎骨の椎体における加齢(老齢)変化のタイプとその段階を示す分類	272	図234	北村縄文人及び長野県下他遺跡出土人骨の炭素同位体分析結果	457
図196	頭蓋骨の後面観	275	図235	北村縄文人の同位体食性分析結果と比較する日本列島各地の遺跡分布	458
図197	右大腿骨前面にみられるアレン類属	278	図236	北黄銅縄文人の炭素・窒素同位体分析結果と食糧資源の同位体環境との関係を示すダイアグラム	459
図198	典型的な付け柱状大腿骨	283	図237	高砂縄文人の炭素・窒素同位体分析結果と食糧資源の同位体環境との関係を示すダイアグラム	459
図199	距骨にみられる踵期面の様本による分類	289	図238	有珠10統縄文人の炭素・窒素同位体分析結果と食糧資源の同位体環境との関係を示すダイアグラム	460
図200	男性の頭蓋骨計測値の偏差折線	346	図239	札幌・スサヤ近世アイヌの炭素・窒素同位体分析結果と食糧資源の同位体環境との関係を示すダイアグラム	460
図201	男性の下顎骨計測値の偏差折線	346	図240	三貫地縄文人の炭素・窒素同位体分析結果と食糧資源の同位体環境との関係を示すダイアグラム	461
図202	男性の頭蓋骨に関する示数の偏差折線	346	図241	古作縄文人の炭素・窒素同位体分析結果と食糧資源の同位体環境との関係を示すダイアグラム	461
図203	女性の頭蓋骨計測値の偏差折線	346			
図204	女性の下顎骨計測値の偏差折線	346			
図205	女性の頭蓋骨に関する示数の偏差折線	346			
図206	男性の歯の大きさの偏差折線	348			
図207	女性の歯の大きさの偏差折線	348			
図208	北村人の咬耗の年齢別特徴	350			
図209	Lovejoyらによる歯の咬耗からの年齢推定方法	351			
図210	北村人から各地域の縄文人集団へのペンローズ形態距離	353			
図211	ペンローズの形態距離にもとづく2次元展開図	355			
図212	ペンローズの大きさ距離にもとづく1次元展開図	355			
図213	男性の上肢骨計測値の偏差折線	356			
図214	女性の上肢骨計測値の偏差折線	356			
図215	男性の上肢骨に関する示数の偏差折線	356			

図242	津雲縄文人の炭素・窒素同位体分析結果と食糧資源の同位体環境との関係を示すダイアグラム	462
図243	奇倉縄文人の炭素・窒素同位体分析結果と食糧資源の同位体環境との関係を示すダイアグラム	462
図244	轟縄文人の炭素・窒素同位体分析結果と食糧資源の同位体環境との関係を示すダイアグラム	463
図245	日本列島における食用野生植物の収穫シーズンの季節変化	464
図246	縄文土器の型式と類型の関係と変遷	469
図247	I～III期の器種と文様の組み合わせ	471
図248	I～III期の主な類型の変遷	472
図249	I～III期各類型の遺構内でのあり方	474
図250	IV～VI期の器種と文様の組み合わせ	477
図251	IV～VI期の主な類型の変遷	478
図252	東北地方の2種類似資料	480
図253	IV～VI期各類型の遺構内でのあり方	481
図254	石屑の集中区	484

図255	石器の消長	485
図256	石器組成グラフ	490
図257	土偶の時期別・形態別分布	498
図258	土偶の残存部位別分布	498
図259	小形土器の時期別分布	500
図260	土器に入った焼人骨	502
図261	合葬と兼葬	502
図262	埋葬姿勢の諸類型	503
図263	甕割り葬と抱き石葬	503
図264	遺跡周辺の環境と遺物	507
図265	住居と遺物集中区の変遷	508
図266	墓坑の変遷と埋葬区	508
図267	北村周辺の縄文遺跡と領域	511
図268	頭位方向の分布	515
図269	埋葬区別にみた頭位方向の分布	516
図270	W群の時期別頭位方向とクラスター	518
図271	時期別埋葬区ごとの人骨分布	519

## 挿 表 目 次

表1	調査区別発掘調査進行表	2
表2	花粉分析結果一覧表	19
表3	松本平北半部の遺跡地名表	25
表4	竪穴住居の地区別数および規模と形態	33
表5	竪穴住居一覧	58
表6	時期別の墓坑数	60
表7	埋葬姿勢(年齢区分)別の墓坑底面の規模	61
表8	上肢と下肢の組み合わせ数量	63
表9	遺跡付近の水質	139
表10	小倉沢における別所累層からの湧出水	139
表11	墓坑一覧	140
表12	遺構出土の炭化材の樹種	168
表13	石器組成	187
表14	剥片A類の形状別出土数	189
表15	剥片・破片遺構別出土数	190
表16	石鏃属性	192
表17	打製石斧属性	194
表18	磨石・凹石・敲石属性	198
表19	台石・石皿属性	201
表20	石錐属性	203
表21	磨製石斧属性	205
表22	刃器属性	207

表23	砥石属性	209
表24	石剣・石棒属性	211
表25	石器遺構別出土数	212
表26	原石・石核一覧	220
表27	剥片A類一覧	220
表28	剥片・破片類一覧	220
表29	石鏃一覧(その1・2)	220
表30	打製石斧一覧	222
表31	磨石類一覧(その1・2)	222
表32	石皿類一覧	224
表33	多孔石・丸石一覧	224
表34	石錐一覧	225
表35	磨製石斧一覧(その1・2)	225
表36	刃器一覧	226
表37	石匙一覧	226
表38	砥石一覧	226
表39	石剣一覧	227
表40	石剣・石棒一覧	227
表41	土偶一覧	228
表42	小形土器一覧	230
表43	有孔土器片一覧	231
表44	土器片円板一覧	232

表45	上顎大白歯の歯種別咬痕数	347
表46	下顎大白歯の咬頭と溝の型	347
表47	北村人の下顎大白歯の「咬頭と溝の型」と現代日本人との比較	348
表48	北村人骨の歯にみられるエナメル質減形成の歯種別の頻度	349
表49	北村遺跡出土の縄文人男性と後・晩期全国縄文人男性の歯冠計測値平均との比較	352
表50	北村遺跡出土の縄文人女性と後・晩期全国縄文人女性の歯冠計測値平均との比較	353
表51	歯冠計測値16項目にもとづくペンローズの形態距離	354
表52	歯冠計測値16項目にもとづくペンローズの大きさ距離	354
表53	埋葬人骨の年齢と墓坑底面積	358
表54	年齢段階別個体数	359
表55	縄文時代貝塚から出土した人骨の男女の出土数	359
表56	年齢段階ごとの人数	360
表57	齧蝕罹患率	362
表58	墓坑別人骨の性別・年齢区分および諸特徴	386
表59	エナメル質減形成	388
表60	男性人骨の頭蓋骨の計測値と比較資料	389
表61	女性人骨の頭蓋骨の計測値と比較資料	390
表62	男性人骨の上顎歯の計測値	392
表63	女性人骨の上顎歯の計測値	392
表64	男性人骨の下顎歯の計測値	393
表65	女性人骨の下顎歯の計測値	393
表66	男性人骨の上肢骨の計測値と比較資料	394
表67	女性人骨の上肢骨の計測値と比較資料	395
表68	男性人骨の下肢骨の計測値と比較資料	396
表69	女性人骨の下肢骨の計測値と比較資料	397
表70	男女別の年齢段階	399
表71	上顎歯の齧蝕の状態(壮年以下57個体)	400

表72	上顎歯の齧蝕の状態(壮年以下63個体)	401
表73	上顎歯の齧蝕の状態(壮年以下35個体)	402
表74	上顎歯の齧蝕の状態(壮年以下38個体)	402
表75	イノシシの部位別出土量と、イノシシの全出土量に対する比率および比較資料	405
表76	ニホンジカの残存重量と、ニホンジカの全出土量に対する比率および比較資料	405
表77	奈良時代の馬歯の計測値と比較資料	406
表78	馬骨の中足骨の計測値	406
表79	イノシシの骨および歯	422
表80	ニホンジカの骨および歯	428
表81	シカ・イノシシ以外の哺乳類	432
表82	哺乳類の遺構別出土状況	432
表83	同位体分析を行なった古人骨試料と分析結果	468
表84	石器と生業活動	491
表85	床面敷石箇所の変遷	494
表86	墓坑施設と年齢段階の関係	495
表87	上面配石の変遷	496
表88	上面配石と性別・年齢の関係	496
表89	土偶の形態別残存部位	498
表90	装身具と性別・年齢・上肢形の関係	501
表91	合葬・集葬の被葬者の構成	502
表92	下肢形と性別・年齢の関係	503
表93	特殊な葬法と性別・年齢・上肢形の関係	503
表94	住居敷と墓数の変遷	507
表95	人骨の頭位・埋葬状態・埋葬姿勢・性別・年齢一覧	514
表96	頭位グループ別の男女比	515
表97	性別と顔の向きの関係	515
表98	埋葬区ごとグループ別人骨の頭位・埋葬状態・埋葬姿勢・性別・年齢一覧	517
表99	埋葬小群と性別の関係	518

## 挿写真目次

写真1	山本によるエナメル質減形成の各段階	369
写真2	SH507から出土した壮年男性の下肢骨	370
写真3	下顎骨と下顎歯(1)	371
写真4	SH522から出土した火葬骨(1)	372
写真5	SH522から出土した火葬骨(2)	373
写真6	下顎骨と下顎歯(2)	374
写真7	SH803から出土した青年男性の下肢骨	375

写真8	SH859から出土した青年男性の四肢骨	376
写真9	SH864から出土した成人男性の下肢骨	377
写真10	外耳道骨腫	378
写真11	変異や病変	379
写真12	SH1161およびSH1190から出土した下肢骨	380
写真13	SH1162から出土した熟年男性の頭蓋骨	381
写真14	SH1163から出土した頑丈な青年男性の四肢骨	382

写真15	大頤骨にみられる殿筋隆起と上腕骨の骨稜 … 383	写真22	北村遺跡出土のイノシシ(5) …… 415
写真16	下顎骨にみられるエナメル質減形成 …… 384	写真23	北村遺跡出土のイノシシ(6) …… 416
写真17	頭蓋骨顔面の復元 …… 385	写真24	北村遺跡出土のイノシシ(7) …… 417
写真18	北村遺跡出土のイノシシ(1) …… 411	写真25	北村遺跡出土のニホンジカ(1) …… 418
写真19	北村遺跡出土のイノシシ(2) …… 412	写真26	北村遺跡出土のニホンジカ(2) …… 419
写真20	北村遺跡出土のイノシシ(3) …… 413	写真27	北村遺跡出土のニホンジカ(3) …… 420
写真21	北村遺跡出土のイノシシ(4) …… 414	写真28	北村遺跡出土のニホンジカ(4)・クマ・タヌキ 421

# 第1部

考 古 学

# 第1章 調査の契約と方法

## 第1節 調査の契約

### 1 調査に至る経緯

高速自動車道用地内にある埋蔵文化財の発掘調査については「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に準じて実施されている。それによれば、日本道路公団(以下「公団」という)は事業施工前に県教育委員会(以下「県教委」という)の意見を聴取の上、文化庁との間で協議し、その結果、記録保存と決定し発掘調査が必要となった場合、公団は県教委に委託して調査を実施することが決定されている。長野県の場合、県独自の調査体制や機関が設置されていないので、公団と県教委との契約後、あらためて(財)長野県埋蔵文化財センター(以下「埋文センター」という)に県教委が再委託する方式がとられている。

中央自動車道長野線(以下「長野線」という)は、昭和57年3月の起工式から岡谷市で本格的な工事が開始された。そこで県教委も同年4月から長野線の事業に対応すべく埋文センターを発足させた。この結果、公団→県教委→埋文センターという委託契約の方式ができ上がり、以降の調査が実施されることとなった。この際取り交わされた契約書および計画書の書式は、『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書一岡谷市内一』(昭和62年3月刊行)に掲載してあるので省略する。

そもそも明科町北村遺跡の発見は、昭和26年の国道19号線拡幅工事の際、灰釉陶器が出土したことが端緒となる。昭和55年、県教委が行なった分布調査により遺跡範囲が確定し、昭和61年には、県教委主催のもと、埋文センターおよび町教委立ち会いにより現地踏査がなされ、STA363+60北側において須恵器の蓋が採集された。ここで今回の調査範囲が確定され、調査対象面積が21,530㎡となった。

### 2 契約業務の経過

#### (1) 昭和62年度

調査期間 昭和62年4月6日～昭和63年3月11日

調査体制 事務局長(兼長野調査事務所庶務部長) 半田順計

同 総務部長(兼松塩筑調査事務所庶務部長) 堀内計人

同 調査部長(兼長野調査事務所調査部長) 樋口昇一

松塩筑調査事務所 所 長 三村忠幸

同 調査部長 宮沢恒之

同 調査研究員 平林 彰、関 全寿、松田青樹、西牧尚人、竹内 稔  
太田典孝、小松 望、小林 上、唐木孝雄、百瀬新治  
岡沢秀紀、小平和夫、小口 徹、小林俊一、石上周蔵  
大竹憲昭、上田典男、百瀬長秀、金原 正、望月 映  
市村勝巳、野村一寿、寺内隆夫、西山克己、百瀬陽三

長野調査事務所 調査研究員 田川幸生、福島厚利、宮尾栄三、春日文彦、三上徹也  
綿田弘実、伊藤友久、斉藤伸介

調査着手前に行われた、公団・県豊科高速道事務所・県教委・埋文センターとの調整会議で、明科町光地区は、長野線ルート決定から用地買収まで13年経過しており、昭和61年度末現在、宅地5件が未契約状態であること。用地内を通過する農業用水路や生活用排水路を保全すること。また、段丘上をオープンカット方式により通過させ明科トンネルへ入るという計画上、国道19号線およびJR線ノ井線下を潜らせるため工法が制約されることなどについて指摘を受けていた。

昭和62年4月6日から開始された発掘調査は、とりあえず地境を目安にしてJR線ノ井線を西からA～D区、以東をE・F区と設定し(図1)、グリッド・トレンチ法による遺構確認調査から着手した。調査開始後まもなく、作業の安全確保や、調査地区内の排土・湧水処理に加えて、C区南に設けた土層観察用のトレンチ下部(地表下2.5m)において縄文土器片が出土したことから、さっそく調査計画の見直しが行われた。このとき、土砂崩落などを考慮して、E区の調査開始を梅雨明けの



発掘調査開始式



E区縄文面調査風景

7月以降に設定したが、実はそのため当該区の縄文文化層の把握が遅れ、のちに大きな禍根を残す原因になった。

6月に入り公団から、JR工事区への資材運搬用道路の建設に伴い、E区の調査を8月末までに終了させてほしいとの要請を受け、7月当初より予定の調査に着手した。まもなく、JR線路下にフロンテジャッキング工法によるパイプブルーの引き込みや、プレストコンクリート箱型桁を圧入するなど工法上の関係から、JR線の東30m西10mは発掘調査に着手できないことになり、計画の変更がよぎなくされた。しかし、膨大な排土と湧水の処理に苦慮し、古代面の調査は結局9月末まで続けられた。加えて、9月9日に縄文時代の遺物包含

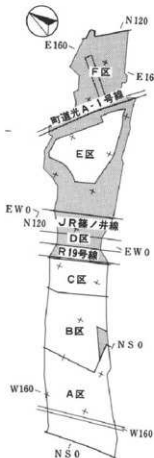


図1 調査区割図  
(アミ部分は調査除外区域)

	昭和62年度												昭和63年度							
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月		
A 古代面																				
区 縄文面																				
B 古代面																				
区 縄文面																				
C 古代面																				
区 縄文面																				
D 古代面																				
区 縄文面																				
E 古代面																				
区 縄文面																				
F 古代面																				
区 縄文面																				

表1 調査区別発掘調査進行表





ビニールハウス内での調査 (昭和62年度)

国道19号線部分(D区)は立会的な調査を行い、E区とF区との境にある町道光A-1号線、およびF区と側道部分は諸般の情勢から調査しないことになるなど、状況が二転三転する場面もあった。

## (2) 昭和63年度

調査期間 昭和63年 4月8日～7月28日

9月5日～9月26日

調査体制 事務局長 (兼総務部長兼長野野調査事務所庶務部長) 半田順計

同 調査部長 (兼長野野調査事務所調査部長) 笹沢 浩

松塩筑調査事務所長 (兼庶務部長) 堀内計人

同 調査部長 宮沢恒之

同 調査研究員 平林 彰、原 明芳、上田典男、望月 映、野村一寿

調査員 百瀬陽三、関 全寿

長野野調査事務所 調査研究員 竹内 稔、太田典孝、寺内隆夫、市川隆之、斉藤伸介



テレビ取材



遺跡説明会

層が確認されて以降、三回にわたり設定してきた調査期限を再び変更せざるをえなくなり、さらに10月9日には、確認された墓坑から人骨が出土するに及んで、県遺跡調査指導委員会をはじめ幾多の考古学・人類学研究者の指導を得ながら、調査計画・体制・方法の整備が検討された上、予定されていたJR工用道路の建設位置変更が行われた。以降、五回におよぶ調査計画と体制の整備、三回の調査方法検討会を経たうえ、ビニールハウスの設置など防寒対策を講ずる中、翌年3月11日まで厳寒期の調査が継続された。この間、工期や安全面を考慮して、

本年度も、当初から調査期間をめぐって公団との交渉が続けられ、種々検討の結果4月8日に調査が開始された。

5月に入って墓坑の発見や人骨の出土があいぐと、奈良国立文化財研究所前所長坪井清足先生をはじめ明治大学教授戸沢充則先生など多くの学識経験者が来跡し、テレビ・新聞による報道もあいまって、29日の一般市民を対象とした遺跡説明会では県内外から多くの見学者が訪れた。6月15日にはE区の調査を一旦終了させ、7月28日までにA～C区の調査も終了した。宅地の撤収が最後まで残ったE区最北部分は9月に調査が行われたが、立ち会い調査並に調査期間が短縮された上、秋雨の中作業が難航し、縄文面上部配石群の調査を省略せざるをえなかった。前年度以来のこうした状況の原因は、遺跡内容の把握の時期の見誤りと方法の不備とにあった。調査に入るための諸条件の整備方法(式)もこれに付随して出てくる問題点である。工事工

程、用地買収状況、調査期間に関わる担当部局相互の情報交換や調整も、これがために後手に回ってしまったといえよう。最終的には、9月26日、すべての発掘調査を完了し、縄文時代、弥生時代、古墳時代後期～平安時代、江戸時代の文化層が調査された。とりわけ長野県のような内陸地域で発見された縄文時代の300個体を数える人骨は、『日本考古学・人類学史上最大の発見』として、関係学界その他に話題を提供することができた。一般市民を対象とした現地説明会で1000名以上の見学者が訪れたのも、埋文センターでは例のないことであった。



現場における人骨法要（昭和63年度）

10月以降は、調査研究員・調査員各1名により整理作業を開始した。とりあえず図面・写真など記録類の点検・照合と遺物の洗浄・注記・台帳作成などの基礎整理を行なった。この間、明治大学・獨協医科大学・東京大学などと人骨の整理方法について打ち合わせが継続され、人骨のクリーニングは獨協医科大学、人骨の実測撮影は明治大学、環境生態学的な分析は東京大学へそれぞれ委託して調査が進められた。1月23日には四者が資料を持ち寄って今後の作業の進め方について検討会を行なった。年度末には事務所の一部改築などを行い、翌年度の作業に備えた。

### (3) 平成元年度

整理体制	事務局長（兼総務部長兼長野調査事務所庶務部長）	半田順計
	同 調査部長（兼長野調査事務所調査部長）	笹沢 浩
	松塩筑調査事務所長（兼庶務部長）	堀内計人
	同 調査課長	青沼博之
	同 調査研究員	平林 彰

4月1日から開始した本年度の整理作業は、人骨のクリーニング作業が主として行われた。およそ100個体分のウレタン梱包を解いて乾燥させ、クリーニング・撮影・実測・取り上げまで、担当調査研究員1名と整理補助員10名とで1年間を要した。その間、記録類の点検・照合や遺物の基礎整理が細々と続けられた。また獨協医科大学や東京大学では人骨の鑑定や分析が本格的に開始された。なお、5月28日には、日本考古学協会では北村遺跡の調査概要を発表したほか、7月30日には松塩筑調査事務所獨協医科大学茂原信生先生の講演会とあわせて出土遺物展示会が行われ、ここでもまた1000名をこえる見学者が訪れた。

### (4) 平成2年度

整理体制	事務局長	塚原隆明
	同 総務部長（兼長野調査事務所庶務部長）	塚田次夫
	同 調査部長（兼 同 調査部長）	小林秀夫
	長野調査事務所長	峯村忠司
	同 調査2課長	宮下健司
	同 調査研究員	平林 彰

本年度以降、整理作業は長野調査事務所に場所を移して行われた。記録類の照合・2次原因の作成をはじめ、遺物の分類・接合・復元を主として、土器の3次元測量を取り入れながら一部実測作業を行なった。

## (5) 平成3年度

整理体制	事務局長	塚原隆明
	同 総務部長 (兼長野調査事務所庶務部長)	塚田次夫
	同 調査部長 (兼 同 調査部長)	小林秀夫
	長野調査事務所長	峯村忠司
	同 整理課長代理	原 明芳
	同 調査研究員	平林 彰・町田勝則

第2原図の作成や遺物の実測・拓本作業を主として行なった。石器の実測図作成に際しては実測用のスリット写真を採用した。人骨の鑑定・分析については、2月26日に明治大学戸沢充則先生、獨協医科大学茂原信生先生、東京大学赤沢威先生を招いて最終的な調整を兼ね検討会が開かれた。

## (6) 平成4年度

整理体制	事務局長	峯村忠司
	同 総務部長	神林幹生
	同 調査部長	小林秀夫
	長野調査事務所 所 長	岡田正彦
	同 整理課長	原 明芳
	同 調査研究員	平林 彰・西嶋 力・町田勝則

遺構・遺物のトレース・図版作成、原稿執筆を主として、遺物の写真撮影・焼付け・版組みなどを平行して行い、報告書が発行された。

以上、明科町内での発掘調査はこの北村遺跡のみ1遺跡、調査面積21,530㎡であったが、発掘調査の1年6ヶ月間を含み、報告書刊行まで6ヶ年を要した。

## 第2節 調査の方法

## 1 発掘調査の方法

## (1) 遺跡の調査と測量・写真撮影の方法

## ア 遺構確認調査

まず遺跡の土層堆積状況を把握するために、遺跡内へ任意に $2 \times 2$  mのグリッドを設定した。A～B区ではI層(耕作土)、II層(古代遺物包含層)、VI層(礫層)が確認されたが、III～V層を欠く。また、C～F区では、II層が厚くさらに分層が可能であることと、深さ2 mでもIII層(縄文遺物包含層)に達しないことがわかった。続いて遺構の分布を確認するため、A～C区では、座標に沿い幅約2 mのトレンチを設定して主として人力で掘り下げた。その結果、該区はII層上位に古代以降の遺構が分布し、II層下位ないしVI層上位に縄文時代の遺物が散布することを確認した。一方、E・F区では、深さに合わせて幅8 m程



遺構検出作業

度のトレンチを東西に設定し、主として重機で掘り下げたところ、ほぼ同様な遺構の広がりが確認された。ただし、F区は地盤の安全確保のため、II層上部の確認を行なったところで、それ以下の掘削を中止した。

## イ 全面調査

トレンチ調査の成果をもとに、全面調査に移行した。A～B区西ではI層のみ重機で削ぎ、以下は手作業で行なった。B区東～E区はII層下部の排土を重機で行い、遺構検出には主としてジョレンを用いた。遺構の精査にあたっては移植ゴテや両刃カマを使用し、特に人骨など脆弱遺物には竹串、解剖用メスなども用いた。

## ウ 測量

日本道路公団が設定した工事用下り線幅杭363+40(第VIII系 $X=36276.9341$   $Y=-51076.6374$ )を測量用基準点として、他の複数の工事用杭の座標値から座標北を算出し、 $X=36200$   $Y=-51000$ を調査用基準点 $N$   $S=0$   $EW=0$ とし、測量を行なっている。標高も同様に標高値のある工事用下り幅杭363+40(標高550.177m)を基準として用いた(図2)。

調査の便宜を図るために、基準線を軸に40m方眼の大地区を設定し、大地区内を8 mごとに区切って中地区とし、さらに2 m単位の小地区も設定した。大地区名は北西から南東にかけてA・B・C・・・とし、中地区も北西から南東にむけて1～25と命名した。グリッドは大地区の西北隅を起点としてY軸方向をA～T、X軸方向を1～20として両者を合わせてグリッド名とした(図3)。測量の基準点のメッシュの一部を



実測作業



レベルを読む

除き測量業者に委託して設定した。

遺構の測量と遺物の出土地点計測は、簡易遭り方測量により調査研究員および調査研究員の指導の下に調査補助員が行い、一部全体図の作成には航空測量を用いた。測量の縮尺は1/20を原則とし、必要に応じて1/10の縮尺を用いた。

### エ 写真撮影

遺構などの撮影にはマミヤRB6×7とニコンFMを併用した。35mmの場合は、すべての遺構などについてモノクロネガとカラースライドを撮影してあるが、6×7は必要に応じて用いている。遺構や景観などの撮影は調査研究員が行い、航空写真は業者に委託した。

## (2) 主な遺構の調査方法

### ア 竪穴住居の調査

遺構記号SBを用いた。遺構確認後、重複しているものは新しい遺構から、主軸やカマドなどの施設を考慮し埋土観察用のベルトを十字に残して掘り下げた。その際、埋土内から出土する遺物の取り上げの便宜を考えて、北西をI区、北東をII区、南西をIII区、南東をIV区と命名した。ベルトは、埋土の堆積状況を記録後除去し、床面精査に入った。炉・埋甕・柱痕を残す柱穴など

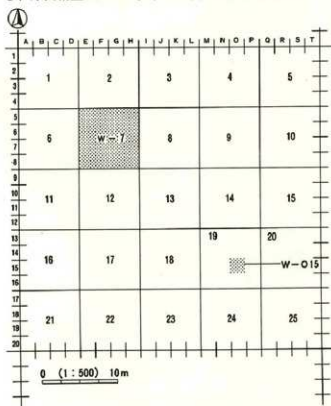


図2 中地区・小地区の設定

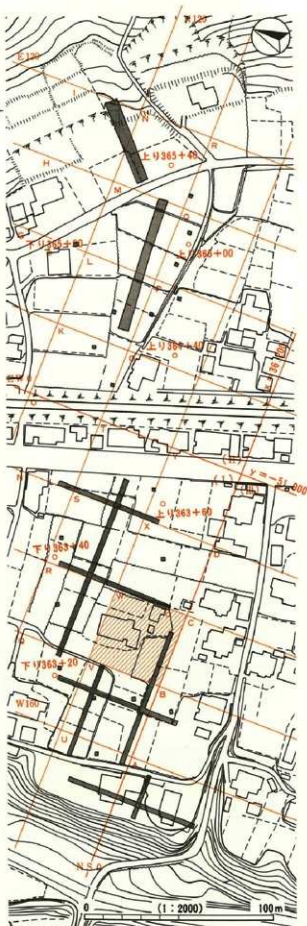


図3 大地区設定図、トレンチ・グリッド配置

情報の多い施設については、アップで写真撮影を行うとともに1/10の微細図を、他は1/20の個別遺構図を作成した。遺物の取り上げは、基本的に先の区割りと土層単位に行なったが、一部特殊な出土状態が観察されたものや床面密着遺物については原位置を記録した場合もある。

#### イ 掘立柱建物の調査

遺構記号STを用いた。柱痕が確認された場合、まずこれを約5cmほど掘り下げて撮影・実測を行なった。続いて、柱穴を半割して埋土の状況を観察・記録し、全面を掘り下げた。遺物の取り上げは、柱穴ごと土層単位に行なった。

#### ウ 配石の調査

遺構記号SHを用いた。遺構確認後撮影を行い、石質、組み合わせ、立石・丸石などの有無を観察しながら実測を行なった。垂直方向はエレベーション図の作成を基本としたが、必要に応じて側面ないしは見通し図も作成した。

#### エ 土坑の調査

遺構検出時に配石を伴っていたり、人骨が確認されたものはSHを、それ以外はSKの遺構記号を用いた。SHは配石ないし上面配石がある墓坑、SKはピット（小土坑）と分別する予定であったが徹底せず、SHを付けた遺構でも墓坑にならなかったり、SKと付けたにも係らず人骨が出土した場合もある。しかし、以後の作業での混乱を避けるため、遺構記号・番号の変更は行わなかった。

配石を伴う土坑の場合、まず配石の調査の方法にしたがって実施した後、土坑の確認を行なった。ただ、検出に難航しサブトレンチによる断面観察や検出面を下げるなどしたため、確認面のプランやレベルが、本来の土坑掘り込み面での形状と異なる場合もあり得る。

検出後は、半割して埋土の状況を観察・記録し、全面を掘り下げた。人骨が出土した場合は、底面まで掘り切らず、人骨上面まで掘り下げた段階で記録した。遺物の取り上げは土坑ごと埋土単位に行い、必要に応じて原位置を記録した例もある。人骨の取り扱いについては一括して後述する。



排水管による水路の切り直し



生活道路保護のための土留め矢板

### (3) 発掘調査時の安全対策の方法

#### ア 湧水処理

C区では発掘開始まもなく、地下水の湧き出しに見舞われた。とりあえずC区南に排水用のトレンチを設定したが、VI層直上より縄文時代後期の遺物が出土してしまったため、結局排水溝を仮設して処理することとした。加えて、調査地区を横断する農業用水路などの切り回しのため排水管も設置した。E区については、数ヶ所にカメラを設置して100Kポンプによる強制排水を行なった。

#### イ 掘削ノリ面の保護

E区では縄文時代の文化層が確認されたことにより、最深部で現地表下7mまで掘削する必要が生じた。本来ならば土留め矢板を打設するなどして、調査範囲いっぱいまで行うことが原則であるが、今回は、オープンカット方式で建設される高速道路の掘削ノリ面を保護するため、調査範囲内に1割の勾配を付けて調査

を行なった。

#### ウ 鉄道・国道および生活道路の安全確保

当初はJR線・国道・生活道路部分も調査範囲に含まれていた。JR線については、フロンテジャッキ工法によりパイプルーフを軌道敷下部に引き込むという建設工事の関係から、建造物整備心得（昭和60年4月JR東日本会社達第60号）の第1章第4条「危害の防止」、ならびに建造物検査基準（規程）第3条（検査の対象）に基づいて、軌道敷の東30m西10mが調査除外となった。国道部分は、調査の安全確保ならびに周辺地盤の保護のため、日本道路公団が矢板を打設した。また生活道路のうち、特に町道光A-1号線については道路の保全のためE区側に矢板を打設して崩壊を防ぐとともに、この部分の調査を見送った。



排土保護工事

#### エ 地域住民への安全確保

立ち入り禁止板の設置や地域住民への広報を通じて注意を喚起したほか、調査範囲を囲う防護壁を設置した。また、排土置場にも土砂の流出を防ぐために、ビニールシートを覆い、土留め矢板を設置した。

## 2 整理事業の方法

### (1) 人骨の整理

当初予想もしていなかった多量の人骨が出土したことによって、その取扱いをめぐって発掘調査段階から試行錯誤が繰り返された。以下、経過にそって取扱い方法を記しておく。

#### ア 人骨の取り上げ



人骨周囲を掘り下げる



ダンボールで囲い人骨を和紙で覆う



ウレタンフォームを流し込む



パールでこじりながら取り上げる



約1ヶ月乾燥させる



解剖用メスで人骨を掘り出す



実測作業



人骨の形質について説明を受ける

一般的には、土坑内で人骨が確認された場合、通常の遺物と同様に出土状態について記録した後、骨を取り上げて土坑底面の実測をとるべきであろう。本遺跡出土の人骨は極めて脆弱なため、それを犠牲にしても、人骨を出土した状態のまま取り上げる方針をとった。したがって人骨上面を精査し記録の後、バインダー処理をして骨を固めてから和紙で覆い、ウレタンフォームで梱包して取り上げた。

しかしながら、天日の下では調査中にも劣化が進んでしまうこと、のちにコラーゲン分析を実施することに変更されたことなどから、骨の露出を極力控え、硬化剤を使わず、和紙の代わりに川砂で覆って取り上げるようになった。考古学的な情報の収集を目的とした発掘調査にあって、現場での出土状態などの観察・記録を省略せざるをえないことは問題ではあるが、人骨から得られる情報を優先した結果であり、出土状態の記録その他は、後に述べる室内作業での補足が可能であることを前提に行なった。

#### イ 出土状態の記録

発掘調査現場で取り上げられた人骨は、梱包を解いてから日陰で約1ヶ月乾燥させたのち、土を除去する部分のみ霧吹きで濡らし、解剖用メスで骨を浮かせさせた。出土状態について鑑定を受けてから記録を取り、セメダインCで硬化させて部位ごとに取り上げテンパコへ収納した。ただし、代表的な10個体については出土状態のままに硬化させて保管してある。人骨取り上げ後、残された土で土坑底面の状態を観察し、必要によって図化した。墓坑の図面は、現場で作成した上面の図と室内で作成した人骨出土状態および底面の図とを合成させたものである。掘り出し中に出土した遺物は、人骨の上部・密着・下部に分けて取り上げた。なお、この作業は、昭和63年度は獨協医科大学・明治大学に委託して行い、平成元年度は埋文センターで実施した。

#### ウ 人骨の鑑定と分析

人骨の形質学的な鑑定は獨協医科大学、食性分析など環境生態学的な分析は東京大学に委託して行なった。

人骨の形質学的な鑑定では、まず取り上げられた人骨をさらに細かくクリーニング処理することから始められた。接合復元を経て、個体別に部位ごと計測を行



い、続いて非計測的な観察を行なった。観察項目については個体別にカード化してある。

食性分析については、形質学的な鑑定を経た個体の中から不用な部位を任意に抽出し、まず表面クリーニング・超音波洗浄・NaOH処理・真空乾燥などの前処理を行う。続いて遠心分離器を用いて脱灰し、過熱・吸引濾過を経て真空乾燥を行い、骨コラーゲンを抽出する。この試料を気化してガスに含まれる炭素と窒素の同位体、 $^{13}\text{C}$ と $^{15}\text{N}$ の量を質量分析計で測定した。あわせて $^{14}\text{C}$ 年代測定も行なった。

## (2) 発掘記録の整理

発掘調査で作成された図面類は、調査区ごと時代別に通し番号を付けて図面仮台帳に登録した。各図面は破損を修繕した後、記載必須事項（遺跡名、遺構名、地区名、実測担当者、実測年月日、標高、縮尺など）の点検を行い、平面図・部分図・断面図などと相互に照合しながら第2原図を作成した。遺構カードに記載してきた事項は、第2原図と照合した上で所見整理カードとしてまとめた。写真は、モノクロについては撮影順にアルバムへ、カラーズライドは内容別にファイルへ収納して撮影状況などを記入した。

## (3) 遺物の整理

遺物の台帳登録と洗浄・注記は、基本的には発掘調査現場で実施した。注記は遺跡記号、遺構記号番号または地区名、取り上げナンバーを記入した。土器・石器は分類・選別の後、検合・復元を経て実測・拓本に回した。なお、縄文土器の実測には3次元図化器を、石器の実測にはスリット写真を用いている。また骨や金属器など保存処理が必要とされるものについては、埋文センターで実施している。遺物の撮影は主としてマミヤRB6×7を用い、石器の使用痕写真のみニコンSMZ10実体顕微鏡を通してニコンFXで行なった。土偶のX線撮影は、島津製作所に依頼した。

## 3 指導者・協力者

発掘調査から整理作業までのあいだ、以下の方々や機関にたいへんお世話になった。明記してお礼にかえたい。なお敬称は省略させていただく。

会田 進	赤沢 威	赤羽 義洋	秋元 信夫	阿部 修二	阿部 芳郎	安藤 政雄	五十嵐由里子
石井 寛	石川日出志	石坂 茂	石野 博信	伊藤 正人	稲村 晃嗣	井上 雅孝	岩崎 卓也
江藤 盛治	遠藤 正夫	大沢 哲	太田 喜幸	岡村 道雄	加藤三千雄	狩野 睦	神沢昌二郎
菊地 実	喜多 圭介	木下 哲夫	桐原 健	工藤 俊樹	國島 聡	小池 孝	小杉 康
児玉 卓文	小林 公明	小林 詢	小林 康房	齊藤 弘道	櫻井 秀雄	茂原 信生	設楽 博己
島田 哲男	十菱 駿武	神保 孝造	末木 健	鈴木 三男	鈴木(山本)美代子		
鈴木 保彦	関沢 聡	芹沢 雅夫	高桑 俊雄	高見 俊樹	田中 琢	田村 俊之	坪井 清足
都築(本橋)恵美子		勅使河原彰	戸沢 充則	烏羽 嘉彦	直井 雅尚	長崎 元廣	仲田 茂司
長沼 孝	水峯 光一	中村 健二	奈良 泰史	成田 誠治	新津 健	西沢 明	西沢 寿晃
西田 泰民	能城 修一	馬場 悠男	林 茂樹	原 雅信	春成 秀爾	樋口 誠司	福沢 幸一
福島 邦男	福島 雅儀	藤巻 正信	藤巻 幸男	堀越 正行	増山 仁	松村 博文	南川 雅夫
宮坂 光昭	武藤 雄六	森嶋 稔	森 幸彦	矢島 國雄	家根 祥多	山口 明	山田 昌久
山本 暉久	山下 泰永	山田 真一	吉田 邦夫	米田 稔	米林 仲	渡辺 誠	和深 俊夫

東京大学総合研究資料館、獨協医科大学第一解剖学教室、明治大学考古学研究室、島津製作所、日本フイルップス、日本電子、パスコ、シン航空写真、新日本航業、

## 4 調査に参加した補助員

発掘調査から整理作業に至るまで、北村遺跡に係る今回の調査は、多数の調査補助員の方々の協力なくしては達成できなかった。以下、感謝の気持ちを込めて、お名前を列挙させていただく。(敬称略)

<b>発掘調査</b>	青木 光男	赤塚 仁	池上いく子	石井 渉	石田 修	市川 邦雄	伊藤 公郎		
	岩切 常行	岩渕けさみ	内山喜和子	大池 幸子	太田 貞一	大月 寅由	大沢 真二		
	柿沢 弘人	加藤やす江	金沢 幸子	上条ありま	上条喜栄子	上条 澄江	上条 三枝		
	河内ゆり子	草深さくの	草深 豊子	倉科さき子	倉科 照子	黒沢 恒夫	栗幅かずま		
	小林佐恵子	小林 昇	小松 武	小松 茂夫	小松 志郎	渋谷 二郎	洲崎 寅雄		
	須永 典子	荘 秀也	高野 良孝	高橋 幸雄	高原 栄子	高山 清十	竹内けさ子		
	竹内 浪子	竹山 政夫	田中加恵子	坪田わくみ	中嶋 菅一	中村 嵩	長幅 明美		
	長幅 勝海	長幅今朝義	長幅さきの	長幅 米義	長幅みえ子	長幅よね子	長嶺シズエ		
	西田 利正	波場 松子	波場 道子	林 伊和夫	原口 一雄	東山 勇雄	平林 栄子		
	平林 乙子	平林喜美恵	平林千恵子	平林 恒子	平林 正子	藤井 初子	藤松 弘子		
	藤原 静敏	降幡 栄子	降幡 貞子	降幡 繕治	降幡たな子	降幡 義一	古瀬 兵次		
	古屋善次郎	堀内 園夫	堀内 祐子	本多けさみ	牧垣喜代寿	牧野 幸子	松井 公子		
	丸山 博次	丸山 実	水口栄美子	宮坂富貴子	宮沢菊太郎	宮崎きよ子	望月 里子		
	望月 重彦	望月なみよ	本木八代子	百瀬 八江	森崎 文一	森 亨	森山 秀人		
	矢下 五郎	矢花 広子	山口 温枝	山崎 吟子	山崎けさき	山崎架装人	山崎 統		
	山崎真寿美	山崎 幸俊	山崎 喜美	山本 朋成	横内 弘子	吉田 次子	和田 一雄		
	渡辺 雅男							以上113名	
<b>整理作業</b>	青木 明美	市川 静代	大内 秀子	大沢 真二	岡島 光枝	大和 豊美	大和 広		
	北島 康子	小出 紀彦	高沼千恵子	古平 道子	小林喜美子	小林美代子	小林 由香		
	近藤 朋子	須永 典子	関 一雄	高砂 優	立岩 洋子	田中源三郎	東条 和子		
	名取さつき	西田 君子	西村はるみ	橋本 信子	原田さゆり	半田 純子	丸山 朝子		
	水口栄美子	山岸 隆男	吉沢 朝子	米窪 照美				以上32名	

## 第2章 位置と環境

### 第1節 遺跡の位置

本遺跡は、長野県のほぼ中央にある松本市の北方約10kmの東筑摩郡明科町大字光北村・中条地籍に所在する。遺跡の範囲は、南と北をそれぞれ奥沢・小倉沢によって画された犀川右岸第4段丘(北村面)全域で、東西約400m、南北1200mの範囲に及ぶ。標高は548～556m、犀川との比高はおよそ20～25mである。対岸は、県内有数の穀倉地帯として知られる安曇野が広がり、正面には、北アルプスの山々を望むことができる。

一方、東側には筑摩山地の一支脈長峰山地が連なっており、段丘上はこの山から継続的に土砂の供給を受けているため、ところどころに小扇状地や崖錐地形が発達している。

遺跡の現況は、ほぼ中央部を南北に国道19号線とJR篠ノ井線が縦走し、これら幹線および山麓の明科町道添いに宅地が集中、その間を田畑が埋めている。また、豊科インターチェンジから北上する中央自動車道長野線は、犀川の氾濫源を通過したのち北村の段丘に突き当たり、遺跡を東西に横断して明科トンネルに入っていく(図版1・2、図4)。

### 第2節 自然環境

#### 1 地形と地質

##### (1) 基盤の地形と地質

明科町周辺は、南北方向に走る山麓線を境にして、筑摩山脈の前山支脈である長峰山地と、西側低地の松本盆地とに分かれる。長峰山地は、山麓線が山麓からわずか1000m内外のところにあり、急崖をなして盆地に落ちる。最高地は、北から長峰山(933.5m)、黒尾山(927.5m)、光城山(911.7m)などでわずかに高度をもっているが、全般的には平坦な痩せ根根が連続しながら、

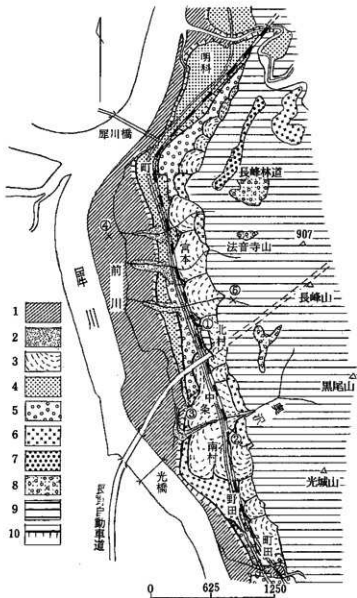


図4 光段丘付近の地形

- (1) 氾濫原 2: 沖積錐 3: 扇状地群 4: 第五段丘  
5: 第四段丘 6: 第三段丘 7: 第二段丘 8: 第一段丘  
9: 山地 10: 段丘産 図中の①-⑤の数字は地下水の採水地)

高さを南方へ次第に減じている。

山腹には、一段ないし二段の解析を受けた段丘面がみられる。また、南の田沢段丘とを分ける濁沢川下流から北方へ、長峰山地の山麓に沿って光段丘面群（第三段丘—南村面、第四段丘—北村面、第五段丘—明科面）が開け、300～700mの幅で南北に連続する（図4）。段丘座は、段丘面形成期における犀川の曲流侵食によって生じた出入りがみられる。段丘面には、それぞれ基盤岩類に重なった段丘礫層（一部に露出）を覆い、沖積錐がいくつもの小高い小扇状地群を形成して西に傾く。扇端部付近をJR篠ノ井線や国道19号線が北走し、国道は階段状に段丘面を上る。古くからの集落は、生活水を井戸水に求めていたため、地下水の得易い扇状地群の接する沢沿いや扇端部付近を取り巻いたり、段丘端に立地しており、旧道がこれを結んでいる。最近では上水道の普及によって扇央部を中心に宅地化が進み、様相は大きく変化してきた。

段丘の下位には一段と低く犀川の氾濫原が、光橋付近から600m内外の幅で開け、安曇野と対して豊かな水田地帯や、御宝田の湧水地帯を形成している。氾濫原は、松本盆地でもっとも標高の低い犀川橋付近で520mを割り、ここから上流に向かって扇状に緩く高まっている。犀川では、光橋で標高530m、田沢橋で545mとなりその勾配は1000分の12で、河流は直線的である。古くから洪水・氾濫によって両岸の水田地帯が侵され、また時々流路の移動もあり、一部で耕作を共有する地割行が行われていた。

この地域の基盤岩類は、北部フォッサ・マグナに分布する。中部中新統の別所累層・青木累層および一部に、大峰帯に属する鮮新統の小谷累層中部相当層がみられる。河岸段丘は、基盤岩類を不整合に河床礫層が重なり、それを崖錐や小扇状地群など沖積錐が覆っている（図5）。

**別所累層**：長峰山地西斜面一帯に分布する。岩相は、黒色または灰色の緻密な泥岩で、岩相変化は少ない。表面は酸化鉄による赤褐色の汚染が目立つ。この地層は一般に剝離性に富み、細かい節理が発達して小塊片に崩れ易く、麓層をつくる特徴をみる。ニシシイワシ・ハダカイワシ科などのウロコ化石を含み、静穏な海域での堆積環境を示す。この付近では、砂岩や砂岩と泥岩の互層がはさまり、スランプ層もみられる。

**青木累層**：奥沢中流域以東の長峰山地に分布する。岩相は下部から礫岩・砂岩・砂質泥岩互層などで、最下部の礫岩・砂岩層は連続性が良い。この地層は浅い海での堆積物で、謎痕やスランプ層がみられ、堆積時の激しい基盤運動を物語る。一般的に砂質泥岩互層層は軟弱で風化性に富み、長雨期などには地滑りが頻発して、谷は濁沢となって多量の泥土を流失する。

**大峰帯—小谷累層中部相当層**：中山断層以西の松本盆地との山地および盆地の一部に分布する。頻海デルタ相またはデルタ相の礫岩など相粒堆積物からなり、一部に酸性凝灰岩をはさむ。礫種は古生層のものが主で、第三系の砂岩も含まれ、礫はもろく割れ易い。酸性凝灰岩のK—Ar年代は290±60万年（加藤・佐藤：1981）を示し、最近光段丘端や光橋付近の河床でも発見され、中新統とは断層で接する。

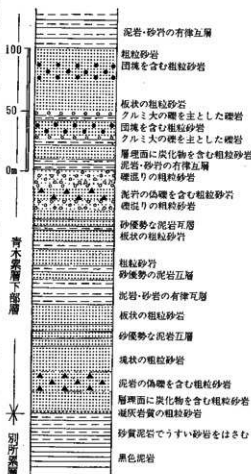


図5 奥沢下流部の柱状断面

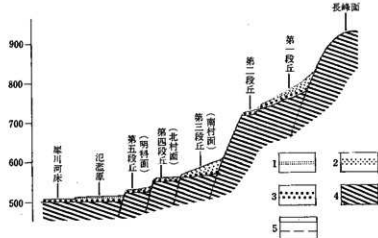


図6 北村遺跡付近の地形断面模式図

- 1：押し出し堆積物 2：河床砂土層 3：河床礫層  
4：基盤岩類 5：断層または推定断層

給された。山砂利の巨礫は、現在長峰面の解析が進んでいるため山稜面には見当たらず、奥沢や粕沢などの沢の各所に転石となってみられる(図6)。

**第一段丘：**更新世中期初頃、松本盆地の東縁と西縁を画する断層の間が地溝状に落ち込み、松本盆地の原形となる陥没盆地が形成された。陥没した盆地底には、梨ノ木礫層〔松本盆地地研グループ；1977〕が堆積した。これは、淘汰不良の礫層で、クリスタル・アッシュC<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>・C<sub>3</sub>をはさんだり、また、これに覆われた淘汰不良の礫層・砂層・シルト層などから構成されている。この地域では、標高770m内外の長峰林道・法音寺山・池の平など、長峰山地の西側中腹部に分布する。長峰林道では、こぶし大～人頭大の花崗岩・硬砂岩・粘板岩などで、現河床礫と大差のない重円礫または円礫からなり、礫と礫の間を中粒砂が埋めている。上部には、風化して金色になった黒雲母が散在することから、クリスタル・アッシュに対比している。クリスタル・アッシュのフィッション・トラック年代では、39万±8万年〔鈴木；未公表〕となっている。河床から220～250mの高所に分布する段丘である。

**第二段丘：**明科駅東方の能念寺山山頂一帯に平坦面を形成する。標高700m内外、解析が進んで馬の背状の尾根となっている。一部で薄い礫層がみられるが「くさり礫」化しており、河床谷の最上位である大倉面に対比される。クリスタル・アッシュは含まれていないことから、梨ノ木礫層相当層より新しいものとされ、礫種や礫の大きさなどは、現河床礫と大差ない構成で、河床からは180mほどである。

**第三段丘(南村面)：**明科～松本城山間では、梨ノ木礫層の堆積面を切って三角末端面が南北に直線的な配列をしている。この三角末端面直下に分布する上位の低位段丘が第三段丘である。これは、盆地東縁に沿う活断層群が発達して、長峰山地が更新世中期～後期にかけて一方的な隆起を続け、その間、盆地底は相対的に沈降して、梨ノ木礫層などの地層を盆地東縁の山地に押し上げてきたことを意味している。さらに後期になると、飛騨山地は隆起をいっそう強めて山岳地帯を形成し、それに伴って盆地へ多量の砂礫を供給した。これが波田礫層で、この礫層の構成する面を波田面とよぶ。波田面の最終形成期は、盆地中央部では、ウルム氷期極末期(1,6万年前)直後〔松本盆地地研グループ；1977〕とされている。光段丘では、段丘崖や段丘面が奥沢の沖積堆積物に埋没して明確さを欠くが、河床礫層の分布する標高500mを越えた野田・南村・中条の各集落がの一段と高台になった地域がこれに当たる。基盤岩を侵食した凹凸面に、現河床礫と同じ構成の礫層が2～3mの厚さで分布する。上面は、沖積錐の小扇状地群に覆われており、河床からは30～45mの高さに広がる。

**第四段丘(北村面)：**更新世末になると、松本盆地を広く覆った波田礫層および相当層の末端部が削削

## (2) 段丘の形成期

**長峰面：**長峰山地は、標高900m内外の起伏量が極めて小さい平坦な山稜が続く。この山稜面を長峰面とよぶ。この面は、大峰面〔小林・平林；1955、仁科；1972〕に対比され、更新世前期中頃の広域隆起の時代に準平理化作用を受けて平坦化された。平坦面の形成後、広域隆起はさらに継続して更新世前期末頃になると、飛騨山地ブロックは急激な上昇を始めた。そして長峰面上には、多量の重角礫または角礫からなる巨礫の山砂利が、飛騨山地から供

される時期が到来して、一面に河川沿いの地域や末端部が削られた。ついで基盤の上昇は停止して砂礫の堆積が始まった。この地域ではその一連の推移の中で、南村面または基盤岩を侵食して形成されたのが北村面である。南村面を取り巻いて南側の町田地帯、北側の北村遺跡を中心に北方へ中川手宮本・明南小学校・明料駅東方にかけて不規則な帯状に分布する。段丘崖は宮本屏の宮付近で一部不明瞭になるが、よく連続する。沖積錐の小扇状地群に覆われており、段丘端付近では河床礫層が表出している。礫層は2m内外で犀川の河床礫と構成は変わらない。河床から20~25mの高さである。

**第五段丘（明料面）**：この段丘は、明料駅前方に広がる明料町の中心街を発達させた段丘面である。段丘は粘土分に富んだ土壌が発達し、その下に3m内外の河床礫層が基盤岩を覆う。光橋付近から始まり、北方へ河床からの比高を増して光天神原・中川手宮本・中耕地・町・明料へと延び、会田川で切られる。末端の明料では河床からの高さは18mを示しており、全般的に段丘崖の保存は良好である。山麓線から離れているため、沖積錐の小扇状地群は形成されていない。

### (3) 北村遺跡付近（第四段丘-北村面）の堆積過程（図7・8）

**段丘礫層**；基盤岩を不整合に覆って、犀川の河床礫と同様な礫層構成で、径20cm以下の新鮮な円礫からなり、粗粒砂が充満している。従来この段丘は更新世の段丘と考えられていたが、■段丘礫層はローム層の被覆を受けていないこと。■松本盆地東縁断層の垂直変移速度は3.5~2.7mm/年の値が求められている。また、中央高地の隆起量は+3mm/年であることを考慮して隆起量を推測すると、9000~6600年の時間的経過を測ることができること。■遺跡の発掘を通して、縄文中期中葉以前の遺構が見当たらないこと。等々の事象から、段丘の形成期は縄文早期~前期と推測され、この時期以降に離水し、段丘面として安定したものと考える。

**段丘堆積物I群**；段丘礫層を直接覆うオリープ褐色細粒砂層。泥岩細角礫を含む褐色粘性土、局部的には再食礫を含むオリープ褐色粗粒砂層を挟み、上位は暗褐色泥岩細角礫土の層相を示す。この堆積物群は、奥沢扇状地の初期的堆積物として20~50cmほどの層厚をもち、段丘礫層の凹地域に流路を変えながら埋積したものである。また出水期には、第三段丘の礫層を削った再食礫や砂および上流部からの泥岩細角礫が運ばれたものと判断される。堆積期は、細角礫土層を掘り込んで縄文中期後葉の遺構が構築されており、土壌の腐植化も進んでいることから、縄文中期中葉以前に形成されたものとする。

**段丘堆積物II群**；この堆積物はマスムーブメント堆積物である。背後の山地には非常に急勾配な小沢が認められるだけで、谷頭部に古い崩落地形がみられることから、この谷頭部の崩落に伴う崩積土が土石流となって押し出したものとする。数次の崩落による覆瓦状の堆積環境を示し、山麓部の一隅に分布する。この堆積物は無遺物層であるが、I群の上位に重なり、末端斜面では縄文中期後葉の遺構が掘り込まれていることから、中期後葉の比較的短い時間内に形成されたものと判断される。

**段丘堆積物III群**；II群堆積物の末端斜面に重なり、I群堆積物を覆い緩斜面で北西方向に延びる。場所によっては直接的に段丘礫層に接しており、奥沢扇状地の成長とともに、徹底地帯を埋積した様相を示す。全般的に細粒砂で50~80cmの層厚をもち、泥岩細角礫を含む腐植性の暗褐色シルト層が主体を占め、細粒砂層ないしシルト層に移行する。中期末葉から後期中葉の遺物が包含されているとともに、上面には後期中葉の配石が構築されていることから、この間に形成されたものと判断される。

**段丘堆積物IV群**；下位のII群・III群とは不整合に接し、一般的に2mを越す層厚で、緩やかな傾斜をなす。黄褐色粘性土と暗褐色粘性土をセットにした4回の時間的間隙をもっている。背後の青木累層起源の砂岩風化粒が黄褐色斑紋を示しており、時々泥岩の細角礫層を挟む。また、段丘礫層の再食礫や泥岩層を溢流した幾筋もの流路跡がみられ、母材の共通性から奥沢扇状地堆積物と判断される。上位層は平安期

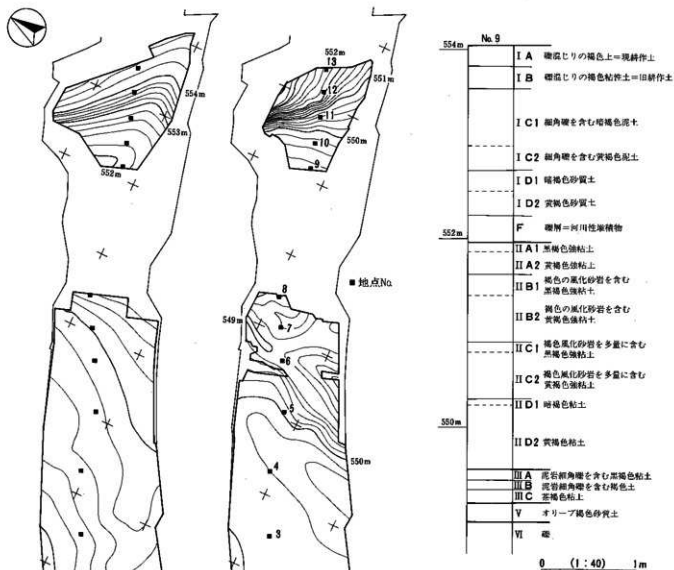


図7 No.9地点の柱状断面(上)と古代面(II層上面)(左)・縄文面(III層上面)(右)の地形

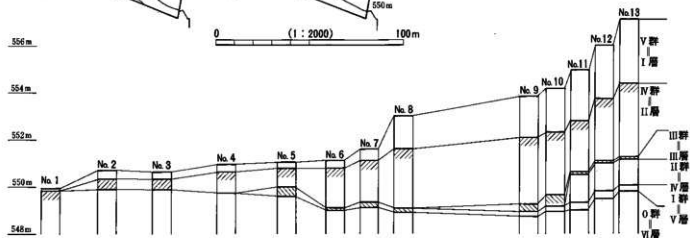


図8 北村遺跡の七層断面(長さ1:2000 深さ1:160)

の遺構が分布し、下位層には弥生時代後期の遺構も認められる。したがって、1000年あまりの期間を要して第三段丘崖を埋没させ、奥沢扇状地の成長とともに一緒に供給されたものである。

**段丘堆積物V群：**背後の急勾配の小沢の運んだ泥岩細角礫土である。山麓沿いにIV群を覆い、半径170mほどの小高い小扇状地や崖錐をつくる。一部で奥沢扇状地上位の岩屑と指文関係を示す。一般的に出水期の堆積が顕著で、天井川の性質をもつ。無遺物層であるが、堆積期は中世以降と考える。

#### (4) 配石に用いられた巨礫

数万個を越える礫が縄文時代の住居址や墓坑等に累々と用いられている。中には簡単には動かし得ない巨礫が含まれている。最大は130×80×25cmの板状花崗岩塊をはじめ、一般的には50×35×30cm内外の古生層起源の垂円礫および第三系板状砂岩塊である。古生層起源の礫種は硬砂岩・ヒン岩・花崗岩が主を占め、粘板岩・チャートは目立たず、まれには輝緑凝灰岩・石灰岩の小塊も含まれる。この規模の巨礫は犀川には存在しないことから、その供給源を背後山地の山砂利(小林・平林;1955)と考える。山砂利は更新世前期末頃、広域隆起の継続によって飛騨山地ブロックは、急激な上昇を始めた。当時飛騨山地東縁は現在の松本盆地中央部まで張り出していたもので、陥没前の長峰山地へ急勾配の河川によって、出水時に直接運ばれたものである。その後、長峰山地の隆起にともない山地の解析が進み、山麓にはほとんど残らず、中腹や沢に転落している。沢の転石には直径2mに及ぶ花崗岩礫もみられ、奥沢をはじめ周辺の沢には、現在も転落した山砂利の巨礫が散在する。したがって、北村遺跡の巨礫類は、一部は犀川から運んだのであろうが、その多くは遺跡周辺の奥沢や小倉沢に転落していた山砂利と、その付近に露出している板状砂岩塊を、何らかの手立てを講じて搬入したものとする。なお山砂利には安山岩類は含まれていないはずである(乗鞍岳など飛騨山地の火山活動は起こっていない)が、巨礫を含めた集石中にみられる安山岩類は、石皿等に加工された小形のものである。これは山砂利とは別に犀川から運んで加工したもので、何らかの事情で廃棄したのであろう。

## 2 気 候

長野県は南北に約220kmと広く、標高差は2950mと大きいためにその気候は複雑で、善光寺平以北は日本海型気候に、伊那谷南部では太平洋型気候に属す。明



長峰山地の巨礫



沢の転石となった花崗岩礫

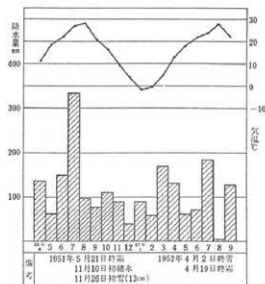


図9 明科町東川手の気象  
「明科町史」上巻より転載



科町を含む松本平は、典型的な内陸盆地型気候の特性を示し、年較差が25度と大きいため夏は暑く冬の寒さは厳しい。また、降水量は一般的に少ない。

1952年の統計によると、明科町の年平均気温は12.4度で、最高は8月の26.5度、最低は2月の-1.5度である。また、1968年から10年間の降水量は、年平均1200mmを越えない。(関;1984) また、晩秋の頃には、犀川筋に霧が発生する日が多い(図9)。

### 3 動・植物

#### (1) 植 物

明科町の約43%を占める山林原野には、現在アカマツを主としてカラマツやスギなどが植林されており、春はワラビ・タラノメ・ウドなどが自生し、水田や湿地にはセリやナズナをみることができる。

縄文時代においては、今回の調査で住居址から出土した炭化材の鑑定結果から、遺跡周辺にクリが繁茂

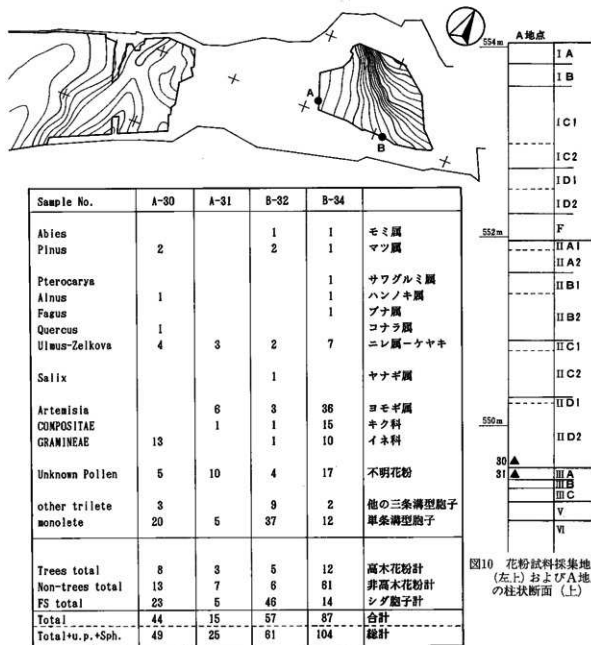


図10 花粉試料採集地点 (左上)およびA地点の柱状断面 (上)

表2 花粉分析結果一覧

していたことは想像に難くない。そのほか、カヤ・ケヤキ・カエデ属の炭化材も出土している。しかし、堅果類や根菜類の植物遺体は検出されなかった。またE区調査地区内の堆積土から採取した土を用いて、花粉分析を行なったが、モミ属・マツ属・サワグルミ属・ハンノキ属・ニレ属が若干検出されたにすぎず、遺跡周辺の植生を復元するには至らなかった(図10、表2)。

## (2) 動物

北村遺跡で確認された獣骨は、イノシシ、シカが圧倒的の大多数を占め、カモシカ・ツキノワグマ・タヌキはそれぞれ1点見つかったにすぎない。

松本平では明治年間まで、ツキノワグマ・イノシシ・カモシカ・ニホンシカ・タヌキ・キツネ・イタチ・テン・アナグマ・ウサギ・リス・ネズミなどの棲息が知られていたが、年々その数は減少してきている。

魚の骨は検出されなかった。『犀川鮭繁盛記』によると、昭和の初期には年間1000尾程度のサケが獲れたとされており(青木;1983)、古くは1193年(建久4年)の伊勢神宮の『神風鈔』により、麻績御厨から内宮へ鮭150尾が納入されていたとあるから、さらにさかのぼる縄文時代にあつてサケが犀川を遡上してきたことは確実であろう。現在はマスやウグイが獲られている。

## 参考文献

- 青木梅生『犀川鮭繁盛記』1983  
 小口 高「松本盆地中部における活断層の垂直変移速度」(『活断層研究』No 8) 1990  
 小林国夫・平林照雄「松本盆地周辺のいわゆる“山砂利”について」(『地質学雑誌』61巻712号) 1955  
 加藤碩一・佐藤信生「信濃池田地域の地質(5万分の1図幅)地質研究所1983  
 関 全寿「松本市北部の地質構造」(『信大教育学部松本分校科学教室研究報告』No 7) 1962  
 関 全寿「自然」『明科町史』上巻1984  
 関 全寿「松本盆地東縁河岸段丘面における埋積過程の様相」『田中邦雄教授退官記念論文集』1989  
 田中邦雄・関 全寿「松本市北方の第三紀層」(『信大教育学部研究論集』No18) 1966  
 長野県埋蔵文化財センター「長野県埋蔵文化財センター年報」No 4 1987  
 長野県埋蔵文化財センター「長野県埋蔵文化財センター年報」No 5 1988  
 仁科良夫「大峰面の形成過程」(『地質学論集』No 7) 1972  
 仁科良夫「松本盆地北部の陥没過程」(『地球科学』37巻6号) 1983  
 松本盆地団体研究グループ「松本盆地の第四紀地質—松本盆地の形成過程に関する研究(3)—」(『地質学論集』No14) 1977  
 山田哲雄「松本市北方の地震探査によって探られた糸魚川—静岡線」『フォッサ・マグナ』1968

## 第3節 歴史環境

### 1 集落の立地状況

北村遺跡が位置する犀川の右岸には、更新世後期に形成された新期の河岸段丘が発達しており、縄文時代から現在までの集落・田畑および道の大部分は、ここに展開している。遺跡東側の山地は急峻な傾斜をもつが、沢筋は豊科町大口沢や四賀村五常方面への交通路として利用されている。明科町周辺でも、池田町の高瀬川・四賀村の会田川・松本市北東の女鳥羽川の流域において、同様な集落立地が認められる。北村遺跡の西側は、犀川の氾濫原を挟んで、北アルプス山麓から発達した扇状地が裾野を広げている。扇状地は松本平における縄文時代の遺跡の宝庫として知られるが、扇状地内を流れる伏流水がまだ谷地形を形成していた当時は、幾筋にも分れた根根状地形の部分に集落が営まれた可能性もある。また、集落を取り巻く山や川は、縄文時代以来、生活の第一次的な資源を得るために、人々によって利用され続けてきたものと思われる。以下、各時代別に遺跡の状況を概観する。(図11、表3)

### 2 時代別の遺跡分布

#### ア 旧石器時代から縄文時代草創期

旧石器時代から縄文時代草創期に属す遺跡は、明科町内および周辺部においてほとんど知られていない。わずかに、明科町中中でオオツノシカの化石が出土し、これを追う旧石器人の存在が推定されているのと、本城村南平遺跡で神子柴タイプの局部磨製石斧、松本市峯の平で有舌尖頭器が確認されているにすぎない。

#### イ 縄文時代早期から後期

縄文時代早期には、押型文土器が発見された明科町こや城・堀金村上手林・半窪下、絡糸体圧痕文をもつ土器が出土した明科町ほうろく屋敷や、末葉の土器が発見された同町吐中・上手屋敷などが知られるようになる。また、穂高町離山・新林でも該期土器が出土している。

前期になると明科町内の遺跡数は増加し、前葉から中葉の上手屋敷、諸磯系土器が出土した塩田若宮、末葉の緑ヶ丘・ほうろく屋敷がある。周辺市町村でも、穂高町南原、堀金村半窪下、三郷村才の神・大日堂北・黒沢川左岸・同右岸・貯水池北、生坂村東部八幡原・番所屋敷、松本市本郷袴腰・不澄池・下屋敷・柳田など微増傾向となる。松川村では、滑石製品製作遺跡として著名な有明山社をはじめとして、西原・湯橋付近・大門橋南・二ツ屋・桜沢など該期の遺跡が多い。

中期に入って町内の遺跡数はさらに増加し、初頭の土坑らしきものを検出した吐中城下、中葉から後葉の上手屋敷、後葉の上郷、末葉の北村、4軒の敷石住居址が確認されたこや城、同じく敷石住居らしき配石や獣骨を発見した塩田若宮がある。犀川左岸では、いずれも後葉の土器が出土しており、下押野城ヶ原、土偶が出土している塩川原孫五郎屋敷・緑ヶ丘・宮原・宮の前・伊勢宮・中村経塚・石原・ほうろく屋敷があげられる。周辺でも、池田町10遺跡、松川村10遺跡、穂高町18遺跡、堀金村10遺跡、豊科町1遺跡、三郷村13遺跡、本城村4遺跡、生坂村6遺跡、四賀村5遺跡、松本市放光寺・沢村2遺跡、岡田10遺跡、本郷41遺跡と急増する。

後期になり町内の遺跡数は減少傾向に入り、北村・こや城・塩田若宮・三五山・孫五郎屋敷・宮原・宮の前・伊勢宮・ほうろく屋敷を残す。中期末葉から継続的に住居や墓・配石を含む集落を形成してきた北村・塩田若宮・ほうろく屋敷は、遺跡間がそれぞれ均等におよそ4kmほど距離をおいている点、非常に興味深い。また、犀川を挟んで北村のちょうど対面にあたる烏川扇状地頂部に離山が位置し、長峯山地を越

えた東北方四賀村に井刈がある。両遺跡とも配石をもち、土偶・石棒といった「第2の道具」を多く有する点からみて、当時北村と密接に交流をもった遺跡と考えてよからう。このほか池田町4遺跡、穂高町7遺跡、堀金村7遺跡、三郷村5遺跡、生坂村1遺跡、松本市放光寺1遺跡、岡田1遺跡、本郷3遺跡で該期の土器その他が出土している。

#### ウ 縄文時代晩期から弥生時代

晩期から弥生時代中期には町内の遺跡が激減して、水式単独出土の荒井、再葬墓が確認されたほうろく屋敷、焼土を伴う配石および獣骨が検出された緑ヶ丘のみとなる。隣接市町村をみても、池田町・三郷村の各4遺跡を除けば穂高町雁山、人面付土器が出土した豊科町の町田、本城村町裏、松本市峯の平・鳥居前、住居址84軒を検出した宮淵遺跡をあげ得る程度である。この時期遺跡が激減する背景として、自然環境の悪化が指摘されるが、遺跡立地がより低位の段丘へ変遷している実態を加味したとき、深所に遺跡が埋没している場合や、すでに河川の侵食作用により消失している場合も考えられる。そうしたとき、ここに示した遺跡数は見せかけの数である可能性も捨て切れない。未だ稲作文化が定着をみないこの時期には、独自の地域色をもちながらも、土器組成の一定量を東海系土器が占めている。再葬墓の風習も広く東海文化圏の中でとらえることができよう。

弥生時代後期に入り、北村・緑ヶ丘で住居址が確認されたほか、こや城や龍門淵で該期の土器が出土している。北村出土土器は箱清水系のそれであり、近隣市町村の該期遺跡でも同様の傾向が読み取れる。こうした状況の背景に、稲作の定着とそれに伴う地域再編が一定程度達成された影響があるものと思われる。

#### エ 古墳時代

4・5世紀の古墳時代前期から中期にかけての古墳は明科町を含め周辺市町村でもほとんど確認されていない。唯一松本市本郷の桜ヶ丘古墳が5世紀代にさかのぼる。ただ、犀川に面し弥生後期に進出をみた龍門淵では、5世紀代の土師器壺・壺・小型丸底壺・高坏のほか、鋸歯紋を有する石製紡錘車が出土しており、周囲の地形と絡めて祭祀遺跡であろうと解釈されている。また、穂高町馬場街道では、5世紀前半代の住居址が2軒検出されている。

古墳時代後期に入ると町内における古墳は、明科5、潮2、下押野1で確認されている。木棺直葬が想定されている能念寺古墳からは直刀が2本出土している。いずれも地鉄が黒色を呈する古式のものであり、立地や埋葬施設の形式から6世紀前半代の古墳と推定されている。また、上郷古墳では横穴の石室から直刀2本と甕が出土しており7世紀末葉に比定されている。下押野所在の上屋敷古墳は、池田町中鶴地区や会染地区に点在する後期古墳と関連があるかもしれない。松川村から三郷村にかける西山麓に築造された古墳はほとんどが6世紀後半以降のものであり、松本市城山・岡田・本郷水汲の古墳も、一部を除き6世紀後半から多くは7世紀代に位置づく。また該期の集落遺跡は明科、潮、下押野の各地区のほか今回北村の町道西側でも発見されている。

#### オ 古 代

律令期7世紀末葉には明科に寺院が造られた。廃寺跡より出土した軒丸瓦はおおむね3形式に分類され、それぞれ白鳳後期・奈良・平安に比定されている。中山山地山腹の宮原・桜坂には古窯址が確認されており、平安時代の須恵器とともに布目瓦も出土している。明科廃寺の増改築に際して利用されたものであろう。ところで、正倉院宝物中に、天平宝字8年(764)銘「信濃国安曇郡前科郷戸主 安曇部真羊 調布一端」の墨書ある麻の布袴がある。地名から考証して現在の七良・南陸郷と池田町の南部を包括する前科郷の存在がわかるが、犀川以東の明科町分がはたしてこれに属していたか否かについて確証はない。当時町内には、北村・上手屋敷・栄町・上郷・塩田若宮・上生野・木戸橋端ノ爪・宮原・宮の前・中村経塚・ほうろく屋敷の各遺跡があり、これらの集落を貫通する川手道があったと推定されている。

## カ 中 世

律令制崩壊にともない川手地区は国府の荘園(国衙領)に編入されたものと推定されるが、鎌倉時代中期には小泉・佐久両郡に勢力を張っていた海野氏の一族が新補地頭として進出し、土着の在名をとって、塔の原・光・田沢と名乗るようになる。光氏は、現在の町田地籍(豊科町分)に居館したと推定され、館町を造って家臣団を住まわせ、東側背後の山上に光古城を築き、のちには光仁場城も築いている。また、一党は光環の開削を進めたともいわれている。家臣には、下里氏・藤松氏・降旗氏などがあり、中でも中条の館は、下里氏が館を構えたところと伝えられる。小字からの考証によると、北村の東側明科町道端には館に関係したと思われる陸海道がみえ、国道の西側にはおそらく光氏の馬場があったと目される馬場という小字名がみえるが、いずれも今回の発掘調査域から外れている。

## キ 近 世

近世に入り、1590年石川氏支配時代の明科では、旧光氏の領分が光村として存続した。1725年幕府領となるも、その後たびたび松本領になったり幕府領になったりし、1785年(天明5)松本領となり明治まで続く。1602年、北国脇往還(善光寺街道)が村内を通過するが、光村には川手道(現町道)が通る。ところで、1662年に北村に4間3間の地蔵堂と石地藏(PL40)が建てられた。今回調査対象となった国道西側のA~B区には、「地蔵堂」の小字がみえる。のち1669年には、地蔵堂に三界万霊塔が建ち、1682年には念仏堂も建つ。1698年以降には現在の北村公民館の場所に大日堂も建てられた。その他、光村にあった寺院は浄土宗宗林寺と真言宗長光寺である。1698年の「神社仏閣道法書上帳」によると、光村の家数は76軒あった。田畑は1652年時に、田が1659畝25歩・畑が5137畝9歩だったものが、原川の川除などによる開発の進展で、幕末1866年には、田が3398畝23歩・畑は6261畝15歩に増加している。作物は米・麦・稗のほか、いぼたや原川の鮭などがある。

## ク 近・現代

近代に入り、1868(明治初)年、北村が属していた光村は、1875年、田沢村と合併して上川手村となるが、1885年には川手村、1889年には連合制がなくなり再び上川手村となる。このときの戸数は455軒、人口2488人とされている。1955年1月、南村を除いて中川手村となり、同年4月には明科町が発足する。このときの北村の戸数は82軒であった。その間1889年には川手新道が開けられ(現国道か?)、1891年には原川べりに百間堤防が築かれ、1902年には篠ノ井線が開通している。1954年には、北村の開田が完成し、1957年にも約10ヘクタールが開田された。1982年、川手地区県営ほ場整備事業着手。同年、中央道長野線明科地区通過が発表される。



図11 松本平北半部の遺跡分布 (1:100,000)

国土地理院発行5万分の1地形図【信濃池田・松本】より作成

(★印は中期末葉～後期前葉を含む)

番号	遺跡名	旧	欄	防	墳	古	中	調査概要	文献
1	西原	○	○			○		跡址、地先形尖頭墓	1
2	篠橋付元		○						
3	興藤遺					○			1
4	春明山社		○					住居、配石、玉製作址	2
5	大門竪所		○						1
6	二ツ妻神戸					○			1
7	細野塚反堀		○						
8	舟岩		○	○					1
9	大林		○						1
10	川花見		○					住居	3
11	七城野							他跡?	1
12	板沢		○					住居	1
13	千羅		○						
14	田原					○			
15	南原		○						
16	西海道		○	○					
17	祖父が家		○	○	○			円墳、溝穴	
18	千羅の窟			○				円墳、溝穴	
19	寺上城					○			
20	鼠穴館					○			
21	鼠穴城					○			
22	相澤寺平出					○			
23	尾畑		○		○	○			
24	石宮		★						
25	七五三塚					○			
26	宮の下		★	○	○			環状列石?	
27	大林					○			
28	小丸					○			
29	三軒家		○						
30	殿林		○						
31	宮の上		○			○			
32	宮の前					○	○		
33	表原		○						
34	林の久保		★			○			
35	五輪		○			○			
36	元屋敷					○			
37	才の神		★	○					
38	西川端					○	○		
39	宮下塚		○					円墳	
40	石矢塚		○					円墳	
41	塚の原								
42	飯塚の塚								
43	飯田								
44	万寿塚					○			
45	金塚					○			
46	大塚								
47	宮原					○			
48	久塚						○	円墳、溝穴?	6
49	法蓮塚					○		円墳	
50	五輪塚					○		円墳	
51	堀沢城						○		
52	堀沢館								
53	田の久城						○		
54	狭田見塚						○		
55	狭田見城						○		
56	藤山城						○		
57	雲所屋敷			○					
58	うるしくほ						○		
59	藪吉堂			○					
60	田島			○		○			
61	塚			○					
62	小立野			○					
63	中海道						○		
64	小池城						○		
65	中野山城						○		
66	小立野館						○		
67	矢塚			○					
68	黒屋敷城						○		
69	はうらく屋敷		★	○	○	○		敷石住居、配石墓	5
70	北竹原			○					
71	寺裏			○					
72	中村待塚			○	○				6
73	石原			○					6
74	藤原平			○					
75	飯田山			○					
76	荒井・伊勢宮			★					6
77	宮ノ前			★		○			
78	緑ヶ丘			○	○	○			6・7
79	宮原			★					
80	藤五郎屋敷			★					
81	坪ヶ平			○					
82	八幡神社			○					
83	申しき								
84	上生野					○			
85	久久保						○		6
86	水戸岡ノ原						○		
87	堀田若宮			★				敷石住居、配石	6
88	堀田ノ爪						○		6
89	こや城			○	○	○		敷石住居	6・8
90	堀田			○	○	○		(上原、龍門両含む)	6
91	上千屋敷			○	○	○			6
92	北村			★	○	○			
93	天平			○		○			
94	城下			○					6
95	村中			○	○				
96	山中中屋敷			○					6
97	赤藤沢			○					
98	上屋敷					○		円墳、溝穴?	6
99	金山塚					○		円墳、溝穴、鍬刀、帯	6
100	お経塚							円墳跡石?	6

表3-1 松本平北半部の遺跡地名表(その1) (番号は図11の中の遺跡番号と同じ)

番号	遺跡名	旧	調	探	古	中	調査概要	文献
101	能念寺			○			円環、木棺直葬7、銅刀	7
102	上郷			○			円環、横穴7、鹿刀、骨	7
103	武土平1号			○			円環、横穴7	7
104	武土平2号			○			円環、横穴7、鹿刀、骨	7
105	菅原古墳				○		7基	7
106	桜坂古墳				○		1基	7
107	神谷の物見					○		
108	中村城					○		
109	殿田館					○		
110	小丸山					○		
111	荻原城					○		
112	筑城					○		
113	白沢橋					○		
114	くまの中館					○		
115	内館					○		
116	押野城					○		
117	西館					○		
118	たけがら 物見					○		
119	鏡か城岩					○		
120	高堂塚物見					○		
121	高松塚跡城					○		
122	川はさみ登					○		
123	物見居岩					○		
124	梨子塚物見					○		
125	瀬古館屋敷					○		
126	瀬古館敷					○		
127	明科古館敷					○		
128	こや城					○		
129	明科館寺			○				9
130	茶臼山城					○		
131	上ノ段館					○		
132	所原城					○		
133	上手館敷					○		
134	しょうぶ平					○		
135	中城の館					○		
136	伏々野城					○		
137	三基城					○		
138	花見城					○		
139	釜蓋	○		○				
140	井刈	*					彫石	10
141	学校館	○						
142	大木戸	○						
143	神ノ木平	○		○				
144	五輪平	○						
145	落水	○						
146	西ノ宮	○				○		
147	上郷					○		
148	神明宮西					○		
149	宮本					○		
150	本町下宿					○		
151	岩井堂			○				
152	殿村			○		○		
153	法作寺					○		
154	資州原			○		○		
155	理金			○				
156	尚王			○				
157	善町小路			○				
158	取出			○				
159	表申堂			○				
160	沢屋					○		
161	反町			○		○		
162	城山西					○		
163	斎藤屋跡塚					○		
164	八王子古館					○		
165	芥田原古館					○		
166	西山入古館					○		
167	飯場古館					○		○
168	鏡二の事							
169	城山城岩					○		
170	黒戸屋城					○		
171	金田氏館					○		
172	西ノ宮館					○		
173	雲沢城					○		
174	藤原軍の館					○		
175	取山館					○		
176	藤原屋城					○		
177	荒神尾城					○		
178	見湯城					○		
179	鎌守			○				
180	和田			○				
181	松田			○				
182	高山			○				
183	竹之上			○				
184	天作			○		○		
185	興田町	*		○		○	墓塚、古瓦	11
186	塚地					○		
187	二反田			○		○	住居	
188	向山					○		
189	下出口					○		
190	岩之上					○	住居	
191	西薬			○		○	墓塚	12
192	宮の前			○		○	墓塚、古瓦	13
193	興田神社裏					○		
194	堀ノ内					○		
195	田中					○		
196	大神の木							
197	板岡					○		
198	トウコン原			○		○		14
199	丸山					○		
200	塩倉			○				

表3-2 松本平北半部の遺跡地名表(その2)



番号	遺跡名	国	県	市	町	村	古	中	調査概要	文献
201	神沢		○							
202	基の平		○							
203	孤塚					○				
204	栗和田		○	○	○					
205	南塚		○	○	○					
206	小河津水		○	○	○					
207	穴田峯					○	○			
208	塚田		○			○		墓塔		
209	穴田崩					○	○			
210	根村尾		★							
211	北ノ久保		○							
212	下屋敷		○			○				
213	五反田					○	○			
214	村取		○				○			15
215	七日赤橋						○			
216	鳥居前					○	○			
217	高田		○	○	○					
218	たて		○				○			
219	西原		○	○						
220	大音寺		○							
221	新油面敷		○							
222	柳田		★			○		住居		16
223	真観寺					○	○			
224	大村		○					墓塔、古瓦		7
225	大穂原		○			○		住居、円筒瓦		
226	新切					○	○			
227	寺山白鳥						○			
228	平塚					○	○			
229	上平瀬					○	○			17
230	北方					○	○			18
231	山城					○				
232	中益					○				
233	高柳塚					○				
234	土取塚					○				
235	塚田					○				
236	本杜茅					○				
237	茶臼山					○				
238	西原					○				
239	下原敷					○				
240	塚塚					○				
241	新塚					○				
242	水道1-3号					○		積石塚、門礎		
243	松岡					○				
244	大腰敷1・2号					○				
245	塚ヶ丘					○		天冠		19
246	妙義山1-3号					○				
247	矢崎					○				
248	塚山					○				
249	砂布古墳群					○				
250	北原古墳群					○				20
251	新塚古墳群						○			
252	伊原城						○			
253	伊原城						○			
254	新塚城						○			
255	茶臼山城						○			
256	平塚城						○			
257	千瀬氏館						○			
258	大竹館						○			
259	先					○	○			
260	町田					○				
261	小瀬橋					○				
262	上ノ山北					○				
263	黒村						○			
264	成宿					○	○			
265	新海魂						○	住居		
266	上手水戸						○			21
267	栗井						○	住居?		
268	新村						○			
269	農倉					○				
270	小海渡						○			
271	宮前						○			
272	新田古宮					○	○			
273	真々部中下						○			
274	姥ヶ池						○			
275	柳原						○			
276	赤村						○			
277	大海渡						○			
278	上ノ山古墳群						○			24
279	真瀬平古墳群						○			22・24
280	光城						○			24
281	田沢城						○			24
282	町田館						○			24
283	上ノ山城						○			24
284	殿山城						○			24
285	細豆氏館						○			24
286	新村館						○			24
287	法蔵寺館						○			24
288	徳之の塚館						○			24
289	徳定法蔵寺跡						○			24
290	中村館屋敷						○			24
291	山野利原館						○			23・24
292	相合氏館						○			24
293	徳定日光寺						○			24
294	鳥羽館						○			24
295	黒田館						○			24
296	真々部氏館						○			24
297	成相氏館						○			24
298	信吉上手					○	○			
299	駒小幡					★	○			
300	道下									25

表3-3 松本平北半部の遺跡地名表(その3)

番号	遺跡名	旧	跡	跡	古	中	調査概要	文献	
301	中村				○			25	
302	檢上手			○	○				
303	坂がいと								
304	三枝神社東				○			25	
305	白山神社横								
306	伊々(306)伊々(306)	○							
307	栗の木				○	○		25	
308	上総屋敷	○			○	○		25	
309	炭庫		○	○	○				
310	若宮				○			25	
311	栗小倉	○						25	
312	三島原				○			25	
313	住吉竹原	○							
314	鴨沢尻	○							
315	西牧	○							
316	地蔵沖	★							
317	大塚		○	○					
318	一本松	○							
319	鴨沢	★							
320	栗の塹	○						25	
321	堀尻				○		住居	25	
322	浄心寺付近	○							
323	笠屋敷		○						
324	山の麓		○						
325	大目堂北	○							
326	中沢				○		住居?	25	
327	半福寺付近		○				古墳?	25	
328	アルプス学園前		○				円墳	25	
329	浄心寺南塚		○					25	
330	中賀氏堀屋敷				○				
331	多川氏堀屋敷				○				
332	二本堂横屋敷				○				
333	草薙肥前屋敷				○				
334	二本土俵屋敷				○				
335	川岸屋敷				○				
336	小倉城				○				
337	和合町	★			○				
338	神沢	★					1966年発掘	26・27	
339	上の原C	○						26	
340	加茂神社南	○							
341	深沢西	○		○	○				
342	堀の内								
343	若田天神南		○				住居	1968年発掘	
344	農儀前				○				
345	下堀通南								
346	十兵衛屋敷				○				
347	中島	○							
348	そり表	○	○	○	○			26・27	
349	田多井古城下	★			○	○		25・27	
350	上の原B	○						26	
351	半原下	★							
352	曲尾	○			○				
353	石見堂	○						26	
354	上子林	○							
355	おもそう		○					26	
356	山の神下	○							
357	田多井北村	○			○	○			
358	行成	○			○				
359	山上	○							
360	古城下	★			○	○			
361	曲尾		○				円墳、溝穴		
362	浜の塹		○				円墳、溝穴	1960年発掘	26
363	谷原		○				円墳、溝穴		
364	深砂渡口南		○				円墳、溝穴		
365	田多井城					○			
366	田多井居館址	○			○				
367	上原堀屋敷	○							
368	安楽寺跡下	★			○				
369	岩塚城					○			
370	大塚	○							
371	ショウノヒナダ	★	○					28	
372	藤原		○					28	
373	藤山	★	○	○			数石住居、配石溝ほか	29	
374	十三屋敷	○							
375	南原	○							
376	塚下	○		○					
377	新林	★					数石住居、配石ほか	28	
378	実神堂								
379	熊谷								
380	神谷	★							
381	孝塚	★							
382	山崎	★	○						
383	寺島掛	★							
384	春明町上	○							
385	右明南原	○							
386	天原およて池				○				
387	馬場街道	○	○	○			住居	28・30	
388	四反田				○				
389	正島	○							
390	矢原五輪池		○	○	○		住居	28	
391	矢原宮権				○		住居		
392	三枚橋				○				
393	橋の池	○							
394	矢原堀池				○				
395	藤塚		○	○	○		住居	28	
396	北才の神				○				
397	大坪沢	○							
398	長青池				○				
399	通橋				○				
400	藤原	★	○						

表3-4 松本平北半部の遺跡地名表(その4)

番号	遺跡名	田	圃	築	古	中	調査概要	文献
401	宗徳寺							
402	松高牧北		○					28
403	經高神社境内							
404	宮脇							
405	神の木							
406	市上		○					
407	一本松							
408	辻							
409	貝塚遺上				○			
410	貝塚遺下				○	○		
411	かいいどぶ					○		
412	耳塚		○	○				28
413	耳塚公民館前					○		
414	墓下		○					
415	墓下神社東		○					
416	庄内塚		○			○		
417	小笠原下木戸		○				○	
418	青海寺大門						○	
419	松尾		○					
420	屋敷沼					○		
421	野辺沢		○					
422	宮城		○					
423	坂原F跡				○		10基	28
424	上原				○		円形、横穴、崗刀、馬具	28
425	牧E群				○		17基	28
426	有明C群				○		5基	28
427	有明B群				○		34基	28
428	有明A群				○		8基(もも18基?)	28
429	有明D群				○		横穴、横穴	28
430	等々力氏墓					○		
431	小笠原城					○		
432	古藤氏墓					○		
433	古藤城					○		

表3-5 松本平北半部の遺跡地名表(その5)

## 参考文献

1. 松川村誌編纂委員会『松川村誌(歴史編)』1988
2. 松川村教育委員会『有明山社—緊急発掘調査報告書—』1969
3. 松川村教育委員会『川花見遺跡緊急発掘調査報告書』1979
4. 池田町教育委員会『宮ノ前遺跡発掘調査報告書』1978
5. 明科町教育委員会『はうろく屋敷遺跡—川西地区県営工場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—』1991
6. 明科町史編纂委員会『明科町史(上巻)』1984
7. 長野県考古学会『松本諏訪地区新産都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告』1966
8. 明科町教育委員会『長野県東筑摩郡明科町こや城発掘調査報告書』1979
9. 原 嘉藤『長野県東筑摩郡明科町明科廃寺址について』(『信濃』第7巻第7号)1955
10. 大場幹雄ほか『長野県東筑摩郡四賀村井刈遺跡調査概報』(『信濃』第15巻第12号)1963
11. 松本市教育委員会『松本市横田・岡田遺跡』1981
12. 松本市教育委員会『松本市岡田西裏遺跡緊急発掘調査概報』1984
13. 松本市教育委員会『松本市宮の前遺跡』1992
14. 松本市教育委員会『松本市トウコン原遺跡』1991
15. 松本市教育委員会『松本市袴坂遺跡・本郷小学校遺跡』1988
16. 松本市教育委員会『松本市大村遺跡群柳田遺跡分布確認調査報告書』1979
17. 松本市教育委員会『松本市島内遺跡群上平瀬遺跡』1986
18. 長野県埋文センター『北方遺跡』[中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書10]1989
19. 本郷町教育委員会『信濃浅間古墳』1966
20. 河西清光ほか『松本市田溝古窯址の調査』(『信濃』第16巻第4号)1964
21. 長野県埋文センター『上手木戸遺跡』[中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書10]1989
22. 豊科町教育委員会『富浦平岡跡群—77KV安曇野作業所送電線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』1987
23. 豊科町教育委員会『吉野町館跡遺跡—県営工場整備事業豊科南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』1992
24. 豊科町教育委員会『豊科町の土地に刻まれた歴史』1991
25. 三郷村誌編纂委員会『三郷村誌I』1980
26. 堀金村誌編纂委員会『堀金村誌上巻(自然・歴史)』1991

第2章 位置と環境

27. 堀金村教育委員会『神沢遺跡・田多井古城下遺跡・そり表遺跡』1988
28. 穂高町誌編纂委員会『穂高町誌第二巻（歴史編上・民俗編）』1991
29. 穂高町教育委員会『隴山遺跡』1972
30. 穂高町教育委員会『矢原遺跡群（馬場街道遺跡）—県道柏矢町～田沢停線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告—』1987

## 第3章 縄文時代

### 第1節 概 観

今回の調査で検出・出土した縄文時代の遺構・遺物は、中期末葉から後期中葉までの間（<sup>14</sup>C年代ではB.P3800±1180年=SH1144人骨）にまとまる。これを関東地方の土器編年に対比させて、以下のように区分した。

I期=加曾利EⅢ式並行	II期=加曾利EⅣ式並行
III期=称名寺式並行	IV期=堀之内Ⅰ式並行
V期=堀之内Ⅱ式並行	VI期=加曾利BⅠ式並行

遺構は、国道19号線の西側B・C区及び国道直下のD区、JR篠ノ井線東側のE区で確認された。検出層位は、B～D区の場合は多くがⅢ層上面で、一部Ⅲ～V層を欠く部分においてはⅥ層上面である。一方、E区ではⅢ層上面または同層中である。遺構の内訳は下記の通りである。

住居址(遺構記号SB) .....	58軒
墓坑(SHまたはSK) .....	469基
屋外埋設土器(SK) .....	13基
配石遺構(SH) .....	26ヶ所
土坑(SK) .....	352基
柱穴と思われるピット群(SK群) .....	5ヶ所
遺物集中区(SQ) .....	6ヶ所

この中で、墓坑・屋外埋設土器・ピット群はE区に集中するが、それ以外はB区にまで及んでいる。遺物は下記に区分できる。

土器（縄文中期末葉～後期中葉）

石器（石鏃・打製石斧・磨石・凹石・敲石・多孔石・石皿・台石・石錘・磨製石斧・刃器・砥石・石錘・丸石・石剣・石棒）

土製品（土鏃・土偶・小形土器・蓋・匙・玉・土鈴・耳飾りなど）

石製品（玉）

土器片円板・有孔土器片

骨角牙製品（腕輪・垂れ飾り・かんざし?など）

人骨（300体）

獣骨・炭化材

このうち、300体に及ぶ人骨の出土が、本遺跡の最大の特徴であろう。出土遺物の総数はコンテナ（54×34×15cm）でおよそ1,000箱にのぼる。

ところで、遺構に関して、発掘から報告書作成に至る間に生じた問題点については、以下の様にして取り扱ってきた。

まず、複数の遺構が重複関係をもっており、検出時に新旧関係を誤って認定した点についてである。これらは、調査中に変更した場合もあるが、整理に入って遺物からこの関係を判断した場合もある。した

がって、E区の全体図・遺構図（図版7～9・19～54）は、遺構の正しい掘り込み面や時期別を厳密に表現したものではなく、当該遺構を検出できた段階での上下関係を表わしている過ぎない。

遺構記号については、埋文センター『調査の方針と手順』の約束にしたがって、円形または方形など広い範囲の掘り込みが認められるもの＝SB（竪穴住居址）、同じく狭い範囲の落ち込み＝SK（柱穴・墓穴・貯蔵穴などの土坑）、面的に広がる礫のまとまり＝SH（配石）、遺物が面的に集中している範囲＝SQ（遺物捨て場）として、検出段階で遺構番号と共に振り分けてきた。ところがSBの場合、必ずしも掘り込みが確認できなくても、住居址と判断されるものを含めている。またSHの場合、調査中に下部から掘り込みが確認される場合が多くなったため、墓穴としての土坑も含めざるを得なくなった。調査が進行していく中で、SH＝墓坑と認識ができてしまい、上面に配石がなくても、穴の形状や人骨の出土などから墓坑と判断したものについては、この遺構記号を踏襲してきた。もっとも、こうした認識は調査担当者間に徹底されなかったため、一部SKに墓坑が含まれている。したがって、SKには柱穴・貯蔵穴・墓坑・屋外埋設土器など、用途が異なる多種類の穴を含む。ただ、調査中あるいは整理段階で、住居址などの柱穴に該当すると判断したものは、ピット(P)に変更している。

遺構番号は、B～D区では、SBが101、SHは1、SKは501、SQは1から、E区では、SBが551、SHは501、SKは2001、SQは501からそれぞれ付けていったが、先の事情などから欠番が多い。

## 第2節 遺構

## 1 竪穴住居

## (1) 総論(表4・5)

今回の調査で検出した縄文時代の住居址は、番号を付けたものだけで50軒を数えるが、拡張などにより重複している住居址を1軒とみなせば、58軒にのぼる。また、柱穴らしいピットが集中している地域には、何らかの建物が存在していたことが予想されるため、この数はさらに増える可能性が高い。

調査区別にみると、B区3、C区4、D区5、E区46軒であり、ほとんどE区へ集中すると共に、西側の地区へ行くにつれて減少する。また時期別にみると、I期4、II期6、III期11、IV期11、V期9、VI期5軒となり、III期からV期にかけてピークを迎えることがわかる。これを調査区別の住居址数に重ね合わせると、E区には全時期の住居址が集中するものの、D区はIII期以降、B・C区に至ってはIV・V期の住居址しかみられない。(表4)

以下、住居址の観察項目ごとに全体の状況を概観しておく。

## ア 住居形態と規模(表4)

検出段階で、掘り込みが確認できなかった住居址は27軒と半数近くにのぼるが、床面検出までの間に多量の遺物が出土している場合があることや、炭化物など遺構の埋土に特有な有機物などもかなり確認できていることから、本来は掘り込みのある竪穴住居址であったものと考えておきたい。

平面形は、円形20軒、柄鏡形31軒と後者がやや多い。柄鏡形のうち26軒はいわゆる敷石住居址であり、円形と考えられる場合も2軒に敷石がみられた。時期別にみると、I期は敷石がない住居址がすべてであったが、II期になり敷石住居址が現れ、III期・IV期では敷石住居址の比率がやや多くなり、逆転する。

V期になると敷石住居址(柄鏡形)が圧倒的になり、最終のVI期になると、もはや敷石がない住居址はみられない。

柄鏡形住居址の主軸長は、最大がSB555の9.6m、最小はSB551および570の5.2mで、平均7.0mである。主体部の直径は、最大はSB108の7.6mであるが、床面の範囲を明確にとらえた住居址でみるとSB562の6.7mである。最小はSB595の2.8mで、平均は4.9mになる。また、張り出し部の幅は平均1.78mで、最大がSB101の3.1m、最小はSB570Aの1.3mである。時期別に主体部直径の平均値を算出すると、I期からVI期にむけて規模が大きくなっている。

## イ 主軸の方向

主軸線は、柄鏡形住居址の場合は原則として、張り出し部の中心線を延長させて設定し、円形住居址の場合は、柱穴ならびに炉の位置から推定した。

主軸の方向が求められた29軒の住居址を調査区別にみると、E区はすべて北から東に傾いた方向なのに

時期	地区別住居址数				住居形態						規模 主体部 直径の 平均値	
	B	C	D	E	敷石あり			敷石なし				
					柄鏡形	円形	その他	柄鏡形	円形	その他		
I				4						4		4.5
II				6	2				2	2		4.6
III		1	2	8	6	1			4			4.8
IV	2	1	2	6	5	1	1		4			5.3
V		2		7	7					1	1	5.0
VI				5	4						1	5.8
不明	1		1	10	2				5	3	2	
計	3	4	5	46	26	2	1	5	18	6		

表4 竪穴住居の地区別数および規模と形態

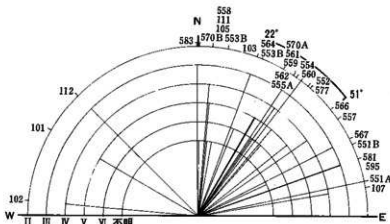


図12 竪穴住居の主軸方向

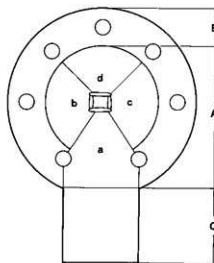


図13 柄鏡形住居の敷石箇所

に分けられる。住居空間を分けて、それぞれどこに敷石されているかをみると(図13)、A～Cに敷石があるものは5軒で、以下A・Bは3軒、A・Cは2軒、B・Cは2軒である。また、Aのみの敷石は3軒、Bのみの4軒、Cのみの10軒である。更に、A部分は炉を中心とした位置によって4細分できる。SB553・578・598は礫が散在しており範囲を特定できないが、張り出し部側のaに敷石があるもの6軒、bは3軒、cが5軒、dは4軒である。敷石のタイプは時期別・規模別に大きな隔りはない。

### エ 炉の位置と形態

炉は主体部のほぼ中央に位置するものが多く、張り出し部寄り、奥壁寄りそれぞれ7軒のみである。住居址の平面形が円形の場合は中央にあるが、柄鏡形の場合は張り出し部寄りまたは奥壁寄りに位置するものが出てくるらしい。

形態別には、SB105・106・589を除いてほとんどに掘り込みがある。平面形は、方形15、長方形6、円形9、楕円形1、卵形2で、不整形3を除けば方形タイプが多い。また、方形タイプの8割が緑石のあるいわゆる石囲い炉で、うち4例に炉体土器を伴う。一方、円形タイプは2例を除き緑石はなかったが、炉体土器を伴うものは3例あった。

住居形態との関係では、柄鏡形の場合は方形15例(石囲い炉11)、円形4例(石囲い炉2)で圧倒的に方形石囲い炉タイプが多い。逆に円形の住居址は掘り込みをもたない3例に加え、方形5例(石囲い炉4)、円形4例とバラエティーに富む。また、敷石住居址の場合は21例中14が石囲い炉で、敷石のない住居址は18

対して、B～D区では規則性がない。時期別では、V期以降はN-22-E～N-51-Eにまとまる傾向がある(図12)。

### ウ 床面の状況と敷石のタイプ

E区では、IV層による高まりのへりに立地する住居址が、奥壁側から張り出し部へ向けてやや傾斜をもつ。ただ、SB583のように極端な傾斜例は少なく、一般的にはほぼ平坦である。

貼り床されているものはSB103・

109・590・591の4軒で、SB101・102・106・107・110・112などB～D区の住居址にはVI層(段丘礫層)を掘り込んでいるものが多く、礫の突出により凹凸がみられる。また、SB561・562にはおそらく軟質の砂岩が風化してしまったものであろう赤色粒が、床のほぼ全面に分布していた。

SB101・555・558・566・578・594の床面上からは、炭化材や焼土が検出された。SB101の焼土は炉の北東に位置する柱穴間に分布し、小形土器3点、土偶1点が出土するなどやや特異な状況を示す。SB555からは炉を取り囲んで板状の炭化材が出土した。床面に敷かれていたものであろう。またSB558は焼失家屋であったと思われる。

敷石住居址の場合、石の敷かれ方によっていくつかのタイプ



例中石囲い炉が6例ある。こうした炉の形態と時期や住居規模などとの明確な相関関係は認められない。

### オ 柱 穴

柱穴は、SB103・566・599が主体部にあるほかは、壁際を巡るものが多い。SB558・560・562のように2重の例もある。また、SB572・594のように壁の外に柱穴が巡る場合もある。

### カ その他の施設

住居に伴う特徴的な施設のうち、埋甕は6軒から出土している。奥壁寄りが1例あるほかはすべて主体部にあり、南寄りにあるSB572・583を除いて主軸線との関係はみとめられない。いずれも、鉢または深鉢形土器を正位に埋設している。

そのほか、5軒の柄鏡形住居址の張り出し部から土坑などの施設が検出された。このうち、SB101はほぼ1個体分の土器片が敷かれていた。また、敷石直下から墓坑が検出された例もあり、住居址との密接な関係が示唆される。

### キ 遺物の出土状態と特徴的な遺物

住居址から出土した遺物は、土器・石器・土製品・石製品・骨角牙製品・人骨・獣骨など北村遺跡においてみられるすべての種類に及ぶが、これらはほとんど埋土中から出土している。土器・石器類で住居との共存関係が深いと思われる出土状態を示す事例は、炉体土器あるいは埋甕として使用されている土器や敷石に転用された石器がある。ほかに、SB101・555・566・570・590・595・599の床面直上出土遺物があり、これらについては分布図を製作した。本遺跡ではⅢ段階以降柄鏡形敷石住居址が増える傾向があるが、これといわゆる「第二の道具」との結び付きが強いとは言えない。ただし、SB555や566などの様な大形住居の場合、遺物は種類・量ともに豊富である。

特徴的な遺物としては、SB557の仰臥屈葬人骨があげられる。床面の敷石直上から解剖学的な骨格位置を留めて出土している住居内埋葬の一事例といえよう。また、SB560・566・568の炉内からはイノシシ・ニホンジカの焼骨が出土している。その他、住居空間の場の利用を積極的に指示する特徴的な事例はない。

## (2) 各 論

住居址番号は、B～D区は101から、E区は551から付けた。また重複していることが遺構検出段階で確実に把握できた場合は個別の番号を付けたが、その後判明した場合は、番号にアルファベットでA・B・・とした。各論での記述の順序は、位置・調査経過・埋土・壁面・床面・柱穴・炉・埋甕・規模と形態・人骨・出土遺物とし、住居址の所属時期については、比定できる場合は最後に記述した。しかし、調査段階からその項目について明確でないものや、全く把握できなかったものは記述しない場合がある。

### SB101 (図版10・11、図14、PL3)

位置：C区のT-C14～F18にまたがってある。

調査経過：Ⅱ層の除去作業中、敷石住居址の張り出し部と考えられる石敷が認められたため精査を試みたところ、主体部を中心とした礫のまとまりが検出された。埋土内集石の可能性を考慮して記録し、主体部の礫を除去し、主体部・張り出し部・周境礫を確認する。炉および土坑を精査し記録後、張り出し部および周境の礫を取り外しビット等の精査を行う。

埋土：炭化粒が混在する黒褐色粘質土を基本に集積しており、3層上面から2層中にかけて多量の礫がみられる。礫の集石状態は主体部の中央では薄く、周境礫直上辺りでは土手状に積み上げられている。

壁面：立ち上がりは低く、壁高は最大で10cmある。主体部奥に僅かな張り出しがみられる。

床面：張り出し部および炉と張り出し部を結ぶ主体部の床面に敷石がある。全体に締まりがなく、段丘礫

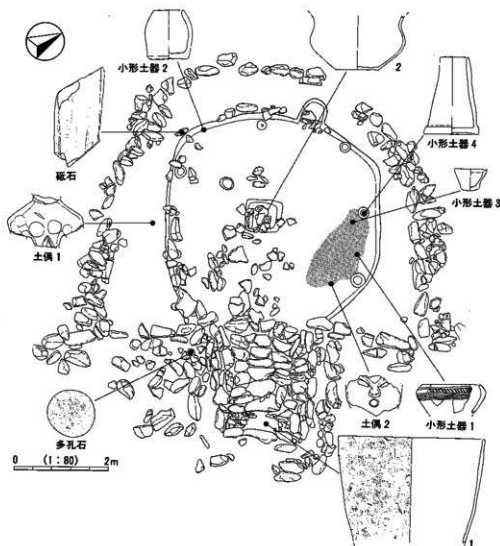


図14 SB101出土遺物分布(土器1/8、砥石・多孔石1/12、土製品1/4)

柱穴：8ヶのピットがある。配置よりP<sub>6</sub>を除き柱穴と考えられるが、柱痕は確認できなかった。埋土はいずれも暗オリーブ褐色土である。

炉：主体部のやや奥左寄りで検出された。70×77cmの長方形で、一ヶ所礫の抜き取り痕をとどめていることから、本来は石囲い炉であったものと思われる。炉内には無文の鉢形土器胴部が埋設され、内部には焼土がブロック状にみられた。

規模と形態：主軸N-60-Wの柄鏡形敷石住居址で、主軸長8.8m、主体部の直径4.6m、周堤礫間7.5m、張り出し部の幅3.1mを測る。

出土遺物：炉内埋設土器、および張り出し端部に敷き詰められた無文の深鉢形土器は、明らかに本址に帰属するものとしてよい。床面から土偶2、小形土器3、周堤礫内から砥石・多孔石各1、2ないし3層中から土器片208、石鏃2、磨石類3、多孔石・石皿・磨製石斧・砥石・小形土器各1が出土した。V期に属する。

#### SB102 (図版12、図15、PL 3)

位置：C区のS-O19~R20、X-N1~R3にある。

調査経過：昭和62年の調査で主体部の東半分から張り出し部を、昭和63年に残った主体部の北半分を検出する。南半分は高速道の側道用壁の保護や調査ノリ面の保全のため調査範囲外となる。主体部および張

層(VI層)を掘り抜いて構築しているため、小円礫が飛び出して凸凹している。炉の北東P<sub>6</sub>~P<sub>7</sub>にかけて焼土の広がりがあ。張り出し部には、礫の長軸を描えて「コ」の字状に二重の縁取りをした後、端部を除き4列横方向に礫を敷き詰めている。礫の抜けた箇所には無文の深鉢形土器の破片が敷き詰められた状態で出土した。外側の縁取りは周堤礫に続いている。主体部床面よりも張り出し部の礫上面のほうが若干高い。

り出し部に伴う落ち込みは認められず、主体部周縁に散在する礫・柱穴・炉などを精査する。

埋土：II層と床面の間には、炭化粒が混在する黒褐色粘質土が堆積していた。

床面：周縁部、および主体部の張り出し部側と奥壁側に敷石がみられる。やはり全体に締まりがなく、VI層を掘り抜いて構築しているため、小円礫が飛び出して凸凹している。

柱穴：19ヶのピットがある。配置よりP<sub>1</sub>～P<sub>11</sub>は柱穴と考えられる。埋土はいずれも黒褐色粘質土である。

炉：主体部のやや奥壁寄りで検出された。直径80cmのほぼ円形で、炉内には深鉢形土器胴部が埋設されている。

規模と形態：柱穴の配置から考えて主軸N-85-Wの柄鏡形敷石住居址になる。主軸長約8.8m、主体部の直径約7.0m、張り出し部の幅約2.0mを測る。

出土遺物：炉内埋設土器は明らかに本址に帰属するものとしてよい。埋土から土器片187、石鎌2、打製石斧2、磨石類1、磨製石斧1が出土した。IV期に属する。

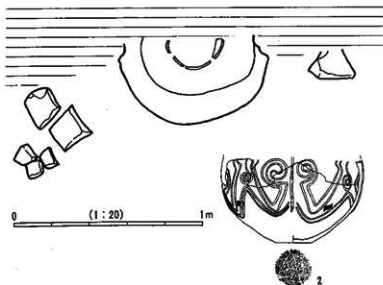


図15 SB102炉体土器出土状態（土器1/8）

### SB103 (図版13)

位置：C区D区のT-A1～C3にあり、SB104に北接する。

調査経過：C区の調査で住居址主体部の西2/3と、南側に散在する礫を確認し、D区の調査で主体部の残りを検出する。

埋土：炭化粒が混在する黒褐色粘質土を基本に集積している。

壁面：立ち上がりは主体部の東側で確認された。壁高は最大で16cmである。

床面：床面の壁際にゴロンとした長円礫が並ぶほか、主体部にはほとんど敷石されていない。床面は黄褐色粘質ブロックが混じった褐色土が貼られ、全体的に平坦である。南壁外に散在する礫は張り出し部の残骸かもしれない。

柱穴：14ヶのピットが検出された。配置よりP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は主柱穴と考えられる。P<sub>13</sub>は張り出し部との接合部にみられる土坑の可能性がある。埋土は褐色粘質土である。

炉：主体部のやや左寄りで検出された。直径60cmの円形で、掘り込みは15cmと浅い。炉の北側床面上には焼土が広がる。

規模と形態：主軸N-20-Eの敷石住居址（柄鏡形？）である。主体部の直径5.5mを測る。

出土遺物：埋土中の土器片151から判断して、III期に比定される。

### SB104 (図版13)

位置：C区D区のT-B3～D6にあり、SB103に南接する。

調査経過：C区で住居址主体部の西1/5を検出し、D区で主体部の残りを検出する。

埋土：炭化物が混在する黒褐色粘質土が堆積している。

壁面：ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は西側で18cmである。西壁上に礫が数点並んでいたが、性格は不明。

床面：ほぼ平坦ながら全体に軟弱である。石は敷かれていない。

柱穴：9ヶのビットがある。配置よりみてすべてが柱穴と考えられる。埋土は褐色粘質土である。

炉：床面の中央西寄りで見出された。直径50cmの円形で、掘り込みは25cmとやや深い。

規模と形態：方形の竪穴住居址である。主軸の方向は不明。長径5.75m、短径4.45mを測る。

出土遺物：埋土中から土器片153が出土した。V期に比定される。

**SB105** (図版15, PL4)

位置：B区のX-M5～O7にあり、南側から東側にかけては調査区外に出る。

規模と形態：やや南北に長い円形の竪穴住居址である。主軸はN-5-E。直径5.1mを測る。

埋土：黒褐色粘質土に炭化物が混在している。

壁面：南から東壁については不明だが、他はなだらかに立ち上がり、壁高は北側で8cmである。

床面：ほぼ平坦である。P<sub>0</sub>の北側に扁平な礫が若干認められる。

柱穴：10ヶのビットが見出された。これらすべてのビットに柱穴の可能性のあるものの、P<sub>0</sub>・P<sub>1</sub>は炉に近すぎる。埋土は褐色粘質土である。

炉：床面のほぼ中央にある。長径65cmの楕円形で、掘り込みはほとんどない。

出土遺物：埋土中からの土器片は少ない。おおむねIV期に比定される。

**SB106** (図版14, PL4)

位置：B区のX-I3～K5にある。

埋土：炭化物を混在する黒褐色粘質土である。

壁面：立ち上がりはなだらかで、壁高は東側で19cmである。

床面：VI層の礫が露出しており軟弱で凹凸が激しい。

柱穴：ビットは見出されなかった。

炉：床面の中央やや北よりで見出された。長径70cmのほぼ方形で、掘り込みはほとんどない。

規模と形態：不整形な竪穴住居址である。主軸の方向は不明。直径4.4mを測る。

出土遺物：ほとんど遺物が出土しなかったため、時期はわからない。

**SB107** (図版14, PL4)

位置：B区のS-E20～F20およびX-E1～F1にある。

埋土：炭化物を混在する暗褐色粗粒砂質土である。

壁面：立ち上がりはなだらかで、壁高は北側で20cmを測る。

床面：SB106同様、VI層の礫が露出しており軟弱で凹凸が激しい。

柱穴：6ヶのビットが見出された。すべて柱穴に関係するものと思われる。

炉：火床または炉に関係する掘り込みは認められなかった。

規模と形態：南西側にやや張り出しをもつ円形の竪穴住居址である。主軸はP<sub>1</sub>とP<sub>0</sub>の間に入り口を想定した場合、N-80-Eとなる。直径は3.2mを測る。

出土遺物：SB105同様、ほとんど遺物が出土しなかったが、埋土中からの土器片によりおおむねIV期に比定されよう。

**SB108** (図版14, PL4)

位置：D区のT-D6～H9にあり、東側は調査区外に出る。

調査経過：II層の下部で検出作業を行なったところ、床面上に敷かれていたと思われる扁平な礫が出土したため、いきなり精査に入る。したがって、埋土および壁の立ち上がりは不明である。

床面：ビットが弧状に並ぶことから、これらを壁柱穴と考えて床面の広がりを推定した。P<sub>7</sub>からP<sub>9</sub>の内側ならびにP<sub>9</sub>とP<sub>6</sub>の間に礫が並ぶほか、床面上には扁平な石が部分的に敷かれている。

柱穴：10ヶのビットがある。配置から考えてすべて柱穴であろう。埋土は褐色粘質土である。

炉：床面の中央東寄りで検出された。長径100cm、短径65cmの卵形で、およそ16cmの掘り込みをもつ石囲い炉である。

規模と形態：主軸の方向は不明ながら、おそらく東側ないし西側に張り出し部をもつ数石住居址(柄鏡形?)になろう。主体部の直径7.6mを測る。

出土遺物：埋土中から土器片28、小形土器1が出土した。IV期に比定される。

**SB109** (図版15, PL5)

位置：D区のO-C20～E20ならびにT-C2～E2にあり、SB112と重複する。

調査経過：II層下部での検出作業中、黄褐色粘質ブロックを踏み固めたような比較的堅い面が認められた。

これを床面と想定して範囲を確認し、炉の精査を行なった。

床面：黄褐色粘質ブロックによる貼り床が認められ、全体に堅く平坦である。

柱穴：ビットはまったく認められなかった。

炉：床面の中央で検出された。直径40cmの円形で、無文土器の胴部が埋設されていた。

規模と形態：主軸の方向は不明。推定した床面の範囲から、直径4.5mの円形を呈するものと思われる。

出土遺物：炉体土器が時期決定できる唯一の土器である。その他、床面と想定される範囲内から若干の土器片と石鏡1が出土した。IV期に比定されよう。

**SB110** (図版15)

位置：D区のT-G13～I15にあり、東側は調査区外に出る。

埋土：1層は黄褐色粘質ブロックを多量に含む暗褐色土で、2層は炭化物が混在する黒褐色粘質土を基本に堆積している。

壁面：立ち上がりはなだらかで、壁高は南で18cmである。

床面：やや凹凸をなすもののほぼ平坦で、北から北西にかけての壁際に礫が巡っている。

柱穴：柱穴に関係するとみられるビットは認められなかった。

炉：火床または炉に関係する掘り込みは認められなかった。

規模と形態：直径4.7mの敷石住居址(柄鏡形?)である。調査範囲内では認められなかったが、東側に張り出し部をもつかもしれない。主軸の方向は不明である。

出土遺物：床面直上から条線をもつ深鉢形土器の破片がややまとまって出土したほか、埋土中より土器片51、石鏡2、刃器1が出土した。III期に属する。

**SB111** (図版15, PL5)

位置：D区のO-B17～C18にあるが、主体部は北側調査区外に出る。

調査経過：II層下部での検出作業中、方形に並べた礫が出土した。精査を行い、柄鏡形敷石住居址の張り

出し部と想定した。

床面：張り出し部の礫はやや攪乱を受けているためか整然と敷かれてはいないものの、上面は平らな部分を用いている。

柱穴：柱穴に関係するとみられるピットは認められなかった。

規模と形態：柄鏡形敷石住居址の張り出し部のみ確認された。張り出し部の巾は1,85mで、主軸の方向はN-5-Eである。

出土遺物：ほとんど遺物は出土していないため、時期は不明である。

**SB112** (図版15、PL5)

位置：D区のT-D1~F3にあり、SB109と重複する。

調査経過：SB109の床面や炉の精査ならびにVI層上面での検出作業中、黒褐色土の落ち込みを確認する。

床面：VI層の礫が突出するため凹凸が激しいものの、全体的にはほぼ平坦である。

柱穴：ピットがまったく認められなかった。

炉：直径60cmの長方形石囲い炉が床面の奥壁寄りで見出された。掘り込みはわずかである。

規模と形態：東西方向にやや長い円形を呈する竪穴住居址である。直径4,0mを測り、主軸はN-45-Wを示す。

出土遺物：埋土中からわずかに土器片が出土した。SB109より古いことから、III期以前に比定できると思われる。

**SB551A・B** (図版32、図16)

位置：E区のL-M18~O20にあり、東側でSB558をきり、北東側でSB560に接する。

調査経過：調査区南端の配水用の溝にかかって敷石の一部が検出される。断面を観察した結果、III層に浅く広く掘り込む埋土が認められたことから敷石住居址であると判断した。敷石の範囲と床面を確認するため埋土を除去しながら精査したところ、当初確認された敷石はSB101に類似した張り出し部であることが判明する。続いてこの敷石部分の東方で2基の炉址が見出された。ただ床面は判然とせず、V層を掘り込むピットの中から本址に伴うと思われる柱穴を選別し、床面の範囲を想定した。また、張り出し部の敷石の下から土坑や土器の集中がみられた。この土器集中は北西方向にSQ501として続く。

埋土：粘性の高い褐色土にオリブ褐色砂質ブロックならびに炭化物が混在している。

床面：張り出し部を除いて、主体部にはほとんど敷石されていない。また床面はほぼ平坦だが張り出し部にむけて傾斜がみられる。張り出し部の敷石は礫の長軸を揃えて2重の縁取りをし、1列横方向に5

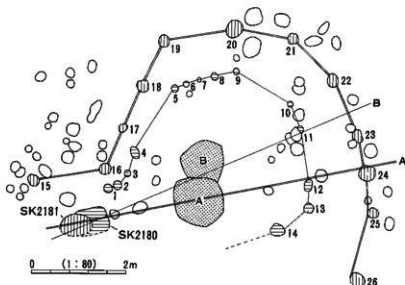


図16 SB551A・B柱穴配置

個の礫を敷き詰めている。張り出し部の先端にはSK2180・2181と切りあう土坑がある。

柱穴：住居址のある範囲から73ヶのピットが検出された。このうち、SK2180と旧炉Bを結ぶ主軸との関係から、 $P_{1.4} \sim P_{1.4}$ が古い段階の柱穴であると思われる。また、SK2181から新炉Aを通り埋塞へ抜ける軸線との関係から、 $P_{1.5} \sim P_{2.6}$ が新段階Aの住居に伴うものであろう。ただ、これ以外のピットがこれらと組み合わせるか、または他の組み合わせに関わる柱穴である可能性も捨て切れない。

炉：主体部の西側張り出し部寄りですら2基検出されたが、両者は重複している。しかし、南側の掘り込みに伴う礫が北側の掘り込みを切っていることから、両者の新旧関係は明らかである。北側の旧炉(B)は径140cmの不整形を呈し、内部に角礫が充満していた。一方南側の新炉(A)は径160cmの方形の石囲いである。Aの埋土にはⅢC層を基調とする含細礫暗褐色粘質土に焼土・炭化粒・骨粉が混在している。

埋塞：調査段階では住居址との関わりを考えず、SK2317内の埋設土器として扱われてきたが、図面整理の時に新住居址の主軸線上を通ることが判明したため、本址に帰属させた。主体部の奥壁寄りに位置し、正位で出土した。

規模と形態：炉ならびに張り出し部先端の土坑の重複、2重にめぐる柱穴の存在から判断して、新旧2時期に渡る拡張重複が予想される。両者とも柄鏡形を呈し、古いB住居址の主軸長およそ5.2m、主体部の直径3.6mを測り、主軸はN-65-Eを示す。新しいAは主軸長およそ6.8m、主体部の直径4.9m、張り出し部の幅およそ1.4m、主軸はN-78-Eを示す。

出土遺物：埋塞のほか173点の土器片、磨石類1が出土した。II期に比定される。

#### SB552 (図版29・30、図17、PL6)

位置：E区のL-P16～Q18にあり、南側でSB558を、西側でSB560をきる。

調査経過：配石群SH506の検出段階で、すでに張り出し部に関わると思われる敷石およびそこから弧状に延びる礫群が確認されていた。当初弧状の礫が壁際をめぐる敷石ではないかと考えていたが、礫下から柱穴が確認されたため、この礫は上層撤去後に置かれたものと訂正した。SH517・518の調査後、張り出し部の敷石から続く床面を検出したが部分的に確認できただけで、結局柱穴から範囲を想定するに留まった。したがって、埋土および壁ははっきりしない。

床面：張り出し部を除いて、主体部には敷石されていた痕跡がみられない。張り出し部の敷石には花崗岩・硬砂岩等を用い、軸線沿いに規模の揃った柱状の礫を横列させ、その左右にやや形の揃わない礫を縦列させている。主体部側に対して先端部がやや幅広い。

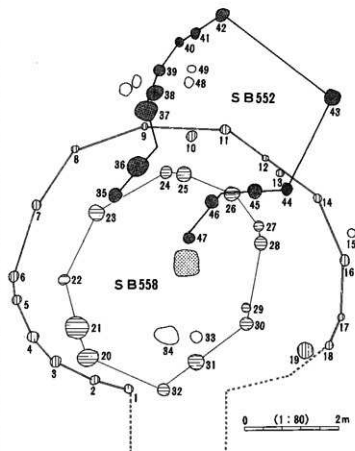


図17 SB552・558柱穴配置

柱穴：P<sub>35</sub>～P<sub>47</sub>は本址に関わる柱穴であると思われる。

炉：SH517の構築に伴って破壊された可能性が高い。

規模と形態：柄鏡形の敷石住居址である。主軸長およそ5.2m、主体部の直径およそ3.8m、張り出し部の幅1.6m、主軸はN-40-Eを示す。

出土遺物：500点余りの土器片、打製石斧1、磨石類6、磨製石斧1が出土した。V期に比定される。

**SB553A・B、554** (図版40)

位置：E区のL-T16～T18、M-A15～D19にある。SB554は553と555に切られる。

調査経過：Ⅲ層上面での検出作業中、L-B18とL-C18で敷石住居址の張り出し部と思われる石敷きが認められたため、前者をSB553、後者をSB554として、主体部床面の確認を行なった。SB553では、SH550の北側で弧状の掘り込みが検出されたことから、これを奥壁と想定した。また、調査段階では土坑として扱っていたSH553・554が、焼土や焼けた礫を伴うことから本址の炉と考えた。一方SB554に関わる壁・床・その他施設については手掛かりが得られなかった。しかしそのことはまた、SB553あるいはSB555に破壊されていることの証拠でもありと考えられる。以下SB553を中心に述べる。

壁面：北側で一部確認された。ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は24cmである。

床面：張り出し部と床面西側および東側に一部敷石がみられるほか、床面の状態は判然としない。発掘調査段階でSH767とした墓坑が、張り出し部直下から検出されている。本址との密接な関係があったのかもしれない。

柱穴：敷石検出面でP<sub>1</sub>～P<sub>19</sub>のビットが確認されたが、柱穴に係るものを特定することはできなかった。

炉：主体部ほぼ中央に重複関係をもつ2基の炉が確認された。西側の炉(A)内の焼土が東側の炉(B)の埋土を切っていることが断面で観察された。西側の旧炉(A)は直径110cmの円形を呈し北側に縁石を残す。新炉(B)は長径185cm、短径140cmの不整形で、縁石と思われる焼けた礫および焼土がある。

規模と形態：柄鏡形の敷石住居址である。主軸長8.0m、主体部の直径6.1m、主軸はN-19-Eを示す。

出土遺物：SB553は、700点余りの土器片、石鏃6、打製石斧2、刃器1、石錐1、土器片円板1、土偶1が出土した。おそらくVI期に比定されるものと思われる。SB554は張り出し部を中心に、土器片161、石鏃2、打製石斧1が出土した。IV期に比定されよう。

**SB555A・B・C** (図版42・43、図18、PL6・41)

位置：E区のM-D13～G17にある。SB554と570とは重複する。

調査経過：62年度秋の調査で、Ⅲ層上面の検出作業中、配石群SH510から東へ続く礫から、敷石住居の張り出し部とおぼしき石敷きと、これから延びる周境礫が確認された。周境礫の内側には礫が散在しており、この中でいくつかの単位が読み取れたため、東からSH527・579・578・599とした。礫の除去及び土坑の調査終了後、床面の検出、施設の精査を行う。ただ、北側は排土場所にかかるため一旦調査を見送り、62年度冬の調査で検出を行なった。その結果、北側の掘り込みと床面が認められた。

壁面：張り出し部を除き、主体部のほぼ全周で確認された。東側ではなだらかに約40cm立ち上がり、北側ではほぼ垂直に3段の立ち上りをみせる。比高は床面から下段まで35cm、下段から中段まで22cm、中段から検出面まで24cmである。

床面：張り出し部を除き、床面には敷石がみられないものの、ほぼ平坦なうえ堅く締まっている。また、炉を取り囲むように床面に密着してクリの炭化板材が出土した。おそらく敷かれていたであろう。北側にはテラス状の平坦部が2段みられた。張り出し部の礫は、左右を縦列に区切った中を横3列に充填



している。また先端部には礫が  
抜けている箇所があり、何らか  
の施設が存在が予想される。

柱穴：床面あるいは壁際より70㎝  
あまりのビットが確認された。  
配置から東・西・北の壁際や、  
1段目のテラス壁際に並ぶもの  
は柱穴と考えられる。

炉：主体部ほぼ中央で確認され  
た。縁辺に石を配した方形石囲  
い炉で、直径70cm、深さ16cmを  
測る。

規模と形態：柄鏡形の敷石住居址  
である。主軸長9.6m、主体部  
の直径6.0mと大形で、主軸は  
N-34-Eを示す。北側2段の  
テラスや柱穴の配置から、3回  
の拡張重複が行われている。

出土遺物：4873点と大量の土器片  
にあわせて、石鏃31、石錘・土  
錘2、打製石斧15、磨製石斧  
9、石鏃7、砥石2、土器片円板4など石器類も豊富に出土している。土偶2、小形土器5、石棒2、丸石2、玉類など土製品・石製品も比較的多い。VI期に比定される。

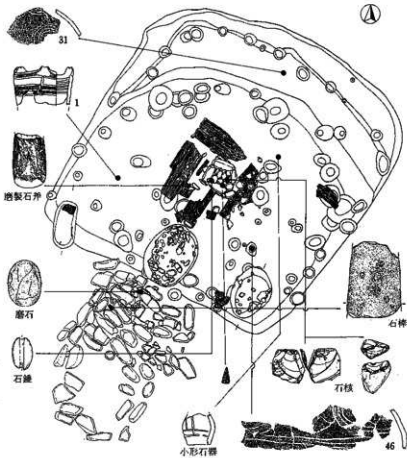


図18 SB555出土遺物分布

土偶2、小形土器5、石棒2、丸石2、玉類など土製品・石製品も比較的多い。VI期に比定される。

#### SB557 (図版28)

位置：E区のL-L13~P15にあり、SB566と重複する。

調査経過：62年度秋の調査で、L14からP15にかけて広がる墓坑の調査を行なったところ、それらの底面付近から部分的に扁平な石が敷かれていることが確認された。特にSH604付近の礫は、北東方向に開口して「コ」の字状に取り囲む様に並んでいたため、敷石住居址の張り出し部と考え、とりあえずSB565と認定した。また、同年度冬のSB566下面の調査では、弧状に並ぶ敷石が認められたためこれをSB557とした。しかし、図面照合により両者がほぼ同レベルに位置することが判明したので、両者を同一遺構と考えてSB557と訂正した。また、焼土を伴う土坑SK2541は位置的に炉と考えた。

床面：張り出し部および主体部の南側から東側にかけて弧状に敷石がみられるものの、多くの墓坑や住居址に破壊されて、床面全体の状況や埋土、壁面などもよくわからない。

柱穴：南から東側にかけての敷石の間から検出されたビットは、柱穴と考えられる。

炉：主体部のやや奥壁寄りで確認された。直径130cmの方形を呈し、焼土がみられる。

規模と形態：柄鏡形の敷石住居址である。主軸長およそ8.6m、主体部の直径およそ5.2m、張り出し部の幅2.4mで、主軸はN-55-Eを示す。

人骨：南東部敷石上面から、ほぼ全身をとどめた仰臥屈葬人骨が出土した。頭位は西。残存状態が極めて

悪いため実測不能であった。

出土遺物：土器片1460、石鍬6、打製石斧2、磨石類2、刃器1が出土している。おおむねIV期に比定されよう。

**SB558** (図版29・30、図17)

位置：E区のL-N17~R20にあり、SB552に切られ、SB560・551を切る。

調査経過：III層上面の検出中、SB552の張り出し部の東西に弧状に並ぶ礫が認められたため精査したところ、P20区で本址の張り出し部と思われる敷石を確認した。しかし、この敷石は調査区外に続いているものと思われる。周堤礫およびSB552の張り出し部敷石を除去してから、床面の精査に入る。本址に伴う掘り込みはみられないものの、SB552の張り出し部敷石の下から柱穴が検出されているので、両者の新旧関係は明らかである。床面を削いだ段階で7基の墓坑が検出された。

床面：張り出し部を除いて敷石はみられない。主体部周囲の礫は、これらの下から柱穴用のピットが検出されたことから、本址廃絶後のものと考えられる。床面には炭化物や焼けた礫が広がり、東側を中心に一部板材や丸太材も認められた。焼失家屋であろう。

柱穴：配置から、P<sub>1</sub>~P<sub>19</sub>とP<sub>20</sub>~P<sub>22</sub>の2重に巡るピットは柱穴としてよい。P<sub>17</sub>~P<sub>19</sub>・P<sub>27</sub>・P<sub>29</sub>には炭化したクリの柱材が遺存していたほか、複数の柱穴に炭化物や焼土が伴っていた。外側を巡る一群は垂木の跡かと想定したが、掘り込みが垂直に入っているものがあるため断定できない。

炉：主体部ほぼ中央で、径28cmの方形を呈す炉が確認された。

規模と形態：柄鏡形敷石住居址で、主軸残存長6.8m、主体部の直径5.5m、主軸はN-5-Eを示す。

出土遺物：1637点の土器片、石鍬4、磨石類2、磨製石斧2、石鍬3、砥石1、土器片円板4、土偶1、土製蓋1が出土した。V期に比定される。

**SB559、564** (図版46、図19)

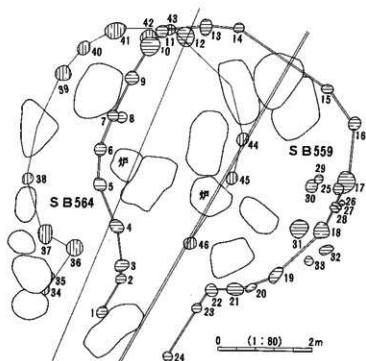


図19 SB559・564柱穴配置

位置：E区のM-G16~J19にあり、SB559が564を切る。

調査経過：III層上面での検出作業中、M-H18・19で敷石住居址の張り出し部と思われる石敷きが2列認められた。南東側SB559の配列が整然としているにもかかわらず、北西側SB564は乱れているため、前者が後者を壊していると判断した。また、SH558・559下部を調査中、南側に扁平な石が敷かれていることが確認されたため、このレベルで全体を精査しSB559に関わる炉を検出した。この炉から広がる焼土がSB564の柱穴上を覆っていることから、両者の新旧関係は補強される。

床面：張り出し部と床面東側に敷石が

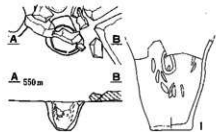
ある。SB564の床面ははっきり捉えることができなかったものの、炉の掘り込み面のレベル差はほとんどない。全体的に北東から南西の張り出し部にむけて傾斜をもつ。

柱穴：2軒の住居址の範囲から50ヶ余りのピットが検出された。配置と切り合い関係から、SB559の柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>24</sub>が、SB564にはP<sub>34</sub>～P<sub>46</sub>が相当するものと思われる。

炉：主体部の張り出し部寄りとその西側に1基づつ炉が確認された。張り出し部の位置から考えて、東側はSB559、西側はSB564の炉であろう。前者は長径90cm、短径75cmの不整形で、周囲に焼土の広がりをもち、後者は径65cmの方形を呈し、SH826に切られている。

規模と形態：両者とも柄鏡形の敷石住居址である。SB559の主軸長7.3m、主体部の直径5.6m、張り出し部の幅1.9mで、主軸はN-30-Eを示す。一方のSB564は主軸長6.2m、主体部の直径4.7mで、N-22-Eを示す。

出土遺物：調査・整理の段階で、2軒の遺物が混合した。1235点の土器片、石鏃5、打製石斧3、磨石類9、刃器1、磨製石斧2、石錐2、石棒1、土器片円板13、土偶1が出土している。V期に属する。



#### SB560 (図版34、図20)

位置：E区のL-N16～P18にあり、SB551と接して、552・558に切られる。

調査経過：ⅢB層掘り下げの途中で、床面に敷かれていたと思われる扁平な礫が確認されたため精査に入る。床面の範囲は、当初石が敷かれている個所と一致すると考えていたが、図面照合の結果、後述の通り柱穴の範囲内と訂正した。

床面：主体部炉の南側から東側にかけて、比較的大形の平石を敷いているほか敷石はみられない。砂岩がほとんどであるが、硬砂岩や粘板岩の平らな面を上に向けているものもある。炉の南側の大きな平石の表面には磨り面が認められた。敷石の範囲以外では、床面の状態が詳しく観察できていない。

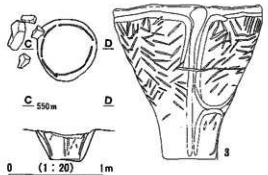


図20 SB560埋塞出土状態(上:No1 下:No2 1/8)

柱穴：配置から、P<sub>1</sub>～P<sub>16</sub>が柱穴であろう。この内側にもP<sub>23</sub>～P<sub>29</sub>と一巡するピットがみられるが、これらも本址に関わる柱穴であろう。両者が同一の上屋に関係するものか、拡張重複によるものかはわからない。

炉：主体部のやや奥壁寄り、長径60cm、短径45cmの長方形の炉が確認された。炉の奥壁側は平石を垂直に立てており、過熱を受けていた。また、深さ46cmの炉内には多量の焼土・炭化物・焼骨が含まれる。

埋塞：炉の南および北に位置する。両者ともに住居址の主軸線から外れている。南側のNo1は深鉢の胴下半部が正位に埋設されており、北側のNo2はほぼ完形の深鉢がやはり正位に埋設されていた。

規模と形態：柄鏡形と思われる敷石住居址である。主軸長およそ5.7m、主体部の直径およそ4.0m、主軸はN-37-Eを示す。

出土遺物：2点の埋塞が本址の時期を決する唯一の土器である。このほか土器片3000、石鏃3、打製石斧6、磨石類4、石錐1、土器片円板14、小形土器1、石棒1が出土した。また焼けた獣骨も多量にみられた。Ⅱ期に比定される。

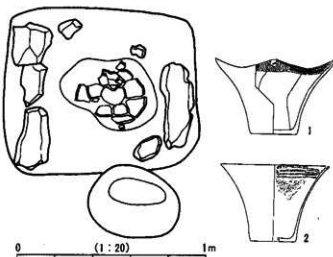


図21 SB561炉内土器出土状態(土器1/8)

に伴う住居プラン等を確認するため、周囲をわずかつつ下げながら精査を行い、K18～M19に展開する弧状の礫群を検出する。その際、SH529・591・594・596・652・670・698のプランも確認する。この間住居址に関わる落ち込みは認められなかったため、周堤礫は弧状の礫群より10cm内外浮いた形で残された。しかし、本址の床面や柱穴・炉などの施設が判然としないため、とりあえず検出した礫のみ実測して取り外し、再び精査を試みたところ、礫群より5cm程度下で、炉・柱穴・床面が確認された。

床面：敷石はみられなかったものの、周堤礫の内側全面に赤色の風化礫を敷いたような面が確認された。この赤色風化礫は弧状の礫群下及び、礫群下で確認されたビットや炉に切られている。

柱穴：P<sub>1</sub>～P<sub>21</sub>の中で、本址の柱穴を想定することができるが、具体的に抽出できない。

炉：主体部のはほぼ中央張り出し部寄りで検出された。長径100cm、短径90cmの長方形石囲い炉である。底面には土器片が敷かれていた。

規模と形態：柄杓形で、残存する主軸長は6.0m、主体部の直径およそ5.0m、主軸はN-30-Eを示す。

出土遺物：炉内に敷かれていた土器片が本址の時期決定の根拠になった。このほか土器片1126、石織2、打製石斧3、磨石類6、多孔石1、磨製石斧1、土器片円板5、土偶2、丸石1が出土した。V期に比定される。

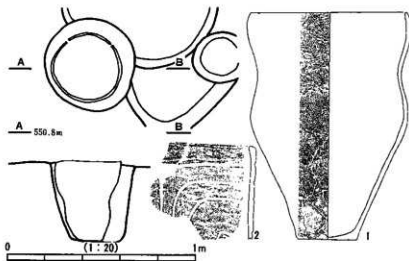


図22 SB562埋甕出土状態(土器1/8)

## SB561 (図版52、図21)

位置：E区のM-J 18～M20にあり、南東側は調査区外に出る。

調査経過：IID 4層下部まで重機によって削平したところ、J 18～20にかけてIII A 1層上面にのる列状の巨礫を検出した。この巨礫列は、北西部でSH530によって破壊され、東部でSH670、もしくはいくつかのビットにともなう何らかの施設によって壊されたものと思われる。なお、この段階でSH529・594・596・652の上面配石を同時に確認する。次に、列状の巨礫群を住居址の周堤礫と考えると、これ

## SB562 (図版47、図22、PL 7)

位置：E区のM-H13～J 15にあり、北東側でSB572と接する。

調査経過：62年度秋の調査でIII B層を掘り下げの途中、遺構の埋土らしき多量の遺物を含む有機物混砂利層が検出されたため住居址と認定した。更に精査により、SB561と類似した赤色の風化礫の面が明らかになったことからこれを床

面と想定したところ、I15区で埋甕が出土した。また、同年度冬の調査では、北側に続く主体部の床面が確認された。

埋土：炭化物を含んだ黒褐色粘質土で、埋土中には多量の遺物を含む。

壁面：西から北東にかけて確認された。立ち上がりはなだらかで、扁平な礫を立てかけたような箇所もみられる。

床面：主体部西から北東にかけての壁際に敷石がみられ、その他の床面には赤色風化礫が分布していた。

柱穴：配置から、P<sub>1</sub>～P<sub>14</sub>が柱穴であろう。この内側にもSB560と同様にP<sub>15</sub>～P<sub>23</sub>と一巡するビットがみられる。本址となんらか係るものであろう。

炉：主体部のやや奥壁寄り、径65cmの方形石囲い炉が確認された。炉の縁石には、すべて平石を立てて用いている。

埋甕：炉の南西部主軸線上にあり、柄杓形態をとるとすれば、張り出し部との接合部に位置することになる。完形の大型深鉢が正位に埋設されていた。

規模と形態：おそらく柄杓形と思われる敷石住居址であろう。主体部の直径およそ6.7m、主軸はN-34-Eを示す。

出土遺物：埋甕および埋甕内から出土した大型破片が本址の時期を決する唯一の土器である。その他土器片1410、石鉢12、打製石斧13、磨石類6、石皿1、磨製石斧1、土器片円板3が出土した。III期に比定される。

#### SB563 (図版51)

位置：E区のM-K13-L15にあり、北側でSB574と重複する。また東半分は調査区外に出る。

調査経過：配石群SH511の北東に続く礫群の下からは多量の土器が出土し、堆積土にも有機物が多く含まれていたため、当初から遺構の埋土であることを予想していた。ところが調査を行っても掘り込みははっきりせず、L14で焼土を伴う円形の落ち込みが検出されて初めて住居址と認定された。

床面：炉を中心として弧状に並ぶ柱穴の位置から床面の範囲を推定した。

柱穴：配置からみて、P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>が柱穴であろう。

炉：床面のはほぼ中央で径45cmの炉が確認された。炉を中心として西側へ焼土が広がっている。

規模と形態：床面から推測して直径およそ4.9mの円形であろう。主軸の方向は不明。

出土遺物：住居址の認定が遅れたため、本址出土の記録がある土器片わずかに101点である。ほかに打製石斧が1点出土している。III期に比定してよいであろう。

#### SB566 (図版27・28、図23)

位置：E区のL-M10-P13にあり、SB557と重複する。

調査経過：E区全体の排土処理など調査工程の関係で、本址の調査は62年度冬と63年度春の2回に分けて行われた。62年度の調査では、配石群SH506の検出作業中、敷石住居の張り出し部と思われる配石、および、この配石の北東部でやや小振りの礫の集中が確認された。礫を除去してから掘り込みの検出を行ったところ、ほぼこの礫集中のはい落ち込みが確認されたため、前述の張り出し部と合わせて住居址と認定した。63年度の調査でもほぼ同様の経過をたどっている。なお、62年度冬の調査は、ビニールハウスの中で行われたため、写真など一部記録に不備がある。

埋土：炭化物を多量に含んだ黒褐色粘質土で、中に多量の遺物を含む。

壁面：張り出し部を除き全周する。北東側で、ほぼ垂直に35cm立ち上がる。

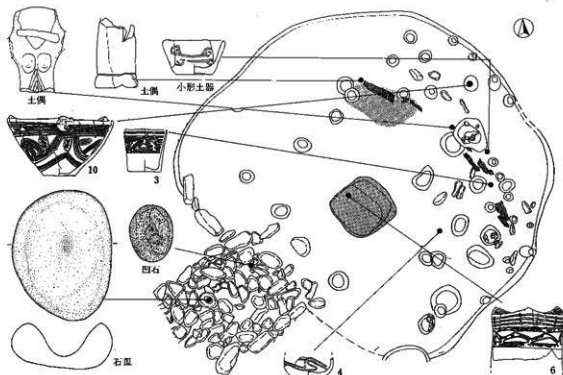


図23 SB566出土遺物分布

床面：主体部に敷石はないものの、全体に良く踏み固められている。奥壁寄りの柱穴間に炭化材が横たわっていたほか、 $P_4$ から $P_8$ にかけて焼土が広がっていた。張り出し部の敷石は、左右を縦列に並べた礎で区切った中に礎を充填している。先端部に近い箇所に凹みを上にした石皿がはめ込まれていた。  
柱穴：38ヶのピットが検出されたが、 $P_1 \sim P_{10}$ は柱穴であろう。 $P_{11}$ の底面からイノシシの下顎骨が出土している。

炉：主体部の中央やや張り出し部寄りにあり、径115cmの方形を呈する。

規模と形態：柄杓形敷石住居址である。ただ主体部のプランは方形に近い。主軸長8.8m、主体部の直径6.4m、張り出し部の幅2.4mと大形で、主軸はN-51-Eを示す。

出土遺物：炉から出土した深鉢形土器および床面直上出土土器から考えて、本址はV期末ないしVI期に比定される。その他石鏃18、打製石斧14、磨石類24、石皿6、刃器2、磨製石斧2、石錐2、土偶9、小形土器5、耳飾り1、玉類2など多量の遺物が出土した。

**SB567** (図版33上)

位置：E区のL-J11~M13にある。

調査経過：SH858の下部を調査中、東側から方形の石囲い炉が検出されたため、周辺を精査したところ、J12から13にかけて張り出し部の敷石と思われる礎の残骸を確認した。図面照合時に、本址の柱穴と思われるピットを選別してその範囲を想定した。

床面：張り出し部および炉の右側を除き敷石はほとんどみられない。床面の観察は不十分だったが、全体に張り出し部へ向けて傾斜をもつようである。張り出し部は攪乱を受けているためか、礎の配列に乱れがあった。また張り出し部の先端から土坑が検出された。

柱穴：30ヶあまりのピットが検出された。配置から考えて、 $P_1 \sim P_{13}$ が柱穴であろう。

炉：主体部の張り出し部寄りに位置する。径70cmの方形石囲い炉である。

埋甕：炉の西側に位置し、主軸線上にはのらない。深鉢形土器の胴下半部を正位に埋設している。  
規模と形態：N-63-Eに主軸をもつ柄鏡形敷石住居址である。主軸長およそ6.8m、主体部の直径4.6mを測る。

出土遺物：埋甕のほか出土した土器片は30点と非常に少ない。住居址の認定の遅れが原因かと思われる。Ⅲ期に比定される。

#### SB568 (図版48)

位置：E区のM-E16～G18にある。

調査経過：ⅢC層の掘り下げで、扁平な石の広がり認められ、炉および柱穴と思われるピットが検出された。

床面：主体部の南側および北側に敷石が一部認められたほか、床面の状態ははっきりしない。

柱穴：炉を中心としてP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>が一巡する。

炉：主体部のほぼ中央に位置する。径74cmの方形を呈し、縁辺に平石を立てかけている。炉内から獣骨がまとまって出土した。

規模と形態：直径4.0mの円形の敷石住居址である。張り出し部または埋甕などの施設がみられないため、主軸の向きは明らかでない。

出土遺物：土器は非常に少ないながら、おそらくⅢ期に比定されるものと思われる。

#### SB570A・B (図版44上、図24、P.L7)

位置：E区のM-E11～G13にあり、南側でSB555に切られる。

調査経過：Ⅳ層の山砂利上面での調査で、礫の少ない黒褐色粘質土の落ち込みを確認する。この落ち込みが南側で不整形に変化するため精査したところ、本址と重複すると思われる別の住居址の張り出し部が確認された。前者をSB570A、後者をBとした。

埋土：Aは炭化物が混在する黒褐色粘質土、Bはこれに礫および黄褐色ブロックが含まれている。

壁面：Aは全周で掘り込みが確認されたが、北壁の立ち上がりが約30cmともっとも明瞭だった。Bは張り出し部では若干立ち上がるものの、主体部はほとんどAと重なるため不明である。

床面：Aは張り出し部、壁際および炉の左側に敷石が認められた。床面は張り出し部にむけてやや傾斜をもち、踏み固められて比較的堅い。Bの張り出し部には明確な敷石はない。

柱穴：P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>が壁際で検出されたが、A・B個々に伴うものは区別できない。

炉：主体部のやや奥壁寄りに位置する。長径85cm、短径45cmの長方形で、縁辺に平石を立て掛けている。特に奥壁側には2枚の平石を用いている。炉の底面からやや浮い

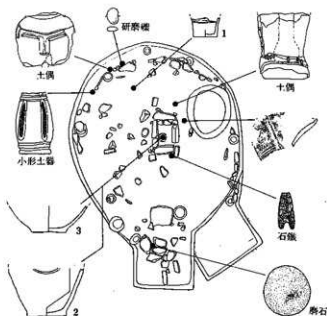


図24 SB570出土遺物分布

て、鉢形土器の胴下半部が出土した。

規模と形態：AはN-30-Eに主軸をもつ柄鏡形敷石住居址である。主軸長5.2m、主体部の直径4.0m、張り出し部の幅は1.3m。Bはほぼ北を向き、張り出し部の幅は1.4mを測る。

出土遺物：土器片1416のほか、石鏃8、打製石斧6、磨石類5、刃器1、磨製石斧3、土器片円板3、土偶2、小形土器1、玉類2が出土した。V期に比定される。

**SB571** (図版36)

位置：E区のL-Q12~S14にある。

調査経過：IV層上面の検出後、黒褐色土の落ち込みを確認する。この範囲には礫が散在していたが、多くは本址を切る土坑に伴うものである。

埋土：炭化物が混在する黒褐色粘質土である。

壁面：南側を除き、なだらかな立ち上がりが確認された。北側の壁高は40cmを測る。

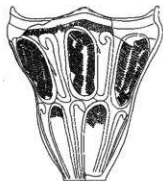
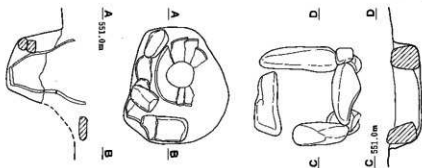
床面：南側および中央部に土坑に切られるため、全体の様子は判然としないうもの、北から南に向けてやや傾斜をもつ。敷石はみられない。

柱穴：ビットがいくつか確認されたが、柱穴と考えられるのはP<sub>1</sub>~P<sub>10</sub>である。

規模と形態：プランが不整形なうえ、炉も確認されていないため、住居址と認定するには躊躇せざるをえないが、ほかに適当な機能も類推できないので、消極的ながら竪穴住居址とした。推定長径は5.0m、短径は3.9mである。

出土遺物：埋土を中心に遺物は比較的多い。土器片660、石鏃3、磨石類9、石皿類2、石鏃1が出土した。

おそらくV期に比定されるものと思われる。



- 土層 1：炉埋土、灰と山砂利
- 2：灰と少量の糞土
- 3：灰が主体
- 4：顔角礫層じりの暗褐色粘質土で、焼土化顕著
- 5：4層と同質だが、焼土化していない
- 6：1層と同質だが、焼土ブロックが多く含まれる
- 7：灰主体で焼土ブロックが入る

図25 SB572炉・埋土出土状態、SB574炉(土器1/8)

**SB572・574**

(図版51、図25)

位置：E区のM-J12~L14にあり、574は572に切られる。また、南西側でSB562と接し、南側はSB563に切られる。

調査経過：IV層上面の検出で黒褐色土の落ち込みを確認したため精査を行なったが、南側の埋土は薄く範囲を明らかにすることはできなかった。ビットの配列や炉の位置から2軒以上の重複が考えられる。



埋土：炭化物および黄褐色ブロックを混在する黒褐色粘質土である。

壁面：北側のみ確認された。ほぼ垂直に約40cm立ち上がる。

床面：IV層直上に構築されているため、角礫が剥き出しとなり凹凸が激しい。SB574とはレベル差はない。

弧状に並ぶ柱穴の位置から床面の範囲を推定した。

柱穴：北壁の外を巡るP<sub>19</sub>～P<sub>25</sub>はSB572に伴う柱穴と考え、床面にあるP<sub>11</sub>～P<sub>13</sub>をSB574に所属するものとした。

炉：都合3基の炉が確認された。西側の独立した炉(A)は径55cmの方形を呈し石囲いをもつ。東側で重複する2基の炉は、Bが形態的にも大きさもAに類似しており、Cは破壊されて形状がつかめない。推定した床面の範囲を当てはめた場合、いずれもSB574に伴うであろう。

埋土：炉Aの南西に位置する。掘り込みの西辺に礫を並べて、底部欠損の深鉢形土器を正位に埋設している。推定した床面の範囲や、炉との位置関係から判断すれば、SB572の埋土と考えられよう。

規模と形態：SB572と574は、共に円形を呈すると思われる。前者の床面はおおよそ直径4.7m、後者は4.0mである。

出土遺物：SB572と574との遺物の混同があるが、572の床面の範囲からは土器片400、石鏃5、打製石斧2、磨石類3が、574からは土器片179、石鏃1、打製石斧7、磨石類5、石棒1が出土している。埋土がSB572に伴うとするとI期に帰属する。SB574はII期に比定されよう。

#### SB573A・B (図版33下)

位置：E区のL-N11～Q14にあり、SB557に切られる。

調査経過：SB557床面東側で、弧状に続く敷石から東へ大きくはずれて、2条の周溝が確認された。周溝のレベルが敷石面より低いことなどから、別の住居址を予想しさらに精査を行なったところ、外側の周溝に続いて立ち上がりが認められたため、住居址と認定する。SB557の床面を削いで本址の床面検出や施設の確認作業の結果、西側でも周溝の痕跡があったほか、床面の中央付近から焼土を伴った土坑も検出された。

埋土：SB557の床面下および東側壁際の状態を観察した限りでは、炭化物を混在する茶褐色粘質土で、オリーブ褐色の砂質ブロックを含んでいる。

壁面：東側で一部認められた。なだらかに20cm程度立ち上がる。

床面：SB557の施設や土坑によって大きく攪乱を受けている。東側の2条の周溝や、西側に残る周溝の痕跡から、2軒以上の重複が考えられる。全体図では、東外側の周溝および立ち上がりのラインにかけて、予想される範囲を破線で表現してみたが、不確かな部分が多いため図版33下の遺構図では、あえて破線を入れてない。

柱穴：床面からは大小50ヶあまりのピットが検出されたが、図面照合時に選別したP<sub>1</sub>～P<sub>20</sub>あたりが柱穴になるのではなからうか。

炉：床面のやや東寄りから、焼土を伴う2基の土坑が確認された。北側(A)は当初から本址の炉と認められていたが、南側(B)は住居址と係りをもたないものとしてSK3050としていた。しかし、のちに図面照合の結果、両者は近接する炉と認定することになった。Aは長径60cm、短径50cmの南北にやや長い円形、Bは長径85cm、短径65cmで、東西に長い卵形を示す。

規模と形態：ほぼ円形の竪穴住居址である。外側の周溝を結んだ床面の最大の長さはおよそ6.8mとなる。

出土遺物：土器片800、石鏃2、打製石斧2、磨石類3が出土した。II期に比定される。

**SB578** (図版21)

位置：E区のL-H4-J6にある。

調査経過：H5～H6にかけて、ⅢB層と考えると掘り下げを行っていたところ、扁平な石が敷かれていた面が検出されたため、周囲を精査して広がりを確認した。図面照合時に本址に伴うと考えられる柱穴を選別した。

埋土：当初ⅢB層と考えていた層が該当する。炭化物が混在した暗褐色粘質土である。

床面：ほぼ平坦で、西側から南側にかけてと中央部に敷石がみられる。また、P<sub>1</sub>の北側から炭化材が出土した。

柱穴：調査時には土坑としてSK番号を付けていたが、図面照合の結果、P<sub>1</sub>～P<sub>8</sub>が本址に伴う柱穴と判断した。

炉：検出されなかった。おそらくSH1129辺りの墓坑に破壊されたものと思われる。

規模と形態：張り出し部ははっきりしないが、おそらく西ないし南西側に張り出し部をもつ敷石住居址(柄鏡形?)であろう。主体部の直径はおよそ5.3mである。主軸の方向は不明。

出土遺物：土器片52、磨石類2、土器片円板1とわずかである。IV期に比定されよう。

**SB580** (図版26)

位置：E区のL-K10-M11にある。

調査経過：本址の周辺は、人骨を伴った墓坑の切り合いが多いため攪乱が激しく、埋土中に極めて多量の土器片があったにも関わらず、調査中に住居址の範囲を確認することが困難だった。したがって、L10で検出された炉を中心に据えて、図面照合の際に住居址の範囲を想定した。

柱穴：東側に並ぶP<sub>1</sub>～P<sub>8</sub>をはじめ、いくつかのビットが本址の柱穴になるものと思われる。

炉：径およそ70cmの方形を呈す。南側には掘り込み面に平石が立て掛けるように設置されていた。

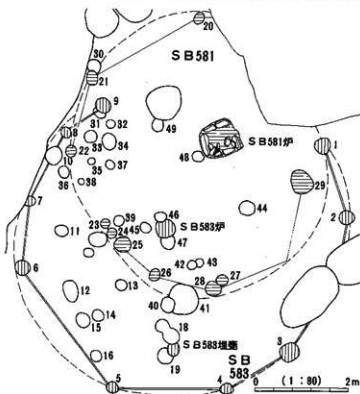


図26 SB581・583柱穴配置

規模と形態：炉と柱穴の並びから推定した床面の範囲は、直径およそ4.9mの円形を呈するものと思われる。主軸の方向は不明。

出土遺物：土器片は2071と多いが、復元できたものは少ない。石器は石鎌2、打製石斧14、磨石類2、石皿類2、刃器1、石錐2、丸石1である。I期に比定される。なお、SH1224は本址の炉に切られることが明らかのため、この周辺には最古段階の墓坑が集中していたことになる。

**SB581・583** (図版25、図版27)

位置：E区のL-H4-J7にあり、SB578に切られる。

調査経過：SB578の敷石を除去したところ、続いて新たな敷石面が検出さ

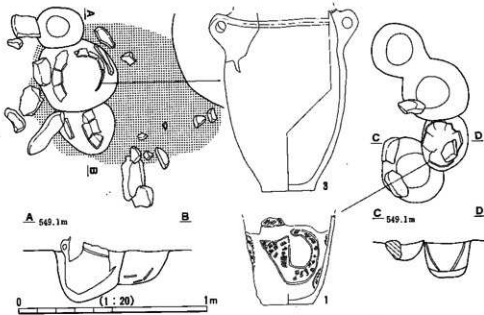


図27 SB583炉内土器・埋甕出土状態(土器1/8)

れたため、周辺を精査して範囲を決め、SB581とする。ただ北東部は掘削のノリ面の関係から調査できなかった。続いてSB581の敷石面の下から焼土を伴った土坑が検出された。またSB581の床面の範囲から南に外れた箇所より、埋甕が出土した。図面照合の段階でいくつかのピットから2軒分の柱穴を選別した。

床面：SB581の床面は、張り出し部から炉に向けての主軸線上、および炉の北東側に敷石が集中していたほか、あちこちで平石が散乱していた。全体に張り出し部へ向けて傾斜をもっている。張り出し部の敷石方法は、SB551などと同様で、左右を主軸方向に区切ったあと横方向に礫を並べて充填している。一方、SB583は南から東へかけて部分的な敷石がみられるほかは、大部分がSB581によって壊されている。

柱穴：両者の柱穴は区分に迷ったが、 $P_1 \sim P_9$ はSB583の、 $P_{20} \sim P_{29}$ はSB581の柱穴と考えて良いのではないか。

炉：SB581の炉は主体部のほぼ中央で検出された。径80cmの方形を呈し、四辺に縁石をもつ。一方、SB

581の敷石下から検出された焼土を伴う埋設土器は、SB583に関わる炉体土器と判断した。

埋甕：SB583炉の南およそ2.5mの位置に、深鉢の胴上半部を欠いて正位に埋設されていた。

規模と形態：SB581はN-70-Eに主軸をとる柄鏡形敷石住居址である。残存する主軸長は5.2m、主体部の直径はおよそ3.3mである。一方のSB583は埋甕と炉を結んだ線が主軸とすると、ほぼ北を向く。床の範囲は直径およそ7.3mの円形を呈する。

出土遺物：SB581からは、土器片1977、石鏃1、打製石斧2、磨石類4、石皿類1、刃器2、磨製石斧1、土器片円板5があり、III期に比定される。SB583では、炉体土器および埋甕のほか、土器片40、磨石類12、石皿類1が出土している。同じくIII期に比定される。

### SB582 (図版22)

位置：E区のL-J7~M10にある。

調査経過：配石群SH1111の礫を除去したところ、K7において弧状に並ぶ礫を検出し、同時に掘り込みを確認する。

埋土：炭化物や礫も多量に混在する黒褐色粘質土である。

壁面：北から東側にかけて立ち上がりを確認した。北側ではⅢA層を、東側ではⅣ層の山砂利を掘り込んでいる。なだらかにおよそ40cm程度立ち上がる。

床面：壁際を一巡する敷石を検出した。しかし、中央部から東寄りには墓坑に破壊されているため状況はわからない。

柱穴：敷石の間から検出されたP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>はいずれも本址の柱穴であろう。

炉：SH1177周辺の墓坑に破壊されたものと思われる。

規模と形態：張り出し部が確認されなかったため、現状では円形の敷石住居址とせざるをえない。主軸の方向は不明。主体部の直径はおよそ6.6mである。

出土遺物：土器片133、石鏃1、磨石類1である。Ⅳ期に比定されよう。

**SB584** (図版23)

位置：E区のL-C10～D12にあり、西側は調査区外に出る。

調査経過：本址の周辺はピットが多いことに加えて、多量の土器片が出土していたため、調査中から住居址の可能性を考えていたが、床面の範囲をとらえることが困難だった。図面照合の段階で、炉周辺のピットの中から柱穴を選別して住居址の範囲を想定した。

柱穴：いくつかのピットが検出されたものの、炉との位置関係とピットの切り合いから、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>を柱穴と考えてみた。

炉：長径80cm、短径55cmの長方形を呈す。底面は焼け、焼土が堆積していた。

規模と形態：炉と柱穴の並びから推定した床面の範囲は、直径およそ4.0mの円形を呈するものと思われる。主軸の方向は不明。

出土遺物：土器片561、打製石斧2である。Ⅰ期に比定される。

**SB587・588** (図版24)

位置：E区のG-M20～P20およびL-M1～P1にあり、北半は調査区外に出る。

調査経過：Ⅳ層の山砂利上面を調査中、黒褐色土の落ち込みを確認する。精査の結果、西側は黄褐色ブロックを含むほう(SB588)が東側(SB587)を切っていることが判明する。

埋土：SB587・588とも炭化物を混在する黒褐色土で、後者には黄褐色ブロックが含まれていた。

壁面：SB587・588ともに山砂利を掘り込んでいる。なだらかに10cm程度立ち上がる。

床面：SB587はほぼ平坦。588は東から西へ向けてやや大きな傾斜をもつ。

柱穴：SB587はP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>、SB588はP<sub>3</sub>～P<sub>13</sub>が壁際にならぶ。

炉：調査区外になってしまうためか、確認されなかった。

規模と形態：円形の竪穴住居址で、SB587は推定で直径4.0m、SB588は5.3m以上になろう。主軸の方向は不明。

出土遺物：SB588で土器片95、打製石斧3が出土した程度で、遺物量は極めて少ない。SB587同様時期は明確ではないが、おそらくⅢ期に比定されよう。

**SB589** (図版24、PL8)

位置：E区のL-L1～M2にあり、南西側でSB590に切られる。

調査経過：Ⅳ層の山砂利面を検出中、黒褐色土の落ち込みを確認する。

埋土：炭化物を混在する黒褐色土で、黄褐色ブロックが含まれていた。

壁面：東側はほぼ垂直に18cm程度の立ち上がりが見られるものの、北から西側ははっきりしない。

床面：ほぼ平坦な上、踏み固められており締まりが良い。

炉：床面の南西寄りに焼土を伴った浅い掘り込みが認められた。

規模と形態：東西にやや長い楕円形の竪穴住居址で、長径2.6m、短径2.2mを測る。主軸の方向は不明。

出土遺物：わずかで時期もはっきりしない。ただ、本址を切るSB590がII期と思われるので、この時期より下ることはない。

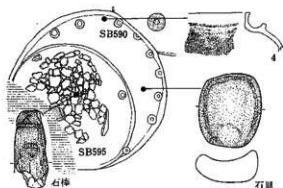


図28 SB590・595出土遺物分布

#### SB590・595 (図版24、図28、PL8)

位置：E区のL-K1～L3にあり、北東側でSB589を切り、南西側でSB594に切られる。

調査経過：IV層の山砂利上面の検出中、黒褐色土の落ち込みを確認し、SB590とする。その後床面精査の段階でこれを切る別の落ち込みがあったのでSB595とした。

埋土：炭化物を混在する黒褐色粘質土で、礫が含まれていた。

壁面：SB590は東側ではほぼ垂直に25cm立ち上がる。SB595は590床面とのレベル差はわずか5cm程度であった。

床面：SB590の床面は黄褐色粘質土が貼られており、締まりがよく平坦である。SB595は、壁際を除き、炉を中心に敷石されていた。

柱穴：SB590は壁際にP<sub>1</sub>～P<sub>9</sub>の9本が確認された。

炉：SB595の炉は径40cmの方形石囲い炉であるが、南西側はSB594に切られている。SB590は595に切られており不明である。

規模と形態：SB590は直径3.3mの円形竪穴住居址である。主軸方向は不明。SB595は炉の向きから考えてN-70-Eに主軸をもつ敷石住居址(柄鏡形?)であろう。南北の直径は2.8mである。

出土遺物：SB590は土器片73、石鏃3、打製石斧2、磨石類7、刃器2、丸石1、小形土器1が出土しており、II期に比定される。595は300の土器片と共に、石棒が1ある。III期に属する。

#### SB577・591・594 (図版19、図29、PL8)

位置：E区のL-H～K5にあり、三者は切り合い関係から古い順に591→594→577となる。また、SB594は北東側でSB595を、南東側で599を切る。

調査経過：まず63年春の調査で、I5付近の配石群SH1111から、敷石住居址の張り出し部を想定される礫の並びが確認された。配石の下を精査したが、張り出し部に関係すると思われる掘り方その他が確認できないまま、一応SB577と命名して一旦調査を終了させている。同年秋の調査で、III層を掘り込む落ち込みが確認された。精査の結果、西側のオリープ褐色砂質ブロックを含む黒褐色土が、東側の礫を含む黒褐色土に切られていることがわかったため、前者をSB591、後者をSB594と命名した。この時点でSB594はSB577の張り出し部と同一住居の主体部に係る落ち込みと判断していた。ところが、SB594床面検出作業中に、埋土1層から4個の砂岩礫による弧状の石列が検出され、床面に密着して出土した

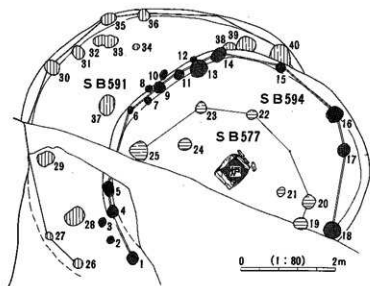


図29 SB577・591・594柱穴配置

炭化材を切ることが確認され、しかも柱穴と考えられるピットの配置が、壁よりかなり内側を巡ることが明らかとなった。よって、当初の所見を修正して、この石列ならびに柱穴列から想定される主体部が、SB577の張り出し部敷石と同一住居址のものであると判断した。ただし、SB577の主体部であるという判断が遅れたため、遺物はほとんどがSB594として取り上げられてしまった。

埋土：SB577の埋土の状況は、調

査ミスにより明らかにできなかったが、SB594の埋土と判断してきた部分が相当するとすれば、礫が混在する黒褐色粘質土ということになる。SB591の埋土には礫が少なく、かわってオリブ褐色の砂質土が含まれていた。

壁面：SB577の壁はまったく確認することができなかった。SB594は北東側で約30cm、591は北西側で約20cmたちあがる。

床面：SB577とSB594の床面のレベル差はわずかであったと思われる。SB577は調査ミスにより床面の状況が明らかでないが、敷石された張り出し部をもつ。この張り出し部敷石直下よりSH1129が検出された。本址と密接な関係があったものと思われる。SB594は北西壁際に敷石があるほか、やや踏み固められた床面上には炭化物が散在し、北壁よりに赤化した部分もみられる。炭化材も出土している。SB591は黄褐色土の貼り床が認められた。

柱穴：SB594の床面上で検出されたP<sub>19</sub>～P<sub>28</sub>はSB577、またP<sub>1</sub>～P<sub>18</sub>はSB594に係る柱穴であろう。張り出し部側のP<sub>1</sub>～P<sub>8</sub>は、SB594のものと思われるがはっきりしない。また、P<sub>28</sub>～P<sub>40</sub>はSB591の柱穴と判断した。

炉：SB594に関わる炉のみ検出された。径およそ60cmの方形の石囲い炉で、炉体土器がある。

規模と形態：SB577は、柱穴および砂岩礫の並び方から床面の範囲を想定し、SH1111内にみられる礫のまとまりを張り出し部と考えれば柄杓形敷石住居址といえる。N-41-Eに主軸をもち、主軸長6.5mを測る。SB594も敷石住居址としたが、張り出し部の状況はわからない。主体部の直径は5.2mである。

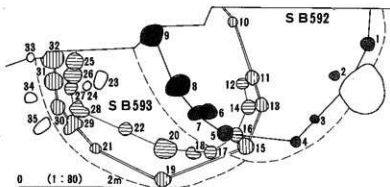


図30 SB592・593A・B柱穴配置

また、SB591は現状では堅穴住居址というほかない。

出土遺物：SB594は炉内から鉢形土器の胴下半部が出土したほか、土器片519、打製石斧3、磨石類8、石皿1、磨製石斧2、土偶・小形土器・石棒・丸石・玉類各1がある。このなかには、SB577に属する遺物も混在しているが、炉体土器を基準にす

れば、SB594はVI期、それをきるSB577もまたVI期以降に比定されよう。またSB591からは土器片604、打製石斧3、磨石類3、石皿1、玉類1が出土した。V期に属する。

### SB592・593 A・B (図版21、図30)

位置：E区のG-I 20～L 20およびL-I 1～L 1にあり、北半は調査区外に出る。

調査経過：III B層上面で検出を行なったところ、弧状に並ぶ複数のピットを確認する。柱穴埋土の共通性と配置を観察しながらこれらを結び、おおむね2軒分の柱穴と判断した。従って、埋土はもちろん、壁面・床面などの状況はわからない。

柱穴：SB592に関わると考えた柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>9</sub>で、埋土は炭化物が混じった黒褐色土である。一方、SB 593 A・Bの柱穴にはP<sub>10</sub>～P<sub>32</sub>を想定した。近接する2本の柱穴は内側が外側に切られていることから、拡張重複も考えられる。またP<sub>33</sub>～P<sub>35</sub>は判断に迷ったが、本址の柱穴からはいちおう除外する。規模と形態：両者ともに円形を呈し、SB592は直径およそ5.0m、SB593は4.2m以上になろう。主軸の方向は不明。

出土遺物：SB592・593の範囲から出土した土器片は390、小形土器1である。IV期に比定されよう。

### SB598 (図版21)

位置：E区のG-H 20およびL-H 1～H 2にあり、北側から西側にかけては調査区外に出る。

調査経過：III B層上面で検出を行なったところ、黒褐色土の落ち込みを確認する。

埋土：炭化物を混在する黒褐土で、黄褐色ブロックが含まれていた。

壁面：東側ではほぼ垂直に20cm程度立ち上がる。

床面：部分的に敷石がみられるほかははっきりしない。

柱穴：床面からピットが多数検出されているため、別の住居址(SB597)との重複を想定したが、調査範囲が狭く特定できなかった。その中でも、壁際に並ぶP<sub>1</sub>～P<sub>8</sub>は本址の柱穴と考えられよう。

炉：調査区外に出てしまうためか、検出されなかった。

規模と形態：主軸の方向は不明。直径およそ3.6mの敷石住居址(柄鏡形?)である。

出土遺物：土器片201、石鎌1、打製石斧1、磨石類2である。IV期に比定されよう。また、SB597として取り上げた遺物は、土器片146、打製石斧2、磨石類2、多孔石2、石皿1、砥石1である。

### SB599 (図版25、図31)

位置：E区のL-J 3～L 5にある。

調査経過：SB591・594の壁面や床面精査の際、東側に遺物を含む遺構埋土が認められたことから、本址を認定した。南半分は掘削ノリ面保護のため調査不能であった。

埋土：炭化物を多量に混在する暗褐色粘質土で、オリブ褐色砂質ブロックが含まれていた。

壁面：調査範囲内では壁は全周する。東側でほぼ垂直に25cm程度立ち上がる。

床面：中央付近がやや凹むものの、ほぼ平坦に踏み固

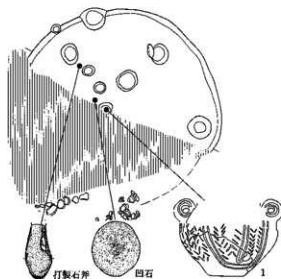


図31 SB599出土遺物分布

住居番号	出版	地区	時期	形		方位	面積 (㎡)	高さ	遺構	土壌の方位	床		面	壁		位置	形	用途	注	次	その他の施設
				構造	平面形						状況	状態		形状	位置						
101	10	C	V	有	平面形	土壌の方位	8.8	4.6	3.1	凹凸あり	A a	C	東壁・北壁	長方形石置い伊・土葺あり	壁跡	7	張り出し部先端に土坑				
102	12	C	IV	有	楕圓形	N-85-W	(8.8)	(7.0)	2.0	凹凸あり	A a d B C	C	やや東壁寄り	円形	土葺あり	(11)					
103	13	C	III	有	(楕圓形)	N-20-E		5.5		平垣、張り床	B C	B	北壁寄り	円形	土葺あり	4	張り出し部との結合部に土坑				
104	13	C	V	有	長方形					平垣			北壁寄り	円形	土葺あり	4					
105	15	B	IV	有	円形	N-5-E		5.1		平垣			ほぼ中央	長方形	土葺あり	(8)					
106	14	B	IV	有	不整形			4.4		凹凸あり			北寄り	長方形	なし	6					
107	14	B	IV	有	円形	N-80-E		3.2		凹凸あり	A a c B	B	(東寄り)	楕圓形	土葺あり	(10)					
108	14	D	IV	有	(楕圓形)		(7.6)	(4.3)		平垣			(中央)	円形	土葺あり	(10)					
109	15	D	IV	有	(円形)		(4.3)	4.7		凹凸あり	B	B	北壁寄り	円形	なし						
110	15	D	III	有	(楕圓形)	N-5-E		1.85		凹凸あり			C	北壁寄り	土葺あり						
111	15	D	IV	有	楕圓形	N-5-E		4.0		凹凸あり			C	東壁寄り	なし						
504A	22	E	II	有	楕圓形	N-78-E	(6.8)	(4.9)	1.4	張り出し部へ向けて傾斜あり	C	C	張り出し部	長方形石置い伊	土葺あり	(12)	東壁寄りに東壁、張り出し部先端に土坑				
551B	32	E	7	有	楕圓形	N-65-E	(5.2)	(3.6)		張り出し部へ向けて傾斜あり				方形石置い伊	土葺あり	(14)	張り出し部先端に土坑				
552	30	E	V	有	楕圓形	N-40-E	(5.2)	(3.3)	1.6	平垣			C	張り出し部	楕圓形	(13)					
553A	40	E	VI	有	楕圓形	N-19-E	8.0	6.1	1.5	張り出し部へ向けて傾斜あり	A B C	C	ほぼ中央	円形石置い伊	土葺あり	(18)	張り出し部の直下にS1707				
553B	40	E	7	有	(楕圓形)	N-20-E			1.4	張り出し部へ向けて傾斜あり			C	北壁寄り	不整形						
554	40	E	IV	有	楕圓形	N-28-E				平垣、押の間に板を敷いている			C	ほぼ中央	方形石置い伊	土葺あり	(28)	張り出し部先端に傾斜があったか?			
555A	43	E	VI	有	楕圓形	N-34-E	9.6	6.0	2.3	平垣、押の間に板を敷いている			C	ほぼ中央	楕圓形	(32)					
555B	43	E	7	有	(楕圓形)									東壁	楕圓形	(32)					
555C	43	E	7	有	(楕圓形)									東壁	楕圓形	(32)					
557	38	E	IV	有	楕圓形	N-55-E	(8.6)	(5.2)	2.4		B C	B C	東壁寄り	方形	土葺あり	(4)					
558	30	E	V	有	楕圓形	N-5-E	(6.8)	(3.5)	1.3	東側に炭化灰や土が広がる	C	C	ほぼ中央	方形	土葺あり	(32)					
559	46	E	V	有	楕圓形	N-20-E	(7.3)	(5.0)	1.9	張り出し部へ向けて傾斜あり	A C B C	C	張り出し部	不整形	土葺あり	(24)	張り出し部直下にS1854				
560	34	E	VI	有	楕圓形	N-37-E	(5.7)	(4.0)	1.3	平垣	A a b c	C	東壁寄り	長方形石置い伊	土葺あり	(22)	土葺部に土葺2か所				
561	52	E	V	有	楕圓形	N-30-E	(5.0)	(5.0)		赤色風化層が広がる			C	張り出し部	方形石置い伊	土葺あり	(21)				
562	47	E	III	有	(楕圓形)	N-34-E		6.7		平垣	B	B	東壁寄り	長方形石置い伊	土葺あり	(16)	張り出し部との結合部に土坑				
563	51	F	III	有	(円形)		(4.9)							円形	土葺あり	(16)					
564	46	E	7	有	楕圓形	N-22-E	(6.2)	(4.7)		張り出し部へ向けて傾斜あり	C	C	張り出し部	方形	土葺あり	(13)					

表5-1 竈穴住居一覧



住居番号	図号	地区	時期	形状	平面	基軸の方向	基軸長	面積	高さ	遺構	状況	断面		位置	形状	断面	柱	穴	その他の施設
												形状	位置						
566	29	E	V	有	楕圓形	N-51-E	8.8	5.4	2.4	部分的に炭化材や灰土が広がる	部分的に炭化材や灰土が広がる	C	張り出し部	土休部	(10)	張り出し部直下にS日1187			
567	33	E	III	?	楕圓形	N-63-E	(4.6)	(4.6)		張り出し部へ向けて傾斜あり	張り出し部へ向けて傾斜あり	A C	張り出し部	方形石圍い平		中央部に遺構、張り出し部直下に土休			
568	49	E	III	?	(円形)		(4.0)	(4.0)		平庭	平庭	A+d B	(中央)	方形石圍い平					
570A	44	E	V	有	楕圓形	N-30-E	5.2	4.0	1.3	張り出し部へ向けて傾斜あり	張り出し部へ向けて傾斜あり	A B B C	張り出し部	方形石圍い平・土盛りあり	(10)				
570B	44	E	?	有	楕圓形	N-0-E		1.4		張り出し部へ向けて傾斜あり	張り出し部へ向けて傾斜あり	A B B C	張り出し部	方形石圍い平・土盛りあり	(11)				
571	36	E	VI	有	(円形)		(4.7)			北から南に傾けて傾斜あり	北から南に傾けて傾斜あり	A B B C	張り出し部	方形石圍い平・土盛りあり	(10)				
572	31	E	I	有	(円形)		(6.8)			部分的に遺構あり	部分的に遺構あり	A B	張り出し部	方形石圍い平	(7)	中央部に遺構、張り出し部直下に土休			
573A	33	E	?	有	不明		(4.0)			部分的に遺構あり	部分的に遺構あり	A B B C	張り出し部	方形石圍い平	(10)				
574	31	E	II	?	(円形)		(4.0)			部分的に遺構あり	部分的に遺構あり	A B B C	張り出し部	方形石圍い平	(10)				
577	19	E	VI	有	楕圓形	N-41-E	(6.5)	(6.5)		部分的に炭化材あり	部分的に炭化材あり	A B	張り出し部	方形石圍い平	(6)				
578	21	E	IV	?	(楕圓形)		(4.5)			部分的に炭化材あり	部分的に炭化材あり	A B	張り出し部	方形石圍い平	(5)				
580	26	E	I	?	(円形)		(4.5)			部分的に炭化材あり	部分的に炭化材あり	A B	張り出し部	方形石圍い平	(5)				
581	25	E	III	?	(円形)		(4.0)			部分的に炭化材あり	部分的に炭化材あり	A+d B C	張り出し部	方形石圍い平	(10)				
582	22	E	IV	有	(円形)		6.6			平庭	平庭	B	張り出し部	方形石圍い平	(9)				
583	25	E	III	?	(円形)	N-0-E	(7.3)			平庭	平庭	B	張り出し部	方形石圍い平	(9)				
584	24	E	I	?	(円形)		(4.0)			平庭	平庭	B	張り出し部	方形石圍い平	(5)				
587	23	E	?	有	(円形)		4.0			平庭	平庭	B	張り出し部	方形石圍い平	(5)				
588	24	E	III	有	(円形)		5.3			平庭	平庭	B	張り出し部	方形石圍い平	(11)				
589	24	E	II	有	(円形)		2.6	2.2		平庭	平庭	B	張り出し部	方形石圍い平	(9)				
590	24	E	II	有	(円形)		2.3			平庭	平庭	B	張り出し部	方形石圍い平	(9)				
591	19	E	V	有	(円形)		(5.0)			平庭	平庭	B	張り出し部	方形石圍い平	(11)				
592	21	E	IV	?	(円形)		(4.2)			平庭	平庭	B	張り出し部	方形石圍い平	(9)				
593A	21	E	?	?	(円形)		(3.9)			平庭	平庭	B	張り出し部	方形石圍い平	(9)				
593B	21	E	?	?	(円形)		(3.9)			平庭	平庭	B	張り出し部	方形石圍い平	(9)				
594	19	E	VI	有	(楕圓形)		5.2			部分的に炭化材や灰土が広がる	部分的に炭化材や灰土が広がる	B	張り出し部	方形石圍い平	(16)				
595	21	E	III	有	(楕圓形)	N-70-E	2.8			平庭	平庭	A B+d	張り出し部	方形石圍い平	(11)				
598	21	E	IV	有	不明		3.6			平庭	平庭	A	張り出し部	方形石圍い平	(6)				
599	26	E	I	有	(円形)		4.5			平庭	平庭	A	張り出し部	方形石圍い平	(3)				

表5-2 竪穴住居一覧

められている。

柱穴：P<sub>1</sub>～P<sub>9</sub>は本址に伴う主柱穴として良いだろう。

炉：P<sub>0</sub>は焼土を伴わないが、床面のほぼ中央に位置するため、あるいは炉址なのかもしれない。

規模と形態：直径およそ4.5mの竪穴住居址である。主軸の方向は不明。

出土遺物：竪穴の約半分しか調査できなかった割には2430と土器片の出土量は多い。また石器も石鏃3、打製石斧13、磨石類14、刃器2、磨製石斧1、石錐1と異常に多い。そのほか土偶4、小形土器1も出土している。I期に比定される。

## 2 墓 坑

### (1) 総 論(表11)

「土坑」という用語は、それ自体「地面に掘られた穴」を示す以上の意味はなく、その用途を限定するため、一般には形態的な特徴や埋土の状態、出土遺物、土坑(あるいは土坑群)の遺跡内における立地や配置、更に最近では理化学的な分析に基づいて、もっとも蓋然性の高い解釈を生み出してきた。

北村遺跡では、ほぼ全身の骨格を留める人骨が、117基の土坑から合計127個体出土した。これらの人骨はほとんどが股関節並びに膝関節を折り曲げた姿勢、つまり一般にいう屈葬形態をとる。そこで、これらの墓坑を基準にして、形態的な特徴・規模や出土遺物などの情報から、墓であることの蓋然性が高い469基の土坑を墓坑(遺体を埋葬するために掘られた穴＝墓穴)と認定した。このうち骨片であれ部分骨であれ、とにかくヒトと思われる骨が出土した墓坑は279基、300個体にのぼる。ただし、形質人類学の鑑定によって確実に人骨と認められたものは190個体である。

時期	確定	数期にわたるもの						総計
I	18	6	29	1	25	13	1	91
II	3							78
III	28							122
IV	24	2	37	43	25			128
V	3							124
VI	24							130
?								185

表6 時期別の墓坑数  
(空らんは0)

これらの墓坑はすべてE区で確認されており、住居址など他の遺構と異なり、一定の集中がみられる。伴出遺物や遺構の切り合い関係から構築時期がほぼ確定したものが100基で、全体の21.3%にあたる。推定される時期に幅をもたせた場合、表6のようになり、III段階に数の急激な増加が伺える。

なお、遺体の埋葬には墓坑以外の施設を用いる場合もあるが、北村遺跡の場合、住居内放置例や、廃屋墓、もしくは貯蔵穴などを再利用した墓(廃穴墓)などは極めて例外的である。

#### ア 上面配石(墓標石)

ここで扱う配石とは、主として墓坑の上面に位置し、墓標として機能したと思われるものに限定する。いわゆる「配石墓」の一群には、墓坑内施設としての石棺状石組やその他の石列をも含む場合が多いが、墓の場を明示する上面配石と墓坑内施設としてのこれらの配石とは、機能的に考えて明確に分離したほうが良いとの視念に立つ。下部に墓坑をもたない配石を除外していることは言うまでもない。自明のことではあるが墓標は、地下に亡骸があることを不特定の人々に認知させる目的で置かれる。現代ではこれに家紋・戒名その他の記号を記すことによって、故人が一定集団内(例えば故人の家族、親類知人など)で特定される。アイヌ民族では木製の墓標(クワ)の形状や文様で同様の効果を果しているという。縄文時代の墓標石の場合も、その形状が一定集団内での故人を示す符号になっている可能性がある。そこで次頁(図32左)のように形態分類を試みた。

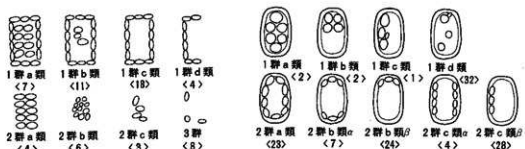


図32 上面配石(左)及び墓坑内配石(右)の類型 (&lt; &gt; 内は例数)

1群……周囲に礫を並べているもの

a類——囲み石内部を数点～10数点、あるいはそれ以上の礫で充填したもの

b類——1～数点の礫を置いているもの c類——礫の見られないもの

d類——本来は囲っていたと思われる礫が部分的に取り除かれてしまったもの

2群……数点の礫で墓坑上面を覆っているもの

a類——完全に覆っているもの

b類——数点～10数点の礫がまとまって見られるもの c類——散存しているもの

3群……まったくまとまりに欠くもの

なお、立石や丸石は位置や個数など多様でまとまりに欠けるため各論で述べる。

分類の結果、墓標石のあるなしでみると、墓標石をもたない例が圧倒的に多い。墓標石をもつ墓坑はほとんどの場合Ⅲ層上面で検出されており、他の遺構の構築によって破壊されることなくⅡ層でバックされ、後世の擾乱もほとんど受けていない。しかし、特に古い段階の墓坑は、遺構の重複によって実態が不明である。本来は墓標石をもったものが遺構の構築などによって破壊されたのか、あるいは墓標の機能を考えれば、もともと墓標石など存在しなかったのか解釈は様々である。

墓標石に用いられた礫は長径30cm内外の楕円形をした河原石を主とし、礫種は、硬砂岩・安山岩・ヒン岩を主にして、砂岩・軟質砂岩・花崗岩・チャートなど様々である。統計処理をしているわけではないが、こうした傾向は数石住居址やその他の配石に使われる礫と大差ない。また黒・白・灰色・赤色といった石の色調にも特に配慮している様子は見受けられなかった。また、明らかに加工を施していると思われる例は、立石・平石の一部などに見られたが、墓坑上面に用いられることとの直接的な関係はわからなかった。その他、磨石・石皿類が転用されている例があった。この点については後述する。

### イ 墓 坑

墓坑検出面における平面形は、上面配石の場合と同じで、遺構の重複や後世の擾乱によって変形をきた

埋葬姿勢 (年齢区分)	資料数	最大値				最小値				平均				
		長径	短径	長/短	深さ	長径	短径	長/短	深さ	長径	短径	長/短	深さ	
屈葬	乳・幼児	3	90	42	2.38	24以上	48	25	1.92	—	69.0	32.0	2.15	20.0以上
	少年～思春期前半	8	97	60	2.32	53	65	40	1.08	—	82.6	48.1	1.76	29.0以上
	思春期後半以上	86	145	89	2.78	60	80	37	1.10	19	105.6	58.9	1.84	32.2以上
伸 展 葬	2	174	85	2.76	36以上	155	56	2.77	—	164.5	69.0	1.77	30.0以上	
合 葬	6	130	93	1.85	60以上	93	60	1.33	—	109.8	69.7	1.60	36.6以上	
集 積 葬	5	115	95	1.72	45以上	48	48	1.00	—	88.0	66.0	1.35	25.0以上	

表7 埋葬姿勢(年齢区分)別の墓坑底面の規模

す場合が多く、現状確認された形態区分に大きな意味をもたせることはできない。強いて言えば卵形、楕円形、隅丸長方形、長方形といった長軸・短軸が明確なものが多く、円形や正方形に近い例は土器棺や集積葬といった特殊な埋葬方法による傾向がある。

埋葬人骨が出土した墓坑のうち、他の遺構との切り合いが少ない112基について、規模を算出してみると表7の通りであった。まず乳幼児の墓坑最小値を基準にして、長径50cm前後、短径25cm前後、深さ20cm前後以上の規模をもつ土坑は墓坑の可能性を考えて良いことになる。なお、当然ながら成長にしたがって墓坑の規模は大きくなっている。屈葬成人骨を出土した墓坑と伸展葬人骨のそれとは、前者の最大値と後者の最小値との比較から、長径150cm前後を境にして両者の分別が一応はできる。もっとも伸展葬人骨が出土した墓坑の例数は少ないため、この差を絶対視することは危険であろう。屈葬と合葬との比較では、平均の短径と長短示数では有為な差があるものの、最大値最小値で見るとかなり厳密には両者を区別できない。また屈葬と集積葬との違いもこの傾向は同じである。ただ先述の通り集積葬の場合、形態との結びつきは強く、平面形が円形あるいは正方形に近い場合、ほとんどがこうした埋葬形態をとる。

ほぼ完全な人骨が出土した墓坑について、被葬者の体軸方向と墓坑の主軸方向との差を計算してみた。両者の差は平均 $6^{\circ}59'$ で、最大 $44^{\circ}$ の開きがある。このうち仰臥で単葬の場合は $5^{\circ}38'$ 、最大 $30^{\circ}$ に縮まる。この差は、埋葬姿勢が側臥などの場合、正しく体軸方向を測定できないという問題点を含むが、それにしても、墓坑の主軸方向との差が平均で $7^{\circ}$ 以内に納まるのだから、墓坑掘削にあたって用意される底面積には、あまり遊びがみられない。しかも、被葬者の埋葬頭位があらかじめ決められていたと考えることができる。

墓坑の底面は大体が平坦ないし舟底形である。傾斜をもつもの若干例認められたが、傾斜の方向と頭位との有機的な関係はなく、むしろ墓坑が構築されている場所と地形傾斜とが関係する。

底面あるいは底面の段際に礫を配した例など(坑内配石)が認められる。坑内配石は、墓坑内に空間が作られていない以上、完成後攪乱を受けないかぎり原位置を留めていると考えられる。しかも、埋葬時に並べられるこうした礫は、被葬者の周囲に施され、一旦土をかぶせて埋葬を完了してしまえば、掘り起こさないかぎり誰も目にすることがなくなるわけだから、葬者の被葬者に対する意味付けを反映している可能性がある。その点、墓坑上面配石との機能差は歴然としている。そこで、図32右のように形態分類を試みた。

#### 1群……底面に礫を敷いているもの

- a類——全面に敷いているもの      b類——長軸方向の片側よりに敷いているもの  
c類——短軸方向の方側に敷いているもの      d類——散在しているもの

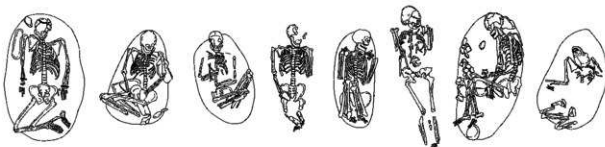
#### 2群……底面の壁際に礫を置いているもの

- a類——周しているもの      b類(α)——長軸方向両端部に礫を置いているもの  
b類(β)——片側のみ礫を並べているもの  
c類(α)——長軸方向に平行する両壁際に礫を並べているもの  
c類(β)——片方の壁のみ並べているもの

なおSH521のように、頭蓋骨の下に枕石を置いた例がわずかながらみられると同時に、こうした施設こそみられないものの、不自然に口が大きく開いた頭蓋骨に接した。形質人類学の所見によると、埋葬後の後頭部の落下が原因で生じた現象であるという。頭を壁際に寄り掛かせていたことも考えられようが、木製の枕を想定することもできる。

### ウ 人 骨

墓坑から出土した人骨の多くは、水分を含んだ焼き豆腐状を呈し、全体的に残存状態は悪い。その中で、



IFAAbb IFBBbb IFCCcc IFADdd IRDDee IRADaa IILACcc III cc

図33 埋葬姿勢のパターン (一部)

何らかの骨片が出土した墓坑は111基、人骨と判断できる程度の部分骨が出土した例は51基（人骨62個体）、ほぼ全身の骨格が認められるか、または頭蓋骨と下肢骨との位置関係によって、埋葬姿勢の大筋がつかめる人骨が出土した墓坑は117基（人骨数127個体）で、合計279基（骨数300個体）ある。

埋葬状態が観察できる個体の85.8%は、墓坑一つに対して被葬者が一人の単葬である。墓坑にほぼ解剖学的位置を留めた2体以上の人骨がみられる合葬は6例5.3%、2回以上にわたる埋葬による重葬やバラバラになった遺体（あるいは人骨）をまとめた集積葬は5例4.4%で、土器棺は1例0.9%である。SH522の土器棺からは肉付きのまま加熱を受けた人骨が出土している。

埋葬姿勢のパターンを示したものが図33である。体幹が仰向けのもの（I）、横向き（II）、うつ伏せ（III）とし、顔の向きは、正面ないし足のほうを向くものを（F）とし、右向き（R）と、左向き（L）とに分けた。上肢は上腕と前腕とがなす肘の角度によって、180度前後（A）、170～140度前後（B）、130～40度前後（C）、40度前後～0度前後（D）とし、下肢は体幹と大腿骨がなす角度および大腿骨と下腿のなす角度がいずれも180度内外（つまり足を真直伸ばしている）のもの（a）、股関節と膝関節を90度内外曲げて右に倒しているもの（b）、左へ倒しているもの（c）、同様に折り曲げながら膝を立てているもの（d）、体幹と大腿骨とがなす角度が0度内外で膝を腹部あるいは胸部の方向へ窮屈に折り曲げているもの（e）に分けてある。上下肢の場合は左右の順で記号化した。

埋葬姿勢が明らかな135個体内、強弱の差こそあれ、股関節と膝関節を曲げた広い意味での屈葬にあたる人骨（下肢の形でa以外のもの）が105個体77.8%あり、本遺構においては一般的であったことを示す。これに対して伸展葬（同a a）は2例1.5%に留まる。屈葬のうち体幹を左右どちらかに向けた側臥（II）は9例8.6%、伏臥（III）が2例1.9%で、仰臥（I）87.6%が圧倒的に多い。仰臥葬の場合で、顔が正面を向いているもの（F）は70例73.7%で、右向き（R）16例16.9%、左向き（L）9例9.5%に比べ圧倒的に多い。その他上肢や下肢の形については表8にまとめてみた。

頭位方向については、第4部考察で時期別・地域別・性別など詳しくみていくことにする。

その他、顔に土器あるいは土器の大破片をのせた「甕被り葬」は18例、人骨の上に礫をのせたいわゆる「抱き石葬」は17例みられた。甕被り・抱き石ともにⅠ段階に各1例あるが、Ⅲ段階以降集中する。甕被りはⅢ・Ⅳ段階で12例、全体の66.7%にのぼる。ま

	AA	CA	AD	DA	BB	BD	DE	CC	CD	DC	DD	ほか	計
aa	1		1										2
bb	8			1	3		1			2	2	5	22
cc	2	2	1	2	1					1	3	5	17
dd	8		2		1	1	1	1	1		10	8	32
ee	2		1	2	1	1			1		3	2	13
ほか	3		1	1	3			1			6	3	18
計	24	2	6	6	9	2	1	2	2	3	24	23	104

表8 上肢（大文字）と下肢（小文字）の組み合わせ数量

た、抱き石はIV～VI段階が9例52.9%であり、時期的にやや偏りがみられる。

### エ 出土遺物

墓坑およびこれに伴う上面配石中から出土した遺物は、土器・石器・土製品など多種に及ぶが、その多くは埋土中に混在していたとみなされるものが圧倒的である。

注意すべき出土状態を示す例としてまず、上面配石に伴う石器類が挙げられる。石皿（5基5個）や磨石類（8基15個）が伴う事例が最も多く、まれに打製石斧（SH518）や土偶（SH1156）、小形土器（SH1144）もある。人骨に近接して出土した遺物では磨石類（5基6個）が多く、小形磨製石斧（SH558）、刃器（SH550・799）、石鏃（SH550・1129）、小形土器（SH857）、土偶（SH1158）と続く。また、SH552のように、底面直上から石棒が出土した例も注目されよう。その他、埋土中から15点の石鏃が出土したSH555や、剥片・破片を多量に伴出したSH555・558・634・735・842なども注意しておきたい。

人骨に密着して出土した牙製品は、腕輪状のもの（SH805・1172・1208）、カンザシ状のもの（SH805・1144）、首飾り状のもの（SH1172）、不明（SH549・851・1136・1193）がある。その他、SH824からはヒスイ製の玉、SH1023からは粘板岩製の玉が出土している。

### (2) 各 論

ここでは、人骨が出土するなど比較的情報量が多い墓坑について記述した。その他については一覧表を参考にいただきたい。先にも述べた通り、墓坑は普通「SH」の記号を用いて501から番号を付けたが、整理作業の段階で墓坑とは考えられないものを省いたため欠番が多い。また「SK」の記号を用いた土坑の内、形態や人骨の出土から墓坑にした例もある。一つの墓坑から2個体以上の人骨が出土した場合は、それぞれをアルファベットA・Bで表わした。墓坑の記述の順序は、位置・配石・墓坑・人骨・その他の遺物・時期としたが、特に必要と思われる場合は、調査経過を加えた。しかし、調査段階からその項目について明確でないものや、全く把握できなかったものについては記述しない場合がある。

#### SH501 (図版27・28)

位置：L-L14にある。SH502に切られ、SH567・630・874を切る。

配石：IID 4層下位で検出された本址上面配石は、北側は判然としなないもののほぼ円形を呈し、SH502に切られる。主として硬砂岩が用いられている。

墓坑：配石ののるIIIA層上面で検出された。平面は楕円形で、配石とは若干ずれる。主軸は北東-南西を向く。埋土は細角礫を含む黒褐色粘質土を基調とし、指頭大の風化礫を含んだ暗褐色粘質土で、下位には炭化粒がやや多くみられた。SH630・874との埋土の相違はわずかであるが、それらが上面配石をもたないこと（破壊されていること）から本址の方が新しいと判断する。底面の長径122cm、短径67cmで、掘り込み面からの深さは38cmである。

人骨：底面の南西寄りで頭蓋骨と上腕骨が出土した。骨の劣化が著しく、顔の向きなどは観察できなかったが、墓坑の大きさから成人が埋葬されたと思われる。頭位は約227度。

その他の遺物：埋土に混在して石鏃2、打製石斧1が出土した。

時期：配石の検出層位からみて、次のSH502～505同様V期以降と考えられる。

#### SH502 (図版27・28、図34、PL11)

位置：L-M14にあり、SH501・536・567・630を切る。

配石：IID 4層下位で検出された上面配石は、ほぼ楕円形で、楕円内にも礫のまとまりがある。なお、東

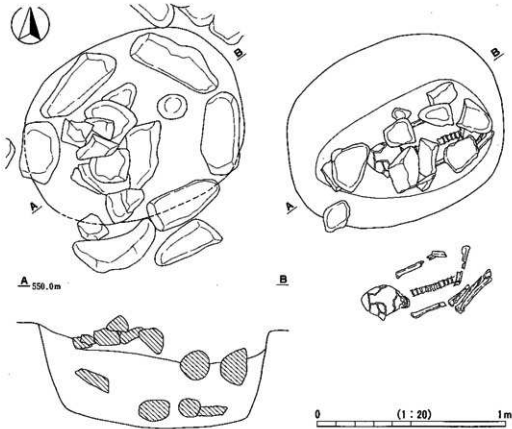


図34 SH502上面配石、人骨出土状態

側でSH536の配石を壊す。配石には硬砂岩の長礫が用いられている。

墓坑：配石ののⅢA層上面で検出された。平面は楕円形を呈し、配石との上下関係は一致している。主軸は東北東—西南西。埋土は細角礫を含む黒褐色粘質土で、黄褐色ブロックや炭化粒・焼土粒が混じる。底面の長径97cm、短径52cmで、掘り込み面からの深さは53cmである。

人骨：掘り込み面から約40cmあたりで比較的多量に検出され、これを除去したところで人骨が出土する。頭位は249度。顔面はやや右向きながら下方を向く。左右の上肢は前腕の残りが悪いもの、おそらく伸展していたと思われる。下肢は股関節と膝をともに強く屈曲させ、膝は右体側に置いている。

時期：SH501同様時期決定の資料はないが、配石の状態をみてV期以降と考えられる。

#### SH503 (図版27・28、図35、PL11)

位置：L—M15にあり、SH536・568を切る。

配石：IID 4層下位で検出された上面配石は、ほぼ方形を呈す。北西端の長楕円の巨礫は立石が倒れたようにも見えるが、出土状況からは配石の一部がずれたものと捉えられる。一方、北東側の円板形の巨礫は、SH504との間に位置するため、両者の親近性を示唆している。本址の配石は東側でSH536の配石を壊す。

墓坑：配石ののⅢA層上面で検出された。平面は楕円形で、配石との上下関係は一致している。西北西—東南東に主軸をもつ。埋土は細角礫を含む黒褐色粘質土を基調とした暗褐色粘質土で、検出面中央部には黄褐色ブロックが集中している。上面の配石が破壊されていないことや、人骨の損傷がないことから、本址がSH568より新しいと判断する。底面の長径134cm、短径83cmで、掘り込み面からは36cmの深さである。

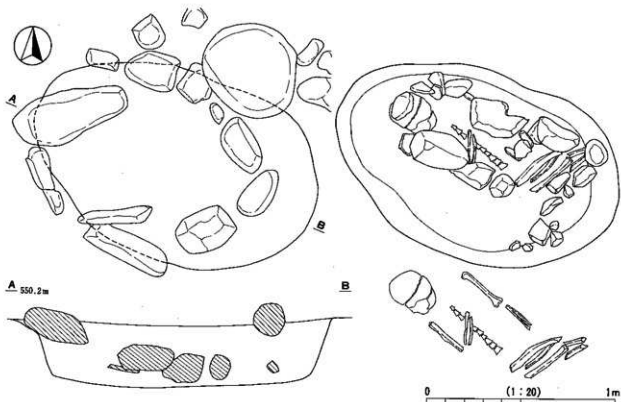


図35 SH503上面配石、人骨出土状態

人骨：底面直上から出土した。頭位は306度。顔面は右向き。右上肢は肘をやや強く曲げて手先を左上腕骨の中央にのせ、左上腕は伸展している。下肢は股関節を約90度曲げ、さらに膝を強く曲げて、左に倒している。左右の上肢に重なる礫は壁際に配されていたものであろう。

その他の遺物：人骨に近接して磨製石斧が出土したほか、埋土に混在して石鏃2、土偶1がある。

時期：配石の検出層位などから、V期以降の構築を考えている。

**SH504** (図版27・28、図36、PL11)

位置：L-M15にあり、SH505・523と接する。

配石：IID 4層下位において検出された上面配石は、ほぼ方形で中央に丸石をもつ。また北東寄りには石棒状の立石がある。配石には主として硬砂岩を用いている。

墓坑：配石ののるIIIA層上面で検出された。配石との上下関係は一致している。平面は楕円形で、北東-南西に主軸をもつ。埋土は細角礫を含む黒褐色粘質土を基調とした暗褐色粘質土で、炭化粒が多量に混在している。底面の長径93cm、短径60cmで、掘り込み面からの深さは38cmである。底面から検出された礫はSB557に関わるものかもしれない。

人骨：底面直上から出土した。現場での調査段階では人骨の位置関係が不自然なこともあり、座位屈葬かとも思われたが、クリーニング作業により、2体合葬であることが判明する。南西部に頭蓋骨をもつAは、顔面を左に向けたうつぶせで、左右の上肢はやや肘を張りながら曲げて手先を下腹部に置いている。下肢の状態はわからない。Aの右上肢に下肢をのせているBは上半身を失っているが、股関節を90度曲げ膝を強く屈曲させて右に倒している。両者の骨は密着しているため同時埋葬と考えられる。Aの頭位54度、Bは推定234度。墓坑の北東側の骨(Aの下肢およびBの上半身)が失われている原因については不明である。



その他の遺物：埋土に混在して打製石斧・石棒各1が出土した。

時期：配石の検出層位などから、V期以降の構築を考えている。

**SH505** (図版27・28、  
図36、PL11)

位置：L-M14にあり、SH504・567と接する。  
配石：IID 4層下位で検出された上面配石は、磔を重ねながら、全体として長方形を呈する。  
墓坑：配石ののるIII A層上面で検出された。配石がやや南西にずれるもの上下関係はほぼ一致している。平面はやや角をもった楕円形で、主軸は西北西-東南東を向く。埋土は細角磔を含む黒褐色土を基調とした暗褐色粘質土で、炭化粒が多量に混在している。底面の長径86cm、短径52cmで、掘り込み面からの深さは44cmである。

人骨：底面南西寄りから頭蓋骨片が、北東よりから下肢骨が出土した。頭位は230度。保存状態が悪く、姿勢についての観察はできないがおそらく仰臥であろう。この人骨の上面にも数個の磔が乗っている。

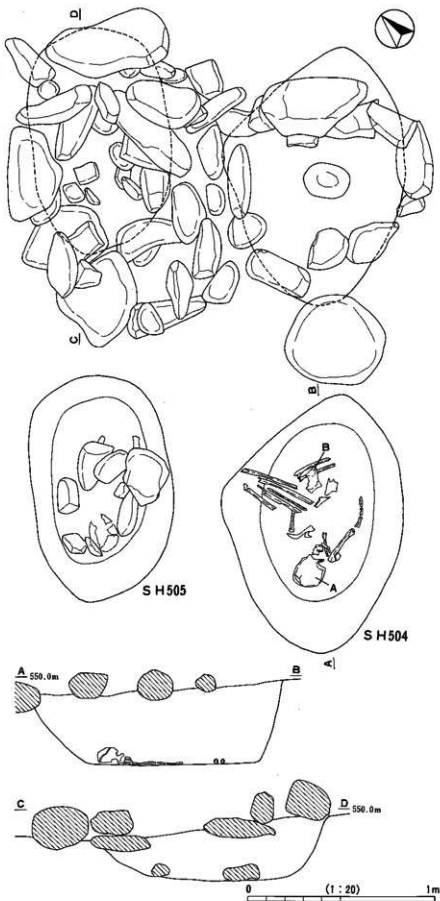


図36 SH504・505上面配石、人骨出土状態

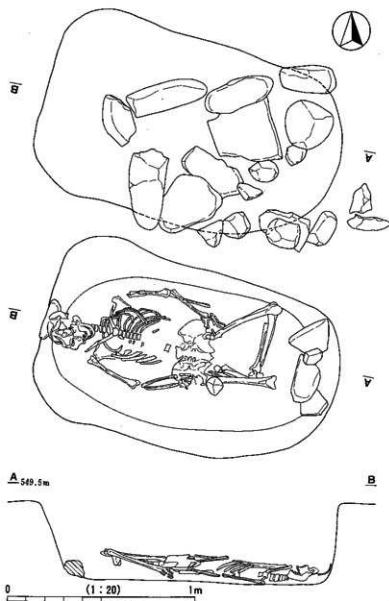


図37 SH507上面配石、人骨出土状態

底面の長径133cm、短径76cmで、掘り込み面からの深さは41cmである。

人骨：底面直上から出土した。頭位は284度で、立石は下肢の上に位置する。顔面はやや右寄りながら下方を向き、上肢は左右とも肘を緩く曲げて手先を下腹部に置いている。右下肢は股関節を伸ばし膝を強く屈曲させて踵を尻の下に置いている。左下肢は股関節を緩く曲げ膝を屈曲させて左へ倒している。頭蓋骨の下にみられる礫は枕石であろう。東壁際にも礫が配されている。

その他の遺物：埋土に混在して打製石斧1が出土した。

時期：SH508の時期および配石面から判断して、構築時期はIV期以降と思われる。

**SH500** (図版31・32)

位置：L-M18にあり、SH507と接する。

配石：III A層下位で検出された上面配石は長方形を呈し、内部に砂岩質の平石を置き、東辺には花崗岩の扁平橋円礫を軸線にそって並べている。

その他の遺物：埋土に混在して石鏡・石錐各1が出土した。

時期：SH501から505は、時期を決定する資料に恵まれないが、配石の検出層位から判断してV期以降に構築されたものと思われる。

**SH507**

(図版31・32、図37、PL12)

位置：L-M17にあり、SH508と接する。

配石：III A層下位で検出された上面配石は長方形を呈し、内部に平石を置くほか東側端部に立石がある。

墓坑：検出は難航し、結局IV層まで下げた段階で確認する。配石との上下関係はほぼ一致している。平面は隅丸長方形で、西北西-東南東に主軸をもつ。埋土はIII A層を基調とし、III C層に由来するものと思われる茶褐色ブロックが混在するため粘性がある。下位にいくに従って、漸移的にIV層起源のオリブ褐色砂質土が混じる。全体に炭化粒や円礫が多量に混在している。

墓坑：SH507同様墓坑の検出は難航し、IV層まで下げた段階で確認する。配石との上下関係はほぼ一致している。平面は隅丸長方形で、主軸は北北西-南南東を向く。埋土はSH507と近似し、基調はⅢA層で、そのほかⅢC層に由来するものと思われる茶褐色ブロックが混在するため粘性がある。下位にいくに従って、漸移的にIV層起源のオリブ褐色砂質土が混じる。底面の長径125cm、短径68cmで、掘り込み面からの深さは32cmである。

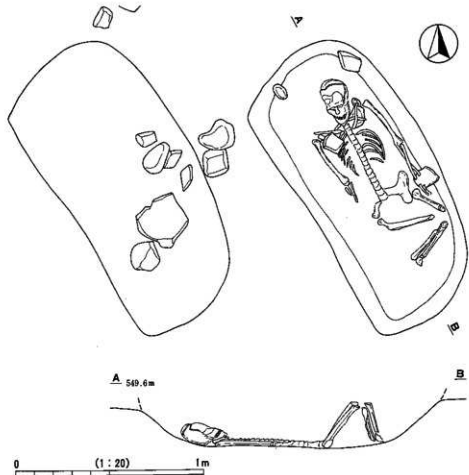


図38 SH512上面配石、人骨出土状態

人骨：底面直上から、顔面に土器片を被せた人骨が出土した。残念ながら人骨鑑定のため搬送中、破損してしまったため姿勢はわからない。

時期：構築時期は、顔面に被せられた土器から判断してIV期に比定される。

**SH512** (図版31・32、図38、PL12)

位置：L-M17にあり、SH573と接する。

配石：ⅢA層下位で検出された上面配石は、北西部のまとまりと砂岩質の平石2枚による南東部にわかれる。

墓坑：検出は難航し、IV層まで下げた段階で確認する。平面は隅丸長方形で、主軸は北北西-南南東を向く。

埋土はⅢA層基調で、ⅢC層に由来するものと思われる茶褐色ブロックが混在する。底面の長径141cm、短径59cmで、掘り込み面からの深さは25cmである。

人骨：底面直上から出土した。頭位は333度。顔面はやや右寄りながら下方を向き、左右の上肢は伸展させている。下肢は両膝を左に傾けて立てている。

時期：SH508の時期および配石面から判断して、構築時期はIV段階以降と思われる。

**SH515** (図版29・30、図39、PL13)

位置：L-Q20にあり、SH542を切る。

配石：ⅢA層下位で検出された上面配石は楕円形を呈す。南側端部に立石がある。西側でSH542の配石を

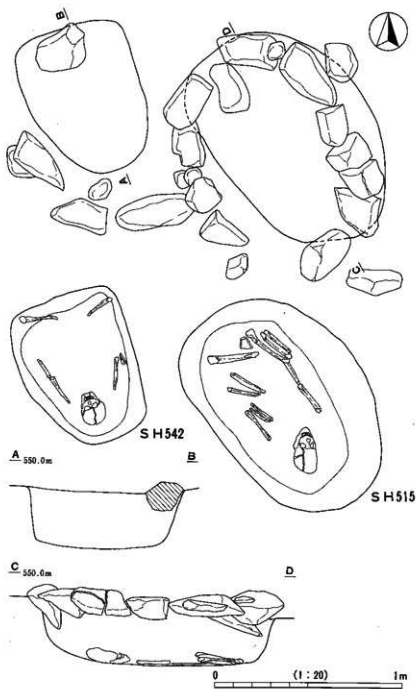


図39 SH515・542上面配石、人骨出土状態

配石：ⅢA層で検出された上面配石は楕円形を呈し、長軸短軸それぞれ一対計4本の立石がある。

墓坑：ⅢB層上面で検出された。配石との上下関係は一致している。平面は楕円形で、北東-南西に主軸をもつ。埋土はⅢB層を基調とした暗褐色粘質土で、炭化粒が多量に混在している。底面の長径130cm、短径93cmで、掘り込み面からの深さは38cmである。

人骨：底面直上から2体並列して出土した。西側のAは、うつぶせて頭蓋骨が右回りにおじれている。右の上肢は左の肘の方向へまっすぐ伸ばし、左上肢は肘で強く折り曲げて手先を肩の位置にしている。下肢は左右とも股関節と膝を曲げて左に倒れている。東側のBは、左すなわちAの方を向いた側臥で、左上肢はまっすぐ伸ばしている。下肢は股関節で90度以上曲げ、膝を折ってやはり左に倒しAの下肢の上ののせている。両者の骨は密着しているため同時埋葬と考えられる。Aの頭位195度。Bの頭位は推定2

壊していることから本址のほうが新しい。

墓坑：配石面で確認された墓坑は楕円形で、北西-南東に主軸をもつ。埋土は細角礫や風化礫を含むⅢB層基調の粘質土で、炭化粒が混じる。底面の長径100cm、短径55cmで、掘り込み面からの深さは31cmである。

人骨：底面直上から出土した。頭位は146度。顔面はやや右寄りながら下方を向き、右上肢は伸展させ、左上肢は肘でやや強く屈曲させて手先を胸方向に向けているらしい。右下肢は股関節で強く折り曲げ、膝も強く折り曲げている。右膝は体側に覆っている。左下肢は軽度の攪乱を受けており、位置関係が定かでない。

その他の遺物：埋土に混在して石鏃1が出土した。

時期：配石面や隣接するSB558の時期から判断して、構築時期はIV期以降と思われる。

**SH517**

(図版29・30、図40、PL13)

位置：L-Q16にあり、SH518と接する。

17度。

その他の遺物：

配石面から石  
皿1、磨石類  
2が、埋土に  
混在して石鎌  
1が出土した。

時期：SB552の  
上位にあるこ  
とから、V期  
以降の構築で  
あろう。

**SH518** (図版  
29・30、図40、  
PL13)

位置：L-P16  
にあり、SH5  
17・519と接  
する。

配石：ⅢA層で  
検出された上  
面配石は方形  
を呈し、南西  
端部には倒れ  
た立石がある。

墓坑：配石の  
のるⅢA層上面  
で検出された。  
配石との  
上下関係はほ  
ぼ一致してい  
る。平面は楕  
円形で、北東  
-南西に主軸  
をもつ。埋土  
はSH517と近  
似し、ⅢB層  
を基調とした  
暗褐色粘質土

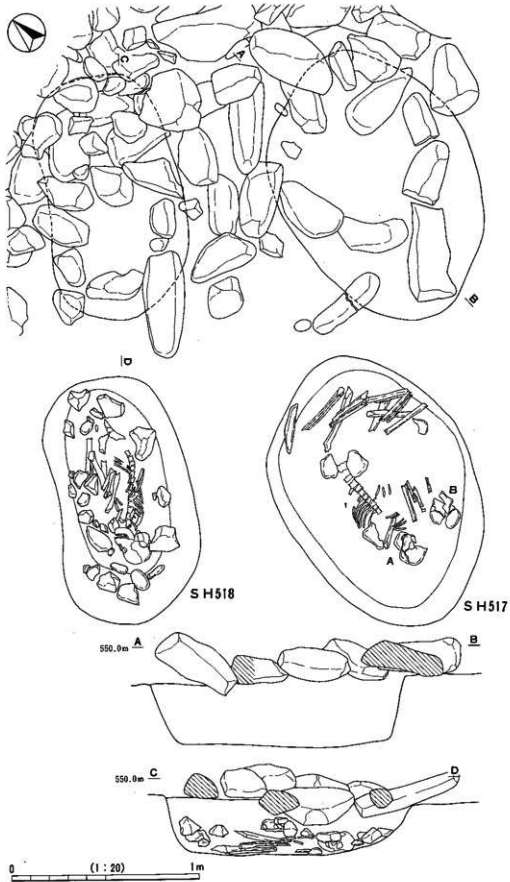


図40 SH517・518上面配石、人骨出土状態

で、炭化粒が多量に混在している。底面の長径100cm、短径50cmで、掘り込み面からの深さは30cmである。

人骨：底面直上で出土した。頭位は238度。側臥で顔面を左へ向けている。左右の上肢は肘で強く屈曲させて手先を肩に置き、下肢も左右股関節で強く折り曲げている。このほかに別個体の下肢骨が混在していた。底面壁際には拳大から人頭大の円礫が並べられている。

その他の遺物：人骨に近接して磨石類2が出土したほか、配石面から磨石類2、打製石斧1、埋土に混在して石鎌3、打製石斧2と豊富な石器類が出土した。

時期：SB552の上位にあることから、V期以降の構築であろう。

**SH519** (図版29・30、図45)

位置：L-P15にある。SH540に切られ、SH518・520と接する。

配石：IID 4層下位で検出された上面配石は、北東部でSH540に伴う配石に切られるため、全体形は不明であるが、南西側では弧状を呈し、中央に立石がある。

墓坑：III B層上面で検出された。配石との上下関係はほぼ一致している。平面はやや角をもった楕円形と思われ、ほぼ南北に主軸をもつ。埋土は上位より下位へ色調が段々暗くなるものの、全体的にはIII B層基調の暗褐色粘質土で、拳大の礫を含み、炭化粒や焼骨片が混在している。

その他の遺物：配石面からの石皿類1のほか、埋土に混在して石鎌・打製石斧各1が出土した。

時期：本址もまたSH517・518同様、SB552の上位に位置することから、V期以降に構築されたものと思われる。

**SH520** (図版29・30、図41)

位置：L-O15にあり、SH521に切られる。

配石：IID 4層下位で検出された上面配石は楕円形を呈し、南西端部に立石がある。

墓坑：III B層上面で検出された。配石との上下関係はほぼ一致している。平面はやや角をもった卵形と思われるが、南東側の壁はやや掘りすぎている。主軸は北東-南西を向く。埋土はIII B層基調の暗褐色粘質土で、炭化粒が混在している。SH521の埋土に見られる黄褐色ブロックはない。このブロックの有無により、本址はSH521に切られると判断した。底面の長径111cm、短径80cmで、掘り込み面からの深さは55cmである。

人骨：底面直上より頭蓋骨と下肢骨が出土した。顔面はやや右寄りながらも下方を向き、右上肢は伸展している。下肢は股関節で緩く曲げ、膝は強く折り曲げて左下方へ倒している。頭位は242度。

その他の遺物：埋土に混在して石鎌1が出土した。

時期：時期決定の資料を欠くが、配石の検出層位からV期以降の構築としたい。

**SH521** (図版29・30、図41、PL14)

位置：L-O15にあり、SH520・524を切る。

配石：IID 4層下位で検出された上面配石は楕円形を呈し、南西および北東端部に立石を、中央に丸石がある。

墓坑：配石面で検出された。配石との上下関係はほぼ一致している。平面は楕円形で、北東-南西に主軸をもつ。埋土はIII B層基調の暗褐色粘質土で、黄褐色ブロックや炭化粒が混在している。SH524との埋土差はほとんど無い。底面の長径124cm、短径83cmで、掘り込み面からの深さは40cmである。

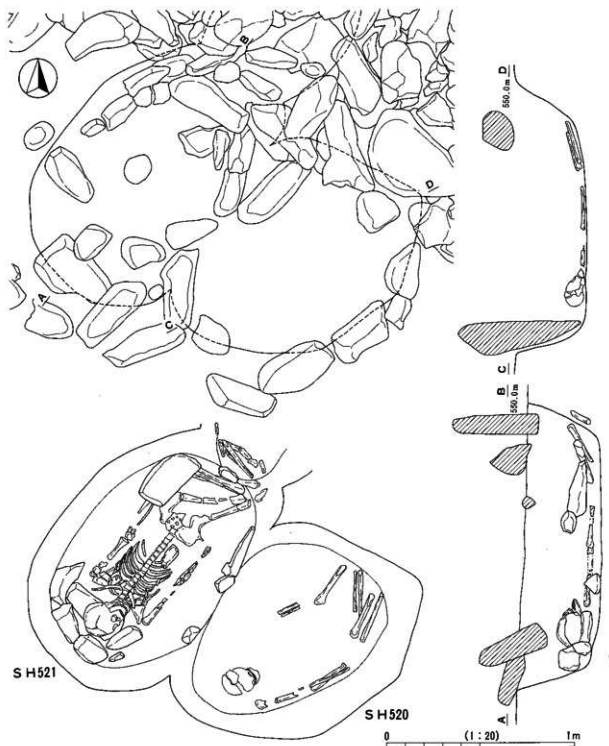


図41 SH520・521上面配石、人骨出土状態

人骨：底面直上より出土した。頭位は219度。顔面は右向き、上肢は左右とも伸展している。下肢は股関節で緩く曲げ、膝は強く折り曲げて右へ倒れている。なお、本址の下肢骨の下からSH524に係る別の下肢骨が出土したため、本址は524より新しいと判断する。頭蓋骨の周囲は丁寧に並べた礫で保護され、石を枕にしている。左前腕部上の礫は壁際にあったものと思われる。本址の人骨は埋葬姿勢を保ったままで保管されている。

その他の遺物：配石面から丸石1、磨石類2が、埋土に混在して磨石類2が出土した。

時期：SH520と同じく時期を決定する資料はないが、配石の検出層位から判断してV期以降に構築されたものと思われる。

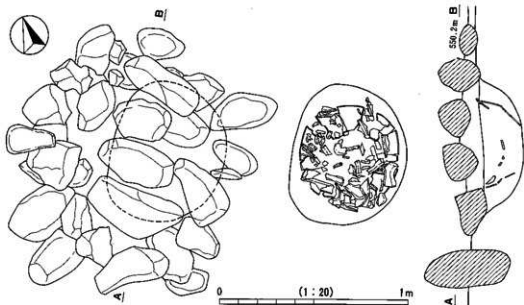


図42 SH522上面配石、人骨出土状態

**SH522** (図版27・28、図42、PL15)

位置：L-O14にあり、SH523・524と接する。

配石：IID 4層下位で検出された上面配石は、方形に礫を積み重ねた内側に、長軸を東西にした礫を3個充填している。南端部に立石がある。

墓坑：配石面で検出された。配石との上下関係はほぼ一致している。平面はほぼ円形で、深鉢形土器の胴部片を埋設している。埋土はIII B層を基調とした暗褐色粘質土で、炭化粒が多量に混在している。掘り込み面の長径40cm、短径33cmで、深さは15cmである。

人骨：土器内部から灰白色化した人骨片が出土した。本遺跡において土器内部にまとまった焼人骨が検出された例は、これが唯一である。

その他の遺物：焼骨を納めていた深鉢は薄く、しかも細片化しているため復元はできなかった。

時期：焼骨が収納されている土器からVI期に比定される。

**SH523** (図版27・28)

位置：L-N15にあり、SH504・522と接する。

配石：IID 4層下位で検出された上面配石は南側で弧を描き、全体として楕円形と思われるが、北側は礫が抜き取られていてわからない。その中央に横たわる長大な礫は、本来は立石だった可能性がある。また、配石に石皿、磨石類4点が用いられている。

墓坑：配石とはほぼ重なって、SB557埋土と思われる土層の上面で確認された。平面は卵形を呈し、一段高い南側底面直上に巨礫がのっていた。主軸は北東-南西を向く。埋土は細角礫や円礫、オリブ褐色砂質土を含む茶褐色粘質土で、炭化物が混在する。底面は北東側で一段低くなっており、この部分の長径58cm、短径50cmで、深さは53cmを測る。

人骨：一段低い底面の南西寄りから頭蓋骨が出土したが、その他の骨が見当たらないため、姿勢についてはわからない。

その他の遺物：配石に伴って石皿1、磨石類2が出土した。

時期：配石の検出層からV期以降の構築であろう。



**SH524** (図版27・28)

位置：L-O14にあり、SH521に切られる。

配石：II D 4層下位で検出された上面配石は南西部に立石を伴いながら、全体としては楕円形である。配石に用いられている石材は硬砂岩・花崗岩が目立つ。

墓坑：SB557床面上で検出された。配石とはややずれ、平面は隅丸長方形である。主軸は北北東-南南西を向く。埋土は細角礫や円礫を含む黒褐色粘質土で、底面の長径80cm、短径36cmで、掘り込み面からの深さは36cmである。

人骨：底面南西寄りから下肢骨が出土する。膝を強く屈曲させて右へ倒している。埋葬が自然位であったとすると、頭位は北東方向を向くことになる。上半身が失われた原因はわからない。

その他の遺物：配石面から磨石類1、埋土に混在して石鏃1が出土した。

時期：SH523と同じように、配石の検出層位から判断してV期以降に構築されたものと思われる。

**SH529** (図版52)

位置：M-J18にあり、SH596と接する。

配石：SB561埋土上面で検出された上面配石は、6個の平石を置いた簡単なものである。

墓坑：配石面で検出された墓坑は、配石とはややずれ、卵形である。主軸は北北東-南南西を向く。埋土は黒褐色粘質土で、炭化物がやや多めに混在する。底面の長径69cm、短径43cmで、掘り込み面からの深さは38cmである。

人骨：底面南西寄りから下肢骨が出土する。股関節および膝を強く屈曲させて、膝を胸付近に置いている。埋葬が自然位であったとすると頭位は北を向くことになる。

時期：SB561の上面で検出されたことから判断して、V期以降に構築されたものと思われる。

**SH534** (図版35・37、図43)

位置：L-S19にある。

配石：III B層上面で検出された拳大の礫のまとまりを、本址の上面配石と考えた。

墓坑：配石面で検出され、卵形で、東北東-西南西に主軸をもつ。埋土は細角礫を多量に含み、III B層を基調としながら炭化粒や焼土を混在する黒褐色粘質土である。底面の長径約90cm、短径55cmで、掘り込み面からの深さは27cmである。

人骨：底面直上から出土した。上肢は左右とも肘で強く折り曲げて手先を肩にのせている。下肢は膝を曲げて左側に倒している。埋土に顕著な違いは認められなかったものの、本址より出土した人骨の頭蓋骨が失われていることから、本址は土坑に切られていると判断した。

その他の遺物：人骨に近接して磨石類1が、また埋土中から石鏃・磨石類各1が出土した。

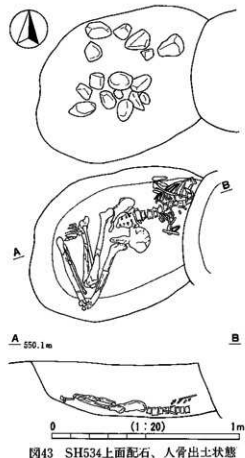


図43 SH534上面配石、人骨出土状態

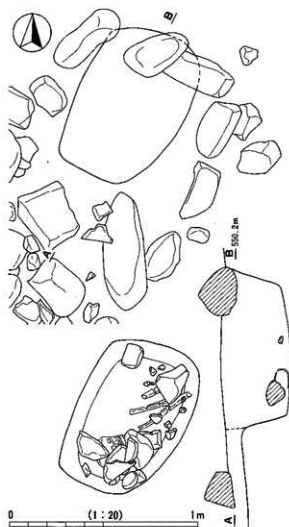


図44 SH538上面配石、人骨出土状態

れる。

墓坑：III B層上面で確認したが整った隅丸長方形で、主軸は北北東-南南西を向く。埋土は上位でIID層起源の黄褐色ブロックを混在する黒褐色粘質土で、下位はIII B層基調の暗褐色土である。中位より人頭大の角礫が頭骨を覆うように出土した。底面の長径は68cm、短径42cm、底面までの深さは32cmで、立ち上がりはほぼ垂直とよい。

人骨：底面直上から頭蓋骨および下肢骨が出土した。頭位は推定207度で、仰臥屈葬姿勢であったと思われる。下肢を強く屈曲させて、膝を腹につけている。

時期：配石の検出層位から考えて、V期以降の構築としたい。

**SH540** (図版29・30、図45)

位置：L-P15にあり、SH519を切る。

配石：IID 4層下位で長方形に並ぶ配石を検出する。配石の礫は硬砂岩・砂岩・ヒン岩・チャートである。

墓坑：III B層上面で確認したが整った楕円形で、西北西-東南東に主軸をもつ。埋土はIII A層を基調として、IID層起源の黄褐色ブロックを混在する暗褐色粘質土である。また下位には拳大から人頭大の礫が集中していた。底面の長径は118cm、短径65cm、底面までの深さは40cmである。

**SH538** (図版28)

位置：L-M14にあり、SH502・503に切られる。

墓坑：III A 1層上面でSH502・503の墓坑検出を行なった際、両者の間で確認する。配石は西側をSH502に、北東でSH505に、南側でSH503に壊されたために残存しない。重複が著しいため正しく平面形を把握することはできないが、ほぼ楕円形と思われ、主軸は北東-南西を向く。埋土はIII A層基調の黒褐色粘質土にIID 4層起源と思われる黄褐色粘質ブロックが混在する。底面は、長径120cm、短径78cmを測る。底面までの深さは約50cmで、立ち上がりはほぼ垂直とよい。

人骨：底面直上から下肢骨のみ出土した。頭位は推定225度で、仰臥屈葬姿勢であったと思われる。下肢は膝を強く屈曲させて左に倒れている。

**SH538** (図版29・30、図44、PL15)

位置：L-Q14にあり、SH516と接する。

配石：IID 4層下位で長方形に並ぶ配石を検出する。南隅の礫は長さが60cmを越え1点のみ長いので、立石が倒れたものと考えら

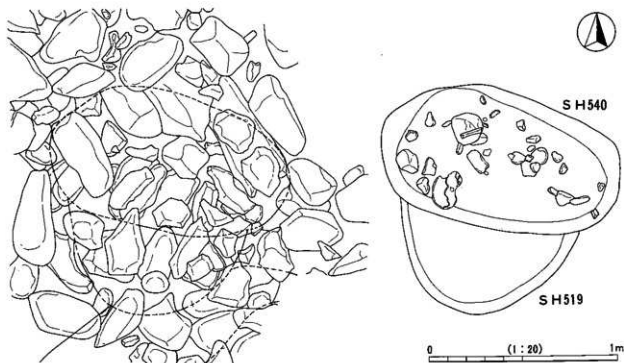


図45 SH519・540上面配石、人骨出土状態

人骨：底面西寄りから頭蓋骨が出土したほか長幹骨片がみられた。残存状態が悪く姿勢はわからないが、顔面は右を向いている。

その他の遺物：埋土中から石鎌2が出土した。

時期：SH538とともに、配石の検出層位から考えてV期以降に構築されたものと思われる。

**SH542** (図版29・30、図39、PL13)

位置：L-Q20にあり、SH515に切られる。

配石：ⅢA層下位での検出により、ほぼ弧状に並ぶ配石を確認する。東側でSH515に係る配石に壊されている。

墓坑：配石面で確認され、隅丸台形を呈する。主軸は北北西-南南東を向く。埋土は、細角礫や風化礫を多量に含むⅢB層を基調とした黒褐色粘質土で、炭化粒が混じる。底面の長径は69cm、短径54cm、立ち上がりはほぼ垂直で、底面までの深さは30cmを測る。

人骨：底面直上から頭位166度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔は下方を向き、左上肢は伸展し、右は肘を強く屈曲させて手先を右外側へあげている。下肢は右は膝を立て、左は左へ倒している。

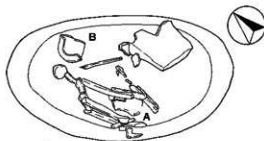
その他の遺物：埋土中から土器片20が出土した。

時期：時期を決定できる根拠はないが、SB558との関係からV期以降に構築されたものと思われる。

**SH545** (図版34)

位置：L-Q15にあり、SH580に切れ、606を切る。

墓坑：ⅢB層下位で確認された。SH580・606に破壊され明確な形態はわからないが、確認された範囲ではほぼ円形を呈する。埋土は、VI層起源の円礫とⅢ層起源の細角礫を混在する暗褐色粘質土である。炭化粒やV層起源のオリブ褐色砂質ブロックも混じる。底面の長径は推定65cm、短径63cm、確認面から底面までの深さは62cmを測る。



0 (1:20) 1m

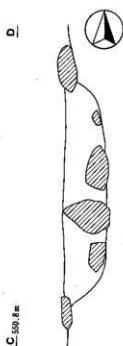
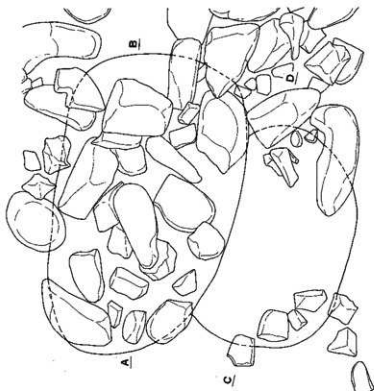
図46 SH549人骨出土状態

人骨：底面直上から出土した。残存状態が悪いうえ取り上げに失敗したため、埋葬姿勢その他詳細は不明である。

**SH548** (図版37、図46)

位置：M-A16にあり、SH526・760を切る。

墓坑：平面は楕円形で、北西-南東に主軸をもつ。埋土は、細角礫や風化礫を多量に含むIII B層を基調と

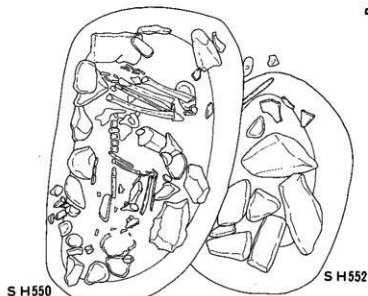


C 50.8m

した黒褐色粘質土で、炭化粒が混じる。底面の長径は120cm、短径65cm、立ち上がりはほぼ垂直で、底面までの深さは55cmを測る。

人骨：底面直上から頭蓋骨2個体および四肢骨の一部が出土した。頭蓋骨Bは四肢骨とやや離れた北西壁寄りであり、下肢骨を主体とした長幹骨の下から頭蓋骨Aが出土している。

その他の遺物：埋土中から石鏃4、打製石斧・刃器各1および小形土器1が出土した。



S H 550

S H 552

0 (1:20) 1m



A 55.0m

**SH550**

(図版40、図47)

位置：M-A15にあり、SH552を切る。

配石：III A層上面で検出された上面配石は重層的に積まれているが、特に

図47 SH550・552上面配石、人骨出土状態

輪郭を巡らすような構造ではない。この配石は東側でSH552の配石を破壊している。

墓坑：配石面で確認され、ほぼ南北に主軸をもつ楕円形を呈する。埋土はⅢA層基調の黒褐色粘質土である。底面の長径145cm、短径80cm、確認面からの深さは32cmである。

人骨：底面直上から仰臥屈葬人骨が出土した。顔面は右を向き、右上肢は肘で強く屈曲させて手先を肩に置いている。左上肢は肘をほぼ90度曲げて手先が右肘付近にある。下肢は股関節を90度曲げたうえ、膝を強く折り右に倒している。壁際に扁平な礫を立てかけた状態に並べている。

その他の遺物：人骨直下から石鏃・刃器各1が出土したほか、配石面から磨石類1、埋土中から打製石斧・石鏃・磨石類各1が出土した。

時期：配石の検出層位ならびにV期のSB553の上位に位置することから、V期以降に構築されたものと思われる。

#### SH552 (図版40、図47)

位置：M-B16にあり、SH550に切られる。

配石：ⅢA層上面で検出された上面配石は、ほぼ楕円形に礫を並べたうえ、内部を大形の円礫で充填している。

墓坑：V層上面で確認され、主軸が南北方向を示す楕円形である。埋土はⅢB層を基調とし、V層に由来するオリブ褐色砂質ブロックが混在する。底面の長径は81cm、短径59cm、掘り込み面からの深さ46cmである。

人骨：底面直上北東壁際より長幹骨が出土しているが、部位が特定できないので頭位方向はわからない。

その他の遺物：北寄り底面直上から完形の石棒が出土している。副葬品であろう。配石面からは磨石類3、埋土中から磨石類3・打製石斧1が出土した。

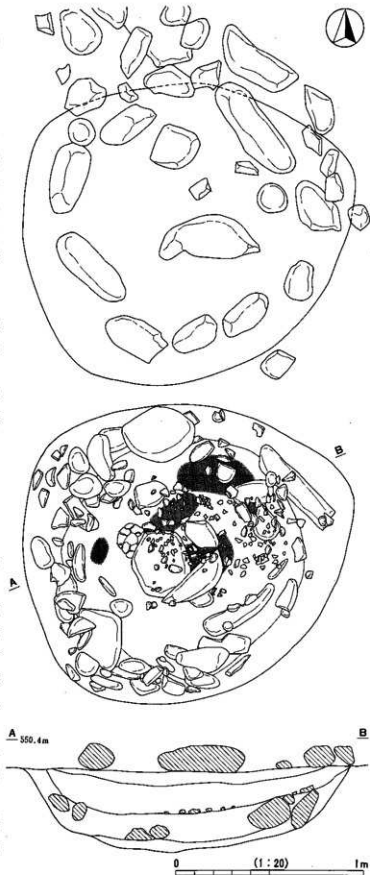


図48 SH555上面配石、人骨出土状態



**SH555**

(図版42・43、図48、PL16)

位置：M-E18にあり、SB555の張り出し部敷石と接する。

配石：ⅢA層上面で検出された。ほぼ円形で、中央にも礫が置かれている。

墓坑：配石面で確認され、ほぼ円形を呈する。埋土はⅢA層基調の黒褐色粘質土であるが、中に小礫が集中する箇所がある。底面の長径129cm、短径125cmで、掘り込み面からは45cmの深さである。

人骨：底面南西寄りから鉢形土器が逆位で出土し、その下に頭蓋骨片が残っていた。また、中央部から北東寄りにも骨の痕跡が残っていたが、部位を特定するに至らなかった。

その他の遺物：埋土中から石鏃15と打製石斧1が出土した。副葬品であろうか。

時期：甕椀りに使用していた鉢形土器からⅥ期に比定される。

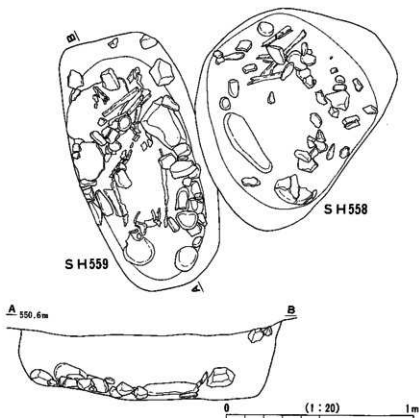


図49 SH558・559上面配石、人骨出土状態

**SH558**

(図版45・46、図49、PL16)

位置：M-H16にあり、SH559を切る。

配石：ⅡD4層中で上面配石

を確認する。ほぼ南北方向に長方形を呈し、縁取り内部にも礫を充填している。南端部に立石がある。本社の配石は、SH559・693に係る配石の上にある。

墓坑：ⅢB層上面で確認され、卵形でほぼ南北に主軸をもつ。埋土は、風化礫や砂岩片を含むⅢA層基調の黒褐色粘質土である。壁の立ち上がりは垂直で、底面の長径は103cm、短径89cm、上面配石から土坑底面までの深さは45cmである。埋土中から小礫が出土するが、散在しており、意図的な配置または被葬者を覆うような所作は認められない。

人骨：底面直上から頭骨ならびに下肢骨が出土した。頭位は173度位と思われるが、姿勢についての詳細は不明である。頭部の左横に扁平な礫があり枕石であったのかもしれない。

その他の遺物：人骨に近接して小形磨製石斧があったほか、埋土に混在して石鏃1、打製石斧・磨石類・刃器各2が出土した。

時期：次の559とともにSB559の上層にあるのでV期以降であるが、上部配石の検出層位から、VI期の可能性もある。

#### SH559 (図版45・46、図49、PL16)

位置：M-116にあり、SH558に切られる。

配石：ⅡD4層中で上面配石を確認する。北北西-南南東方向に長方形を呈し、両端部に立石がある。配石を構成する礫は砂岩を主体とする。

墓坑：ⅢB層上面で確認され、隅丸長方形で、北北西-南南東に主軸をもつ。埋土は、風化礫や砂岩片を含むⅢA層基調の黒褐色粘質土である。壁際には円礫や平石を並べている。壁の立ち上がりは垂直で、底面の長径は121cm、短径56cm、上面配石から土坑底面までの深さは34cmである。

人骨：底面直上から仰臥屈葬人骨が出土した。頭位は167度。顔面は左を向き、右の上肢を伸展させ、左上肢は肘を緩く曲げて手先を下腹部に置いている。下肢は股関節で90度曲げたうえ、膝を強く屈曲させて右に倒れている。

その他の遺物：骨盤に密着して磨石が検出されており副葬品の可能性もある。配石面から台石類1が、また、埋土に混在して石鏃1・磨石類2が出土した。

時期：SH558とともにSB559の上層に構築されているからV期以降であることは間違いない。上面配石の検出層位を加味するとVI期に比定される可能性もある。

#### SH567 (図版27・28)

位置：L-M14にあり、SH501・502に切られる。

墓坑：ⅢB層で確認したが楕円形を呈し、主軸は北西-南東を向く。埋土は砂質ブロックを含む黒褐色粘質土で、炭化物が混在する。底面の長径121cm、短径67cm、検出面からの深さは35cmである。

人骨：底面南東寄りから下肢骨が出土した。残存状態が悪く、埋葬姿勢はわからない。

その他の遺物：埋土中から石鏃・刃器各1が出土した。時期は不明である。

#### SH573 (図版31・32、図50、PL17)

位置：L-N14にあり、SH512に近接する。

配石：ⅢA層下位で立石と平石2枚が検出された以外はつきりしない。立石は墓坑の北東寄りにある。

墓坑：検出は難航し、結局V層まで下げた段階で確認する。配石との上下関係はほぼ一致している。平面は楕円形で、主軸は北北東-南南西を向く。埋土はⅢA層を基調とし、ⅢC層に由来するものと思われる。

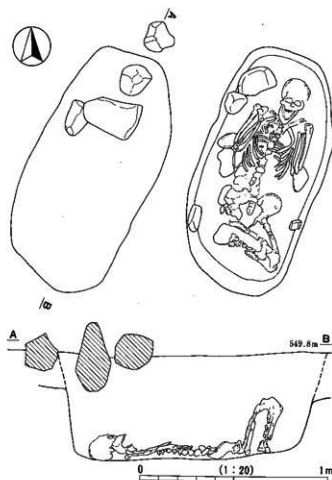


図50 SH573上面配石、人骨出土状態

人骨：底面北寄りから頭蓋骨が出土したものの残存状態が悪く、姿勢その他はわからない。壁際には礫が並べられている。

その他の遺物：配石面から石皿・磨石類各1が出土したほか、埋土中に磨石類1、石鏃2点、磨製石斧・石錐・蛇紋岩の研磨礫各1があった。

時期：SB555との関係から判断して、VI期に構築されたものと考えられる。

**SH580** (図版29・30、図51)

位置：L-Q15にあり、SH545・606・709を切るほかSB552も切る。

配石：III A層上面で検出された。北東-南西方向に一列に礫を並べてあり、北東端部の礫は立石である。

墓坑：配石面で確認された。平面は隅丸長方形を呈し、主軸は北北東-南南西を向く。埋土はIII A層基調の黒褐色粘質土ながら、V層起源のオリープ褐色砂質ブロックや炭化粒が混在する。壁際には礫が並べられており、底面は長径130cm、短径67cm、掘り込み面からの深さ30cmでV層に達する。

人骨：底面南西寄りから頭蓋骨が、北東寄りから下肢骨が出土した。立石は下肢の上方にあることになる。左右とも下肢は股関節で約60度曲げ、右膝は右へ、左膝は左へ股を開いた感じで曲げている。

その他の遺物：埋土中から磨石類1が出土した。

時期：SB552の上面配石と同一層で確認されたことから、本址の構築時期はV期以降と考えられる。

る茶褐色ブロックが混在するため粘性がある。全体に炭化粒や円礫が混在している。底面は長径115cm、短径58cm、掘り込み面からの深さは38cmで、VI層に達している。人骨：底面直上から出土した。頭位は21度である。顔面は正面を向き口が大きく開いている。上肢は左右とも肘で強く折り曲げ手先を肩に置き、下肢は股関節で90度近く折り、膝を曲げて立っている。壁際に礫を並べている。

時期：SH508の時期および配石面から判断して、構築時期はIV期以降と考えられる。

**SH578** (図版42・43)

位置：M-E16にあり、SB555の張り出し部と炉のほぼ中間上面にある。

配石：SB555の埋土上面で検出された配石は、長軸の両側に平行させて礫を並べている。

墓坑：配石面で確認されたが楕円形を呈し、主軸は北北東-南南西を向く。埋土は炭化物の混在が著しいSB555の埋土を基調としている。底面は長径118cm、短径58cm、掘り込み面からの深さ17cmである。



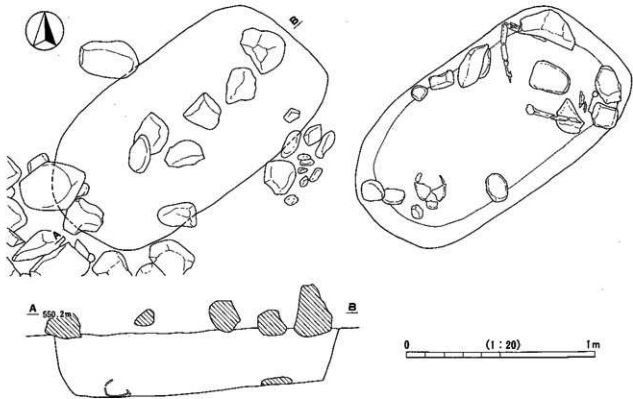


図51 SH580上面配石、人骨出土状態

**SH596** (図版52・PL17)

位置：M-K19にあり、SH529と接する。

配石：IID 4層中から、円礫を中心にほぼ楕円形にまとまる上面配石を検出する。

墓坑：検出は難航したが、SB561埋土内において黒褐色粘質土の落ち込みを確認する。平面は楕円形で、主軸は北北東-南南西を向く。埋土は黒褐色粘質土で、炭化物が混在する。底面は長径80cm、短径38cm、掘り込み面からの深さは40cmで立ち上がりは垂直に近い。

人骨：底面北寄りから下肢骨のみ出土した。頭位は推定で192度。太腿骨と腓骨・脛骨の位置から、下肢は左右とも膝を強く屈曲させて左に倒していたものと思われる。

時期：SH529と接することやSB561の上面に構築されていることから、V期以降と考えられる。頭位は約180度対向するものの、遺構の構造上の類似からみて、SH529とは極めて近い関係にあると思われる。

**SH599** (図版42・43)

位置：M-D15のSB555主体部南西隅上面にある。

調査経過：SB555の主体部床面検出にむけて掘り下げ中、弧状に巡る礫と人骨を確認する。そこで、全体の掘り下げを一旦中止して、この配石を人骨とに係る掘り込みの検出を行う。識別は困難を極めたが、若干粘性の強い褐色ブロックと炭化物の集中をもとに墓坑の範囲を確認した。配石および人骨を精査したのち、取り上げて底面を検出したが、墓坑の確認が遅れた結果、確認面からの深さは減じてしまった。配石：SB555の埋土下面で検出され、西側から東側にかけて弧状に礫を巡らせている。

墓坑：配石面で確認され、平面は楕円形を呈し、主軸は北北東-南南西を向く。埋土は炭化物の混在が著しいSB555の埋土を基調とする。底面は長径84cm、短径33cm、確認面からの深さ6cmである。

人骨：底面南寄りに頭蓋骨が出土した。残存状態が悪く、姿勢その他は不明である。

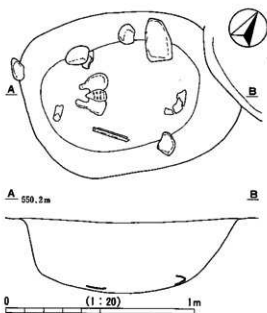


図52 SH606人骨出土状態

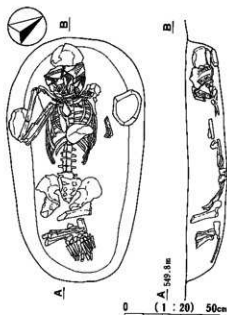


図53 SH607人骨出土状態

時期：SH578・579同様、SB555との関係から判断して、VI期に構築されたものと考えられる。

**SH606** (図版34、図52)

位置：L-Q16にあり、SB552・SH709を切り、SH545に切られる。

墓坑：III B層上面で検出された。平面は楕円形を呈し、北東-南西方向に主軸をもつ。墓坑上面にSB552に係る礫が被ることから、本址はそれより古い。埋土はV層由来の円礫と、IV層由来のオリブ褐色砂質土を多量に混在する暗褐色土である。埋土の差によりSH580より古く、545・709より新しいとした。底面は長径84cm、短径55cm、確認面からの深さは37cmである。

人骨：底面近くより仰臥人骨が出土した。顔面の向きは定かでないが、左上肢は肘で緩く曲げ、手先を下腹部に置いているものと思われる。下肢の形はわからない。

その他の遺物：埋土中より打製石斧1が出土した。

時期：SB552より古いことから、本址の構築時期はV期以前と思われる。

**SH607** (図版34、図53、PL17)

位置：L-Q16にあり、SB552、SH517・518に切れ、SB560を切る。

墓坑：SB560の埋土中で確認された。SH517・518に上部が壊されており、上面プランは明確につかめないものの、ほぼ隅丸長方形を呈し、北西-南東に主軸をもつ。埋土は、SB560の埋土と思われる炭化物や焼土粒を混在した暗褐色粘質土に、V層由来の砂質ブロックが混じる。底面の長径118cm、短径55cm、確認面からの深さ41cmである。

人骨：底面直上から仰臥屈葬人骨が出土した。頭位は309度。顔面上に深鉢形土器胴下半部を逆位に被せ、頭の下には枕石を置く。また左胸部の上にも礫を乗せている。顔面は正面を向き、上肢は左右とも肘を強く折り曲げて肩に手先を置く。下肢は膝を折り曲げて立てている。左右の上肢の脇、壁際にも礫が置かれている。

時期：本址の構築時期は、顔面に被せられた深鉢を根拠にしてIII期と考えられる。

**SH616** (図版37、図54)

位置：L-S18にある。

墓坑：V層上面で確認された。隅丸長方形を呈し北北東-南南西に主軸をもつ。埋土はV層基調のオリーブ褐色砂質土に、細角礫や炭化物が多量に混在する。底面の長径129cm、短径62cm、確認面からの深さ24cmである。

人骨：底面直上から仰臥屈葬人骨が出土した。頭位は196度。顔面は正面を向き、右上肢は肘を強く折り曲げて手先を肩に、左は肘で緩く曲げて手先を下腹部に置いているらしい。下肢は股関節を緩く曲げ、膝も緩く折り、右に倒している。

その他の遺物：埋土中より石鏃1が出土した。

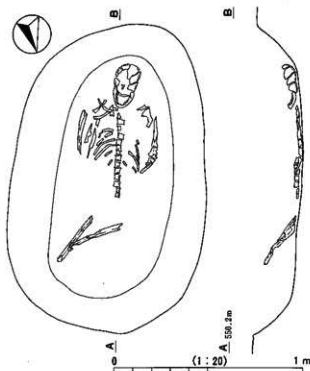


図54 SH616人骨出土状態

**SH627** (図版35・37、図55、PL18)

位置：L-S15にあり、SH625・637・657を切る。

墓坑：V層上面で確認する。平面は楕円形で、ほぼ南北に主軸をもつ。埋土は多量の角礫を含む黄褐色砂質土で、炭化物を混在する。底面の長径105cm、短径79cm、検出面からの深さは27cmである。

人骨：床面直上から3体分出土した。Aは頭位0度の仰臥屈葬。顔面は強く下方を向く。右上肢は肘を強く曲げて手先を右肩に置いている。下肢は股関節と膝とともに強く屈曲させ、膝は左体側に置いている。Bは頭位358度の伏臥屈葬。頭蓋骨は左下に向いている。左上肢は残存しているが、右半身から下半身にかけては欠損している。Cは下肢のみ出土した。膝を強く折り曲げた屈葬人骨であるが、Bの埋葬時に大部分が失われたものと思われる。

その他の遺物：埋土中より石鏃1が出土した。

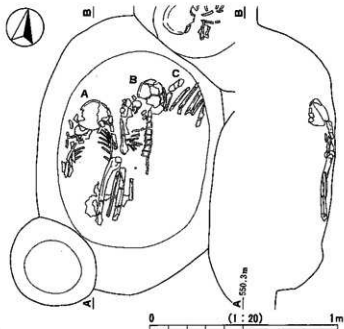


図55 SH627人骨出土状態

**SH638** (図版38、図56、PL18)

位置：L-T15にあり、SH696に切られる。

墓坑：V層上面で確認する。平面は楕円形で、ほぼ南北に主軸をもつ。埋土は上層が角礫を含む暗褐色で、下層は褐色の粘質土である。底面の長径90cm、短径41cm、検出面からの深さは25cmである。

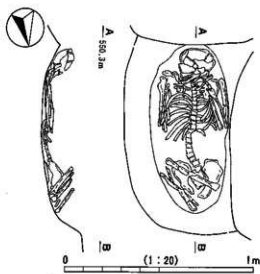


図56 SH638人骨出土状態

人骨：底面直上より仰臥屈葬人骨が出土する。頭位は184度。顔面は右横を向き、上肢は左右とも肘を強く屈曲させて、手先を肩に乗せている。下肢は股関節を強く屈曲させて、膝を右体側においている。

**SH644** (図版36・37)

位置：L-S16にあり、SH637・658に切られ、659を切る。

墓坑：SH637・658の底面を精査している段階で確認する。

楕円形を呈し、東西に主軸をもつ。埋土は上層が多量の細角礫を含む褐色土で、下層は灰褐色砂質土である。底面の長径73cm、短径60cm、検出面からの深さは29cmである。

人骨：底面の東壁寄りから下肢骨が出土した。上半身は欠損しているため埋葬姿勢は不明。

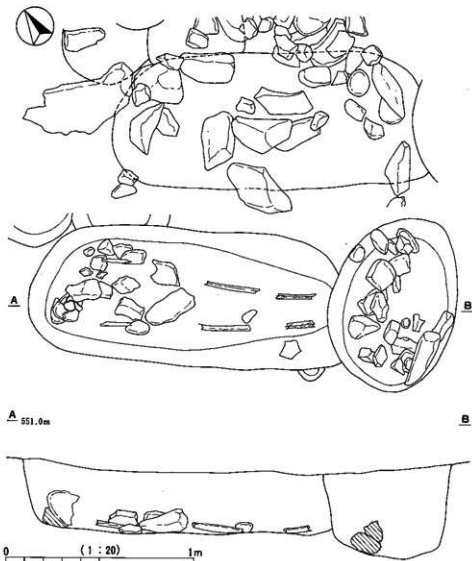


図57 SH652上面配石、人骨出土状態

その他の遺物：底面の下から深鉢形土器の削下半部が出土したが、出土状況からして、本址に伴うものとはいえない。

**SH646**

(図版38・41)

位置：M-C16にあり、SH632に切られる。

墓坑：SH632を精査している段階で確認する。楕円形を呈し、東西に主軸をもつ。埋土は細角礫を含む褐色土である。底面の長径50cm、短径45cm、検出面からの深さは20cmである。

人骨：底面の西壁寄りから下肢骨が出土した。上半身は

欠損しているため埋葬姿勢は不明。

その他の遺物：埋土中より石鏡1が出土した。

**SH652** (図版52、図57)

位置：M-K19にあり、SH594に切られる。

配石：SB561の埋土上面において検出された。北側はほぼ直線状に礫を並べているが、南側ははっきりしない。北西端部に横たわる長大な硬砂岩は立石だった可能性がある。

墓坑：当初は墓坑の範囲を見誤り、北西部と南東部に2基の土坑が並列していると判断して調査を進めた。ところが、北西の土坑から頭蓋骨および上肢骨、南東の土坑から下肢骨が出土したため、両者を同一のものと考え、図面照合の段階で合成した。北西-南東に主軸をもつ隅丸長方形を呈し、埋土は黒褐色粘質土で炭化物を混在する。底面の規模は長径155cm、短径56cm、掘り込み面からの深さは31cmである。

人骨：床面直上から仰臥伸展葬の人骨が出土した。調査ミスにより肋骨から骨盤にかけては欠損してしまった。顔面は右下方を向き、上肢・下肢は左右ともまっすぐ伸ばしている。

その他の遺物：配石面から磨石類1が出土した。

時期：SB561の上層に構築されていることから、本址はV期以降に比定されよう。

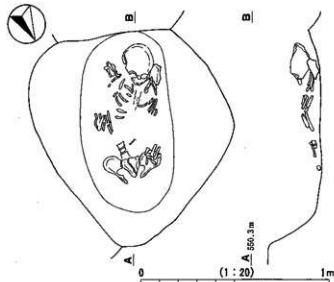


図58 SH657人骨出土状態

**SH657** (図版35・37、図58)

位置：L-S15にあり、SH627に切られ、695を切る。

墓坑：SH627の人骨取り上げ時に確認された。卵形で、北東-南西に主軸をもつ。埋土は上層が多量の細角礫を含む暗褐色粘質土で、下層に行くに従いオリーブ褐色砂質ブロックが多くなる。底面の規模は長径96cm、短径49cm、掘り込み面からの深さは26cmである。

人骨：床面直上から仰臥屈葬の人骨が出土した。左右の上肢および下肢を欠損している。頭蓋骨は下方を向いている。

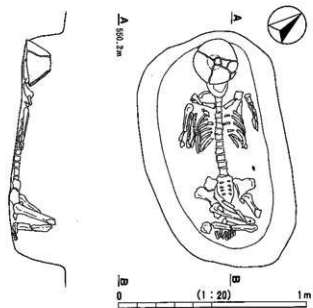


図59 SH659人骨出土状態

**SH659** (図版35・37、図59、PL18)

位置：L-S17にあり、SH644に切られる。

配石：図面照合段階で、配石群SH510直下より出土した礫が本址に伴うものと判断した。SH644に切られ全体形ははっきりしない。

墓坑：SH644底面調査段階で確認された。隅丸長方形で、北西-南東に主軸をもつ。埋土は多量の細角礫を含む褐色砂質土である。底面の規模は長径114cm、短径54cm、掘り込み面からの深さは28cmである。人骨：床面直上から寝破りの仰臥屈葬の人骨が出土した。顔は正面を向き、左右の上肢は肘を強く屈曲させて手先を肩に置いている。一方、下肢は左右とも膝を立てている。

その他の遺物：埋土中から打製石斧1が出土した。

時期：顔面上の土器から判断して、IV期に構築されたことは確実である。

**SH682** (図版32)

位置：L-N16にある。北側は攪乱を受けて破壊されている。

墓坑：III C層上面で確認する。平面は楕円形と思われ、主軸は北東-南西を向く。埋土は茶褐色粘質ブロック、オリブ褐色砂質ブロック、細角礫を含む黒褐色粘質土で、炭化物が混在する。

人骨：底面の南西側から頭蓋骨が出土したほか、骨片が散乱している。

時期：SB560との関係から、II期遺構構築されたものと思われる。

**SH686** (図版41上)

位置：M-D17にあり、SH647に切れ、731を切る。

墓坑：SB553の床面下で確認された。楕円形で主軸は北東-南西を向く。埋土は細角礫を含む暗褐色粘質土で、炭化物を混在する。底面の長径118cm、短径83cm、検出面からの深さは40cmである。南西壁際から礫が出土した。

その他の遺物：埋土中からII期の深鉢土器の大破片が出土している。

**SH690** (図版35・37)

位置：L-S17にあり、SH771に切られる。

墓坑：III B層上面で確認された。平面は正方形を呈する。埋土は細角礫を多量に含む黒褐色粘質土で、炭化物を混在する。底面の長径50cm、短径45cm、検出面からの深さは28cmである。

その他の遺物：埋土中より小形土器1、III期の鉢形土器が出土した。

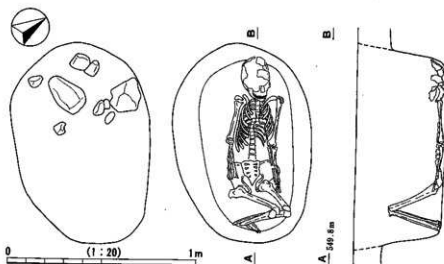


図60 SH692上面配石、人骨出土状態

**SH692** (図版31・32, 図60, PL19)

位置：L-M18にある。

配石：発掘調査段階でははっきりしなかったが、図面照合により、墓坑の上面にまとまる数点の礫を本址に伴うものと判断した。

墓坑：SB551の埋土中で確認した。楕円形で、北西-南西に主軸をもつ。埋土は細角礫や茶

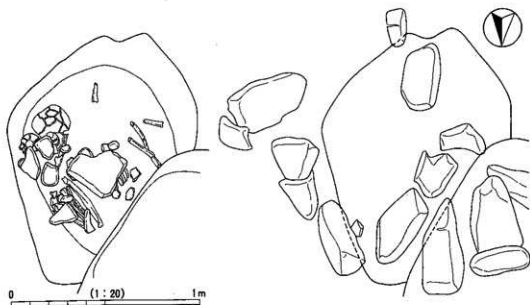


図61 SH693上面配石、人骨出土状態

褐色粘質ブロックを含む暗褐色粘質土で、炭化物を混在する。底面の長径90cm、短径49cm、掘り込み面からの深さは31cmである。

人骨：床面直上から仰臥屈葬人骨が出土した。顔面はやや左下方を向き、左右の上肢は伸展させている。下肢は膝を立てている。

その他の遺物：埋土中より石鏃1、磨石類1が出土した。

時期：SH508と配石の確認面が共通していることから、本址もIV期以降に構築されたものと思われる。

#### SH693 (図版45・46、図61、PL19)

位置：M-J16にあり、SH558に切られる。

配石：SH558から続く弧状の礫が、本址の配石を構成する可能性がある。III A層上面で確認された。

墓坑：配石面直下で検出された。不整の卵形ではほぼ南北に主軸をもつ。埋土は多量の細角礫を含む黒褐色粘質土で、炭化物を混在する。底面の長径101cm、短径77cm、掘り込み面からの深さは26cmである。

人骨：床面直上から側臥屈葬人骨が出土した。頭蓋骨の北側および体幹の直上に平石が乗っている。顔面および体幹は右を向き、左右の上肢は股関節で強く屈曲させて、膝を胸につけている。頭蓋骨の右、床面直上から出土した鉢形土器は、本来顔面に被せられていたものと思われる。

その他の遺物：人骨に近接して磨石類1点、埋土中から打製石斧・磨石類・土偶各1が出土した。

時期：鉢形土器はVI段階に比定される。

#### SH698 (図版52)

位置：M-M19にある。

墓坑：SB561の埋土上層で確認されたが、配石は検出されなかった。主軸は西北西-東南東を向き、隅丸長方形を呈する。埋土は角礫を多量に含む暗褐色土で、炭化粒もみられる。底面の長径70cm、短径47cm、検出面からの深さは30cmである。

人骨：底面の東寄りから下肢骨片が出土した。従って、本址の埋葬人骨の頭位は西北西と考えられる。

その他の遺物：埋土中より打製石斧1が出土した。

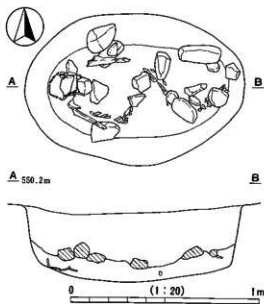


図62 SH703人骨出土状態

ら、本址はV期以降に比定される。

**SH703** (図版34、図62)

位置：L-R16にある。

墓坑：ⅢC層上面で確認した。楕円形でほぼ東西に主軸をもつ。埋土は上層が細角礫を含む暗褐色粘質土、下層は黄褐色砂質土で炭化物を混在する。底面の長径96cm、短径49cm、検出面からの深さは40cmである。壁際には疎らに礫が並んでいる。

人骨：床面直上から仰臥屈髀人骨が出土した。ただし、椎骨や肋骨など主要な体幹の骨は欠損している。頭蓋骨は土圧で潰れ顔面の向きはわからない。右上肢は肘を張りながら緩く曲げ、手先を下腹部に置いている。左上肢も同様に下腹部に手先を置いているが、上腕骨は体側に沿って真直伸ばしている。下肢は左右とも膝を立てている。

その他の遺物：埋土中より磨石類1が出土した。

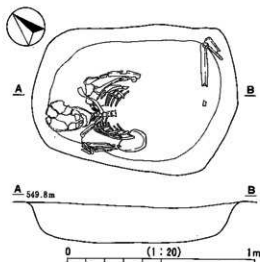


図63 SH709人骨出土状態

時期：SB561の上位に構築されていることから、本址はV期以降に比定される。

**SH700** (図版46)

位置：M-I18にある。

墓坑：SB559の床面敷石を精査している段階で確認されたが、配石は検出されなかった。長方形で主軸は東北東-西南西を向く。埋土は多量の細角礫と茶褐色粘質ブロックを含む黒褐色粘質土で、下位にいくに従ってオリーブ褐色砂質ブロックが含まれ、炭化粒もみられる。底面の長径62cm、短径36cm、検出面からの深さは24cmである。

人骨：底面の直上から骨片が比較的多量に出土した。

その他の遺物：埋土中より磨石類2が出土した。

時期：SB559の敷石を取り除いて構築されていることから

**SH709** (図版34、図63)

位置：L-Q15にあり、SH606に切られる。

墓坑：ⅢB層上面で確認された。楕円形で主軸は北西-南東を向く。埋土はオリーブ褐色砂質ブロックを含む暗褐色砂質土である。底面の長径90cm、短径63cm、検出面からの深さは19cmである。

人骨：底面の北西側から上半身の骨が出土したほか、断片的に長幹骨もある。頭位は322度で、顔面はほぼ正面を向く。左右の上肢は肘を強く折り曲げて、手先を肩に乗せている。右の下肢は股関節を約90度曲げ、大腿骨は左へ倒し膝を折り曲げている。

時期：SH606より古いわけだからV期以前に構築されて



いることは間違いない。

**SH711** (図版37、図64、PL19)

位置：M-B16にある。

墓坑：SB553床面直下から人骨が出土し、掘り方については不明な点が多い。おそらく長方形を呈するものと思われ、人骨の方位からして墓坑の主軸は北東-南西を向く。

人骨：底面直上から仰臥屈葬人骨が出土した。頭位は0度。頭蓋骨の劣化が激しいものの、顔面は右を向くと思われる。上半身の骨はほとんど欠損しているため上肢の位置がわからない。下肢は左右とも股関節を強く折り曲げて、膝を右体側に置いている。

その他の遺物：埋土中から石鏃1が出土した。

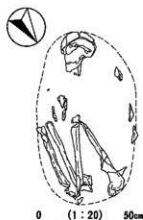


図64 SH711人骨出土状態

**SH714** (図版34)

位置：L-P18にある。

墓坑：SB558の床面直下で確認する。長方形で主軸はほぼ東西を向く。埋土は細角礫とオリープ褐色砂質ブロックを含む褐色砂質土で、炭化物が混在する。底面の長径は92cm、短径64cm、検出面からの深さは33cmである。

人骨：底面の西寄りに頭蓋骨が認められたほか、上肢骨および下肢骨の一部が出土している。頭蓋骨は劣化が著しいため、顔面の向き等わからない。上肢は解剖学的位置にあるとすると、肘を強く張ったうえや強く曲げ、手先を胸に置いていることになる。

時期：SB558との関係から、本址の構築時期はIV期以前であることは間違いない。

**SH717** (図版34、図65、PL19)

位置：L-Q17にある。

墓坑：SB560の床面周辺精査で確認された。不整長方形で主軸は北北西-南南東を向く。埋土は細角礫を含む暗褐色砂質土で、炭化物を混在する。底面の長径104cm、短径60cm、検出面からの深さは60cmである。

人骨：床面直上から1体(B)、その上に重ねてもう1体(A)が出土した。Aは頭蓋骨が欠損している仰臥屈葬人骨で、頭位は5度。左右の上肢は伸展させ、下肢は膝を立てている。Bの頭位は300度。顔面を正面に向け、右上肢は伸展させ、左上肢は肘を強く折り曲げて手先を肩に乗せている。下肢は股関節で強く屈曲させているため、膝が胸の位置にある。AとBの間には円礫が多量に混じっている土が介在しており、両者の埋葬に時間差があった可能性もある。

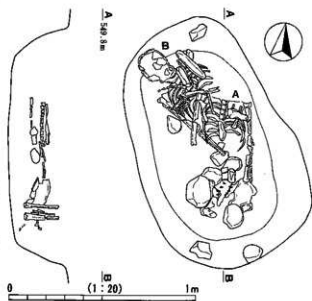


図65 SH717人骨出土状態

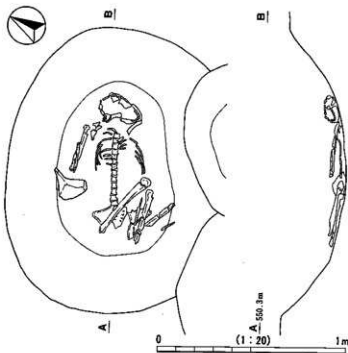


図66 SH735人骨出土状態

**SH735** (図版38、図66)

位置：L-R15にある。

墓坑：ⅢB層上面で検出された。楕円形でほぼ東西に主軸をもつ。埋土は多量の細角礫を含む暗褐色粘質土で、下位へいくに従って黄褐色砂質ブロックが多くなる。底面の長径92cm、短径61cm、検出面からの深さは32cmである。

人骨：底面直上から仰臥屈葬人骨が出土した。頭位は80度。顔面はやや左下方を向き、右上肢は肘を強く折り曲げて手先を肩に置いている。左上肢は欠損してわからない。下肢は左右とも股関節で強く屈曲させ膝を左体側に置いている。

その他の遺物：埋土中から石鏃2が出土した。

**SH739** (図版38、図78)

位置：L-T17にあり、SH786・796を切る。

墓坑：ⅢB層直上で検出された。卵形でほぼ南北に主軸をもつ。埋土は細角礫とオリーブ褐色砂質ブロックを含む褐色砂質土である。底面の長径95cm、短径75cm、検出面からの深さは30cmである。

人骨：底面直上から仰臥屈葬人骨が出土した。頭位は168度。顔面はほぼ正面を向く。右上肢は肘を強く折り曲げて手先を肩に置いているが、左は肘を直角に曲げて右肘付近に手先がある。下肢は左右ともに膝を強く曲げて左に倒れている。

**SH741** (図版47)

位置：M-I16にあり、SH753を切る。

墓坑：SH558・559の底面を精査している段階で確認する。掘り込み面がかなり攪乱を受けているため、平面形については不明な点が多いが、おそらく楕円形で主軸は北東-南西を向いていたものと思われる。埋土は茶褐色粘質ブロックを含む暗褐色で、炭化物が混在する。

人骨：底面直上から頭蓋骨の破片が出土しているが、位置不明により頭位や埋葬姿勢はわからない。

その他の遺物：埋土中から打製石斧1が出土した。

時期：SH558・559はもちろんSB559より古いことから、V期以前には構築されていた。

**SH742** (図版35・37)

位置：L-T18にあり、SH743・785を切る。

配石：ⅢB層上面で確認された数点の礫が、上面配石を構成するものと思われる。

墓坑：配石面で確認する。不整形長方形で主軸はほぼ東西を向く。埋土は細角礫を含む暗褐色粘質土で、炭化物が混在する。底面の長径170cm、短径110cm、検出面からの深さは49cmである。

人骨：底面の西寄りに頭蓋骨が認められたほか、断片的に骨片がある。

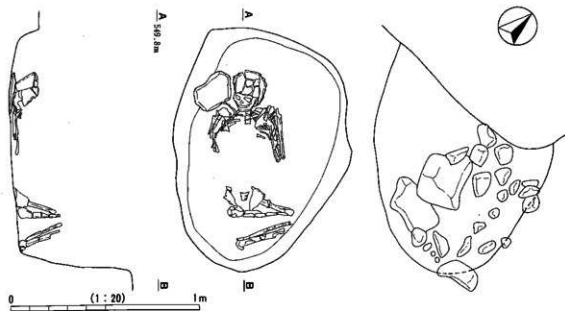


図67 SH743上面配石、人骨出土状態

その他の遺物：埋土中から石鏃1が出土した。

時期：IV期のSH785より新しいから、それ以降構築された。

#### SH743 (図版35・37、図67)

位置：L-T18にあり、SH742に切られる。

配石：III B層上面で確認された。当初はSH544と命名し、下部土坑はないと考えていたが、V層上面で検出された墓坑と図面照合により合致したため本址の上面配石と判断した。配石とはいえ、硬砂岩を主体とした大小の礫をまとめたもので、特に定形をなすわけではない。

墓坑：V層上面で確認する。卵形で主軸は北北西-南南東を向く。埋土は細角礫を含む暗褐色粘質土で、炭化物が混在する。底面の長径117cm、短径74cm、掘り込み面からの深さは43cmである。

人骨：底面直上から仰臥屈葬人骨が出土した。胸から腹にかけての部位が欠損している。頭位は326度。顔面は正面を向き、左右の上肢は肘を張りながら強く屈曲させ、手先を肩に乗せている。下肢は股関節で90度曲げ膝を左に倒している。頭蓋骨の右に平石が置かれていた。

時期：上面に配石があることや、その検出面がSH785などと同一であることから、IV期以降の構築と思われる。

#### SH751 (図版47、図68)

位置：M-J16にあり、SH901・931を切る。

墓坑：III C層上面で確認された。卵形で主軸はほぼ南北を向く。埋土は細角礫を含む暗褐色砂質土で、炭化物を混在する。底面の長径95cm、短径86cm、検出面からの深さは32cmである。底面の壁際には礫を巡らせて

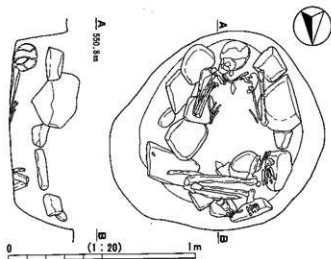


図68 SH751人骨出土状態

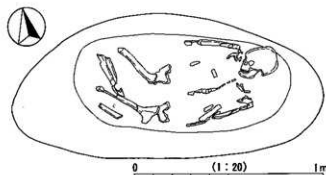


図69 SH753人骨出土状態

る。

墓坑：ⅢC層上面で確認された。隅丸長方形で主軸は北東-南西を向く。埋土は細角礫とオリブ褐色砂質ブロックを含む褐色砂質土である。底面の北東壁寄りに礫が集中していた。底面の長径88cm、短径60cm、検出面からの深さは31cmである。

人骨：底面の南西側から頭蓋骨の破片が出土したほか、骨片が散在している。頭蓋骨の出土位置から考えて、頭位は南西を向くことになる。

**SH753** (図版47、図69)

位置：M-J16にあり、SH741に切られ、SH910・931を切る。

墓坑：ⅢC層上面で確認された。平面は楕円形を呈する。埋土はオリブ褐色砂質ブロックを含む褐色砂質土で、炭化物を混在する。底面の長径113cm、短径52cm、検出面からの深さは20cmである。

人骨：底面直上から仰臥屈葬人骨が出土した。全身の劣化が著しい。頭位は90度。顔面は右下方を向き、右上肢は伸展している。左は前腕部が欠損しているためわからない。下肢骨は股関節を曲げて右に倒したうえ膝を強く折り曲げ、脛骨の遠位端が寛骨付近にある。

その他の遺物：磨石類・打製石斧各1が埋土中から出土した。

いる。

人骨：床面直上から仰臥屈葬人骨が出土した。

頭位は180度。顔面は右下方を向く。左上肢は肘を強く屈曲させて手先を肩に置き、右は伸展させている。下肢は左右とも股関節を90度曲げ、膝を右に倒している。

その他の遺物：埋土中から石鏃1が出土した。

**SH752** (図版48・49)

位置：M-I20にあり、SH750・778に切られ

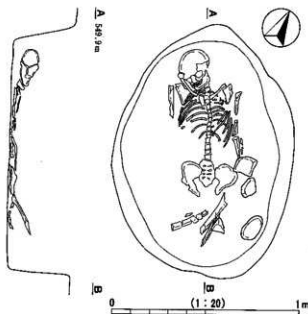


図70 SH762人骨出土状態

時期：SH741がV期以前ならば、本址もまたV段階以前に構築されていたことになる。

**SH761** (図版38)

位置：L-R15にあり、SH735に切られる。

墓坑：ⅢC層上面で検出された。楕円形でほぼ北北西-南南東に主軸をもつ。埋土は細角礫を含む黄褐色砂質土である。底面の長径100cm、短径65cm、掘り込み面からの深さは32cmである。

人骨：底面の南寄りから、頭蓋骨および右上腕骨の一部が出土した。他の骨が欠損しているため埋葬姿勢など詳細は不明である。

**SH762** (図版34、図70、PL19)

位置：L-R18にある。

墓坑：SB558床面直下のIII C層上面で検出された。卵形でほぼ北北西—南南東に主軸をもつ。埋土はオリープ褐色砂質ブロックを含む褐色砂質土で炭化物が混在する。底面の長径120cm、短径84cm、掘り込み面からの深さは33cmである。

人骨：底面直上から仰臥屈葬人骨が出土した。頭位は344度。顔面は右下方を向く。左上肢は伸展させているが、右は前腕部が欠損しているためわからない。下肢はSH753と同様に、左右とも股関節を曲げ膝を強く屈曲させて、脛骨の遠位端を寛骨付近に置いている。下半身の左側に腰が並んでいた。

時期：SH763・764と同じく、SB558との関係から、V期以前の構築と考えたい。

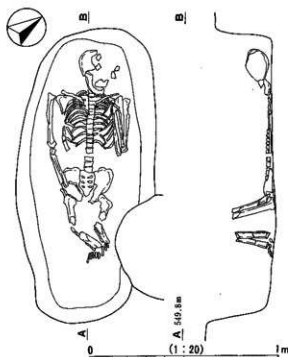


図71 SH763人骨出土状態

**SH763** (図版34、図71、PL20)

位置：L—Q19にある。

墓坑：SB558床面直下で確認された。隅丸長方形でほぼ北西—南東に主軸をもつ。埋土は多量の細角礫とオリープ褐色砂質土を含む暗褐色土で、炭化粒もみられる。底面の長径142cm、短径58cm、検出面からの深さは34cmである。

人骨：底面直上から仰臥屈葬人骨が出土した。頭位は304度。顔面は土圧により破損が著しいものの、おそらく左下方を向いていたと思われる。右上肢は伸展させ、左は肘を強く折り曲げて、手先を肩に乗せている。下肢は左右とも股関節で90度曲げ膝を立てている。

**SH764** (図版34、図72)

位置：L—P19にある。

墓坑：SB558床面直下で確認された。楕円形で主軸は北西—南東をむく。埋土は細角礫とオリープ褐色砂質ブロックを含む褐色砂質土で、炭化粒もみられる。底面の長径103cm、短径48cm、検出面からの深さは21cmである。

人骨：床面直上から頭蓋骨・上肢骨・下肢骨が出土した。頭位は332度。顔面は右下方を向く。左上肢は伸展しているが、右は前腕部が欠損しているためわからない。下肢は左右とも股関節で折り曲げて、膝を左に倒している。なお、体幹上に拳大の礫が散乱していた。

時期：SH762・763と同様、SB558との関係からIV期以前に構築されたものと思われる。

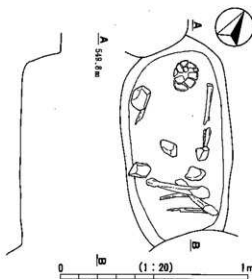


図72 SH764人骨出土状態

**SH767** (図版41下)

位置：M—B19にある。

墓坑：SB553の張り出し部敷石直下で検出された。卵形で

ほぼ北北東-南南西に主軸をもつ。埋土は細角礫を含む褐色粘質土で、全体に炭化物を混在する。底面の長径は130cm、短径67cm、検出面からの深さは27cmである。

人骨：底面の北壁寄りから骨片がまとまって出土した。

時期：次のSH768同様、SB553との関係からVI期よりは古いことは間違いない。

**SH768** (図版41下)

位置：M-B17にある。

墓坑：III C層上面で検出された。卵形では東西に主軸をもつ。埋土は細角礫を含む暗褐色粘質土で、下層は褐色砂質土になる。底面の長径100cm、短径68cm、検出面からの深さは22cmである。

人骨：床面の東寄りからまとまった骨片が、また西側からは大腿骨が出土している。頭位は東であろう。

東側の骨のまとまりの上には礫が3個置かれていた。

時期：SH767同様、SB553との関係からVI期より確実に古い。

**SH771** (図版35・37)

位置：L-S17にあり、SH690を切る。

配石：I層上面で確認した。硬砂岩主体の長礫を楕円形に並べ、中央には長大な礫が横たわっている。

墓坑：配石面直下で確認した。楕円形ないし西部でやや広がりをもつ卵形で、主軸は西北西-東南東を向く。底面の長径は70cm、短径37cm、掘り込み面からの深さは34cmである。

人骨：底面直上から腹部以下を欠く頭位263度の仰臥人骨が出土した。頭蓋骨は土圧による劣化が著しいものの、おそらく顔面は左下方を向く。前腕部を欠くため上肢の位置はわからない。下肢も不明である。

時期：III段階の土器をもつSH690を切るから、本址はIII期以降構築されている。

**SH773** (図版34)

位置：L-O17にある。

墓坑：SB560の床面敷石を精査している段階で確認する。楕円形で主軸は西北西-東南東を向いていたものと思われる。埋土は茶褐色粘質ブロックを含む暗褐色で、多量の礫と炭化物が混在する。底面の長径65cm、短径38cm、検出面からの深さ16cmである。

人骨：埋土中から骨片が出土した。

その他の遺物：炭化したクルミ、磨石類Iが出土した。

時期：SB560の敷石を除去して構築していることから、II期以降に構築されたものと考えられる。

**SH775** (図版34)

位置：L-O18にある。

墓坑：SB551の床面精査の段階で確認する。長方形で主軸はほぼ東西を向く。埋土は細角礫を含む暗褐色粘質土で、多量の礫と炭化物が混在する。底面の長径85cm、短径55cm、検出面からの深さは26cmである。

人骨：底面の東寄りに頭蓋骨が認められたほか、断片的に長幹骨片が出土した。頭蓋骨の出土位置が原位置を保っているとするならば、頭位は東ということになる。

時期：SB551に係る柱穴を切り、SB558の床面下で検出されたことから、本址の構築時期はII期～V期までの間に比定される。

**SH777** (図版48・49)

位置：M-I 20にある。SH750・776に切られ、SH972・973を切る。

墓坑：SH750・776の精査段階にⅢC層上面で確認された。卵形で主軸は東北東-西西南西を向く。埋土は細角礫のオリブ褐色砂質ブロックを含む暗褐色粘質土で、炭化物が混在する。底面の長径95cm、短径73cm、掘り込み面からの深さは30cmである。

人骨：底面南西壁寄りから頭蓋骨が出土したほか、床面直上に骨片の集中がみられた。全体に劣化が激しく、埋葬姿勢その他については不明な点が多い。寛骨らしい骨片の直上に平石が置かれていた。

その他の遺物：磨石1が埋土中から出土している。

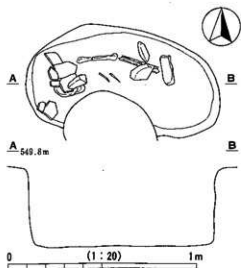


図73 SH782人骨出土状態

**SH782** (図版34、図73)

位置：L-P 18にある。

墓坑：SB558の床面直下のⅢC層上面で確認された。平面は楕円形を呈する。埋土はオリブ褐色砂質ブロックを含む褐色砂質土で、炭化物を混在する。底面の長径120cm、短径49cm、検出面から38cmの深さである。

人骨：底面直上から頭蓋骨・左上肢ほか若干の骨片が出土した。顔面に無文の鉢形土器が被せられていた。全身の劣化が著しく、左上肢を伸展させていること以外の埋葬姿勢はわからない。頭位は270度。

その他の遺物：上記無文の鉢形土器と、埋土中から石鏝1が出土した。

時期：伴出土器のⅣ期に比定される。

**SH784** (図版32、図74、PL20)

位置：L-N 18に位置する。

墓坑：SB551床面精査の段階で確認した。隅丸長方形ではほぼ北西-南東に主軸をもつ。埋土は細角礫や茶褐色粘質ブロックを含む暗褐色粘質土で、炭化物が混在する。底面の長径120cm、短径49cm、検出面からの深さは38cmである。

人骨：床面直上から襖被りの仰臥屈葬人骨が出土した。頭位は340度。顔面は左横を向く。上肢は左右とも肘を強く曲げさせて手先を肩に置いている。下肢は股関節で90度曲げ膝を立てている。

その他の遺物：顔面に被せられた土器はⅣ期の深鉢を縦に半割したものである。

時期：土器からみてⅣ期に比定される。

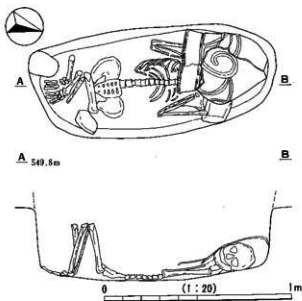


図74 SH784人骨出土状態

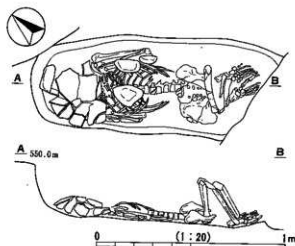


図75 SH785人骨出土状態

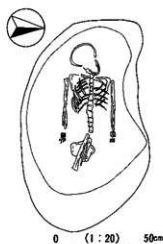


図76 SH786人骨出土状態

**SH786** (図版38、図76)

位置：L-T17にある。

墓坑：SH739人骨取り上げ段階で検出された。楕円形でほぼ東西に主軸をもつ。埋土は多量の細角礫とオリブ褐色砂質ブロックを含む暗褐色砂質土である。底面の長径は約85cm、短径60cm、検出面からの深さは19cmである。

人骨：床面直上から頭位が280度の仰臥屈葬人骨が出土した。頭蓋骨は土圧による破損が激しい。上肢は左右とも伸ばしている。右下肢は股関節を強く折り曲げている。左は不明。

**SH794** (図版41下、図77)

位置：M-C17にあり、SH805に切られる。

墓坑：III C層上面で確認する。卵形で主軸は北東-南西を向いている。埋土はオリブ褐色砂質ブロックを含

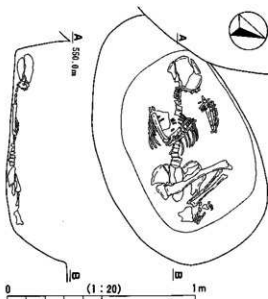


図77 SH794人骨出土状態

**SH785** (図版37、図75、PL20)

位置：L-S17にあり、SH742に切られる。

墓坑：本址は配石が伴わず、また他の遺構との重複が激しいこともあって土坑の検出が遅れたが、上層で検出したSH659の調査過程で出土した無文一括土器を手掛かりに周辺を精査した結果、砂質土や強粘性の黄白色土ブロックを含む茶褐色土に、大粒の炭化物が多量に混じる埋土をもつ落ち込みを確認する。落ち込みは南東で、径5-10cmの円礫を多量に含み、かつ炭化物の少ない埋土のSH742に切られているものの、ほぼ長楕円形を呈す。北東-南西に長軸をもち、底面の長径約125cm、短径45cmを測る。立ち上がりはほぼ垂直で、深さ

は約25cmである。底面はV層中位で止まる。

人骨：墓坑のほぼ中央埋土中から頭骨が出土した。頭骨を除き、さらに掘り下げたところで、底面直上から頭位319度の仰臥屈葬人骨が出土する。顔面を覆うように土器の大破片を置いている。また、胸の上には人頭大と拳大の礫を1個づつ乗せている。埋土内は礫がほとんど混入していないこと、2個の礫がいずれも肋骨に密着しているところから、意図的に置かれたものと思われる。顔はほぼ正面真上を向き、上肢は左右とも肘で強く折り曲げ、手先を肩に乗せている。下肢は膝を立てている。

その他の遺物：顔面に被せられた土器は無文深鉢である  
時期：上記土器によりIV期に比定できる。



む褐色砂質土で、多量の炭化物が混在する。底面長径は90cm、短径64cm、検出面からの深さ38cmである。

人骨：床面直上から仰臥屈葬人骨が出土した。頭位は267度。顔面は左下方を向く。右上肢は肘でやや強く折り曲げて手先を左肩付近に置いている。左は肘を強く曲げて左肩に手先を置いている。下肢は左右とも股関節をやや強く曲げて、膝を左に倒している。

その他の遺物：打製石斧1が埋土中から出土した。

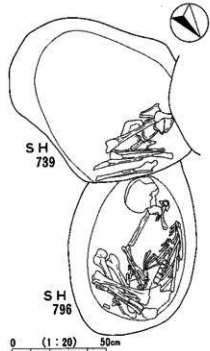


図78 SH739・796人骨出土状態

**SH796** (図版38、図78)

位置：L-J17にあり、SH739に切られる。

墓坑：SH663の精査段階にIII C層上面で確認された。卵形で主軸は北東-南西を向く。埋土は細角礫のオリブ褐色砂質ブロックを含む暗褐色粘質土で、炭化物が混在する。底面長径83cm、短径51cm、掘り込み面からの深さは27cmである。

人骨：床面直上から側臥屈葬人骨が出土した。頭位は250度。顔面は下方を向き、右上肢は肘を緩く曲げて手先を下腹部に置いている。左下肢は股関節で約90度、右はやや強く折り曲げ、膝を腹部の前方に置いている。ただ、下肢骨はやや不自然な位置関係にあり、攪乱を受けた可能性もある。

0 (1:20) 50cm

**SH789** (図版37、図79)

位置：L-T17にあり、SH800を切る。

墓坑：V層上面での検出作業により、5cm前後の円礫ならびに炭化粒を混在するやや粘性のある砂質土の落ち込みを確認する。落ち込みはさらに北東方向に延びており、別の遺構(SH800)との切り合いが予想されたため、先行トレンチを設定し、埋土の違い等観察しながら掘り下げる。埋土に顕著な違いは認められなかったものの、本址より出土した人骨が破壊を受けていないことから、本址が、SH800を切っていると判断する。楕円形で北北東-南南西に主軸をもつ。立ち上がりはなだらかで、深さは約40cmである。底面での長径は127cm、短径51cmを測る。土坑底面はV層を抜き、一部でVI層に達する。

人骨：底面直上から頭位12度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔面はほぼ正面真上を向き、上肢は左右とも肘で強く折り曲げて手先を肩に乗せている。下肢は膝を立てながらやや右側に倒している。左寛骨に密着して刃器が出土するが、副葬品かどうか明確な判断はできない。

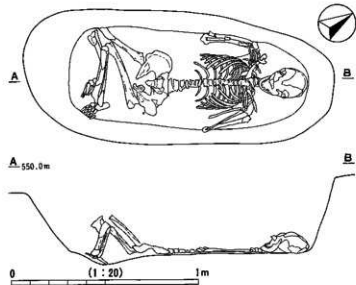


図79 SH789人骨出土状態

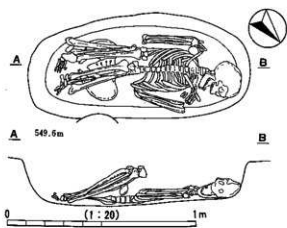


図80 SH803人骨出土状態

**SH803** (図版32・34、図80、PL21)

位置：L-O16にある。

墓坑：SB560床面下のⅢD層上面での精査中、細角礫・炭化粒を多量に混在する粘質シルトの落ち込みを確認する。楕円形で主軸は北西-南東を向く。立ち上がりはほぼ垂直で、底面までの深さは25cm、底面の長径101cm、短径42cmを測る。

人骨：底面直上から頭位297度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔面は左向き、上肢は左右とも肘で強く折り曲げて手先を肩に乗せている。下肢も膝が腹部につくまで強く折り曲げている。

その他の遺物：埋土中より磨石類1が出土した。

時期：SB560との切り合いから考えて、II期以前の比較的古手の墓址である。

その他の遺物：刃器1が出土した。

**SH801** (図版38・41)

位置：M-A16にある。

墓坑：ⅢC層上面で確認した。不整長方形で主軸は北東-南西を向く。埋土は細角礫とオリープ褐色砂質ブロックを含む褐色砂質土で、炭化物を混在する。底面の長径は100cm、短径40cm、検出面からの深さは16cmである。

人骨：底面の南西壁寄りからややまとまった骨片が出土したほか、北東壁寄りでは下肢骨がみられた。全体の埋葬姿勢はわからないが、頭位は南西を向いた屈葬人骨であろう。

**SH805** (図版41下、図81、PL21)

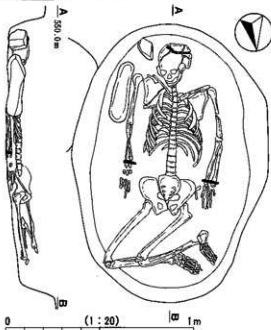


図81 SH805人骨出土状態

位置：M-B17にあり、SH794を切る。

墓坑：ⅢC層上面で確認された。楕円形で主軸は南北を向く。埋土は細角礫とオリープ褐色砂質ブロックを含む暗褐色粘質土で、炭化物が混在する。底面の長径134cm、短径84cm、掘り込み面から23cmの深さである。

人骨：床面直上から頭位190度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔面は右やや下方を向く。左右の上肢は伸展させ、下肢は左右とも股関節を緩く曲げて膝を右に倒している。なお頭蓋骨にはかんざし状、両手首には腕輪状の牙製品がみられた。右上腕骨の右側に長礫が置かれていた。

その他の遺物：人骨に装着された状態で牙製のかんざし・腕輪が出土した。いずれもイノシシの牙でできているものと思われる。

**SH808** (図版51)

位置：M-K15にある。

墓坑：SB563の床面精査の段階で確認された。楕円形で主軸はほぼ南北を向く。埋土は細角礫を含む暗褐色砂質土で、多量の礫と炭化物を混在する。底面の長径105cm、短径90cm、検出面からの深さは30cmである。底面壁際に礫を巡らせている。

人骨：北に頭位をもつ仰臥屈葬人骨が出土したが、運搬中に破損してしまい、詳細は不明である。

その他の遺物：打製石斧2、土偶1が埋土中から出土した。

時期：SB563の床面を壊していることから、Ⅲ期以降構築されたものと思われる。

**SH814** (図版38・41上)

位置：M-E17にある。

墓坑：ⅢC層上面で確認した。卵形で北北西-南南東に主軸をもつ。埋土は細角礫や茶褐色粘質ブロックを含む暗褐色粘質土で、炭化物を混在する。底面の長径98cm、短径70cm、検出面からの深さは15cmである。

人骨：床面の北寄りからヒトの歯が、南東壁寄りから下肢骨が出土した。これらがほぼ原位置を保ついるとするならば、頭位は北北西ということになる。

その他の遺物：打製石斧1が埋土中から出土した。

**SH815** (図版37、図82、PL22)

位置：L-T19にあり、SH623に切られる。

墓坑：上層に作られたSH623により、遺構上面が破壊されていたことに加え、ⅢA層由来の角礫は一切含まず、わずかに炭粒を混在するⅢD層由来の砂質土が埋土の主体となるため、地山との差異を識別できず、検出が遅れる。結果的には、北側に位置するSH743の人骨取り上げの際、本址に伴う頭骨が出土したことにより、精査を行うことになる。平面は北東-南西に長軸をもつ楕円形。底面の長径105cm、短径64cmを測り、立ち上がりはほぼ垂直で深さは約36cm、底面はV層を抜きVI層上面に達している。

人骨：底面直上から頭位31度の伏臥屈葬人骨が出土した。顔は下顎を前方へつき出す。左上肢は肘で直角に曲げ外側に開き、右は鋭角に曲げ手先を顔の右横に置いている。下肢は膝を曲げて左にねかせている。単独葬で伏臥屈葬姿勢をとるものは本址のみである。しかも、周辺で北東方向に頭位をとるものはない点もあわせて、特殊な例といえる。

時期：検出が遅れたため、本址の帰属時期は不明な点が多いものの、SH623に壊され、遺構のほとんどがⅢD層中に入ることから、古手に属すると思われる。

**SH818** (図版46)

位置：M-G17にある。

墓坑：SB564床面精査の段階で確認した。平面

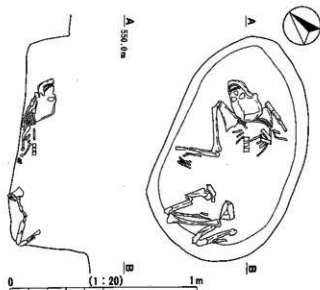


図82 SH815人骨出土状態

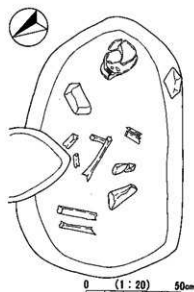


図83 SH842人骨出土状態  
さである。

人骨：床面直上から、南へ頭位を向けた仰臥屈葬人骨と別の1体とが出土した。骨の劣化が極めて激しく、埋葬姿勢など詳細は不明である。

その他の遺物：ちょうど肋骨にあたる位置からヒスイ製の玉が伴出した。垂飾りであろう。ほかに、石鏃2、打製石斧・磨石類・刃器各1が出土している。

時期：SB559との関係からV期以降に比定される。

**SH842** (図版51、図83)

位置：M-K16にある。

墓坑：III C層上面で確認された。楕円形で主軸はほぼ西北西-東南東を向く。底面の長径125cm、短径70cm、検出面からの深さは12cmである。埋土はオリブ褐色砂質ブロックを含む褐色粘質土で、炭化粒が混在する。

人骨：底面の東側から顔面を正面に向けた頭蓋骨が出土したほか、骨片が散在していた。

その他の遺物：埋土中から48点と多量の石器制作時の破片が出土し、注目された。

**SH851** (図版27・28、図84)

位置：L-L13にあり、SH854・873を切る。

配石：IID 4層下部において、長礫によってほぼ楕円形にならぶ配石を確認する。

墓坑：配石を約15cmほど削平した段階で掘り方を確認、南東側を半裁して掘り下げたところ、確認面下約40cmの南東壁際から頭蓋骨が出土したため、人骨の範囲を確認する方向で土坑内部を広げて、おおよそ全体のプランを把握する。埋土中に、II～III段階の土器片の混在が目立ったが、のちにこれは、SB567を覆っていたためと判明する。平面は楕円形を呈する。確認面からの深さは55cmで、立ち上がりはほぼ垂直といてよい。底面は長径15cm、短径54cmを測る。

人骨：頭蓋骨、左右上腕骨、左桡骨および尺骨、左右大腿骨と脛骨の一部が出土した。骨の保存状態は不良であるものの、全体として解剖学的な位置を保っている。左右の大腿骨は体側に添っており、左前腕部はやや強く折り曲げて、手先を右腕の上に置いている。下肢は大腿骨の遠位部を南に向け、膝で折り

はほぼ三角形で、主軸は南北を向く。底面長径115cm、短径68cm、検出面からの掘り込みは20cmである。底面の北端に平石が据えられていた。

人骨：底面東寄りに骨片が集中していた。

その他の遺物：集中していた骨片上から無文の鉢形土器が逆位で出土した。おそらく甕破りの残骸であろう。ほかに石鏃2点が出土した。

時期：上記の土器から判断して本址の構築時期はV期に比定される。

**SH824** (図版46)

位置：M-I 17にあり、SB559の炉を切る。

墓坑：SB559の床面で確認された。隅丸長方形で主軸は北北東-南南西を向く。埋土は細角礫を含む黒褐色粘質土で、炭化物が混在する。底面の長径125cm、短径70cm、掘り込み面からは15cmの深

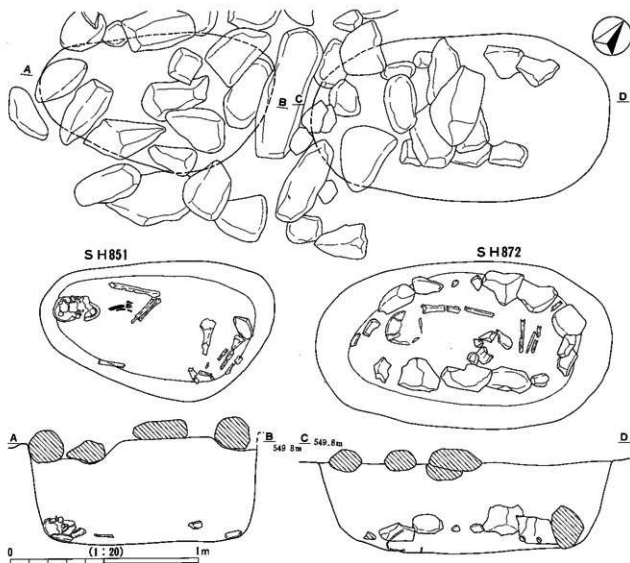


図84 SH851・872上面配石、人骨出土状態

返して足先を北へ向けている。頭位は242度である。

その他の遺物：人骨の胸直上の位置からイノシシの牙製装身具が出土した。

時期：SB567を壊し、IID 4層下部ないしIIIA層上面に配石が造られていることからV期以降に比定されることは間違いない。

#### SH852 (図版31・33、図85、PL22)

位置：L-K11にあり、SB567の炉を切る。

配石：IIIA 1層上面より、東西に各一本の対になる立石と立石間の平石を確認する。全体形は定形を示さず、土坑の中心から南西方向に約50cmずれる。

墓坑：配石より北東にややずれをみせながら、IIIA 1層上面で円礫・炭化物・黄褐色粘土粒を混在する暗褐色粘質土の落ち込みを認める。主軸が西南西-東北東の卵形で、検出面での長径141cm、短径116cm、底面ではそれぞれ121cm、83cmを測る。底面までの深さは約59cmで、途中SB567の炉を壊して床面を抜いている。

人骨：底面直上から頭位248度の仰臥人骨が出土した。頭蓋骨が一部破損しているものの、ほぼ全体形を

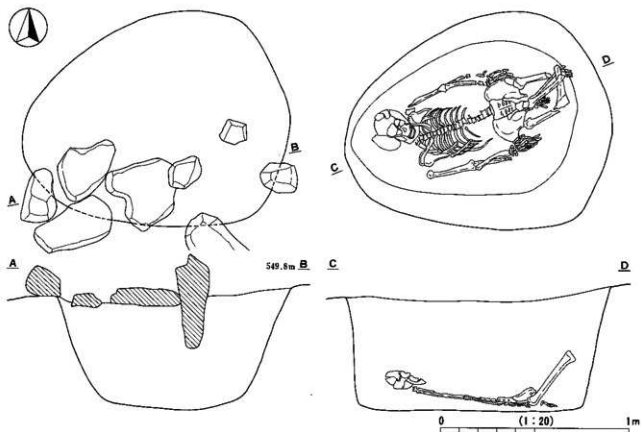


図85 SH852上面配石、人骨出土状態

留めている。頭蓋骨は左やや下向き、上肢は左右とも体側に添ってまっすぐ伸ばしている。下肢は、あぐらの形で膝を立てたような形になる。

その他の遺物：磨石類2が埋土中から出土した。

時期：SH851・852はSH501などのグループに続き、IID 4層下部ないしIIIA層上面に配石が造られていることから、V期以降に構築されたものと思われる。

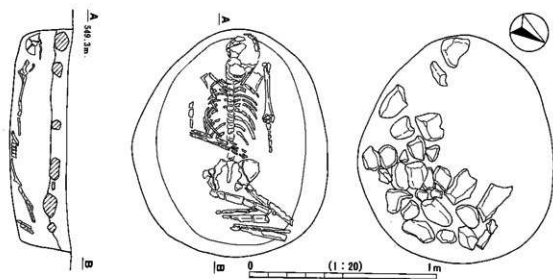


図86 SH853上面配石、人骨出土状態

**SH853** (図版31・33、図86)

位置：L-J11にある。

墓坑：掘り込みが確認できたのはⅢA 2層上面である。主軸を西南西—東北東にもつ卵形で、検出面での長径121cm、短径103cm、底面ではそれぞれ110cm、79cmを測る。確認面から底面までの深さは約30cmで、SB567の床面を抜いている。埋土は円礫・炭化物を混在する暗褐色粘質土で、埋土上部に礫のまとまりはあるが、礫上部にもさらに埋土が乗るため、土坑上面に構築された配石とは異なる性格をもつものと思われる。底面は緩やかな凹みを呈する船底形である。

人骨：底面直上から、ほぼ全骨格が揃った人骨が出土した。ただ、骨は劣化が進み全体に脆弱である。頭骨はほぼ正面を向き、右上肢は肘で緩く曲げて手先を左腰部に乗せている。対して、左は体側に添ってまっすぐ伸ばしている。下肢は、左右とも大腿骨を北に倒し、膝で折り曲げて足先を南へ向けている。

時期：SB567の床面を壊しているのだから、Ⅲ期以降であることは確実である。

**SH854・858** (図版31・33、図87、PL23)

位置：L-K12にある。

調査経過：ⅢA 1層上面において礫のまとまりを確認するが、定形を成さないため記録後除去し、SB567埋土上層で精査したところ、円礫・炭化物を混在する暗褐色粘質土の落ち込みを認める。落ち込みの形状は不整楕円形であり、2基以上の土坑が切り合っていると考えられたが、埋土差が明瞭でないため断面観察を行いながら掘り下げる。土坑南西端と北東端から頭骨が出土したため、両者の接点にあたる中

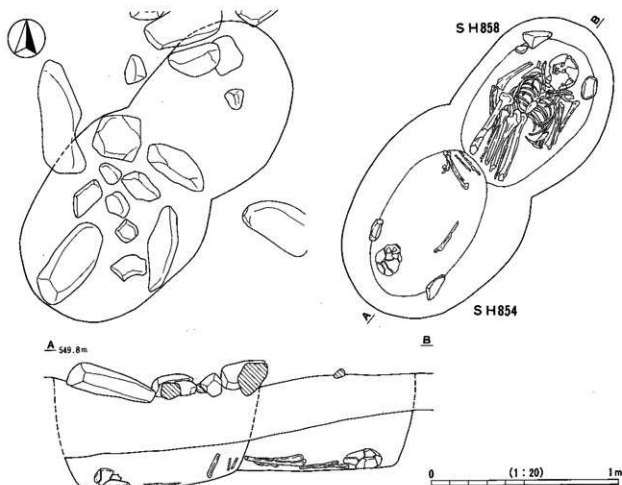


図87 SH854・858上面配石、人骨出土状態

尖部を精査する。その結果、南西側の人骨(854)の脛骨および腓骨が北東側(858)の下肢骨より上位に位置することを確認する。のちに図面照合の結果、SH854には不整形の配石が伴い、しかもそれがSH858の配石を切っていることがわかる。

配石：854は比較的大きな礫を周囲に配して、内部に小児頭大の礫を充填している。南西端の礫は立石であったかもしれない。858は礫が散在している程度である。

墓坑：両者とも主軸が南西-北東の楕円形で、底面は854の長径が84cm、短径48cmを測り、858は82・55cmを測る。底面までの深さは約25cmで、858はSB567の炉を切る。

人骨：両址とも、底面直上から仰臥人骨が出土した。858はほぼ全骨格を留めており、頭位は38度を測る。顔面を左やや下に向け、右上肢は肘を緩く曲げて手先を腰の下にしている。対して左は、肘で上腕骨近位端方向へ強く折り曲げ手先を肩に置いている。下肢は、左右大腿骨を寛骨との関節部で強く折り曲げ膝を腹部の上に置き、膝を折り曲げて、左右脛骨遠位端を尻方向に向けている。一方、854からは、頭蓋骨、右上腕骨の一部、右大腿骨・脛骨および腓骨の一部が出土しただけである。埋葬姿勢は頭蓋骨・下肢骨から判断して仰臥であり、下肢は大腿骨を北西に倒し、膝で折返して足先を南東へ向けている。

時期：両者ともSB567の床面を壊しており、Ⅲ期以降であることは確実である。

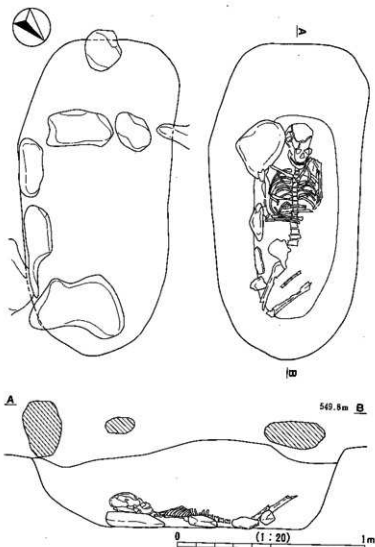


図88 SH855上面配石、人骨出土状態

**SH855** (図版31・33、図88、PL22)

位置：L-L11にあり、SH864を切る。

配石：ⅢA 1層上面において確認する。

四辺に長礫を用いた長方形で、南西-北東に主軸をもつ。

墓坑：上面配石より南西方向にずれ、ⅢA 2層上面で掘り込みが確認された。主軸を南西-北東にもつ隅丸長方形で、底面での長径は107cm、短径45cm、底面までの深さは45cmである。埋土は土器片・円礫・炭化物を混在する暗褐色粘質土で、底面の南東壁際に礫を並べている。

人骨：仙骨、左寛骨および下肢骨を除き、ほぼ全骨格が出土する。頭蓋骨はほぼ正面を向き、左右の上腕骨は体側に添って伸ばし、肘で90度曲げて手先を脇に置いている。右大腿骨はやや立ち気味ながら若干右に倒し、膝で折り曲げて足先を尻の下に置いている。

その他の遺物：磨石類1が出土した。

**SH856** (図版31・33、図89)

位置：L-L13にあり、北東側でSH8



57と接する。

配石：配石の平面図と墓坑平面図とを照合したところ、本址に伴う配石は定形をなさない長円形の集合であることがわかった。

墓坑：ⅢA 2層上面で掘り込みが確認された。主軸を南西—北東にもつ不整形円形で、底面での長径86cm、短径43cmを測る。確認面から底面までの深さは約26cmである。埋土は円礫・炭化物を混在する暗褐色粘質土である。

人骨：頭蓋骨の一部、右上腕骨および橈骨、左右大腿骨、左胫骨および腓骨が出土した。残存状態は不良ながら、各部位は解剖学的な位置を示しているものと思われる。右上肢は体側に添って伸ばし、下肢は大腿骨を北東に倒し、膝で折り曲げている。頭位は24度である。

**SH857** (図版31・33、図89、P L22)

位置：L—L13にある。

配石：ⅢA 1層上面において数点の礫を検出したが、定形をなさずまとももない。本址はSH856に切られていることから、構築時の配石がのちに破壊されたことも考えられる。

墓坑：掘り込みが確認できたのはⅢA 1層中である。主軸が西南—東北の楕円形で、底面での長径96cm、短径57cmを測る。底面までの深さは約30cmであるが、配石があるⅢA 1層上面とは約60cm程度の差がある。埋土は土器片・炭化物・黄褐色粘質土を混在する暗褐色粘質土である。

人骨：底面直上から、足先を除きほぼ全骨格の揃う頭位246度の仰臥人骨が出土した。頭骨はほぼ正面を

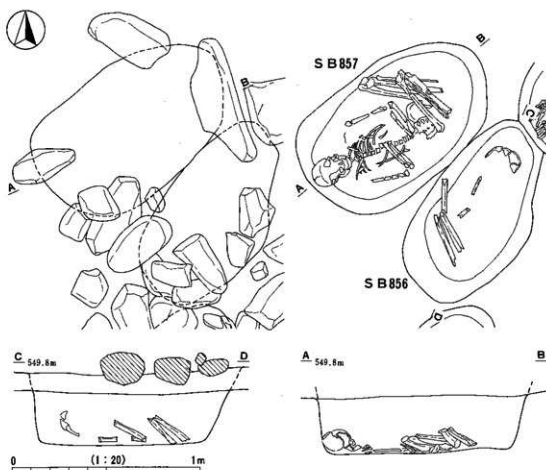


図89 SH856・857上面配石、人骨出土状態

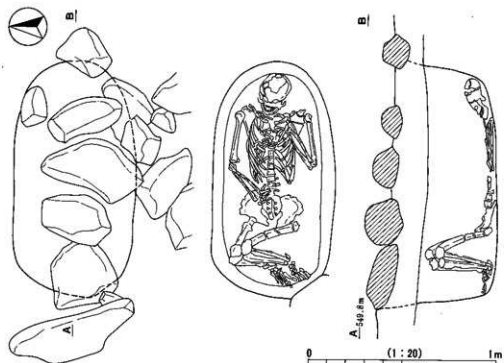


図90 SH859上面配石、人骨出土状態

向き、左上肢は肘を90度緩く曲げて手先を右腹部に置き、右は上腕骨を体側から若干離し、肘をやや強く曲げて手先を左胸部に置いている。下肢は、左右とも大腿骨を北西方向に倒し、膝で強く折り返して、足先を尻の北東に置い

ている。

その他の遺物：頭骨右脇より、半環形の鉢形小形土器1が出土した。本址に伴う副葬品としてよからう。

外面には文様がなく、口縁部内面に一条の沈線が施されている。

時期：小形土器から考えて、V期に比定される。本址と同一の検出面でとらえられたSH854～859f、同じ時間幅の中でとらえてよからう。

**SH859** (図版31・33、図90、P L23)

位置：L-L12にあり、SH856に切られる。

配石：IID 4層下部において確認する。楕円形の礫を長軸方向に連ねて長方形に巡らせている。

墓坑：配石下部を約10cmほど削平した段階で土坑の掘り形を確認する。

平面は楕円形で、確認面からの深さは39cm、立ち上がりはほぼ垂直とってよい。底面は、長径111cm、短径52cmを測る。

人骨：全骨格が揃い、比較的残存状態が良い。左右の上腕骨は体側に添って伸ばし、右肘は緩く曲げて手先を下腹部に置き、左肘は強く折り曲げて、手先を左胸上部に置いている。下肢は左右の膝を立てて折り曲げている。頭位は90度である。

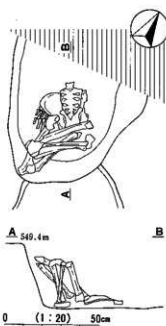


図91 SH864人骨出土状態

**SH864** (図版33上、図91)

位置：L-L11にある。南側でSH860を切り855に切られるほか、西側では878を切る。

墓坑：SH855の人骨取り上げ中、頭蓋骨の下から別の個体と考えられる大腿骨が出土した。精査したところ、これに係る落ち込みを確認でき

た。北半は地区境のトレンチによってすでに破壊されており正確なプランは把握し難いが、ほぼ楕円形といってよからう。底面の長径は推定で110cm、短径53cm、検出面からの深さは63cmである。主軸は北西-南東を向く。

人骨：左右の大腿骨・胫骨および腓骨と、寛骨・仙骨、右手指骨が出土し、上半身はSH878構築に伴って、欠損している。下半身はほぼ解剖学的な位置を留め、大腿骨を南西に傾け、膝で折り返して足先を北東に向けている。頭位は約330度を示す。

その他の遺物：断面形が弧状を呈し、つまみがなく、2孔一対の結縛用の穿孔ある土製蓋が埋土中から1点出土した。

時期：SB567より新しくSH855より古いことから、Ⅲ期～Ⅴ期までの間に構築されたことになる。

#### SH872 (図版33上、図84)

位置：L-L12にある。

配石：SB566の張り出し部敷石直下より、2列平行に並んだ礫が確認された。

墓坑：配石面で確認される。楕円形で主軸は北東-南西を向く。底面の長径は120cm、短径は70cm、検出面からの深さは55cmである。壁際には礫を巡らせている。

人骨：床面直上から仰臥屈葬人骨が出土した。頭位は240度。骨全体の保存状態は極めて悪いため、顔面の向きや右上肢の位置関係は不明であるが、左上肢は伸展させ、下肢は左右とも股関節で90度曲げて左へ倒している。

時期：SH851などのグループと同様Ⅴ期に比定されよう。

#### SH879 (図版33上、図92、PL24)

位置：L-L13にあり、SH856・857の直下に当たる。

墓坑：SH856・857の人骨取り上げ中、下面より別の個体と考えられる大腿骨が出土した。精査したところ、これに係る落ち込みを確認できた。掘り込み面はすでに破壊されており正確なプランは把握し難いが、楕円形といってよからう。底面の長径118cm、短径は62cm、検出面からの深さは28cmである。主軸は北東-南西を向く。

人骨：比較的保存の良い仰臥屈葬人骨が床面直上で出土した。頭位は255度。顔面を右に向け左右の上肢は伸展させている。下肢は股関節で90度折り曲げて、膝を立てている。

その他の遺物：石鎌1が埋土中から出土した。

時期：Ⅴ期以降に比定されるSH856・857より古く、SB567より新しいから、Ⅲ期～Ⅴ期までの間に構築されている。

#### SH908 (図版53、図93)

位置：M-K17にあり、SH904・905を切る。

墓坑：ⅢC層上面で確認される。楕円形で主軸は北北東-南南西を向く。埋土は細角礫とオリープ褐色砂質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物和礫が混在する。底

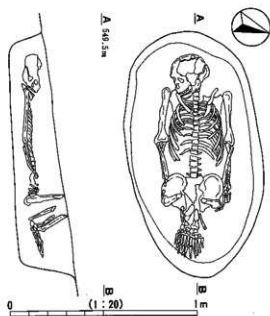


図92 SH879人骨出土状態

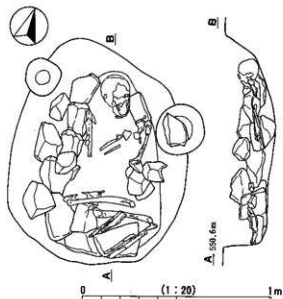


図93 SH908人骨出土状態

面の長径は97cm、短径は60cm、検出面からの深さは18cmである。壁際に大きめの礫が一巡している。  
 人骨：底面直上から、頭位0度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔面は損傷が著しくほぼ正面という以外わからない。右上肢は肘でやや強く折り曲げて、手先を左肩に置いている。左は前腕部を欠損しているため不明。下肢は左右とも股関節で約90度曲げて、膝を左に倒している。なお、下肢骨の下に平石が敷かれていた。

**SH924** (図版47、図94、P.L24)

位置：M-J 17にある。  
 墓坑：III C層上面で確認する。卵形ではほぼ南北に主軸をもつ。埋土は細角礫とオリープ褐色砂質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物を混在する。底面の長径

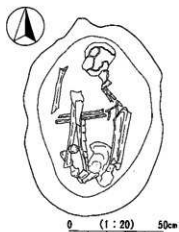


図94 SH924人骨出土状態

は85cm、短径60cm、検出面からの深さは20cmである。  
 人骨：床面直上からの頭位0度の仰臥屈葬人骨が出土した。頭蓋骨は損傷が激しくて、顔面の向きなどわからない。右上肢は肘を約90度曲げ、手先を左脇腹に置いている。下肢は股関節を180度強く屈曲させて、膝は開き気味に胸の付近へもってきている。  
 その他の遺物：磨石類1が埋土中から出土した。

**SH938** (図版47・49、図95)

位置：M-H15にあり、SH937・939に切られる。  
 墓坑：III C層上面で確認する。楕円形で北東-南西に主軸をもつ。埋土は細角礫とオリープ褐色砂質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物と礫が混在する。底面の長径は推定100cm、短径55cm、検出面からの深さは30cmである。

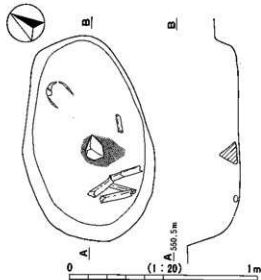


図95 SH938人骨出土状態

人骨：底面の北壁寄りから頭蓋骨が、南寄りから下肢骨が出土しているほか、中央付近に骨盤と思われる骨片がみられ、その上に礫が乗っていた。これらが解剖学的な位置を留めているとするならば、北に頭位をもつ仰臥屈葬人骨ということになる。

**SH952** (図版48・49)

位置：M-H18にあり、SH923・942に切られる。  
 墓坑：III C層上面で確認する。平面は楕円形と思われ、北西-南東に主軸をもつ。埋土は細角礫とオリープ褐色砂質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物を混在する。底面の長径は推定で110cm、短径60cm、検出面からの

深さは40cmである。

人骨：床面南東の土器内から骨片が出土した。劣化が著しく、頭蓋骨かどうか断定できなかった。

その他の遺物：口縁を下にした鉢形土器が出土した。他の事例から考えて顔面を覆っていた土器と思われる。土器の内部に骨片がみられたが、ほかに石鏃1と碎片48が出土している。

時期：土器からみてⅢ期に比定されよう。

**SH958** (図版48、図96、P.L25)

位置：M-H18にあり、SH970に切られ、SH959・960・980を切る。

配石：SB559の張り出し部敷石を除去したところで、北西コーナー付近から、北辺を巡り東辺に並ぶ礫を検出する。本来は一周して楕円形に配列されていたものと思われる。東辺の列はSH970に主体をおくが、土坑の前後関係から両者に共通のものであろう。配石のほぼ中央北寄りに立石があり、根元は人骨の膝よりやや上まで入り、礫で根固めしている。なお、この立石は上面に構築された住居址張り出し部敷石から突き出していたことから、おそらく住居構築者は、下部に墓があることを周知していたと思われる。

墓坑：配石直下を精査したところ、敷基の土坑が切り合っていることがわかり、先行トレンチにより埋土観察を行う。本址の埋土は細角礫を多量に含む黒褐色粘質土であり、東側のSH970の黄褐色粘土塊を混在する埋土がこれを切り込んでいる。また、西側のSH959・960は砂質土を基調とする埋土で、本址との識別は比較的容易だった。主軸は北北西-南南西を向き、平面は隅丸長方形を呈する。立ち上がりは垂直に近く、底面の長径174cm、短径85cmを測る。

人骨：底面直上から頭位207度の仰臥伸展葬人骨が出土した。顔は左向き、上肢は左が肘を強く折り曲げて肩に手先を置き、右はまっすぐ伸ばして体側につけている。肋骨に不自然な乱れが観察でき、いわゆ

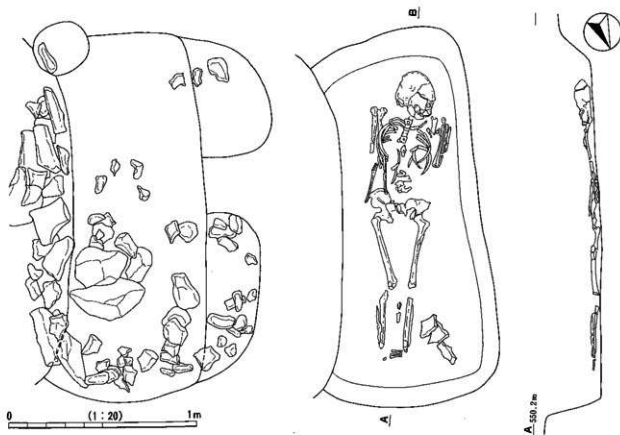


図96 SH958上面配石、人骨出土状態

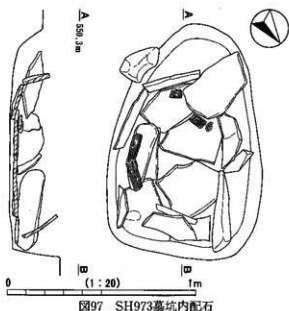


図97 SH973墓坑内配石

る解剖学的な位置にない。

その他の遺物：上部配石中から打製石斧1、埋土中より石鏃1が出土した。

時期：SB559の床面敷石下で検出されていることから、V期以前に構築されている。本遺跡中、伸展姿勢は本址を含めて4例であり、極めて特異な存在といえる。約6m東には、本址と約90度頭位を違えた北西頭位の伸展人骨（SH652）が出土しており、関連性が注目される。

**SH973** (図版48、図97、PL25)

位置：M-I 20にあり、SH777・778に切られ、972を切る。

墓坑：SH777・778の精査段階で確認される。卵形で主軸は北東-南西をむく。埋土は細角礫と茶褐色粘質ブロックを含む褐色土で、炭化物を混在する。平石を壁に立てかけるとともに底面に敷いて、石棺状に構築している。墓坑底面の長径109cm、短径70cm、検出面からの深さは35cmである。また、内法は長径95cm、短径50cmである。

人骨：底面敷石の直上から炭化物および骨片が出土した。

その他の遺物：磨石1が出土した。

**SH979** (図版48、図98、PL24)

位置：M-H18にあり、SH980を切る。

墓坑：III C層上面で確認される。長方形で主軸はほぼ南北を向く。埋土はオリーブ褐色砂質土を含む褐色土で、炭化物を混在する。底面の長径97cm、短径56cm、検出面からの深さは20cmである。

人骨：底面直上から頭位4度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔面から腹部にかけて、深鉢の大形破片2個体を被せている。顔面は左下方を向き、右上肢は伸展させ、左は肘を約30度曲げて、手先を股間に置いている。左右の下肢は、股関節で約120度折り曲げて膝を左に倒している。膝のすぐ左に礫が2個置かれていた。

その他の遺物：顔面から腹部にかよせられた深鉢の大形破片が出土した。

時期：上記深鉢からIV期に比定できよう。

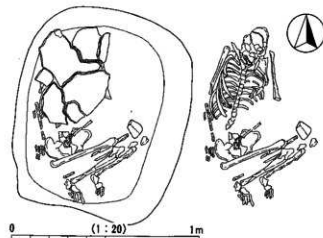


図98 SH979人骨出土状態

**SH1006** (図版39)

位置：M-C13にある。

墓坑：III A層上面で確認された。長方形で主軸は西北西-東南東を向く。埋土は細角礫と黄褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物が混在する。石棺状に敷石されていたと思われる平石が底面近くで重なり合っていた。底

面の長径は80cm、短径60cm、検出面からの深さは57cmである。

人骨：底面の敷石直上から骨片が出土した。

その他の遺物：小形土器が埋土中から出土した。

#### SH1012 (図版39)

位置：M-B14にある。SH1007に切られ、SH1026・1045を切る。

配石：III A層上面で確認された。小児頭大の礫が散在しているだけで、特に定形をなさない。

墓坑：配石面で確認された。楕円形で主軸は北北西-南南東を向く。埋土は細角礫を含む暗褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径90cm、短径44cm、検出面からの深さは9cmである。

人骨：底面付近から骨片が出土した。

その他の遺物：埋土中からヒスイ製の玉が1点出土した。

#### SH1021 (図版39)

位置：L-T13にある。

墓坑：IV層上面で確認された。ほぼ円形で主軸は大体南北を向く。埋土は細角礫と茶褐色粘質ブロックを含む褐色土で、礫と炭化物が混在する。底面の長径55cm、検出面からの深さは45cmである。

その他の遺物：埋土中より土偶・土製蓋各1かが出土した。

#### SH1023 (図版35・36)

位置：L-S13にある。SH1069を切り、1024に切られる。

配石：SB571の埋土中で確認された礫が、本址に伴う上面配石である可能性はあるが、特にまとまりがないため断定はできない。

墓坑：上記の礫が集中する面で確認された。南側は攪乱を受けているが、おそらく平面はほぼ円形で、主軸は北西-南東を向く。埋土は細角礫と茶褐色粘質ブロックを含む褐色土で、礫と炭化物が混在する。

底面の長径は推定150cm、短径は推定で85cm、検出面からの深さは25cmである。

その他の遺物：床面直上から、長骨数点と粘板岩製の玉が1、また、磨石類1が上面の礫の中から出土した。

#### SH1047 (図版39)

位置：M-A14にあり、SH1046に切られる。

墓坑：IV層上面で確認された。楕円形でほぼ北北西-南南東に主軸をもつ。埋土は細角礫を含む褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径は50cm、短径33cm、検出面からの深さは17cmである。

人骨：底面の南寄りから頭蓋骨と思われる骨片が出土した。

#### SH1048 (図版39)

位置：L-T14にある。

墓坑：IV層上面で確認された。南側は攪乱を受けているが、おそらく平面は楕円形で、ほぼ東西に主軸をもつ。埋土は茶褐色粘質ブロックを含む褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径は66cm、短径は推定で40cm、検出面からの深さは30cmである。

人骨：底面の東寄りから頭蓋骨が出土した。土圧による損傷が著しく、顔面の向きなどはわからない。

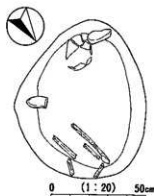


図99 SH1049人骨出土状態

その他の遺物：埋土中からIV期の深鉢がほぼ完形で出土した。副葬ないしは供献されたものかもしれない。

**SH1049** (図版36、図99)

位置：L-S14にあり、SH1066・1068を切る。

配石：SB571の埋土中で確認された。南側から東にかけて弧状に礫が巡る。墓坑：配石面で確認された。卵形で北北東-南南西に主軸をもつ。埋土は細角礫を含む黒褐色粘質土で、炭化物が混在する。底面の長径は73cm、短径は50cm、検出面からの深さは15cmである。

人骨：底面の南寄りから頭蓋骨が、北寄りからは下肢骨が出土した。骨の劣化が激しいため、細かな埋葬姿勢などはわからないが、解剖学的位置にあるとすれば、南に頭位をもつ仰臥屈葬人骨であろう。頭蓋骨のすぐ南に礫が置かれていた。

**SH1066** (図版35・36)

位置：L-S14にある。SH1049に切られ、1067を切る。

墓坑：SH1049の配石面直下で確認された。楕円形でほぼ南北に主軸をもつ。埋土は細角礫と黄褐色粘質ブロックを含む黒褐色粘質土で、炭化物が混在する。底面の長径は95cm、短径は54cm、検出面からの深さは20cmである。

人骨：底面の南壁際から頭蓋骨が出土した他、長骨が散在していた。

その他の遺物：SH1049の配石に混じって石皿片が出土しているが、位置関係から本址に係るもの可能性が高い。

**SH1068** (図版35・36、図100)

位置：L-R13にあり、SH1049に切られる。

墓坑：SH1049の精査段階で確認された。楕円形でほぼ東西に主軸をもつ。埋土は細角礫と茶褐色粘質ブロックを含む褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径は103cm、短径は70cm、検出面からは18cmの深さである。

人骨：底面直上から頭位280度の仰臥屈葬人骨が出土した。頭蓋骨は破損して解剖学的位置を離れ、脊椎の北に動いている。右上肢は肘を強く曲げて手先を胸の位置に置き、左は90度強曲げて右脇腹付近に置いている。また、左下肢は股関節を強く折り曲げて、膝を腹近くに置いているが、右は解剖学的位置を留めていない。

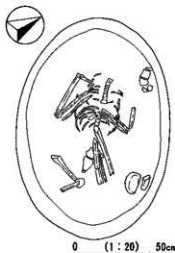


図100 SH1068人骨出土状態

**SH1081** (図版51、PL25)

位置：M-J13にある。

墓坑：SB572・574の床面精査で確認された。卵形で北東-南西に主軸をもつ。埋土はオリープ褐色砂質ブロックを含む褐色土である。底面の長径は65cm、短径45cm、検出面からの深さは33cmである。

出土遺物：底面の西寄りから口縁部を下にした深鉢が出土した。I期に比定されよう。深鉢内に骨片がみられた。



## SH1082 (図版51)

位置：M-J13にある。

墓坑：SB572・574の床面精査で確認された。長楕円形で北東-南西に主軸をもつ。埋土はオリブ褐色砂質ブロックを含む褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径は135cm、短径42cm、検出面からの深さは38cmである。

その他の遺物：打製石斧・刃器・磨石類各1が埋土中から出土した。これらに共伴する完形漆鉢は口縁部を斜め下に向けていた。I期に比定される。

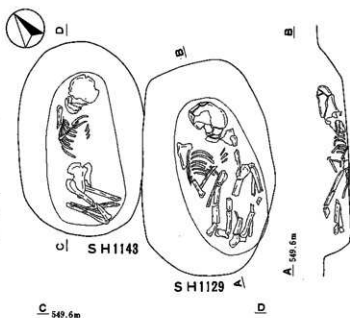


図101 SH1129・1143人骨出土状態

## SH1129 (図版19・22、図101)

位置：L-I5にある。

配石：SB577張り出し部の敷石除去後、本址を構成すると思われる配石を検出する。ただし住居址構築に伴う破壊を受け原形を留めていない。

墓坑：NE-SWを主軸とする楕円形を呈し、長径85cm、短径44cm、深さは約35cmで、下層のSB579の床面を破壊している。人骨の南東脇に並ぶ石列は、礎の長軸を土坑の壁に沿わせて整然と配置していることから、被葬者に伴う土坑施設であると考えられる。

人骨：底面直上より頭位31度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔面は左下方を向き、右上肢は肘をやや強く折り曲げて手先を胸に置いている。左は前腕部が欠損しており不明である。下肢は股関節を強く折り曲げて膝が腹部付近についている。

その他の遺物：頭蓋骨の北東で石鏃が出土したが、副葬品か埋土内への混入品かの判別は難しい。

時期：配石の構築面、土坑の平面形や主軸方向、人骨の頭位などから判断して、本址の被葬者は隣接するSH1143の被葬者と密接な関係があると思われる。また、SB577より古く、SB578よりは新しいのでIV~VI期までの構築であろう。

## SH1136 (図版19・21、図102、PL25)

位置：L-I5にある。

配石：SB577の張り出し部敷石精査の段階で確認する。南北に塊状の砂岩を置き、あいだに平石を敷く。周囲には拳大以下の礎を並べている。南西端の花崗岩長礎は立石であった可能性がある。また、北東部の礎はSB577により破壊を受けたためか欠けている。

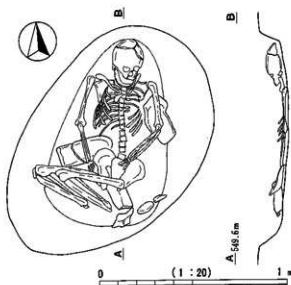


図102 SH1136人骨出土状態

墓坑：配石面の直下で確認する。北北東—南南西を主軸とする楕円形である。埋土は細角礫や黄褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径は103cm、短径55cmを測る。深さが約45cmであるため、下層のSB578の床面および、さらに下層のSB581の炉の一部が破壊されている。

人骨：底面直上より頭位8度の仰臥人骨が出土した。全体的に骨の残りは良く、左手指骨と距骨以下を欠くのみである。顔面はやや左下を向き、上肢は左右とも肘で弱く曲げて手先を腰の上に乗せている。下肢は左右とも膝を強く曲げて右に倒している。

その他の遺物：胸脊上部に密着して牙製品が出土した。

時期：SH1129・1143と共にSB577より古く、SB578より新しいことは確認されているのでIV～VI期間の構築であろう。

**SH1143** (図版19・21、図101)

位置：L-H 5にあり、SH1129に近接する。

配石：SB577の張り出し部敷石精査の段階で確認する。北西側に砂岩の長大な巨礫が置かれ、他はほぼ楕円形に礫を巡らせている。

墓坑：配石面の直下で確認する。北東—南西を主軸とする楕円形である。埋土は細角礫や黄褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径は84cm、短径40cm、掘り込み面からの深さは約30cmである。

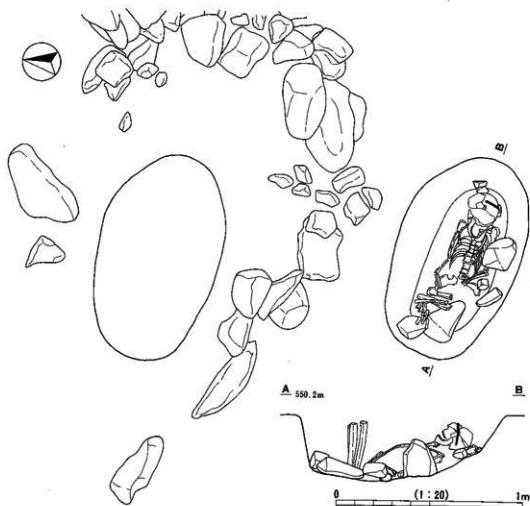


図103 SH1144上面配石、人骨出土状態

人骨：底面直上より頭位46度の側臥屈葬人骨が出土した。頭蓋骨の破損は著しいが、体幹と顔面は左を向いている。上肢は、左および右の前腕部が欠損し、位置不明。下肢は股関節で90度弱曲げて膝を左に倒している。

その他の遺物：石鏃・磨石類各1が埋土中から出土した。

時期：SH1129・1136と同じく、いずれもSB577より古く、SB578より新しいことが明らかであることから、IV期～VI期までの間に構築されたものである。

#### SH1144 (図版20・22、図103)

位置：L-L11にある。

配石：配石群SH506北西端部の精査段階で確認する。南東側に長礫を直線的に並べ、南東側で弧を描いて、北東側に点在する礫に続いている。

墓坑：配石面で確認する。西北西—東南東を主軸とする楕円形である。埋土は細角礫や黄褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径は85cm、短径37cm、掘り込み面からの深さは37cmである。

人骨：底面直上より頭位94度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔面は左正面ないし下方を向き、右上肢は伸展させ、左は肘で45度程度曲げて、手先を下腹部に置いている。下肢は股関節で90度弱曲げて膝を立てている。頭頂部付近に密着して横方向の紐状の骨がみられた。劣化が激しく、加工などは観察できなかったが、恐らくかんざし風の装身具であろう。

その他の遺物：配石面から小形土器1が、埋土中から石鏃3、石錐1が出土した。

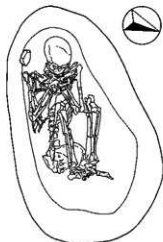


図104 SH1149人骨出土状態

#### SH1149 (図版21、図104)

位置：L-H3にあり、SK3219を切る。

墓坑：SB578の周辺精査段階で確認する。北東—南西を主軸とする卵形である。埋土は細角礫や黄褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径は104cm、短径55cm、掘り込み面からは23cmの深さである。

人骨：底面直上より頭位257度の側臥屈葬人骨が出土した。顔面は左下方を向く。上肢は左右とも肘で強く曲げて、手先を胸に置いている。下肢は股関節で強く曲げているので、膝が腹の位置にきている。

その他の遺物：磨石類・刃器各1が埋土中から出土した。

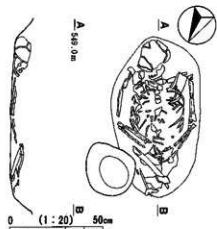


図105 SH1155人骨出土状態

#### SH1155 (図版23、図105、PL25)

位置：L-F11にある。

墓坑：III C層上面で確認する。北北西—南南東を主軸とする楕円形である。埋土は茶褐色粘質ブロックとオリブ褐色砂質ブロックおよび円礫を含む褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径85cm、短径55cm、掘り込み面からの深さは44cmである。

人骨：底面直上より頭位154度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔

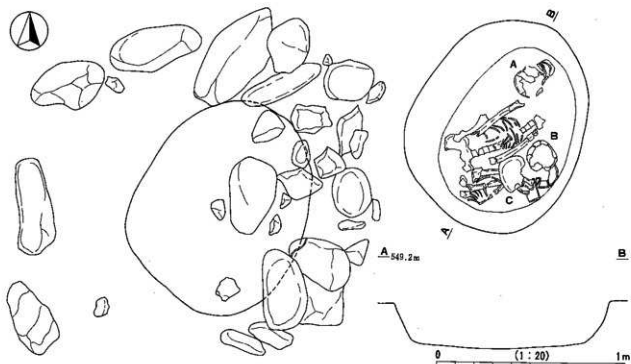


図106 SH1156上面配石、人骨出土状態

面は右下方を向く。上肢は左右とも肘を緩く曲げて、手先を下腹部に置いている。下肢は股関節を強く曲げて膝を右体側に倒している。

その他の遺物：石鏃・石棒各1が埋土中から出土した。

**SH1156** (図版20・22、図106、PL26)

位置：L-J 10にある。

配石：図面照合段階で、配石群SH1111南端部の礫から、本址に係ると考えられる礫を抽出し、構成させた。南側はSH1189に係る礫との関係ではっきりしないが、その他は長礫の軸を描いて矩形に大きく配置させている。北東部にある花崗岩の立石も本址に伴うものかもしれない。

墓坑：III B層上面で確認する。北東—南西を主軸とする卵形である。埋土は細角礫と茶褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径は90cm、短径60cm、掘り込み面からの深さは25cmである。

人骨：底面直上より頭蓋骨が3個、四肢骨・体幹骨についてはおそらく2体分が出土した。1体分Aの体幹骨・四肢骨は比較的解剖学的な位置を留めているが、底面北側で下顎を突き出している頭蓋骨は、上下が逆方向を向いている。南東部にみえる2個の頭蓋骨の内どちらかは、その下から出土した四肢骨に対応すると考えられるが、いずれにせよ解剖学的位置にない。骨の位置関係から推定すると、まず南東部にまとまるBないしCが埋葬されていたのを、Aの埋葬時に横へ寄せたと思われる。ただ、BとCの前後関係や、Aの頭蓋骨が捻転している理由については不明である。

その他の遺物：配石面の立石の横から、中空土偶の頭部が顔面を上に向けて出土しており、その他埋土中に磨石類1がある。

時期：立石の横から出土した土偶が本址に伴うとすれば、V～VI期に比定される。

**SH1157** (図版22、図107、PL25)

位置：L-K11にある。

墓坑：ⅢA層中で確認する。北東—南西を主軸とする楕円形を呈す。埋土は細角礫や黄褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径は90cm、短径42cm、掘り込み面からの深さは24cm。北東端部に立石がある。

人骨：底面直上より頭位54度の仰臥人骨が出土した。下半身を欠損しているため、全体の姿勢は不明である。また頭蓋骨は土圧によって潰れ、顔面の向きがわからない。

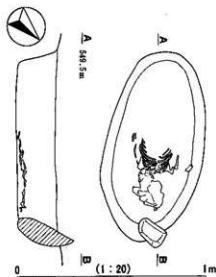


図107 SH1157人骨出土状態

**SH1158** (図版20・22、図108、PL26)

位置：L-J7にあり、SH1161・1165を切る。

配石：図面照合段階で配石群SH1111の中から、本址に係る可能性のある長礫を選び出したが、確実性に乏しい。

墓坑：ⅢB層上面で確認する。東西を主軸とする楕円形である。埋土は細角礫や黄褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径は105cm、短径52cm、掘り込み面からの深さは28cm。

人骨：底面直上より頭位270度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔面は左下方を向き、左右の上肢は肘をやや張りながら曲げて、手先を胸に乗せている。下肢は股関節で90度近く曲げ、膝を揃えて立てている。右肩の横に礫が置かれている。

その他の遺物：人骨の直上から土偶が、また埋土中から石錐が各1出土した。

**SH1160** (図版20・22、図109、PL26)

位置：L-J5にある。

配石：SB577の張り出し部敷石周辺の配石を精査中、北東—南西方向に2列に並ぶ長礫が認められ、長礫間にはこもて石風の礫が集中している。

墓坑：SB578の埋土中で確認する。東北東—西南西を主軸とする楕円形。埋土は黄褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物や焼土が混在する。底面の長径は105cm、短径51cm、検出面からの深さは17cmで

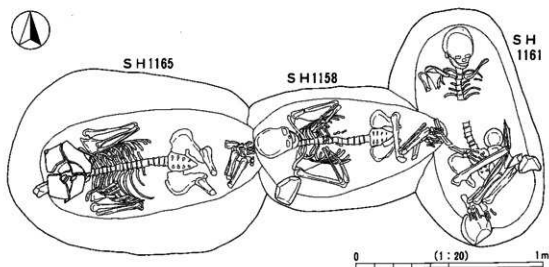


図108 SH1158・1161・1165人骨出土状態

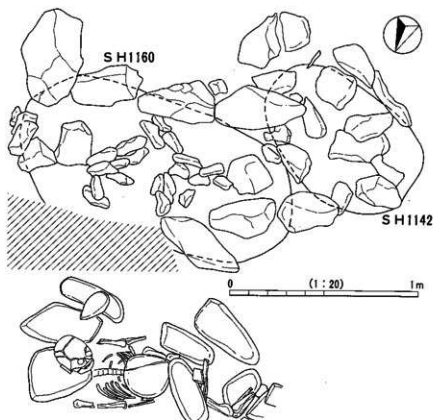


図109 SH1160上面配石、人骨出土状態  
とは確実である。

**SH1161** (図版20・22、図108)

位置：L-J 7にある。

墓坑：ⅢB層上面で確認する。ほぼ南北を主軸とする楕円形である。埋土は黄褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径は110cm、短径50cm、検出面からの深さは31cm。

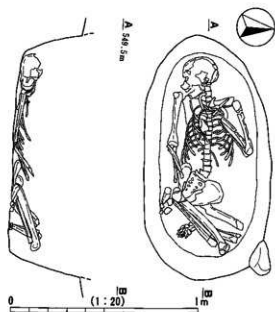


図110 SH1162人骨出土状態

ある。

人骨：底面直上より頭位82度の仰臥人骨が出土した。顔面は左下方を向き、左右の上肢は伸展させている。左下肢は股をやや開き加減にし、膝を緩やかに曲げている。いわゆる屈葬とは異なり、どちらかといえば伸展葬に近い。人骨の上下に平石がみられるが、これらはSB578の床面を壊したときにでてきた敷石を再利用したものである。

その他の遺物：石鏃1、打製石斧4、磨石類1が埋土中から出土した。

時期：SB578との関係から、IV期以降に構築されたこ

人骨：底面直上より頭位353度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔面は左下方を向き、右上肢は肘を緩く曲げて手先を下腹部に置き、左は伸展させている。下肢は股関節をやや強く曲げ膝を揃えて左へ倒している。膝の横と足先に礫が置かれていた。

その他の遺物：左の寛骨に接して磨石が、石鏃1、磨石類2が埋土中から出土した。

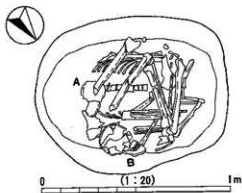
**SH1162** (図版20・22、図110、PL26)

位置：L-19にある。

墓坑：ⅢB層上面で確認する。ほぼ東西を主軸とする楕円形。埋土は黄褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径は108cm、短径

51cm、検出面からの深さは37cmである。

人骨：底面直上より頭位268度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔面は右を向き、右上肢は伸展させ、左は肘をやや強く折り曲げて手先を胸に置いている。腰を右に捻りながら下肢は股関節を90度くらい曲げ膝を揃えて左へ倒している。  
時期：SB1204を切ることから、IV期以降の構築である。



**SH1163** (図版20・22、図111、PL26)

位置：L-18にある。

墓坑：ⅢB層上面で確認する。不整楕円形で北西—南東に主軸をもつ。埋土は黄褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径は108cm、短径51cm、検出面からの深さは17cmである。

人骨：底面直上より2体分(A・B)の人骨が出土した。脊椎や肋骨など体幹骨が識別できるAの上に、Aの四肢骨が乗り、さらにBの四肢骨と頭蓋骨が乗っている。骨の位置関係が複雑なため、埋葬状況の詳細については、第2部の形質人類学の項目を参照されたい。

図111 SH1163 (A・B) 人骨出土状態

**SH1165** (図版20・22、図108、PL27)

位置：L-17にあり、SH1158に切られる。

墓坑：ⅢB層上面で確認する。ほぼ東西を主軸とする楕円形である。埋土は黄褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径は115cm、短径55cm、検出面からの深さは25cm。

人骨：底面直上より頭位262度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔面には無文の鉢形土器大破片を被せてある。顔面は右下方を向き、左右の上肢は肘を強く屈曲させて手先を肩に乗せ、下肢は股関節を90度くらい曲げ膝を揃え立てている。なお、本人骨は埋葬姿勢を保ったまま保管してある。

**SH1166** (図版20・22、図112)

位置：L-17にある。

墓坑：ⅢB層上面で確認する。北北東—南南西を主軸とする楕円形。埋土は黄褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径は48cm、短径25cm、検出面からの深さは18cmである。なお、本址出土人骨は新生児との鑑定を受けているため、この墓坑の規格が乳児墓の基準の一つとなる。

人骨：底面直上より頭位193度の仰臥屈葬人骨が出土した。骨の依存状態は極めて悪いが、顔面は右下方を向いていたと思われる。左右の上肢は伸展させているが、下肢の状態は不明である。頭蓋骨の左上と右横、左上腕骨の左、大腿骨の下に礫が置かれていた。

**SH1168** (図版22)

位置：L-L9にある。

墓坑：SB582の床面精査段階で確認する。ほぼ南北を主軸とする楕円形。埋土は細角礫を含む黒褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径は85cm、短径40cm、検出面からの深さは15cmである。

人骨：底面の南側より下肢骨片が出土した。

時期：SB582との関係から、本址はIV段階以降に比定される。

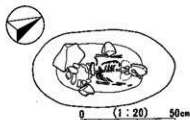


図112 SH1166人骨出土状態

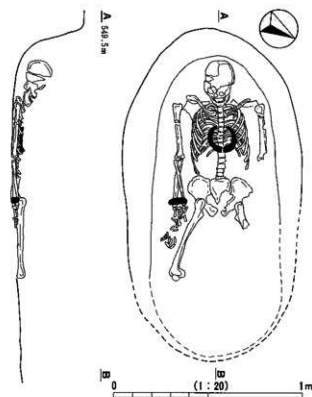


図113 SH1172:人骨出土状態

**SH1172<sub>a</sub>** (図版25、図114)

位置：L-J 8 にあり、SH1217 を切る。

墓坑：SH1172<sub>a</sub> の人骨精査の際に確認する。北北西-南南東を主軸とする隅丸長方形。埋土はオリープ褐色砂質ブロックを含む褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径は103cm、短径42cmである。

人骨：底面直上より骨盤の一部のみ出土する。

**SH1174** (図版20、図115)

位置：L-L 9 にあり、SH1179 に切られる。

配石：配石群SH1111の礎を除いて掘り下げている段階で、すでに頭骨および右上腕骨が出土する。付近は遺構の切り合いが多く、しかもそれらはSB582の埋土中に構築されているため、落ち込みの検出は極めて困難であった。のちに図面照合の結果、SH1111を構成する礎の一部が、本址に直接係る配石であることを確認した。硬砂岩・花崗岩の長礎を楕円形に配置させた中に、砂岩平石等を充填している。西部の硬砂岩長礎は立石であった可能性がある。

墓坑：西南西-東北東を主軸とする楕円形で、底面での長径は100cm、短径51cm、掘り込み面からの深さは26cmである。傾斜に逆らって底面のレベルを揃えている。ただし水平ではなく、中央部は緩やかな凹みをもつ。

人骨：底面直上より頭位259度の仰臥屈葬人骨が出土した。風化により骨質は脆くなっているが、ほぼ全体形を観察できる。顔はやや左下を向き、上肢は左右とも肘で弱く曲げて手先を腰の上に乗せている。下肢は左右

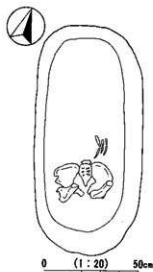


図114 SH1172:人骨出土状態

**SH1172<sub>b</sub>** (図版20・22、図113、PL27)

位置：L-J 8 にあり、SH1199 を切る。

墓坑：III B層上面で確認する。ほぼ東西を主軸とする長楕円形。埋土は黄褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物が混在する。底面の長径は118cm、短径70cm、検出面からの深さは36cm。人骨：底面直上より頭位258度の仰臥人骨が出土した。顔面は右下方を向き、左右の上肢は伸展させている。右下肢は股を開き加減にして膝を緩く曲げている。左も同様であろう。肋骨の上にはイノシシの下顎犬歯で作られた首飾りと思われる装身具を乗せており、右の手首にも牙製腕輪が装着されていた。

その他の遺物：埋土中から打製石斧1が出土した。なお、本人骨は埋葬姿勢を保ったまま保管してある。

時期：SH1204より新しいことから、IV期以降の構築と思われる。



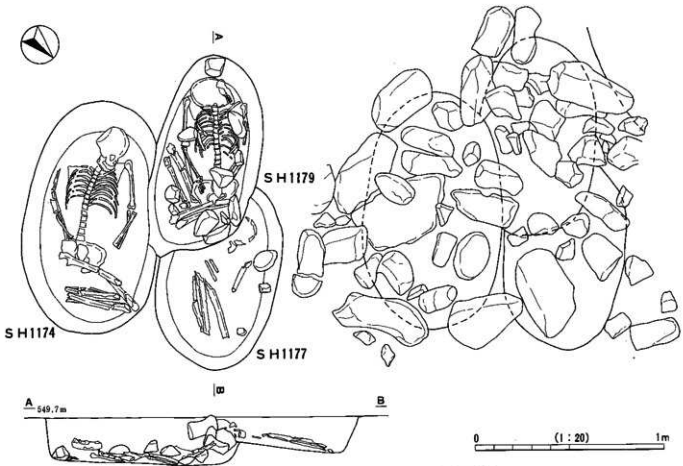


図115 SH1174・1177・1179上面配石、人骨出土状態

とも膝で強く  
曲げて左に倒  
している。  
その他の遺物：  
埋土中から磨  
石類・土器片  
円板各1が出  
土した。  
時期：SB582の  
埋土上面に造  
られているの  
でIV期以降で  
あろう。

**SH1176**

(図版20・21、  
図116、PL28)  
位置：L-J 6

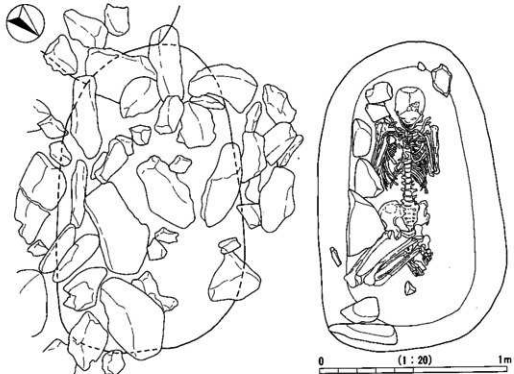


図116 SH1176上面配石、人骨出土状態

にあり、SH1181を切る。

配石：発掘調査段階では、IID層下部で検出された配石群SH1111に係る礫として調査を行っていた。

この遺構は、配石を除去したあとの精査ならびに先行トレンチでは、下部の落ち込みが明確でないため、土坑はないと判断していた。一方、SB580精査時に出土した人骨およびその南辺の石列については、明確な掘り込みが確認できないままSH1176として個別に調査していた。図面を照合したところ、SH1111下からSH1176までの間、後者に伴う配石や墓坑の掘り込みが認められないことに加え、他遺構の介在もみられないことから、両者を一体と考えるに至った。配石は、花崗岩・硬砂岩で円形に配列され、内部に硬砂岩・砂岩長礫が置かれている。南西部には円形配列から飛び出した硬砂岩長礫がある。これは立石であった可能性が高い。

墓坑：平面は、人骨および南辺の石列から判断して北東—南西に長軸をもつ楕円形と推定される。底面の長径は80cm、短径40cm、検出面からの深さ30cmである。

人骨：底面直上より頭位223度の仰臥人骨が出土した。顔は正面を向き、上肢は左右とも肘で弱く曲げて手先を肩の上に乗せている。下肢は左右とも膝で曲げて右に倒している。被葬者の右側面壁際に礫が並べられている。

その他の遺物：石織・打製石斧1が出土している。

#### SH1177 (図版20・22、図115)

位置：L—L9にあり、SH1179に切られる。

配石：図面照会の結果、SH1111を構成する礫の一部が、本址に直接係る配石であることを確認した。

墓坑：SB582の埋土中で確認する。楕円形で主軸はほぼ東西を向く。底面での長径は84cm、短径51cm、掘り込み面からの深さは19cmである。

人骨：底面直上より頭位246度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔面はやや右を向き、右上肢は肘で緩やかに曲げて手先を下腹部に置いている。左は前腕部を欠くため不明である。下肢は左右とも股関節を強く屈曲させて、膝を右体側に置いている。

その他の遺物：埋土中から打製石斧・磨石類各1が出土した。

時期：SB582の埋土上面に造られているのでIV期以降であろう。

#### SH1178 (図版20・22、図117)

位置：L—K8にあり、SH1180に切られる。

配石：配石群SH1111を構成する礫の中で、本址の南西端部に転がる長礫は、本址に伴う立石であった可能性がある。

墓坑：SH1180の人骨取り上げ中に下肢骨が出土し、続く検出作業によって頭骨および左右上腕骨が出土した。付近は遺構の切り合いが多く、それらはSB582の埋土中に構築されているため、落ち込みの検出は極めて困難であった。肋骨以下はSH1180取り上げ時に破損する。楕円形で主軸は南西—北東を向く。底面の長径は推定で80cm、短径40cm、深さは30cm。

人骨：底面直上より頭位232度の仰臥人骨が出土した。現場での観察により、上肢は左右とも肘で直角に曲げ、胸または腹部の上に乗せている。顔は右横を向く。下肢の状態は不明である。

時期：SB582の埋土上面に造られているのでIV期以降であろう。

#### SH1179 (図版20・22、図115)

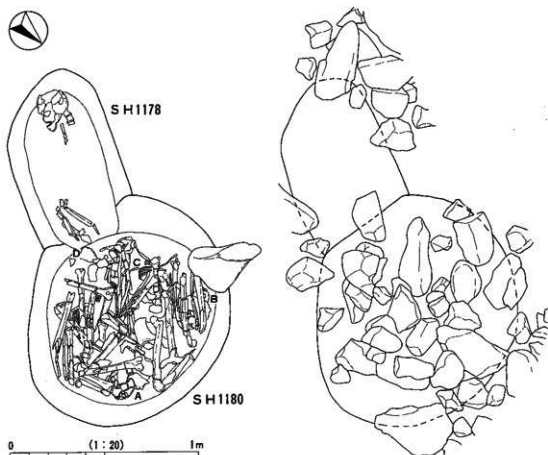


図117 SH1178・1180上面配石、人骨出土状態

位置：L-L 8 にあり、SH1174・1177を切る

配石：図面照合段階に、配石群SH1111を構成する礫の中から、本址に係る可能性の高い礫を選別した。

北西側の軸を南北にした礫は動いているとすると、全体を矩形に囲った中を拳大の礫で充填している。  
墓坑：SB582の埋土中で確認された。平面は楕円形で、主軸は東西を向く。底面の長径は推定で95cm、短径45cm、検出面からの深さは26cmである。

人骨：底面直上より頭位246度の仰臥屈葬人骨が出土した。頭蓋骨は頸椎からはずれて動いており、正確な向きがわからない。上肢は左右とも肘を緩やかに曲げて、手先を下腹部に置いている。右の下肢は股関節を強く屈曲させ膝は右体側にある。左は股関節で曲げ、膝で折り返して踵を寛骨付近にもってきている。人骨上部で砂岩・花崗岩の角礫が5個出土した。

時期：SH1174・1177・1180と同じく、SB582の埋土上面に造られているので、IV期以降であることは間違いない。

#### SH1180 (図版20・22、図117、PL28)

位置：L-L 8 にあり、SH1178を切る。

配石：図面照合段階に、配石群SH1111を構成する礫の中から、本址に係る可能性の高い礫を選別した。

北西部に硬砂岩の立石があり、基部は人骨を痛めていないから、埋葬前に設置されたものと考えられる。  
墓坑：SB582の埋土中で確認された。平面はほぼ円形。底面の直径は95cm、検出面からの深さは25cmである。

人骨：底面直上より最低でも5体分が出土した。長骨を意識的に矩形に配置した、いわゆる盤状集積の類

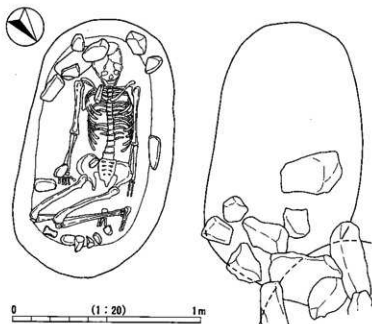


図118 SH1181人骨出土状態

80cmにも達してしまうこと等から、本址に直接伴う配石か否かにわかに判断できない。

墓坑：SH1111の礫を除いて掘り下げ、約50cmでほぼ全身の骨格を残す人骨が出土した。付近はSB583の埋土中で、土器片や炭化物が多く、落ち込みの検出は困難であった。楕円形で主軸は北東—南西を向く。底面の長径は110cm、短径65cm、検出面からの深さは32cmである。底面壁際の人骨周囲には、まばらに拳大の礫を配している。

人骨：底面直上より頭位224度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔はほぼ正面を向き、上肢は左右ともまっすぐ伸ばしている。下肢骨は左右とも膝を曲げて右に倒している。右手指骨の先が右大腿骨の下になっており、また左尺骨も左寛骨の下になっていることから、姿勢は土坑埋葬時に最終決定されていることがわかる。

その他の遺物：埋土中から打製石斧2、磨石類1が出土した。

にあたる。埋葬状態についての詳細は第2部に譲る。

時期：SH1174・1177～1179とともに、いずれもSB582の埋土上面に造られていることから、IV期以降に比定される。

**SH1181** (図版20・22、図118、PL29)

位置：L-J7にあり、SH1176に切られる。

配石：図面照合により、SH1111を構成する礫の一部が、本址に係る配石である可能性を残す。その際、立石は下肢骨の上部に位置する。ただし、配石が土坑の落ち込みと一致しないこと、礫と土坑底面のレベル差が約

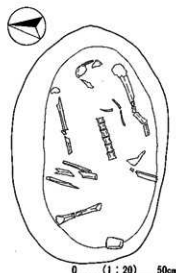


図119 SH1182人骨出土状態

**SH1182** (図版22、図119)

位置：L-L9にある。

墓坑：SB582の埋土中で確認された。楕円形で主軸は東西を向く。底面の長径は107cm、短径61cm、検出面からの深さは20cmである。

人骨：底面直上より2体分が出土した。東頭位のAは上肢を伸展させ、股を開いて膝を緩く曲げている。西頭位のBは頭蓋骨のみのため、姿勢については不明である。

その他の遺物：土鏃・打製石斧・刃器各1が埋土中から出土した。

時期：SH1174同様にIV期以降の構築であろう。

**SH1183** (図版22)

位置：L-L9にあり、SH1168に切られる。

墓坑：SB582の埋土中で確認された。平面は卵形で主軸はほぼ南北を向

いている。底面の長径75cm、短径57cm、検出面からの深さは30cmである。

人骨：底面南寄りから頭蓋骨の破片および上腕骨が出土した。

その他の遺物：埋土中から石鏃・打製石斧・丸石が各1、磨石類2が出土した。

時期：SH1174・1182などと同様にIV期以降に比定される。

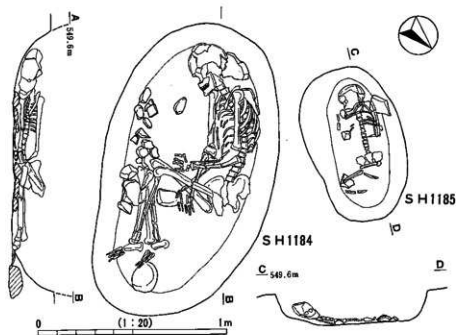


図120 SH1184・1185人骨出土状態

**SH1184** (図版26、図120、PL29)

位置：L-K7にあり、SH1216を切る。

墓坑：ほぼ東西を主軸とする楕円形である。底面での長径143cm、短径67cm、検出面からの深さは22cm。

頭骨の下に粘板岩の平石を置き、底面南壁際には砂岩を主体とする角礫を配している。

人骨：底面直上より頭位242度の右側臥屈葬人骨が出土した。右上肢はまっすぐ伸ばして股の間に挟み込み、左は肘で直角に曲げ前方につき出している。下肢は左右とも膝をつき出して直角に曲げている。調査時には、頭位および人骨の出土レベルの近似性から、SH1185と密接な関係があると思われたが、本址の被葬者は、1185に背を向ける姿勢をとるため、両者の関係については検討が必要である。

その他の遺物：埋土中より石鏃・打製石斧各1が出土した。

**SH1185** (図版26、図120、PL29)

位置：L-K7にある。

墓坑：III C層上面で確認する。楕円形で主軸は北東—南西を向く。底面の長径69cm、短径は29cm、検出面からの深さは18cmである。

人骨：底面直上から頭位232度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔面は右下方を向き、上肢は左右とも伸展しているようである。下肢は股関節を曲げて右に倒している。

その他の遺物：埋土中より打製石斧2、石鏃・石鏃・小形土器各1が出土した。

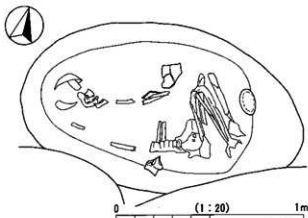


図121 SH1186人骨出土状態

**SH1186** (図版22、図121)

位置：L-M10にあり、SH1187切る。

墓坑：ⅢB層上面で確認する。楕円形で主軸は北東—南西を向く。底面の長径は80cm、短径は50cm、検出面からの深さは25cm。埋土は細角礫と茶褐色粘質ブロックを含む褐色土で、炭化物が混在する。

人骨：底面直上から頭位247度の左側臥屈葬人骨が出土した。顔面は右を向き、右上肢は肘を張りながら強く曲げ、手先を肩に置いている。左も前腕部を欠いているが、手先は肩に置いていたようである。下肢は股関節を直角に曲げて膝を左に倒している。

その他の遺物：埋土中より石鏃・打製石斧各1が出土した。

時期：SB566に切られているので、V期以前の構築であろう。

**SH1187** (図版22)

位置：L—M10にあり、SH1186に切られる。

墓坑：ⅢB層上面で確認する。平面は楕円形で、主軸は北東—南西を向く。底面の長径は115cm、短径は67cm、検出面からの深さは45cmである。

人骨：底面直上から2体分が出土したが、各部位は解剖学的な位置にない。

その他の遺物：埋土中から石鏃・打製石斧各1が出土した。

時期：SH1186と同じくSB566に切られるから、V期以前に構築されている。



図122 SH1188上面配石、人骨出土状態

**SH1188** (図版20・22、図122)

位置：L—M10にある。

配石：SB582周辺の精査段階で確認する。拳大の礫を集めてある程度で、特に定形をなすわけではない。

墓坑：配石面で確認された。楕円形で主軸は北東—南西を向く。底面の長径は90cm、短径は55cm、検出面からの深さは25cmである。

人骨：底面直上から頭位47度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔面は左を向き、上肢は左右とも肘を張りながら約90度強曲げ、手先を胸に置いている。下肢は股関節を直角に曲げて膝を左に倒しているらしい。

その他の遺物：埋土中より石鏃・打製石斧・磨石各1が出土した。

時期：SB582を切っているから、IV期以降の構築と思われる。

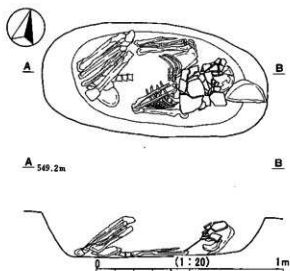


図123 SH1189人骨出土状態

**SH1189** (図版22、図123、PL29)

位置：L—J 11にある。

墓坑：ⅢB層上面で確認された。楕円形で主軸はほぼ東西を向く。底面の長径は93cm、短径は43cm、検出面からの深さは23cm。

人骨：底面直上から頭位262度の仰臥屈葬人骨が出土した。頭蓋骨には鉢形土器の大破片が被せられてい

る。顔面は下方を向き、上肢は左右とも肘を強く屈曲させて、手先を肩に置いている。下肢は股関節を強く折り曲げて、膝を右体側に置いている。

その他の遺物：上記鉢形土器のほか埋土中より石鎌・石錐各1点が出土した。

時期：頭蓋骨に被せられた土器からIV段階としてよいだろう。

#### SH1190 (図版26、図124)

位置：L-L11にある。

墓坑：SB567の床面精査段階で確認された。南西側は攪乱を受けているが、おそらく平面は楕円形で、主軸は北東-南西を向く。底面の長径は不明、短径47cm、検出面からは40cmの深さである。

人骨：底面直上から頭位229度の仰臥屈葬人骨が出土した。頭

蓋骨は欠損しており、しかも上半身は下半身より低いレベルにある。左上肢は肘を強く屈曲させて、手先を肩に置いているが、右はわからない。下肢は股関節を強く折り曲げて、膝を右体側に置いている。

時期：SB567の床面を破壊していることから、III期以降の構築と思われる。

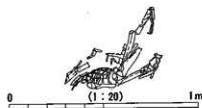
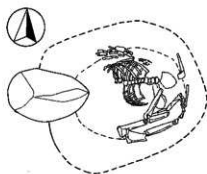


図124 SH1190人骨出土状態

#### SH1181 (図版26、図125)

位置：L-K 8にあり、SH1218を切る。

墓坑：SB580の床面精査段階で、頭骨および下肢骨が出土する。付近は、SB580埋土中で土器片や炭化物が多く、落ち込みの検出は困難であった。南西-北東を主軸とする卵形で、底面の長径は91cm、短径は55cm、検出面からの深さは17cmである。傾斜に逆らい底面のレベルを揃えている。

人骨：底面直上より頭位229度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔は左やや下を向き、上肢は左右とも肘で強く曲げ手先を胸上部に乗せている。下肢骨は左右とも膝で曲げて左に倒れている。なお、人骨はウレタン梱包後に搬送する際破損し、体部中央から左上肢にかけて損壊する。

その他の遺物：埋土中より磨石類・小形土器各1点が出土した。

時期：上面はSB582に壊されていることから、IV期以前の構築と思われる。

#### SH1192 (図版26、図126)

位置：L-K 8にあり、SH1193に切られる。

墓坑：III C層上面で、硬砂岩を主体とする礫の散在、および炭化物が混在する黒褐色粘質土の落ち込みを検出する。西南西-東北東を主軸とする楕円形で、底面での長径は112cm、短径62cm、検出面からは17cmの深さである。急傾斜地に造りながらも底面のレベルは水平であった。

人骨：底面直上より頭位245度の仰臥屈葬人骨が出土し

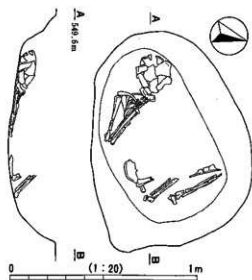


図125 SH1191人骨出土状態

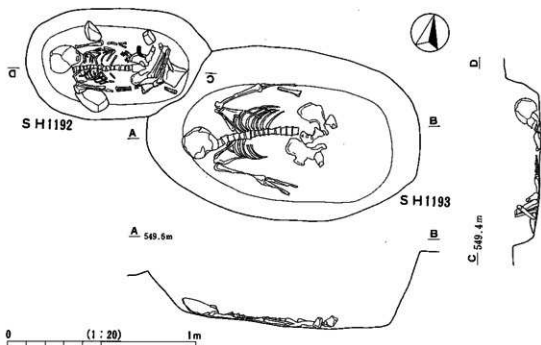


図126 SH1192・1193人骨出土状態

顔は右やや下向き、上肢は左右ともやや開きぎみにまっすぐ伸ばす。下肢骨はSH1180取り上げの際破損したが、右大腿骨の方向から判断して、左右とも膝で曲げて右に倒している。

その他の遺物：埋土中より石鏃・打製石斧各1と磨石類2が出土した。

**SH1193** (図版26、図126、PL29)

位置：L-K 8にあり、SH1192を切る。

墓坑：ⅢC層上面で確認する。楕円形で西南西-東北東に主軸をもつ。底面での長径は77cm、短径41cm、検出面からの深さは16cmである。

人骨：底面直上より頭位248度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔は左下方を向き、上肢は左右とも伸展させている。下肢骨は股関節を90度弱曲げてやや左に傾きながらも立てている。上腕骨の左右および下肢骨の下に礫が置かれていた。

その他の遺物：左寛骨に密着してイノシシの下顎犬歯（おそらく何かの装身具であろう）が出土したほか、埋土中からの石鏃1がある。

時期：SH1191～1193の上面はSB582に壊されていることから、IV期以前の構築と思われる。

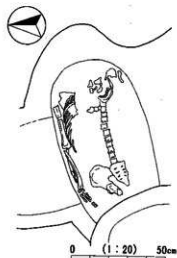


図127 SH1195人骨出土状態

**SH1195** (図版21、図127)

位置：L-I 4にあり、SH1143に切られる。

墓坑：SH1143の人骨取り上げ後に確認する。南側を大きくSH1143に破壊されているが、平面はおそらく楕円形で、北東-南西に主軸もつ。底面での長径は77cm、検出面からの深さは22cmである。

人骨：底面直上より頭位28度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔は左下方を向き、左上肢は伸展させている。右上肢および下肢骨は欠損して



いてわからない。

時期：Ⅲ期のSB578を壊し、SH1143に切られていることから、Ⅳ期～Ⅴ期までの間の構築と考えられる。

**SH1198** (図版26)

位置：L-M10にあり、SH1203を切る。

墓坑：SB580の埋土中で確認する。楕円形で北東-南西に主軸もつ。底面での長径は92cm、短径35cm、検出面からの深さは18cmである。

人骨：底面直上よりほぼ1体分が出土した。南西側に頭蓋骨、その東に体幹骨、さらに下肢骨と続くが、いずれも碎片化しており、埋葬姿勢などはわからない。

その他の遺物：石鏃2が埋土中から出土した。

時期：SB582より古く、SB580より新しいのだから、Ⅰ期～Ⅳ期までの間に比定される。

**SH1199** (図版22、図128、PL30)

位置：L-I 8にある。SH1204を切り、SH1172に切られる。

墓坑：ⅢD層に炭化物および細砂・円礫混じりの褐色粘質土の落ち込みを確認する。西南西-東北東を主軸とする楕円形で、底面での長径は98cm、短径52cm、検出面からの深さは23cm。傾斜地にあわせて底面もいくぶん傾斜がある。

人骨：底面直上より頭位260度の仰臥屈葬人骨が出土した。頭骨の破損が著しいものの、全体の骨質は堅固で残存状態は比較的良好である。顔は左やや下を向き、右上肢はまっすぐ伸ばし、左上肢は肘で折り曲げ手先を顔の左横に置いている。下肢骨は左右とも膝で曲げて左に倒している。頭頂部に密着している硬砂岩の円礫は、埋葬施設の一部と考えたい。

時期：SH1204より新しいことから、Ⅳ期以降に比定される。



図128 SH1199人骨出土状態

**SH1200** (図版26、図129、PL30)

位置：L-L 9にあり、SH1201を切る。

墓坑：SB580の埋土中で確認する。埋土は細角礫と茶褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物を混在する。北東-南西を主軸とする楕円形で、底面での長径は87cm、短径57cm、検出面からの深さは37cmである。

人骨：底面直上より頭位247度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔面は左やや下を向き、左上肢はまっすぐ伸ばしているが、右はわからない。下肢骨は左右とも膝を曲げて左に倒している。

その他の遺物：埋土中から打製石斧1が出土した。

時期：SB582より古く、SB580より新しいのでⅠ～Ⅳ期間の構築といえる。

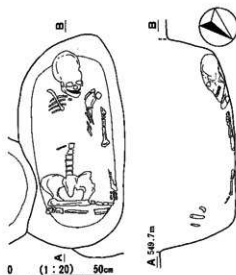


図129 SH1200人骨出土状態

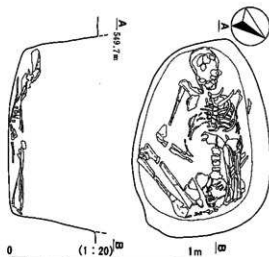


図130 SH1201人骨出土状態

は右体側へ、左膝は腹部に置いている。

時期：SH1200と同じく、SB582より古くSB580より新しいから、I期～IV期までの間に構築されている。

**SH1202** (図版25、図131、PL30)

位置：L-H4にある。

墓坑：V層上面で確認する。埋土はオリープ褐色砂質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物を混在する。平面は円形。底面での直径は48cm、検出面からの深さは13cmである。

人骨：底面直上より2体分が出土した。人骨は解剖学的な位置を留めていないが、四肢骨や頭蓋骨は比較的整然と並べられている。埋葬状況の詳細については第2部の形質人類学の項目を参照されたい。

**SH1203** (図版26)

位置：L-M10にあり、SH1198に切られる。

墓坑：SB580の埋土中で確認する。埋土は細角礫と茶褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物を混在する。楕円形で主軸は北西-南東を向く。底面での長径は113cm、短径50cm、検出面からの深さは15cm。

人骨：底面の南東寄りから下肢骨が出土した。左右とも股関節を90度近く曲げて、右に倒しており、状況から仰臥屈葬人骨であると思われる。

その他の遺物：埋土中から石鏃・打製石斧・磨石類各1が出土した。

時期：SH1198同様、I期～IV期までの間に構築されている。

**SH1207**

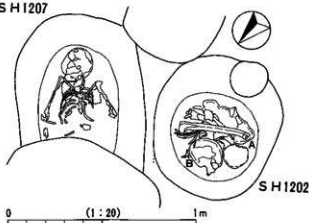


図131 SH1202・1207人骨出土状態

**SH1201** (図版26、図130、PL30)

位置：L-L9にあり、SH1201に切られ、1228を切る。

墓坑：SH1201の精査段階で確認する。埋土は細角礫と茶褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物を混在する。SH1200との埋土差はわずかで、識別が難しかった。北東-南西を主軸とする楕円形で、底面での長径は91cm、短径60cm、検出面からの深さは47cm。

人骨：底面直上より頭位240度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔面は左やや下を向き、左右の上肢は肘で緩く曲げて、手先を下腹部に置いている。下肢骨は左右とも股関節を強く曲げて、股を開き気味に、右膝

**SH1204** (図版22、図132、PL30)

位置：L-I9にあり、SH1162・1199に切られる。

墓坑：SB580の埋土中で確認する。埋土は細角礫と茶褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物を混在する。楕円形で主軸が北西-南

東を向く。底面での長径は114cm、短径52cm、検出面からの深さは31cm。

人骨：底面直上から頭位334度の仰臥屈葬人骨が出土した。頭蓋骨には破砕した土器片が被せられており、顔面は下方を向いていた。左右の上肢は伸展させ、下肢は股関節を90度近く曲げて、膝を立てている。下腹部の上に4個の礫が乗せられているほか、頭蓋骨の下や足骨の下に礫が置かれている。

その他の遺物：甕被りの土器が1点出土した。

時期：上記土器はIV期に比定されるので同時期としてよいであろう。

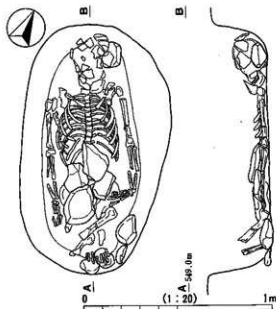


図132 SH1204人骨出土状態

#### SH1205 (図版26)

位置：L-K 9にある。

墓坑：SB580の埋土中で確認する。埋土は茶褐色粘質ブロックとオリープ褐色砂質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物を混在する。楕円形で主軸は北北東-南南西を向く。底面での長径は86cm、短径50cm、検出面からの深さは40cm。

人骨：底面の東寄りから下肢骨が出土した。

その他の遺物：埋土中から磨石類2が出土した。

時期：SB580よりは新しいから、I期以降構築されたものである。

#### SH1206 (図版26、図133)

位置：L-K 6にあり、SH1215に切られる。

墓坑：SB583の埋土中で確認する。埋土は細角礫と茶褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物を混在する。楕円形で、主軸は東北東-西南西を向く。底面での長径は115cm、短径64cm、検出面からの深さは35cmを測る。

人骨：底面直上から頭位253度の仰臥屈葬人骨が出土した。顔面は左下方を向き、左右の上肢は伸展させている。下肢は股関節を90度近く曲げて、膝を右に倒している。頭蓋骨の下、上肢の両側、足下に礫が置かれているほか、左上腕骨の左下から炭化材が出土している。

その他の遺物：埋土中からは石鏃・打製石斧各1と磨石類4が出土した。

時期：SB583とSH1215との関係から、III期～IV期までの間に構築されたものである。

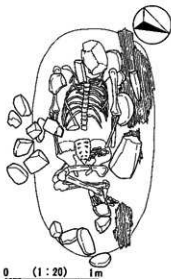


図133 SH1206人骨出土状態

#### SH1207 (図版25、図131)

位置：L-H 4にあり、SK3219に切られる。

墓坑：V層上面で確認する。埋土はオリープ褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物を混在する。北側は攪乱を受けているため全体形ははっきりしないが、おそらく楕円形で、主軸は北西-南東を向く。底

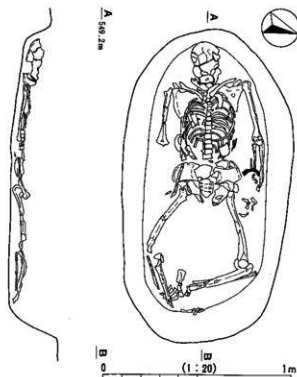


図134 SH1208人骨出土状態

面での短径42cm、検出面からの深さは20cmである。  
 人骨：底面直上から頭位136度の仰臥屈葬人骨が出土した。下半身は攪乱の結果欠損しており不明だが、顔面は右下方を向き、左右の上肢はおそらく肘を張りながら軽く曲げて、手先を下腹部に置いている。

**SH1208** (図版26、図134、PL30)

位置：L-J 9にある。

墓坑：V層上面で精査を行なったところ、小円礫・炭化物を混在する砂質土の落ち込みを検出する。主軸が西南西-東北東の楕円形で、底面での長径142cm、短径65cm、検出面からの深さは23cmを測る。底面は平坦である。

人骨：底面直上から頭位247度の仰臥人骨が出土した。頭骨はほぼ正面を向き、上肢は左右ともやや開き加減ながら伸ばして体側につける。下肢は、左右とも膝を緩く曲げるが、全体には伸ばしている

といえる。左手首にイノシシ牙製の腕輪を着装している。本址の人骨は頭位方向・埋葬姿勢や装身具をもつことから、約2m北で検出されたSH1172出土人骨と極めて近似している。関連性を注視したい。その他の遺物：上記腕輪のほか、埋土中より石鏃・打製石斧・磨石類各1が出土した。

**SH1211** (図版25、図135、PL31)

位置：L-I 5にあり、SB581の炉に切られる。

墓坑：SB581の床面精査段階で確認された。主軸が北東-南西の楕円形。埋土はオリブ褐色砂質ブロックが混在した褐色土で、炭化物や焼土が混在する。底面での長径88cm、短径60cm、検出面からの深さは16cmを測る。

人骨：底面直上から頭位30度の仰臥屈葬人骨が出土した。頭骨は下方を向き、上肢は左右とも肘でやや強く曲げて、手先を胸に置いている。下肢は股を開きながら股関節で強く曲げ、左右の膝をそれぞれの肘付近に置いている。

時期：SB581との関係から、本址はⅢ期以前に構築されている。

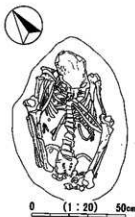


図135 SH1211人骨出土状態

**SH1212** (図版25)

位置：L-I 6にあり、SB581の炉に切られる。

墓坑：SB581の床面精査段階で確認された。主軸が北東東-西南西の楕円形。埋土はオリブ褐色砂質ブロックが混在した褐色土で、炭化物や焼土が混在する。底面での長径85cm、短径55cm、検出面からの深さは24cmを測る。

人骨：底面の北東端部から頭蓋骨の骨片が出土した。

時期：SB581との関係からⅢ期以前に構築されている。

**SH1213** (図版25)

位置：L-I 6にあり、SH1212および1214に切られる。

墓坑：SB581の床面精査段階で確認された。主軸が北東-南西の不整卵形。埋土は円礫やオリブ褐色砂質ブロックが混在した褐色土で、炭化物が混在する。底面での長径126cm、短径68cm、検出面からの深さは27cmを測る。

人骨：底面の北東端部から頭蓋骨の骨片が出土した。

時期：SB581との関係からⅢ期以前に構築されている。

**SH1214** (図版25)

位置：L-I 6にあり、SH1213を切る。

墓坑：SB581の床面精査段階で確認された。主軸がほぼ東西の楕円形。埋土はオリブ褐色砂質ブロックが混在した褐色土で、礫や炭化物が混在する。底面での長径103cm、短径59cm、検出面から16cmの深さを測る。

その他の遺物：底面のやや東寄りから、外面を上にした土器の大破片が出土した。

時期：底面出土土器から、ⅡないしⅢ期に比定される。

**SH1215** (図版26、図136、PL31)

位置：L-J 7にあり、SH1206を切る。

墓坑：SB583の床面精査段階で確認された。主軸が北東-南西の楕円形。埋土はオリブ褐色砂質ブロックが混在した褐色土で、礫や炭化物が混在する。底面での長径127cm、短径61cm、検出面からの深さは30cmを測る。

人骨：底面直上から頭位37度の仰臥屈葬人骨が出土した。頭蓋骨には鉢形土器2個体が重ねて被せられている。顔面は左を向き、上肢は左右とも肘でやや強く曲げて、手先を胸に置いている。下肢は、股関節で約90度曲げて、膝を立てている。

その他の遺物：顔面に直接被せられていた土器は鉢の胴下半部で、さらにその上にはほぼ完形の鉢を乗せてあった。

時期：被せられていた土器から、本址はⅣ期に構築されている。

**SH1216** (図版26、図137)

位置：L-K 7にあり、SH1184・1185に切られる。

墓坑：SH1184・1185の精査段階で確認された。主軸が北東-南西の楕円形。埋土はオリブ褐色砂質ブロックが混在した褐色土で、炭化物が混在する。底面での長径は131cm、短径は77cm、検出面から22cmの深さを測る。

人骨：底面直上から頭位251度の仰臥屈葬人骨が上半身だけ出土した。顔面は右下方を向き、上肢は左右ともおそらく肘を

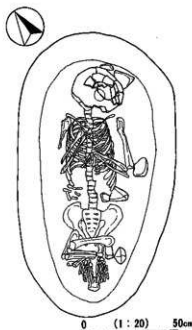


図136 SH1215人骨出土状態

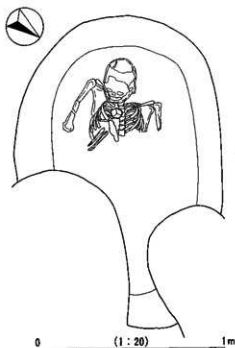


図137 SH1216人骨出土状態

やや強く曲げて、手先を胸に置いている。

時期：SH1184・1185より古いことから、本址もIV期以前に構築されている。

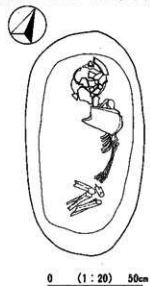


図138 SH1217人骨出土状態

**SH1217** (図版26、図138)

位置：L-J 8にあり、SH1172<sub>2</sub>に切られる。

墓坑：V層上面で確認された。主軸が北北西-南南東の楕円形。埋土はオリープ褐色砂質ブロックが混在した褐色土で、炭化物が混在する。底面での長径95cm、短径49cm、検出面からの深さは23cmを測る。

人骨：底面直上から頭位338度の仰臥屈葬人骨が左半身だけ出土した。右半身はSH1172<sub>2</sub>構築に伴って欠損したと思われる。頭蓋骨には土器が被せられていた。顔面の向きは不明。左上肢は伸展させ、下肢は股関節で曲げて、膝を左に倒している。

その他の遺物：埋土中から石鏃2が出土した。顔を覆っていた土器は、深鉢の胴下半部である。

時期：被せられていた土器から、II期に比定される。

**SH1221** (図版26)

位置：L-L10にある。

墓坑：V層上面で確認された。主軸が北西-南東の卵形。埋土はオリープ褐色砂質ブロックが混在した褐色土で、底面での長径107cm、短径75cm、検出面からの深さは30cmを測る。

その他の遺物：底面の南東寄りから骨片が出土した。

時期：SB580との関係からI期に比定されよう。

**SH1222** (図版26)

位置：L-M9にある。

墓坑：V層上面で確認された。主軸が南北の卵形。埋土はオリープ褐色砂質ブロックが混在した褐色土である。底面での長径135cm、短径95cm、検出面からの深さは20cmを測る。

その他の遺物：底面直上から骨片が、埋土中から磨石類1が出土した。

時期：SB580との関係から、I期に比定されよう。

**SH1224** (図版26)

位置：L-L9にあり、SB580の炉に切られる。

墓坑：SB580の床面精査段階で確認された。主軸が東北東-西南西の隅丸長方形。埋土はオリープ褐色砂質ブロックが混在した褐色土で、炭化物と焼土が混在する。底面での長径139cm、短径63cm、検出面からの深さは33cmを測る。

その他の遺物：埋土中から打製石斧・磨石類各1が出土した。

時期：SB580との関係から、本址はI期に比定されよう。

**SH1228** (図版26、図139、PL31)

位置：L-L9にある。SH1200・1201に切られ、1229を切る。

墓坑：SH1201の精査段階で確認された。主軸が東西の隅丸長方形。埋土はオリブ褐色砂質ブロックが混在した褐色土で、炭化物が混在する。底面での長径116cm、短径47cm、検出面からの深さは30cmを測る。

人骨：床面直上から頭位272度の仰臥屈葬人骨が出土した。頭蓋骨には土器が被せられている。顔面は左下方を向き、右上肢は肘を強く曲げて、手先を肩に置き、左は伸展させている。下肢は左右とも股関節を強く屈曲させて、膝をやや開き気味に腹部へ置いている。足骨の東側趾骨には砂岩の巨礫が置かれていた。

その他の遺物：頭蓋骨に被せられていた土器は、深鉢の胴下半部である。

時期：土器から考えて、本址はⅢ期に構築されている。

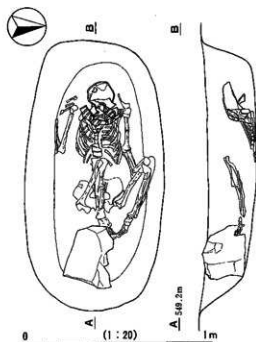


図139 SH1228人骨出土状態

#### SH1229 (図版26)

位置：L-L9にあり、1228に切られる。

墓坑：SH1228の精査段階で確認された。主軸がほぼ南北

の楕円形。埋土は円礫とオリブ褐色砂質ブロックが混在した褐色土で、炭化物が混在する。底面での長径75cm、短径48cm、検出面からは30cmの深さを測る。

時期：SH1228との関係から、本址はⅢ期ないしはそれ以前に構築されている。

#### SH1230 (図版25)

位置：L-H4にある。

墓坑：V層上面で確認された。主軸が北北西-南南東の楕円形。埋土は円礫とオリブ褐色砂質ブロックが混在した褐色土で、炭化物が混在する。底面での長径78cm、短径40cm、検出面からの深さは33cm。

人骨：床面の北寄りから下肢骨と思われる長骨が出土した。

その他の遺物：埋土中から刃器2が出土した。

時期：SB581の床面を壊しているから、Ⅲ期以前に構築されている。

#### SH1232 (図版25)

位置：L-H3にある。

墓坑：ⅢB層上面で確認された。主軸が北西-南東の隅丸長方形。埋土は細角礫と茶褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物が混在する。底面での長径118cm、短径60cm、検出面からの深さは30cmを測る。

その他の遺物：底面の北西寄りから口縁を下にした鉢形土器が出土し、その下には頭蓋骨と思われる骨片がみられた。

時期：頭蓋骨に被せられていたと考えられる土器から、本址の構築時期はⅢ期に比定される。

#### SH1233 (図版21、図140、PL31)

位置：L-H1にある。

墓坑：SB598の埋土中で確認された。主軸が北東-南西の楕円形。埋土は細角礫を含む黒褐色粘質土で、

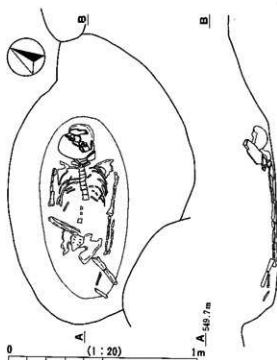


図140 SH1233人骨出土状態

その他の遺物：埋土中からミニチュア土器が出土した。

**SH1238** (図版21)

位置：L-L4にある。

墓坑：SB599の埋土上面で確認された。主軸が東西の楕円形。埋土は細角礫と茶褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物が混在する。底面での長径70cm、短径38cm、検出面からの深さは16cmを測る。

その他の遺物：底面直上から骨片が出土した。

**SH1237** (図版21)

位置：L-J3にある。

墓坑：SB591の床面下で確認された。主軸が西北西-東南東が楕円形。埋土は細角礫と茶褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物が混在する。底面での長径85cm、短径53cm、検出面からの深さは14cm。

その他の遺物：底面直上から骨片が出土した。

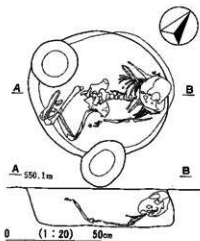


図141 SK2029人骨出土状態

炭化物が混在する。底面での長径95cm、短径47cm、検出面からの深さは22cmを測る。

人骨：底面直上から頭位62度の仰臥屈葬人骨が出土した。頭蓋骨には無文の鉢形土器が被せられており、顔面は正面を向く。右上肢は肘を約45度曲げ、手先を下腹部に置き、左はまっすぐに伸ばしている。下肢骨は残りが悪く位置関係はよくわからない。

時期：頭蓋骨に被せられていた土器から、本址の構築時期はIV期に比定される。

その他の遺物：打製石斧1が出土した。

**SH1234** (図版21)

位置：L-J3にある。

墓坑：SB591の床面下で確認された。主軸が北西-南東の楕円形。埋土は細角礫と茶褐色粘質ブロックを含む暗褐色土で、炭化物が混在する。底面での長径73cm、短径55cm、検出面からの深さは16cmを測る。

**SK2029** (図版37、図141)

位置：L-S19にある。

墓坑：III C層上面で確認された。主軸が北東-南西の円形に近い楕円形。埋土はオリブ褐色砂質ブロックを含む褐色粘質土で、炭化物が混在する。底面での長径65cm、短径60cm、検出面からの深さは20cmを測る。

人骨：底面直上から頭位212度の仰臥屈葬人骨が出土した。頸椎で捻れているため頭蓋骨が原位置にない。顔面の向きはおそらく左



下方を向いていたものと思われる。右上肢は肘を張りながら強く曲げ、手先を胸に置き、左はまっすぐ伸ばしている。下肢骨は左右とも股関節で緩く曲げて、膝を左に傾けながら立てている。

### (3) 補論一人骨を保存した立地 (表9・10)

北村縄文中期～後期人の人骨を多数保存している地域は、II層(強粘質土)に覆われた、III層(含細角礫粘質土)またはV層(細粒砂)の範囲である。細粒砂層や均質な細角礫を含む粘性土などを掘り込んだ墓坑に埋葬姿勢を保った人骨が多数保存されている。

埋葬された墓坑や配石類の上位は、3～5mに及ぶ緻密な細角礫土や粘性土に覆われており、人骨は地下の深所に埋もれている。またこの付近は、地下水が比較的豊かで、蛇ノ道(地下水の通路)が地表下1～3m内外のところを縦横に走っている。付近の井戸水位によると、水位は地表下2m以内である。水質はPH7.2～7.3の微アルカリ性を示しており、遺跡北方に所在する別所累層を流れる小倉沢での湧出水はPH7.6を示し、アルカリ度を増している。

採水地	水温(℃)	地上より水面までの深さ(m)	水深(m)	PH	硫酸(mg/ℓ)	硝酸(mg/ℓ)	塩素(mg/ℓ)	硫酸(mg/ℓ)
① 北村遺跡発掘地やや北方	15.0	0.6	1.6	7.3	6.1	0.03	4.74	11.3
② 北村遺跡南方	16.2	1.7	3.0	7.2	6.7	0.04	32.57	28.5
③ 北村遺跡発掘地西方段丘端	17.0	2.0	4.0	6.8	6.1	0.15	18.57	12.8
④ 段丘下部氾濫層の湧水	16.0			6.3	4.3	0.02	4.44	11.6

表9 遺跡付近の水質

(東京学芸部・松本市誌自然編 第三章より抜粋)

水温(℃)	PH	懸濁残渣	過マンガン酸カリ消費量	イ					オ			硝酸	有機炭酸	硫化水素	亜硫酸
				ナトリウム	カルシウム	マグネシウム	鉄	塩素	硫酸	ヒドロ炭酸					
7.0	7.6	826.0	3.4	40.4	—	140.2	41.9	0.62	4.3	410.5	—	22.2	—	—	—

表10 小倉沢における別所累層からの湧出水(小倉沢の湯)

(昭和29年 荒井敏男氏分析)

骨が堅いのは、70%ほどのカルシウム塩類を含み、ニカワ質が骨に弾力をもたせて丈夫にしている。土中で骨が軟化するのにはカルシウム塩類が溶け出し、脆くなるのはニカワ質の成分が溶けたり腐ったりしてなくなるからと考えられる。出土した人骨は発掘に際して、形態をよく残しているが非常に脆い。骨髄および骨質部が割がれて、骨髄を残す状態になることが目立った。また骨格部周辺には、白濁粘土化した部分も見られ、軽度の臭気を放っていた。これらの人骨は、カルシウム塩類やニカワ質成分の相当な溶脱があり、水を含んだビスケット状になっていたり、骨の外形が保たれたものもあり、また相当数の骨が溶失してしまってもいた。3500年余を経過した今日、300個体の人骨が保存されていたのは、

- ① 酸性の強いローム層がない
- ② 微アルカリ性の地下水で、水分が多く、酸素の少ない土中に埋没している
- ③ 付近一帯を占める別所累層および、それに起源をもつ沖積錐などを通る水は、カルシウム・イオン濃度が高い特長をもつ。従って周辺の地下水は、カルシウム・イオン濃度が相当高濃度である
- ④ 緻密な堆積物III群が不透水層の役割をして、雨水など地表水を浸透させにくい
- ⑤ 厚く堆積した堆積物III群・IV群が通気を妨げ、酸素の供給を断っていた

以上のような環境下に置かれていたことが、長期間良好な保存状態をもたらしたものと考える。

器名番号	調査年度	出處	種別	年代	製作地	器型		容量	重量	用途	装飾		出土遺物	産地	備考			
						形状	文様				形状	文様						
SH500	27-28	L-1711	V-VI	1	1	球形	2x3	30	NE50	27		土流?	船内、船尾を含む褐色色胎土。褐色陶質作	焼上、正	227	I	7 30-40	舟
SH501	27-28	L-M14	V-VI	1	1	球形	2x3	30	NE27	32		土流?	船内、船尾を含む褐色色胎土。褐色陶質作	焼上、正	227	I	7 13-14	舟
SH502	27-28	L-M12	V-VI	1	1	球形	2x3	35	NW56	28		土流?	船内船首を含む褐色色胎土。中央に褐色土塊を中	全身	516	I R C A C C	7 30-40	舟
SH504	27-28	L-M15	V-VI	1	1	球形	2x3	28	NE59	32		土流?	褐色土を含む褐色色胎土。褐色陶質作	全身	514	I L B B B B	7 40-50	舟
SH505	27-28	L-M14	V-VI	1	1	球形	2x3	44	NE64	34		土流?	褐色土を含む褐色色胎土。褐色陶質作	全身	514	I B B B B	7 40-50	舟
SH507	31-32	L-M17	IV-VI	1	1	球形	2x3	41	NW10	27		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	胴、下腹	268	I F B B B e	7 20-	舟
SH508	31-32	L-M19	IV	2	2	球形	2x3	32	NW25	27		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	284	I	7 50-60	舟
SH512	31-32	L-M17	IV-VI	2	2	球形	2x3	25	NW12	27		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	333	I F A A d	7 25-30	舟
SH515	29-30	L-Q26	V-VI	1	1	球形	2x3	31	NW69	33		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	333	I F A A d	7 25-30	舟
SH516	30	L-P19	IV-VI	1	1	球形	2x3	18	NI66	34		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	146	I F A D e f	7 35-38	舟
SH517A	29-30	L-Q12	V-VI	1	1	球形	2x3	38	NE60	34		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	195	I B C C C	7 18-20	舟
SH517B	29-30	L-P12	V-VI	1	1	球形	2x3	36	NI66	34		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	217	I L A A C C	7 12-13	舟
SH522B	29-30	L-P21	V-VI	1	1	球形	2x3	32	NE66	34		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	238	I L D D D e	7 40-50	舟
SH523	29-30	L-Q15	V-VI	1	1	球形	2x3	22	NE66	34		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	342	I F A A C C	7 60-	舟
SH529	29-30	L-O15	V-VI	1	1	球形	2x3	55	NE82	34		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	219	I R A A B B	7 20	舟
SH531	29-30	L-O15	V-VI	1	1	球形	2x3	40	NE51	34		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	219	I R A A B B	7 20	舟
SH532	27-28	L-O14	VII	2	2	球形	2x3	15	NE63	34		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	219	I R A A B B	7 20	舟
SH523	27-28	L-N15	V-VI	1	1	球形	2x3	53	NE26	33		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	219	I R A A B B	7 20	舟
SH524	27-28	L-O14	V-VI	1	1	球形	2x3	36	NE26	33		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	219	I R A A B B	7 20	舟
SH526	32	M-A15	V-VI	1	1	球形	2x3	11	NW24	28		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	219	I R A A B B	7 20	舟
SH527	42-43	M-F17	V-VI	1	1	球形	2x3	8	NE9	28		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	219	I R A A B B	7 20	舟
SH529	42	M-J18	V-VI	2	2	球形	2x3	38	NF12	38		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	219	I R A A B B	7 20	舟
SH533	40	M-O15	VI	1	1	球形	2x3	13	NW72	1		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	219	I R A A B B	7 20	舟
SH524	35-37	L-S19	IV-VI	2	2	球形	2x3	27	NE27	32		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	219	I R A A B B	7 20	舟
SH526	35-37	L-S17	IV-VI	3	3	球形	2x3	22	NE45	2		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	219	I R A A B B	7 20	舟
SH528	29	L-M14	IV-VI	1	1	球形	2x3	50	NE53	1		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	219	I R A A B B	7 20	舟
SH528	29-30	L-O14	V-VI	1	1	球形	2x3	32	NE26	2		土流?	茶褐色アロッカ程度の胎土より一層褐色胎土を覆	全身	219	I R A A B B	7 20	舟

表11-1 墓坑一覧

製造番号	断面	種類	種区	時期	軌小	アライ	長さ	重量	寸法	用途	製造	人		備考	
												製造	検査		
SH540	29-30	45	L-P15	V-VI	1 a	棒円	118×65	30	NW73	1 d	丸鋼	1 R	166	13-14	
SH542	29-30	39	L-Q20	V-VI	1 c	丸鋼	69×54	40	NW23						
SH545	34		L-Q15	?		円	65×53	42					310	30-35	
SH550A	27	46	M-A15	VI		棒円	120×65	55	NW54	1 d					40-50
SH550B	46	47	M-A15	V-VI	1 a	棒円	140×60	32	NE10	2 a					20C
SH550	46	47	M-R16	V-VI	1 c	棒円	81×59	66	NE10	1 a または 1 b					
SH552	49	47	M-R16	V-VI	1 c	棒円	81×59	66	NE10	1 a または 1 b					
SH554A	41-43	48	M-R18	VI	1 b	円	129×125	65							
SH554B	41-43	48	M-R18	VI	1 b	円	129×125	65							
SH556	45-46	49	M-I116	V-VI	1 c	棒	103×89	45	NW4	3 a					
SH559	45-46	49	M-I116	V-VI	1 c	丸鋼	121×66	34	NW75	1 b					
SH567	27-28	28	L-M14	IV-VI	1 b	棒円	121×67	35	NW41						
SH606	32		L-M15	?		棒円	140×85	45	NW60	断面等りに組立					
SH673	31-32	30	L-N14	IV	2 c	棒円	115×88	38	NR17	2 c e					
SH674	32		L-N16	?		棒円	135×57	38	NW74	1 d					
SH675	32		L-N16	?		円	50×50	10							
SH678	42-43		M-R16	VI	1 c	棒円	118×58	17	NE35	2 a					
SH679	42-43		M-R16	VI	1 b	棒円	90×62	39	NE24	2 a					
SH680	29-30	31	L-Q15	V-VI	2 c	丸鋼	130×67	30	NE26	2 a					
SH690	52		M-L17	V-VI		棒円	90×45	20	NE80	2 b e					
SH1291	52		M-L17	V-VI		棒円	60×45	16	NE13	2 a					
SH696	42-43		M-R18	V-VI	2 b	棒円	80×38	40	NE25						
SH699	42-43		R-F 1	?		棒円	84×32	4	NE19						
SH701	41		R-F 1	?		棒円	90×30	16	NE18	1 d					
SH702	44		R-G 1	?		棒円		90		1 d					
SH703	44		R-P 1	?		棒円	45×44	103							
SH704	29-32		L-L15	IV-VI		棒円	109×56	65	NW9	1 a					
SH665	32		L-L15	IV-VI		棒円	122×81	100	NW19	1 d					

表11-2 基杭一覧

遺址番号	遺跡	地区	精製	配石	基			遺跡	出土遺物	土	人		備考				
					プラン	面積(m <sup>2</sup> )	土橋				積石法	遺物		遺跡形状	柱	身長(m)	
SH606	31	52	L-Q15	I-V	横円	84×35	37	NW54	2cα	積石貯	円盤石片	円盤石片	300	I F D D d	20-25	155.8	焼酎・他石
SH607	31	53	L-Q16	III	横長方形	118×55	41	NW54	2cα	積石	円盤石片	円盤石片	300	I F D D d	20-25	155.8	焼酎・他石
SH611	45-46		M-I119	V-VI	横長方形	140×90	35	NW51	1d	石橋	骨片	骨片					
SH615	45-46		M-I119	VI	三角	100×67	16	NW99		石橋	骨片	骨片					
SH615	45-46		M-I119	VI	三角	100×67	16	NW99		石橋	骨片	骨片					
SH616	45-46		M-I119	VI	三角	100×67	16	NW99		石橋	骨片	骨片					
SH616	45-46		M-I119	VI	三角	100×67	16	NW99		石橋	骨片	骨片					
SH616	45-46		M-I119	VI	三角	100×67	16	NW99		石橋	骨片	骨片					
SH617	37	54	L-S18	?	横長方形	129×62	50	NE17		石橋	骨片	骨片	195	I F D B b b	20-25	145.6	
SH617	37	54	L-S18	?	横円			NW68									
SH620	45-46		M-I119	?	横円	100×45	18	NE29	1d	横石橋	骨片	骨片					
SH623	37		L-T19	?	横円	75×42	18	NW3	2cβ	打製石片、磨石等	骨片	骨片					
SH624	35-37		L-T15	?	横長方形	140×82	20	NE15	2a	小形土器、刀鏃	骨片	骨片					
SH625	35-37		L-T15	?	横円	102×77	25	NW2	高知種セツト内 以類	小形土器	骨片	骨片					
SH626	37		L-S15	IV-VI	横円	88×45	14	NE24	磨石等	磨石	骨片	骨片					
SH627A	35-37	55	L-S15	IV-VI	横円	105×79	27	NW2		石橋	骨片	骨片					
SH627B																	
SH628	32		L-M16	?	横円	1250×80	31	NW62		多量の角礫を含む褐色砂質土、灰化砂質土	骨片	骨片	0	I F D e e	20-	156.2	
SH629	32		L-L15	?	横円	116×68	24	NW23	1d	打製石片	骨片	骨片	368	I R D	20-	156.9	
SH630	25		L-M14	IV-VI	横円	110×65	26	NW10		多量の角礫を含む褐色砂質土	骨片	骨片					
SH631	25		M-A16	I-II	横長方形	1003×71	221	NW25	奥部中に横石	円盤	骨片	骨片					
SH632	41		M-C16	?	円	79×79	120	NW15	1c	丸小、小形土器	骨片	骨片					
SH633	41		M-C19	?	横円	66×57	22	NE2	1a		骨片	骨片					
SH634	45-46		M-I119	V-VI	小形土器	113×88	27	NE51		石橋、磨石	骨片	骨片					
SH636	46		M-K15	?	横円	70×69	27	NW2	1d		骨片	骨片					
SH637	35-37		L-S15	IV-VI	横円	97×65	20	NE13	2bβ	石橋	骨片	骨片					
SH638	35	56	L-T15	I-III	横円	90×41	25	N	0	石橋	骨片	骨片					
SH639	37		M-A15	III	横円	87×69	22	NW16	2bβ	打製石片	骨片	骨片	134	I R D D e e	20-25	145.8	
SH640	41		M-A20	?	横円	65×55	22	NE51			骨片	骨片					
SH641	41		M-C19	?	横長方形	68×35	22	NW4									

表11-3 遺坑一覧

調査番号	調査地区	測区	時期	瓦口	アラス	幅員(m)	深さ(m)	土層	出土遺物	M	人		備考			
											位置	規模				
SH843	36・37	L-T16	?	横切	64×(50)	(33)	NE37	層状6		部内壁を赤心褐色土、灰化物混在	横切位置	遺構番号	遺構位置	遺構規模	遺構形状	備考
SH844	36・37	L-S16	IV-VI	横切	73×60	(29)	NE93	2 b α		少量の部内壁を褐色土	横切	?	?	?	?	?
SH845	36・37	M-A18	I-II	横切	(60)×54	(26)	NE18	2 b α	打撃灰片、土塊	黒褐色粘質土、灰化物混在	横切					
SH846	38・41	M-C16	I	横切	(50)×45	(20)	NP96		大塊、下のこぶ状土製品	部内壁を赤心褐色土	下壁	葉				
SH847	38・41	M-D17	II-	跡	64×45	(14)	NP75		瓦類	部内壁を赤心褐色粘質土	遺跡					
SH848	40	M-B15	VI	横断面	60×38	32	NE15	2 b α, 中々に葉	石皿、磨石、瓦類、円錐	部内壁を赤心褐色粘質土、灰化物混在	円錐					
SH850	36・37	L-T20	?	横断面	63×40	(8)	NE33	2 c β	石皿、円錐	赤褐色粘質土、灰化物混在	円錐					
SH852	37	M-K19	V-VI	1 b	横断面	(53)×36	31	NP59	散骨、石皿	赤心褐色粘質土、灰化物混在	円錐	300	1 F A A 3 3	?	25-30	土中に埋
SH856	40	M-B15	VI		円	50×43		1 d		黒褐色粘質土、灰化物混在						
SH857	36・37	L-S15	?	跡	66×49	(26)	NE36			少量の部内壁を赤心褐色粘質土	円錐	223	1 F D D			柱上土層
SH868	36・37	L-S17	IV-VI	跡	106×73	32	NP31	2 b β	打撃灰片	少量の部内壁を赤心褐色粘質土、灰化物混在	横切					
SH869	36・37	L-S17	IV	3	横断面	114×54	28	NP52	石皿、磨石	少量の部内壁を赤心褐色粘質土	円錐	300	1 F D D d	α	40-60	壁根?
SH860	38	L-S16	?	横切	77×58	(16)	NP7			外壁を赤心褐色粘質土	横切					
SH862	38	L-T16	I-IV	横断面	66×50	(21)	NE16		散骨	角壁を赤心褐色粘質土、灰化物混在	横切					
SH864	36・37	L-T15	I-II	横切	86×73	(31)	NP2	2 c β	打撃灰片、磨石、散骨	部内壁を赤心褐色粘質土、灰化物混在	横切					
SH865	36・37	L-R19		横切	(110)×85	(40)	NP71			赤心褐色粘質土、灰化物混在						
SH870	42	M-M18	V-VI	2 c	横断面	39×42	10	NP37		黄褐色粘質土、部内壁を赤心褐色粘質土、灰化物混在						
SH871	53	M-N18	I-IV	横切	44×50		NE14			部内壁を赤心褐色粘質土、灰化物混在						
SH872	52	M-N18	IV	横断面	77×58	19	NP1	2 b β	磨石、小片、磨石、散骨	部内壁を赤心褐色粘質土、灰化物多量に混在	横切					
SH873	45・46	M-I19	?	2 b	横切	48×35	46	NP33	石皿	黄褐色粘質土、部内壁を赤心褐色粘質土、灰化物混在						
SH874	38	L-S16	?	横切	67×76	(26)	NP79			角壁を赤心褐色粘質土	横・下壁					
SH875	38	L-R17	?	横切	56×45		NE17	2 c β, 柱石?		上部部内壁を赤心褐色粘質土、下部より赤心褐色粘質土混在						
SH876	38	L-S16	?	横切	77×42	(23)				部内壁を赤心褐色粘質土	横切					
SH877	48・49	M-G19	?	跡	49×53	(26)	NE27	遺構中に内壁片		部内壁を赤心褐色粘質土	横切					
SH878	46	M-H19	I-IV	不規則	(104)×75	(25)	NP97	1 d		部内壁を赤心褐色粘質土	横切					
SH879	38	L-S16	?	横切	75×40	(26)	NE50			部内壁を赤心褐色粘質土	横切					
SH882	38	L-N16	?	横切	74×40	(15)	NE26			赤褐色粘質土、部内壁を赤心褐色粘質土、灰化物混在	横					

表11-4 基坑一覽

遺跡番号	調査年度	地区	時期	地質	プラン	規模(m)	土坑	溝	竪穴	出土遺物	土			人			備考	
											位置	形状	土質	位置	形状	土質		
SH653	46	M-E19	?	円	50×50	33	NW17	2 a		打石片、石皿、骨片・角								
SH654	46	M-116	V-VI	楕円	100×50	13	NW17	2 a		打石片、石皿、骨片・角								
SH660	38・37	M-A17	I-II	楕円	41×48	(27)	NW3	2 c, f										
SH666	41	M-D17	II	楕円	118×(20)	(40)	NE57	3 b, f		陶器片								
SH668	48・46	M-H20	IV	楕円	76×46	(33)	NE53	2 b, f		打石片、多乳石								
SH680	46	M-119	?	長方	(× 60)		NW16	1 d										
SH686	38・37	L-S17	III	正方	30×45	(38)				小、形土器、骨片								
SH692	31・32	M-1018	IV-VI	2 c	楕円	90×48	31	NW33		小瓶、骨器類								
SH693	45・46	61	M-116	VI	2 c	不規則	(101)×77	26	N 0	林、漆片、打石片、土器								
SH694	38・37	L-S15	?	楕円	73×66	(28)	NE16											
SH696	38・37	L-S15	?	楕円	68×71	(24)	NW65			土器類								
SH698	38	L-T15	I	楕円	70×47	(20)	NW66			打石片、骨器								
SH699	38	M-M19	V-VI	楕円	70×47	(20)	NW66			打石片、骨器								
SH700	46	M-118	V-VI	楕円	62×38	(24)	NE20	1 d		腰刀類 2								
SH703	34	L-R16	I-V	楕円	39×49	(49)	NE30	2 a		腰刀類								
SH704	44	M-F19	?	楕円	62×38	(24)	NE33	2 b, f										
SH705	44	M-F19	?	楕円	73×65	(22)	NW78	1 d										
SH706	44	M-E19	?	楕円	40×58	(26)	NE47	1 d										
SH707	44	M-E19	?	楕円	33×31	(36)	NE71											
SH709	34	L-Q15	I-V	楕円	105×63	(35)	NW26			40歳 2								
SH711	37	M-B16	I-V	長方	60×43	(42)	NE21			円盤								
SH714	34	L-P18	IV-V	長方	42×64	(32)	NW94			石盤								
SH715	34	L-P18	I-V	楕円	51×34	(24)	NW36	1 b										
SH717A	34	L-Q17	I-V	不規則	104×48	(60)	NW28			円盤								
SH717B	38	L-T15	?	楕円	68×68	(48)	NW61											
SH719	41	M-F19	?	楕円	(× 60)		NE20	2 c, f										
SH720	41	M-D19	?	楕円	54×35		NE39	1 c, f(埋没化?)										

表11-5 基坑一覧

発掘番号	図号	種類	地区	時期	配行	プラン	規模	位置	出土遺物	注	人	番号
SH721	41・44		M-D19	?	南	128×44	8 N 0	2 b, β		エリーブ褐色砂質ワックを含む褐色粘土、炭化植物遺		
SH722	44		M-F19	?	南	45×45						
SH723	44		M-E19	1-VI	南	45×45		1 d				
SH724	44		M-F20	?	南	135×1	24	炭化植物遺				
SH725	44		M-E20	?	南	92×62	10 NW90		石皿、磨石皿			
SH726	44		M-E20	?	南	87×58	12 NE4		褐色粘土質瓦			
SH727	44		M-E20	?	南	82×46	10 NW5		褐色粘土質瓦			
SH728	44		M-E20	?	南	80×72	16 NE5		エリーブ褐色砂質ワックを含む褐色粘土、炭化植物遺			
SH731	45		M-D17	1-II	南	100×72 (×47)	NW4	炭化植物遺				
SH732	44		R-F1	?	南	72×1	NW97	1 d				
SH734	34		L-R18	?	不発掘	(65×46)	NE84	2 c, β				
SH735	38		L-R15	?	南	92×61	22 NE78	2 c, β	丸皿2、円皿			
SH736	38		L-T15	?	南	93×70	20 NE1	2 c, β				
SH739	38		L-S17	I	南	65×56	10 NE29		打撃臼、円皿			
SH79	38		L-T17	I-IV	南	95×75	30 NW8		打撃臼、円皿			
SH741	47		M-116	1-VI	南	×	NE52					
SH742	35・37		L-T18	III-VI	不発掘	170×110	69 NW64					
SH743	35・37		L-T16	I	南	117×74	43 NW18	2 c, β				
SH751	47		M-116	?	南	95×66	22 N 0	2 a				
SH752	48・49		M-130	?	南	88×66	31 NE54	2 b, β				
SH753	47		M-116	?	南	113×22	20 NW91		磨石皿、打撃臼			
SH756	48・49		M-119	1-V	不発掘	93×53	26 NE57	1 d				
SH758	48・49		M-119	1-V	南	115×68	29 NE16	2 b, β				
SH760	50・57		M-A13	I-III	南	109×64	20 NE58		石皿3			
SH761	38		L-R15		南	100×65	32 NW23	2 c, β				
SH762	34		L-R18	1-IV	南	120×64	33 NW16	2 c, β				
SH763	34		L-Q19	1-IV	南	142×64	34 NW25		磨石			

表11-6 墓坑一覧

発掘番号	西暦	緯度	経度	時期	配分	墓				出土遺物		土		人		備考	
						プラン	墓長(m)	墓幅(m)	土層	構造	位置	積込位置	積込位置	積込位置	積込位置		積込位置
SH54	34	72	1-P-19	I-IV	相同	45×48	31	NW27	2 c #					332	IFACC	30-40	儀
SH56	38-41		M-B18	?	北長	115×66	36	N222	2 b #	瓦片							
SH57	41		M-B19	?	南	130×67	27	N213	2 b #								
SH58	41		M-B17	?	南	100×68	22	NW42									
SH70	38-41		M-D18	?	南	43×42	35	NW90	2 c #	円板							骨上層
SH71A	35-37		L-S-17	I-III	相同	70×47	34	NW72									
SH71B																	
SH72	34		L-O17	II-IV	相同	65×38	15	NW75	1 a	赤色磁、タラシ							
SH75	34		L-O18	II-IV	北長	40×35	26	N226	1 d								
SH77	48-49		M-120	?	南	85×73	30	N261		赤い磁							
SH78	48-49		M-120	?	南	70×52	5	NW1	1 d								
SH79	48-49		M-120	?	北長	120×65	10	N259									
SH82	34	72	L-P18	I-IV	相同	120×48	38	NW64	1 d	緑彩土器、石製、円板				270	B	?	1400年
SH84	32	74	L-N18	IV	個人墓分	120×49	38	NW26	2 b #					340	IFDDd	?	20-30 155.6
SH85A	37	75	L-S17	III	3	118×45	25	NW38		土部大断片				319	IFDDd	?	50-60 166.9
SH85B	37	75	L-S17	3	長断片	115×45	25	NW28									
SH86	38	76	L-T17	I-IV	相同	45×66	19	NW90		土器				280	IFAAcc		
SH87	38-41		M-D17	?	南	82×42	15	NW33	2 b #								
SH90	41		M-D17	?	南	59×49		N230									
SH91	38-41		M-D17	?	南	80×4		NW88									
SH93	41		M-C17	?	相同	43×33		NW18									
SH94	41	77	M-C17	?	南	50×64	38	N257		打撃打片				387	ILDDcc	?	30-
SH95	35-37		L-T18	?	円	74×74	28										
SH96	38	78	L-J17	I-IV	相同	83×51		N250		遺棄土に埋没				250	IFBAcc	?	30-40 155.4
SH97	34		L-P17	II	不規則形	53×25	27	NW44	2 c #								
SH99	37	79	L-T17	III	相同	127×51	40	N239		円盤							
SH99	35-37		M-A17	I-III	長方	40×55	37	NW13									
SH99	38-41		M-A16	?	不規則形	100×46	16	N233									

表11-7 墓坑一覧



産地番号	産地	産区	時限	配付	産			坑			人			備考			
					アール	産出量	産出	産出	産出	産出	産出	産出	産出		産出	産出	
SH002	38	M-A16	IV		15	NW2											
SH002	32-34	L-O16	IV-VI		131×42	NW69											
SH006	41	M-B17	+		134×84	NW6	2 c β										
SH008	51	M-K15	IV-VI		105×40	NE5	2 a										
SH011	38	M-A13	IV-VI		80×8	NE27											
SH013	38-41	M-B17	I, II		67×66	NE3	2 c β										
SH014	38-43	M-B17	?		80×70	NW16	2 c α										
SH019	37	L-T19	?		105×44	NE31											
SH016	48-49	M-G18	III-VI		68×39	NE38											
SH017	46	M-G17	V, VI		175×46	NE1											
SH018	46	M-G17	V		115×66	NE0	2 c β										
SH019	46	M-H16	V, VI		98×70	NE31	2 c β										
SH050	46	M-G18	V, VI		70×50	NW62	2 b α										
SH023	46	M-F19	I-III		90×46	NW99											
SH024	46	M-117	V, VI		125×79	NE6											
SH026	46	M-H17	V, VI		135×58	NE35	2 c β 柱石										
SH030	53	M-K16	I-III		77×52	NE3											
SH036	53	M-M19	I-IV		69×38	NE14											
SH037	48-49	M-J19	?		38×22	NE0											
SH039	53	M-M16	?		90×52	NE29											
SH040	53	M-N19	I-IV		40×32	NE0											
SH042	51	M-N16	II		135×70	NE1	1 d										
SH063	27-28	L-L13	V-VI	1 b	105×54	NE26	2 b β										
SH062	31-33	L-K11	III?	2 b	121×83	NE3											
SH063	31-33	L-J11	III-VI		110×79	NE9											
SH064	31-33	L-K12	III-VI	2 a	84×48	NE23	2 c α										
SH055	31-33	L-L11	III-VI	1 a	104×50	NE19	2 c α										

表11-8 墓坑一覧

調査番号	区画	検出	層位	時期	形状	断面	土壌		土質	土質	人		備考
							深さcm	上端			調査位置	調査時期	
SH856	31-33	89	L-113	III-VI	1 d	不規則形	86×43	25	NE24	土層片・円礫・炭化物を含む褐色粘質土	調査位置	160-	
SH857	31-33	89	L-113	V-VI	1 d	楕円	96×57	30	NE47	土層片・炭化物・著緑色粘質土を含む褐色粘質土	全身	40-40	
SH858	31-33	87	L-K12	III-VI	2 c #	楕円	82×55	25	NE42	土層片・円礫・炭化物を含む褐色粘質土	全身	100-	
SH859	31-33	90	L-112	III-VI	2 a	楕円	111×52	30	NE90	土層片・円礫・炭化物を含む褐色粘質土	全身	100-	
SH860	33		L-112	III-VI	2 a	楕円	105×87	32	NW39	炭化物を含む褐色粘質土	骨片	100-	
SH861	33		L-M12	III-VI	楕円	105×35	ND90	2 b #		炭化物・オリブ・褐色粘質土を含む褐色粘質土	骨片		
SH862	33		L-M12	III-VI	楕円	115×35	NW25	2 b #		土層片・炭化物	骨片		
SH863	33		L-M12	I-VI	楕円	105×60	NW11	1 d		土層片・炭化物	骨片		
SH864	33	81	L-111	III-VI	楕円	710×53	NW33			土層片・炭化物	7層	100-	
SH865	31-33		L-112	III-VI	1 d	楕円	73×46	NE27	2 c #	炭化物を含む褐色粘質土	骨片		
SH866	33		L-N13	I-VI	不規則形	130×45	NW25	1 b		土層片・炭化物	骨片		
SH870	33		L-O12	I-VI	楕円	112×55	NE3	2 c #		土層片・炭化物	骨片		
SH870	33		L-N12	I-VI	楕円	112×55	45			土層片・炭化物	骨片		
SH872	33	84	L-112	III-VI	1 b	楕円	107×70	NS33	2 a		全身	240	
SH874	25		L-113	?	楕円	84×59							
SH875	33		L-M13	I-VI	楕円	115×56	NW25	1 b					
SH877	33		L-M13	I-VI	楕円	37×43	NW11						
SH878	33		L-112	III-VI	楕円		NE90						
SH879	33	82	L-113	III-VI	楕円	118×62	NS69						
SH880	31-33		L-O20	I-VI	楕円	134×58	24	NE97		炭化物多量に含む褐色粘質土	全身	100-150	
SH892	44		R-F1	?	楕円	31×8	30	NW81	1 d				
SH894	31-37		L-S20	?	楕円	68×47	38	NW41		土層片・炭化物	骨片		
SH901	47-49		M-J16	?	楕円	134×68	34	NE85		土層片・炭化物	骨片		
SH902	47		M-117	I-VI	楕円	45×35		NE14	2 b #	土層片・炭化物	骨片		
SH904	53		M-L17	?	楕円	60×45	22	NE23	2 a #	土層片・炭化物	骨片		
SH905	53		M-L17	?	楕円	50×27	24	NE24	2 b #	土層片・炭化物	骨片		
SH906	53		M-L17	?	楕円	65×42	22	NE25	1 d	土層片・炭化物	骨片		

表11-9 基坑一覧

表11-10 墓坑一覧

墓坑番号	区画	経度	緯度	形状	形状	プラン	墓室寸法	土輪	出土遺物	注	土	位置	埋没状況	発見者	発見年	調査年
SH008	53	63	M-K17 IV-V	円	97×60	18	N D	2 A			墓内面と茶褐色粘質ロツクを含む褐色土。灰化層と腐葉土。	全身	0	I F C A C C	30-40	
SH010	48-49		M-H17 IV-V	楕円	90×52	12	N200	2 c β, 腐敗層に基く			墓内面と茶褐色粘質ロツクを含む褐色土。灰化層と腐葉土。					
SH012	47-49		M-H15 Ⅰ	楕円	90×60	20	NW2	2 b β	土瓶、銀貨		腐内面と茶褐色粘質ロツクを含む褐色土。	骨片				
SH013	48-49		M-F18 I-II	円	72×42	26	NW63				オリーブ褐色粘質土を含む褐色土。					
SH014	48-49		M-F19 I-II	円	69×47	35	N273	2 c β			オリーブ褐色粘質土を含む褐色土。灰化腐葉土。					
SH015	48-49		M-F18 I-II	楕円	63×36	20	NW14				墓内面とオリーブ褐色粘質土を含む褐色土。					
SH016	48-49		M-G18 I-II	楕円	(68×)	56					オリーブ褐色粘質土を含む褐色土。					
SH017	48-49		M-G17 I-II	楕円	(58×)	14					オリーブ褐色粘質土を含む褐色土。層上灰化腐葉土。					
SH019	33-49		M-J18 Ⅰ	楕円	63×52	23	NW79	1 d	小瓶、磨石類		墓内面とオリーブ褐色粘質土を含む褐色土。層上灰化腐葉土。					
SH023	48		M-H18 IV-V	円			1 d				墓内面とオリーブ褐色粘質土を含む褐色土。層上灰化腐葉土。					
SH024	47	94	M-J17 Ⅰ	円	85×60	20	NE4		赤銅類		墓内面とオリーブ褐色粘質ロツクを含む褐色土。層上灰化腐葉土。	全身	0	I F C D e e	50-	
SH027	47-49		M-J17 Ⅰ	小室	(69×)				石椁		オリーブ褐色粘質ロツクを含む褐色土。	骨片				
SH031	47-49		M-J16 Ⅰ	楕円	100×45	12	NW34	1 d	鉄釘		茶褐色粘質ロツクを含む褐色土。灰化腐葉土。					
SH033	47-49		M-J17 Ⅰ	楕円	47×30		NE14		石椁、磨石類		茶褐色粘質ロツクを含む褐色土。灰化腐葉土。					
SH035	47-49		M-H15 I-II	円	(70×63)	10	N 0				茶褐色粘質ロツクを含む褐色土。灰化腐葉土。					
SH036	47		M-H15 I-II	楕円	(60×36)						墓内面と茶褐色粘質ロツクを含む褐色土。層上灰化腐葉土。					
SH037	47-49		M-H15 I-II	楕円	(62×20)	18	NE16				墓内面とオリーブ褐色粘質ロツクを含む褐色土。					
SH038	47-49	95	M-H15 I-II	楕円	(100×50)	30	NE54				墓内面とオリーブ褐色粘質ロツクを含む褐色土。層上灰化腐葉土。					
SH039	47-49		M-H16 Ⅰ	楕円	65×35	20	NE5				墓内面と茶褐色粘質ロツクを含む褐色土。層上灰化腐葉土。					
SH040	47-49		M-H16 Ⅰ	不規則	60×40	32	NE33	2 c β	磨石類		墓内面と茶褐色粘質ロツクを含む褐色土。					
SH041	48-49		M-H16 Ⅰ	楕円	68×40	32	NW5	2 b β			オリーブ褐色粘質土を含む褐色土。	骨片				
SH042	48-49		M-G17 IV-V	不規則	(100×50)		NE69				オリーブ褐色粘質土を含む褐色土。					
SH043	48-49		M-G16 Ⅰ	楕円	(85×67)		NE64				墓内面とオリーブ褐色粘質土を含む褐色土。灰化腐葉土。					
SH044	48		M-H17 Ⅰ	楕円	(90×66)	20	NW11		石椁		墓内面とオリーブ褐色粘質土を含む褐色土。					
SH045	48		M-H17 Ⅰ	楕円	(45×26)	34	NE11				オリーブ褐色粘質土を含む褐色土。					
SH047	48-49		M-G17 Ⅰ	不規則	(80×60)	20	NE37				オリーブ褐色粘質土を含む褐色土。層上灰化腐葉土。					
SH048	48-49		M-G17 I-II	不規則	(60×30)	24	NW12	2 c β			オリーブ褐色粘質土を含む褐色土。層上灰化腐葉土。					

集落番号	図面	経度	緯度	時期	方位	範囲	中心	面積	土質	出土遺物	遺構	土	居住施設	居住数	柱 数	柱 径	遺 跡	備 考
SH949	48°49'	M-G17	1-Ⅲ	東西	145×47	40	NW28	2 b β	緑褐色の砂質土を含む褐色土。灰化腐植土	打撃石、石皿、骨片		オリーブ褐色砂質土を含む褐色土。灰化腐植土	骨片	20	20		遺跡(1)	
SH950	48°49'	M-H18	Ⅱ	東西	(110×60)	40	NW29		緑褐色とオリーブ褐色砂質土を含む褐色土									
SH955	48°	M-G18	1-Ⅲ	東西	(50×37)				オリーブ褐色砂質土を含む褐色土									
SH956	48°	M-K15	1-Ⅲ	東西	102×48	38	NW29	2 c β	茶褐色砂質土を含む褐色土。灰化腐植土									
SH957	48°	M-H19	1-Ⅳ	東西	82×54		NE26	2 c β	緑褐色と茶褐色砂質土を含む褐色土。灰化腐植土									
SH958	48°	M-H19	1-Ⅳ	東西	174×85		NE25		緑褐色と茶褐色砂質土を含む褐色土。灰化腐植土									
SH959	48°	M-H19	1-Ⅳ	東西	45×35		NE 8	60度傾斜に墓石	緑褐色と茶褐色砂質土を含む褐色土									
SH961	48°46'	M-G17	1-Ⅲ	東西	( ×50)	40	NE 3		緑褐色とオリーブ褐色砂質土を含む褐色土。腐植土									
SH962	48°49'	M-G17	1-Ⅲ	東西	(60×40)	32	NE 7	1 β	緑褐色とオリーブ褐色砂質土を含む褐色土									
SH965	48°49'	M-G19	?	東西	88×42	15	NE49		緑褐色と茶褐色砂質土を含む褐色土									
SH965	48°49'	M-L16	?	東西	(90×50)	10			オリーブ褐色砂質土を含む褐色土									
SH966	48°49'	M-L16	?	東西	(80×40)	11	NE 5		オリーブ褐色砂質土を含む褐色土									
SH967	48°49'	M-H16	?	不整	80×56	47	NW12		オリーブ褐色砂質土を含む褐色土。灰化腐植土									
SH968	48°49'	M-H16	?	東西	(57×30)	30	NW14		オリーブ褐色砂質土を含む褐色土。灰化腐植土									
SH970	48°49'	M-H18	1-Ⅳ	東西	107×100		NE20		オリーブ褐色砂質土を含む褐色土									
SH972	48°49'	M-L16	?	東西	(100× )	20			緑褐色と茶褐色砂質土を含む褐色土。灰化腐植土									
SH973	48°	M-L20	?	東西	100×70	35	NE47	1 β	腐植土と茶褐色砂質土を含む褐色土。灰化腐植土									
SH974	48°49'	M-L19	1-Ⅳ	東西	122×104	16	NE26	2 b β	オリーブ褐色砂質土を含む褐色土。灰化腐植土									
SH975	48°49'	M-L19	1-Ⅳ	東西	(73×50)	35	NW29		オリーブ褐色砂質土を含む褐色土。灰化腐植土									
SH976	48°49'	M-F17	1-Ⅳ	東西	80×55	10	NE26	内壁赤にシタ	オリーブ褐色砂質土を含む褐色土。灰化腐植土									
SH978	48°	M-L18	1-Ⅳ	東西	97×56	20	NE 7		オリーブ褐色砂質土を含む褐色土。灰化腐植土									
SH984	48°	M-H18	1-Ⅳ	東西				2 b β	腐植土と茶褐色砂質土を含む褐色土。灰化腐植土									
SH101	44°	M-F13	Ⅱ	東西	62×55	15			腐植土を含む褐色土									
SH106	39°	M-C13	—	東西	63×45	10	NE30	2 c β	腐植土と茶褐色砂質土を含む褐色土。灰化腐植土									
SH103	39°	M-C14	?	東西	(64×33)	50	N 0		腐植土と茶褐色砂質土を含む褐色土。灰化腐植土									
SH104	39°	M-C14	?	東西	(75×40)	24	NW 8	傾斜にシタ	腐植土と茶褐色砂質土を含む褐色土。灰化腐植土									
SH105	39°	M-D14	?	東西	(110×55)	10	NE 1		腐植土を含む褐色土。灰化腐植土									

表11-11 墓坑一覽

遺構番号	位置	時期	配石	プラン	規模(m)	埋没深	基礎	柱	柱上遺構	壁	上	人	備考
SH1006	39	M-C13	VI	長方形	50×60	57	NW65	平石の敷置	小形土器		灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1007	39	M-B14	?	不整形	(72×65)	5	NW41	2 b, γ			灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1009	39	M-C13	?	楕円	35×33	18	N266	1 d	石皿、小形土器		灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1012	39	M-B14	?	楕円	30×44	9	NW14		研鉢		灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1013	39	M-B13	?	楕円	43×40	5	NW37				灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1016	39	M-A13	?	楕円	(33×52)	24	NW2	2 b, ?			灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1018	39	M-A12	?	楕円	58×22	21	NW22	2 b, β			灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1019	39	M-C14	?	楕円	(102×70)	17	N261				灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1021	39	L-T13	?	楕円	35×55	45		2 b, ?	土器、土器蓋		灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1023	39・36	L-S13	VI	楕円	150×85	25	NW68		土、磨石皿、灰膏		灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1024	39・36	L-S13	VI	円	80×80	19		1 d			灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1025	39	M-B14	?	楕円	(57×24)	16	N268				灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1026	39	M-B14	?	楕円	X	X	N257				灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1042	39	M-B13	?	長方形	74×28	7	K0				灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1045	39	M-B14	?	楕円	(90×)	10	NW3		灰膏		灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1046	39	M-A14	?	楕円	80×32	8	NW27				灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1047	39	M-A14	?	楕円	(50×33)	17	NW27				灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1048	39	L-T14	V	楕円	(59×60)	30	N250		磨石皿		灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1049	36	L-S14	VI	1 d	楕円	73×50	15	N227	2 b, β		灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1052		M-I14	III-V	楕円	62×46	31					灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1055	47	M-II14	III-V	楕円	58×49	32	NW85	1 d			灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1066	56	M-J11	?	楕円	105×66	15	K0				灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1077	56	M-J11	?	楕円	125×79	23	N21				灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1028	50	M-J12	I-IV	不整形	100×46	9	N215				灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1059	50	M-J13	III-V	不整形	90×53	12	NW46	1 d	石皿		灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1061	39・36	L-Q13	VI	楕円	90×65	30	N211	1 d			灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	
SH1066	39・36	L-S14	VI	楕円	95×54	20	N219				灰褐色と黄褐色胎質のロックを含む暗褐色土、灰化物胎質	板瓦	

表11-12 墓坑一覽

調査番号	調査地	調査区	地層	位置			出土遺物	土質	人		
				プラン	距離	至軸			種別	年代	
SH1067	35-36	L-1-S12	VI	2.4	N19	50×65	土	土	200	1 D D e	1 20-
SH1068	35-36	L-1-R13	VI	横切	103×79	18	NW66	細内壁上層褐色粘質アロクを含有し褐色土。灰化物混在	骨片		
SH1069	35-36	L-1-R13	VI	横切	55×30	23	NW27	細内壁上層褐色粘質アロクを含有し褐色土。灰化物混在	骨片		
SH1070	35-36	L-1-R13	VI	横切	88×57	10	NE13	細内壁上層褐色粘質アロクを含有し褐色土。灰化物混在	骨片		
SH1071	50	M-K11	7	横切	106×53	40	NW24	細内壁上層褐色粘質アロクを含有し褐色土。灰化物混在	骨片		
SH1072	50	M-K15	III-VI	横切	50×39	12	NW23	細内壁上層褐色粘質アロクを含有し褐色土。灰化物混在	骨片		
SH1073	33	L-Q12	I-VI	横切	103×56	NE20	1 d	細内壁上層褐色粘質アロクを含有し褐色土。灰化物混在	骨片		
SH1074	33	L-Q12	I-VI	横切	50×46	20	NE27	細内壁上層褐色粘質アロクを含有し褐色土。灰化物混在	骨片		
SH1077	44	M-P12	IV-VI	1.3	横切	35×42	14	NE25	細内壁上層褐色粘質アロクを含有し褐色土。灰化物混在	骨片	
SH1079	27-28	L-O12	V-VI	1.3	横切	91×70	22	NE27	細内壁上層褐色粘質アロクを含有し褐色土。灰化物混在	骨片	
SH1080	27-28	L-O12	V-VI	1.c	横切	53×53	33	NE27	細内壁上層褐色粘質アロクを含有し褐色土。灰化物混在	骨片	
SH1081	51	M-J13	I	横切	65×45	33	NE22	オリーブ褐色粘質アロクを含有し褐色土。灰化物混在	骨片		
SH1082	53	M-J13	I	横切	136×62	38	NM48	オリーブ褐色粘質アロクを含有し褐色土。灰化物混在	骨片		
SH1083	56	L-Q12	I-VI	横切	(50×63)	NE20					
SH1084	33	L-O11	±	横切		NW33					
SH1095	33	L-O11	I	横切		NW64					
SH1128	19-22	161	L-1-5	IV-VI	横切	65×44	25	NE22	細内壁上層褐色粘質アロクを含有し褐色土。灰化物混在	骨片	
SH1106	19-21	102	L-1-6	IV-VI	横切	103×55	45	NE20	1 d		
SH1142	19-21		L-1-6	IV-VI	1.8	横切	77×43	20	NE26		
SH1143	19-21	101	L-1-5	IV-VI	横切	84×40	20	NE49			
SH1144	20-22	103	L-1-11	IV	1 d	横切	83×27	27	NW72	2 c.2	
SH1146	21	L-1-4	IV-VI	横切	( 4.30)	22	NE77	細内壁上層褐色粘質アロクを含有し褐色土。灰化物混在			
SH1147	21	L-1-4	IV-VI	横切	( 4.40)	18	NE75	細内壁上層褐色粘質アロクを含有し褐色土。灰化物混在	骨片		
SH1149	23	L-B13	IV-VI	横切	104×55	23	NE26	細内壁上層褐色粘質アロクを含有し褐色土。灰化物混在	骨片		
SH1154	21	L-H4	IV-VI	1.5	横切	60×35	20	NW17	2 c.2		
SH1162	23	L-F11	IV	横切	30×25	44	NW20	細内壁上層褐色粘質アロクを含有し褐色土。灰化物混在	骨片		
SH1163A	20-22	106	L-J10	IV	1 d	横切	90×66	25	NE27		
SH1163B											
SH1163C											

表11-13 墓坑一版

基			坑			人			備 考				
地区番号	区 画	特 別 配 付	アライ	面積	土 産	産 品	出 土 産 物	産 品	坑 位	埋 葬 形 式	性 年 齢	身長	備 考
SH137	22	107	L-K-11 Ⅱ-Ⅴ 2 c	横田	900×42	24	NE61	2 b β	20	I P	♀	3 歳半	
SH138	20	108	L-7 Ⅳ 3	横田	105×52	28	NE20	2 c β	270	I F D D d d	♀	45-50	
SH139	25		L-H-5 Ⅲ	横田	63×36	11	NE715		骨片				
SH140	20	109	L-J-3 Ⅳ 1 b	横田	139×41	17	NE74	1 d	62	I F A A d d	♀	60-	胎子
SH141	20	108	L-7 Ⅰ-Ⅳ	横田	110×50	31	NE71	2 b β	553	I F B A d d	♀	50-	
SH142	20	110	L-1-9 Ⅲ-V	横田	308×51	37	NE26		358	I R A D d d	♀	160	
SH143	20	111	L-1-8 Ⅰ	平塚南門	338×51	37	NE67		全身		♀	20前後	151.8
SH144	20	108	L-1-7 Ⅳ	横田	115×58	25	NE20		全身		♀	20-	158.6
SH145	20	111	L-1-7 Ⅰ	横田	49×25	19	NE13	2 b α	193	I F A A	♂	3ヶ月 ca.	56
SH146	22		L-1-9 Ⅲ	横田	85×40	15	NE72		7枚				
SH147	20	113	L-1-8 Ⅳ	長塚町	118×72	36	NE77		全身		♂	12-20	
SH148	25	114	L-J-8 Ⅰ-Ⅳ 1 d	横光野分	107×62		NE78		竹筒、北瓦	I d d			
SH149	26	116	L-L-9 Ⅳ 1 a	横田	100×51	26	NE74		全身	I F B B b b	♀	30-40	
SH150	30	116	L-1-6 Ⅲ 1 c	横田	80×48	20	NE42	2 c β	全身	I F D D b b	♀	50代	保平塚
SH151	20	115	L-L-9 Ⅳ-V	横田	84×51	19	NE28		全身	I F B B b b	♀	20前後	154.2
SH152	20	117	L-K-8 Ⅳ 3	横田	80×48	20	NE41		全身	I R B B	♀	50代	
SH153	20	115	L-L-8 Ⅲ-V 2 a	横田	95×48	26	NE26	2 b α	全身	I R	♀	60-	146.9
SH154	20	117	L-1-8 Ⅳ 1 a	横田	95×55	25			全身		♀	20-	胎子
SH155	20	116	L-1-7 Ⅰ-Ⅱ 2 b	横田	110×65	32	NE22	2 a	全身		♀	20-	
SH156	22	119	L-L-9 Ⅳ-V	横田	107×61	30	NE28		全身		♀	20-	
SH157	22		L-1-9 Ⅳ-V	横田	75×57	30	NE13		全身		♀	20-	
SH158	22		L-L-9 Ⅳ-V	横田	140×67	23	NE24	2 c β	全身		♀	40-45	胎子
SH159	26	120	L-K-7 Ⅲ	横田	69×29	16	NE25	1 d	全身	I F	♀	3-4	
SH160	22	121	L-M-10 Ⅲ	横田	80×50	25	NE79	2 b β	全身	I L C A c c	♀	50代	151.2

表11-14 墓坑一覧

東洋番号	区画	緯度	経度	N/A	遺構			土			人			空			
					プラン	底面積 m <sup>2</sup>	3軸	構造	山土遺物	風	土	居住単位	居住者数		住居形態		
SH1187A B	22				縄円	113×87	45	NE54	石皿、打製石片、片石			縄円	1	10-20 1	縄文		
SH1188	20-22	22	L-M10	IV	縄円	90×85	35	NE43	石皿、打製石片、燧石			縄円	47	1FAA B B	10-40	縄文	
SH1189	20	123	L-J11	VI	3	縄円	93×43	33	NW89	2 b #		縄円	262	1R D D G	10-50	縄文	
SH1190	26	124	L-L11	III	3	縄円	91×56	49	NE40	緑色土器、土器、石皿		縄円	229	1 D 4 d	20-	156.2	
SH1191	26	125	L-K-8	III	3	縄円	91×56	37	NE83	土部片、土部片		縄円	229	1 L D C c	40-	156.2	
SH1192	26	125	L-K-8	III	4	縄円	112×82	17	NE73	土部片、土部片		縄円	245	1 R A A	1	160	
SH1193	26	126	L-K-8	III	4	縄円	77×41	16	NW74	土部片		縄円	246	1 L A A c c	12	100	縄文
SH1195	21	127	L-L-4	III	4	縄円	77×	22	NE69			縄円	246	1 F A	1	16	
SH1196	21	128	L-M10	I-IV	1	縄円	92×85	18	NE92	燧石		縄円	246	1 F A	1	15-40	
SH1199	21	128	L-L-8	IV	4	縄円	98×52	33	NE77	燧石		縄円	246	1 F A D c c	1	10-	14.0
SH1200	26	129	L-L-9	III	4	縄円	87×57	37	NE83	打製石片		縄円	247	1 F A 4 d	1	50-55	16.1
SH1201	26	130	L-L-9	III	4	縄円	91×60	47	NE90			縄円	240	1 F B B c c	20-		
SH1202A SH1202B	25	131	L-H-4	I-IV	1	円	48×46	13		石皿、打製石片、燧石、片石		縄円	240	1 F A	1	16	
SH1203	26	131	L-M10	I	4	縄円	113×56	15	NW63	燧石		縄円	240	1 F A	1	16	
SH1204	26	132	L-L-9	IV	4	縄円	113×52	31	NW12	燧石、打製石片、燧石、片石		縄円	240	1 F A A d d	1	16	
SH1205	26	133	L-K-9	I-III	4	縄円	86×56	46	NE72	燧石		縄円	240	1 F A A d d	1	16	
SH1206	26	133	L-K-6	III	4	縄円	115×64	35	NE68	燧石		縄円	240	1 F A A d d	1	16	
SH1207	25	133	L-H-4	I-IV	4	縄円	113×63	29	NW40	燧石		縄円	240	1 F A A d d	1	16	
SH1208	26	134	L-J-9	III	4	縄円	142×63	23	NE74	燧石		縄円	240	1 F A A d d	1	16	
SH1211	25	135	L-L-5	I-III	4	縄円	89×66	35	NE80	燧石		縄円	240	1 F A A d d	1	16	
SH1212	25	135	L-L-6	III	4	縄円	85×58	24	NE79	燧石		縄円	240	1 F A A d d	1	16	
SH1213	25	135	L-L-6	III	4	縄円	126×68	27	NW49	燧石		縄円	240	1 F A A d d	1	16	
SH1214	25	135	L-L-6	III	4	縄円	103×59	16	NW90	燧石		縄円	240	1 F A A d d	1	16	
SH1215	26	136	L-J-7	IV	4	縄円	127×61	39	NW37	燧石		縄円	240	1 F A A d d	1	16	
SH1216	26	137	L-K-7	I-III	4	縄円	131×77	22	NE79	燧石		縄円	240	1 F A A d d	1	16	
SH1217A SH1217B	26	138	L-J-8	I	4	縄円	90×49	23	NW22	燧石		縄円	240	1 F A A d d	1	16	

表11-15 墓坑一覽



基岩番号	図面	構造	傾度	時間	標高	アラス	規模(m)	深さ(m)	地層	地層記号	地層名	地 質		備考
												層位	厚さ(m)	
SH1216	26	L-K-1	I	III	傾先尾方	49×20	23	NW27	ナリ-ア褐色砂質アロックが露出した褐色土	傾先				
SH1220	26	L-M11	I	III	傾	312×60	43	NW27	ナリ-ア褐色砂質アロックが露出した褐色土	傾先				
SH1221	26	L-L10	I	III	傾	307×78	30	NW27	ナリ-ア褐色砂質アロックが露出した褐色土	傾先				
SH1222	26	L-M9	I	III	傾	335×65	29	NW11	ナリ-ア褐色砂質アロックが露出した褐色土	傾先				
SH1223	26	L-M10	I	III	傾	107×407	12		ナリ-ア褐色砂質アロックが露出した褐色土、炭化植物遺体	傾先				
SH1224	26	L-L9	I	III	傾先尾方	139×63	33	N271	ナリ-ア褐色砂質アロックが露出した褐色土、傾先と炭化植物遺体	傾先				
SH1226	26	L-L9	III	III	傾先尾方	118×47	30	NW89	ナリ-ア褐色砂質アロックが露出した褐色土、炭化植物遺体	傾先				
SH1229	26	L-L9	III	III	傾先	75×48	30	N22	炭化植物遺体	傾先				
SH1230	26	L-H4	III	III	傾先	79×46	33	NW16	ナリ-ア褐色砂質アロックが露出した褐色土、炭化植物遺体	傾先				
SH1231	26	L-L11	I	III	傾先	110×82	15	N285	傾先とナリ-ア褐色砂質アロックが露出した褐色土、炭化植物遺体	傾先				
SH1232	26	L-I13	III	III	傾先尾方	118×60	30	NW55	傾先とナリ-ア褐色砂質アロックが露出した褐色土、炭化植物遺体	傾先				
SH1233	21	L-14	I	V	傾先	95×47	22	N258	傾先とナリ-ア褐色砂質アロックが露出した褐色土、炭化植物遺体	傾先				
SH1234	21	L-J3	I	IV	傾先	73×55	18	NW23	傾先とナリ-ア褐色砂質アロックが露出した褐色土、炭化植物遺体	傾先				
SH1235	21	L-K3	I	IV	傾先尾方	84×40	18	NW29	傾先とナリ-ア褐色砂質アロックが露出した褐色土、炭化植物遺体	傾先				
SH1236	21	L-L4	I	IV	傾先	70×38	16	N259	傾先とナリ-ア褐色砂質アロックが露出した褐色土、炭化植物遺体	傾先				
SH1237	21	L-J3	I	IV	傾先	65×33	14		傾先とナリ-ア褐色砂質アロックが露出した褐色土、炭化植物遺体	傾先				
SK202	41	M-B20	?	?	傾先	65×26		N0						
SK203	41	M-C19	?	?	傾先	40×23		NW37						
SK209	37	L-819	?	?	傾先	65×60	20	N214						
SK209	37	L-R20	?	?	不明	173×83		N277						
SK2214	41	M-B18	?	?	傾先尾方	58×29		NW80	炭化材、石灰、層状層					
SK2218	41	M-A18	?	?	不明	100×63		NW27						
SK2319	41	M-C18	?	?	傾先	47×22		N218						
SK236	41	M-D15	?	?	傾先	50×25		N266	中央に露出					
SK238	41	M-B14	?	?	傾先	33×22		NW60	2 b a					
SK241	41	M-D15	?	?	傾先	45×25		NW5						
SK242	41	M-C15	?	?	不明	90×60		1 d						

表11-16 基岩一覧

基坑番号	図面	神田	地区	方位	構造	土層		土	人		備考
						プラン	断面		階位	用途	
SK2343	41	M-F16	?	不整	50×45	NW54					
SK2351	41	M-D16	?	横円	(40×30)	NE30					
SK2352	41	M-E15	?	横円	47×36	NW79					
SK2356	41	M-E16	?	円	43×45	NW 9	北側にテラス、 1d、溝堀一部瓦、土塊、磨石痕				
SK2358	41	M-D15	?	溝	67×48	NE11	1d、溝堀一部瓦、土塊、磨石痕 (構造にヒット)				
SK2360	41	M-C15	?	溝	(50×35)	N 0					
SK2361	41	M-D17	?	横円	55×20	NE47					
SK2369	41	M-F16	?	不整	45×40						
SK2385	41	M-D18	?	横円	(50×30)	NE21	1d				
SK2389	34	L-Q18	I-V	正方形	(50×47)	NE33					
SK2399	41	M-F17	?	隅丸基方	140×55	NE39	2c#				
SK2311	41	M-B18	?	横円	(91× )	NE21	石堀 2				
SK2316	38	L-K17	?	長細円	(180×60)	NE26	1d	合併			
SK2321	41	M-F17	?	横円	48×45			右取込隅、内堀			
SK2325	41	M-E17	I-II	横円	87×76	NW14					
SK2401	41	M-D16	?	基方	(90×63)	NE22					
SK2403	41	M-D17	?	横円	( ×57)	NW70					
SK2467	48	M-J19	?	溝	54×48	S 0					
SK2502	22	L-H12	?	隅丸基方	48×33	NE29					
SK2577	28	L-N13	IV-V	横円	59×25	NE18					
SK2578	28	L-N13	IV-VI	横円	46×38	NE22					
SK2579	28	L-N13	IV-VI	横円	68×48	NE28					
SK2657	47	M-L17	?	横円	( ×28)	NW21					
SK2646	34	M-M16	?	横円	( ×28)	NZ45					
SK2701	48	M-G18	III-VI	円	53×33						
SK2706	48	M-G19	?	横円	45×38	NE20					
SK2711	53	M-L17	?	横円	( ×32)	NW45					

表11-17 基坑一覧

墓誌番号	区 画	種 別	墓 区	時 期	版 行	墓			墓 誌	出土遺物	備 考	人			青
						ブロン	直径mm	長さmm				形状	位置	墓誌	
SK2729	53		M-A19	?	冊	59×32		NE14							
SK2906	39		M-B12	?	冊	53×20		NE56							
SK2916	35		L-R14	VI	冊	68×60									
SK2924	56		M-112	?	冊	47×33		NE21							
SK2925	50		M-112	?	冊	47×28		NE16	2トナ						
SK2940	51		M-114	III-VI	簡&裏方	83×48		NW62	1d	土灰、打銅石片、鉄口鏃					
SK2942	51		M-K13	III-VI	冊	30×26			1d						
SK2958	39		M-A14	?	冊	45×20	35	NW13							
SK2961	47		M-112	?	冊	53×26		N0							
SK2980	39		L-T13	I	裏方	73×53		NE23		打銅石片					
SK3219	21		L-H4	?	冊	50×50				口鏃					
SK3430	21		G-L20	IV-VI	冊	85×73		NW5							
SK3438	21		L-H1	V-VI	冊	59×43		N0							
SK3496	21		L-K2	I-IV	冊	76×66				石鏃2					
SK3498	33		L-12	I-IV	裏方	105×38		NE54							
SK3601	41		M-R16	?	冊	25×28		NE28							
SK3602	41		M-F18	?	冊	89×48		NE60		両面にビント					
SK3603	41		M-E16	?	冊	59×25		NW38							

表11-18 墓坑一覧

- ※1、「時期」は認定される時期幅を指す。伴出土器などから時期が確定できる場合は、アンダーラインをつけた。  
 2、「版行」「長さ」で( )内の数字は推定値を示す。  
 3、「版行」「長さ」「形状」「埋没姿勢」の部分は、本文の墓誌編纂による。  
 4、「傾位は基準北を0°」として、360°で表した。但し、正確に計測できない場合は方位で示した。

### 3 埋設土器

#### (1) 総論

土坑（掘り方）に完形ないし半完形の土器を正位または逆位で埋設した遺構は13基確認された。このうちSH522は、土器内から焼人骨が出土し土器棺であることが明らかのため、墓坑の項で扱っている。また旧SK2541・3266は、図面照合の結果、前者がSB551に、後者がSB583に帰属することが明らかになったため、埋甕として扱っている。すべてE区に分布する。

#### (2) 各論

##### SK1273 (図版54)

L-T4に位置する。長径35cm、短径24cm、深さ約25cmの楕円形の土坑に、深鉢形土器の胴下半部を正位に埋設している。ただ、出土時は押し潰されたような状態であった。IV期に比定される。

##### SK1302 (図版54)

M-A5に位置する。長径60cm、短径54cm、深さ約35cmの不整形の土坑に、鉢形土器の胴下半部を正位に埋設している。IV期に比定される。

##### SK2018 (図版41、図142)

M-B20に位置する。長径37cm、短径34cm、深さ約20cmの楕円形の土坑に、深鉢形土器の胴下半部を正位に埋設している。I期に比定される。

##### SK2020 (図版41、図142)

M-C20に位置する。直径34cm、深さ約25cmの円形の土坑に、深鉢形土器の胴下半部を逆位に埋設している。II期に比定される。

##### SK2232 (図版37、図142)

L-S18に位置する。長径35cm、短径32cm、深さ約32cmの不整形な土坑に、深鉢形土器の胴下半部を正位に埋設している。IV期に比定される。

##### SK2371 (図版41)

M-F15に位置する。検出面で長径98cm、短径54cm、深さ22cmの、東西に長軸をもつ楕円形の土坑のほぼ中央から、深鉢形土器の胴下半部が出土した。この土坑は、埋設土器の掘り方とするにはやや規模が大きすぎるため、土坑に伴う土器と考えたほうがよいかもしれない。IV期に比定されよう。

##### SK2419 (図版41、図142)

M-D16に位置し、SH791を切る。直径40cm、深さ約30cmの円形の土坑から壺形土器が押し潰されたような状態で出土した。III期に比定されよう。

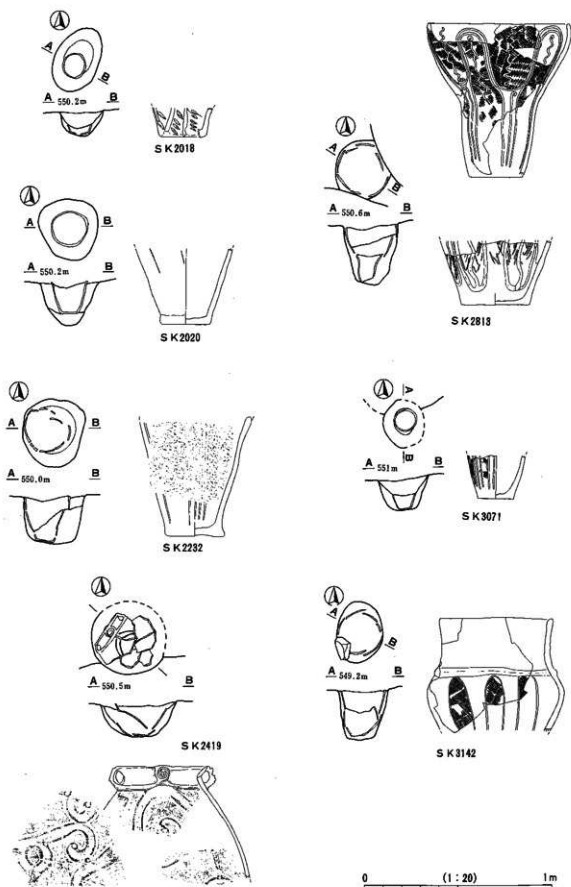


图142 埋設土器 (土器1/8)

**SK2813** (図版47、図142)

M-J16に位置し、SH753・931に切られる。直径20cm、深さ約35cmの円形の土坑に、深鉢形土器を正位に埋設している。I期に比定される。

**SK3071** (図版39、図142)

M-A13に位置し、SH1016に切られる。直径27cm、深さ約20cmの円形の土坑に、深鉢形土器の胴下半部を正位に埋設している。I期に比定される。

**SK3142** (図版23、図142)

L-D10に位置する。長さ33cm、短径25cmの楕円形の土坑に、壺形土器の胴上半部を正位に埋設している。II期に比定される。

#### 4 配石遺構

##### (1) 総論

配石遺構とは、広い意味では「石を用いて造られた構築物」を示すらしい。ただ本項で扱う配石遺構の場合は、「配石墓」や柄鏡形敷石住居址など、機能・用途が比較的限定できる遺構は除いており、しかも人為的であっても構築物とはいえないものも含まれている。

北村遺跡では、大きく分けて2種類の配石遺構が検出されている。一つはいくつかのまとまりをもった配石（その中には墓坑の上面配石も含む）が群を成しているもので、C区に2ヶ所、E区では4ヶ所認められた。特にE区の配石群は、全体としてIV層（崩積土）形成に伴う地形の高まりを取り巻くように、断続的ながら帯状に並んでいる。もう一つは列石、組石、積石、あるいは不整形な礫のまとまりがみられるもので、B区5ヶ所、C区9ヶ所、E区6ヶ所で確認されている。これらは、一、二の例外を除いて、遺構の構造や伴出遺物等にもみるべきものはなく、場の機能・用途は不明といわざるをえない。

##### (2) 各論

**SH5配石群** (図版6・17)

C区中央やや北寄りにあり、SH1・4・10などと接する。配石はII層下部で検出され、III層上面に構築されている。規模は直径5.5mの、ほぼ円形である。

配石に用いられている礫は拳大前後のいくらか小振りの礫を主体として、中に小児頭大の礫が混じる。調査段階では、配石群を北東側のa環と南西側のb環とに分けられるとみたが、配石を除去したところ、両者にかけてVI層を掘り込んだ環状の溝が検出されたことから、これらは一体とみることもできる。溝の幅は広いところで1.4m、狭いところで0.4m、深さは20cmを測る。溝の底面からは10ヶ所のピットが確認された。ピットは直径12～60cmと大小ばらばらで、深さも一定しない。溝と同じ黒褐色粘質土が埋まっていることから、配石と何らかの係りがあると思われる。

石皿1、石鉢・磨石類各2以外、出土遺物にはみるべきものはない。

VないしVI期に形成されたものであろう。

**SH33配石群** (図版6、PL9)

C区ほぼ中央にある。東西約10m、南北12mの範囲に広がり、SH7・8と接し、SB108上面を一部

覆っていると思われる。配石はⅡ層下部で検出され、Ⅲ層上面に構築されている。ただ、この付近ではⅢ層の堆積が薄く、直下にⅥ層（段丘礫層）が続くため、これに含まれる礫が取り込まれている可能性もある。

配石に用いられている礫は主に拳大で、北西部に長楕円礫を直線的あるいは弧状に並べたかのような箇所がある（HSH16）。そのほか配石群北側中央には礫の空白部があり、不整形の土坑（SK501）もある。

出土した石器は磨製石斧・石皿各1、石棒2である。なかでも石皿と石棒がHSH16からセットで確認されたことは注意されよう。

SH5同様、VないしⅥ期に形成されたものであろう。

#### SH506配石群（図版7、PL10）

E区のほぼ中央西寄りにある。礫はⅡ層下部で検出され、長径16m、短径4mの範囲で、SB566からSH517にかけて、住居址張り出し部や複数の墓坑上面配石全体を覆っている。配石に用いられている礫は人頭大ないしはそれ以上の大きさの長楕円礫ないし円礫である。これはSH510・511・1111も同様である。

遺物は、打製石斧2、磨石類6、石錐・砥石・石棒各1、丸石2などのほか、小形土器4が出土した。また、一帯に細かなイノシシ・シカの焼骨が散乱していた。

V・Ⅵ期の墓坑や住居址を覆っていることから、Ⅵ期に形成されたことはほぼ間違いない。

#### SH510配石群（図版7、PL10）

E区のほぼ中央南よりにある。礫はⅡ層下部で検出され、長径13m、短径3mの範囲でSB553からSB555を覆っている。

遺物は、石錐14、打製石斧9、磨石類24、石皿5、磨製石斧3、石錐3、石棒1と石器が豊富で、しかも原石から剥片・砕片に至る道具外の遺物も多い。また、小形土器5、土偶1が出土している。SH506同様、獣の焼骨片が目立った。

SB553を覆っていることから、本址はⅥ期に形成されている。

#### SH511配石群（図版7、PL10）

E区の南東寄りにある。礫はⅡ層下部で検出された。長径9m、短径5mの範囲でSH558・559からSB563にかけて住居址内配石や複数の墓坑上面配石を覆っている。

遺物は、石錐22、打製石斧7、磨石類6、石皿・刃器各1、磨製石斧2、石錐1のほか剥片・砕片も多量に出土している。

V・Ⅵ期の墓坑を覆っていることから、Ⅵ期に形成されたことは確実であろう。

#### SH1111配石群（図版7、PL10）

E区の北西寄りにある。礫はⅡ層下部で検出され、長径16m、短径6mの範囲でSB577からSH1179にかけて、住居址の張り出し部敷石や複数の墓坑上面配石を覆っている。本址は更に北西方向に延びており、SB597も覆っていたと思われるが、種々の事情により確認できなかった。

石器は、石錐17、打製石斧4、石錐3、石錐1と道具こそ少ないものの、剥片・砕片類は多い。

V・Ⅵ期の墓坑を覆っていることから、Ⅵ期に形成されたことはほぼ間違いないであろう。

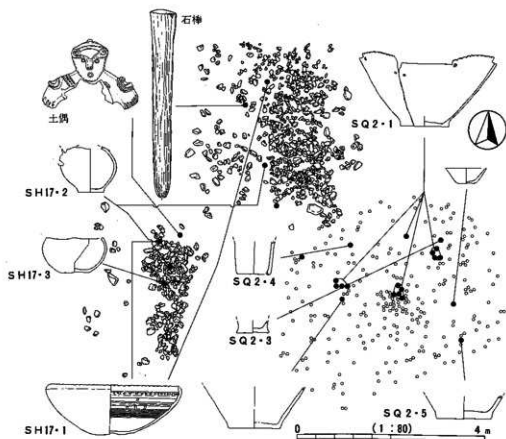


図143 SH17・18、SQ2 出土遺物分布  
(土器1/8、土偶1/8、石棒1/8)

きに長軸方向が異なる礫があり、その礫の部分は間隔が狭いことから、本来は立ててあった可能性もある。打製石斧・多孔石・丸石各1が出土している。

SH5と接し、SB103・104を一部覆っていることから、VないしVI期に比定される。

#### SH17・18 (図版16、図143、PL9)

X-C7～F10にある。両址の位置するこの付近は、今回の調査範囲における縄文時代遺構の南西端である。両址とも、ほぼ楕円形のマウンド状で、拳大の礫を多用している。規模は、SH17が長径2.6m、短径1m、SH18は長径4m、短径3.2mである。

注目される点は遺物の出土状態である。SH17の北東部から、胴下半を欠くものの比較的大形の中空土偶が顔面を下向きにして出土した。一方、SH18の西側からは緑泥片岩製の細身の石棒が出土し、両者はあたかも向き合う位置関係にある。しかも、SH17出土土器片とSH18のそれとは接合関係にあり、VI期の浅鉢が復元された。それ以外にも、注口土器・鉢形土器・打製石斧・土器片円板各1が出土している。

出土土器からみてVI期に比定されるであろう。

#### B区その他の配石遺構

SH19・30・31が該当する。SH19はSH17や18と同様、ややマウンド状を呈する。また、SH30・31は軟質の砂岩を敷いているようにもみられる。SH19の規模は、長径4m、短径3.1mである。

伴出する遺物を欠き、時期不明である。

#### SH1 (図版17、PL9)

C区のS-P3～T3にかけて約10m連なる列石状の配石遺構である。本址の北側には目立った遺構はなく、南側にはSH32・4・5が広がる。遺構を構成する礫には硬砂岩や安山岩の長円礫が用いられ、礫の長軸を東西方向に向けてほぼ直線的に並べている。ただ、2～3個お



## C区のその他の配石遺構

SH4・6・7・8・10・11・32が該当する。全体の形状はいずれも不整形な集石状を呈し、用いられている礫は主として拳大であり、比較的小さめである。SH6・32を除き下部に掘り込みがあるが、墓坑と断定できる要素に欠けるため除外した。

特に目立った遺物はなく、時期決定の決め手にも欠ける。

## SH525 (PL15)

M-A16にあり、SB553の埋土上面に構築されている。硬砂岩の長円礫を用いた、直径2m前後の円形で、下部には掘り込みが認められなかった。

伴出遺物はまったくないが、SB553との関係からVI期に比定される。

## SH528・530～532・588 (図版45・52)

SH528はM-118に、SH530はM-K17にある。また、SH530の西側でSH532が確認され、SH531はM-L16に位置し、SH588はこれに北隣する

硬砂岩の長円礫を主として用い、直径1.4mから2.4m内外の円形または楕円形に礫を巡らせている。いずれも、下部に掘り込みがみられなかった。

SH528がSB559の埋土上面に構築されていることや、ほかの配石遺構がこれと同じ面で検出されたことから、これらはいずれも、VI期に構築されたものと思われる。

## SH1140 (図版23、図144)

L-D10にある。硬砂岩の長円礫で長方形に縁取り、内部に礫を充填させている。全体の規模は、長径1.2m、短径0.7mを測り、形態は一見柄鏡形住居址の張り出し部敷石に似ている。下部に浅い掘り込みをもち、底面からイノシシの下顎骨が出土している。

配石に伴って、石鏃3、石錐・土器片円板各1が出土している。

時期は不明である。

## E区のその他の配石遺構

検出段階で、下部に墓坑の存在を推定して番号を付けたが、結果として墓坑は確認できなかった。不整形な石のまとまりや、調査段階でSH506・510・511・1111配石群の1単位を構成すると考えた個々の配石が含まれる。個々の配石が人為的に形成されたかどうかは非常に微妙で、ここでは特に取り上げなかった。

## 5 その他の遺構

## (1) ビット群

## ビット群A (図版17・54)

E区のL-R1～T8およびM-A1～H8の広い範囲で、ビットが76基検出された。いずれも崩積土のIV層を掘り込んでおり、埋土に礫を含む暗褐色砂質土がみられるなど共通性が多い。

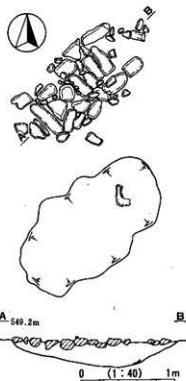


図144 SH1140上面配石(上)、イノシシ下顎骨出土状態(下)

SK1273・1302のようにほぼ完形の土器を伴っているものもある。

この中でSK1275～1281および1338は、東西2.5m、南北2.2mの方形に並び建物址の柱穴を予想させる。同様に、SK1284・1287・1289・1292・1295・1299・1309・1339もまた、東西3.5m、南北3.2mと一回り大きく方形に並ぶため、何らかの建物址である可能性が高い。ただ、柱痕が確認できなかったこと、遺構が集中する箇所でも明確な掘立柱建物址を検出できなかったこと、これらのピットが集中している場所は、他にはほとんど遺構がみられないことなどから、積極的に掘立柱建物址とするには躊躇せざるをえなかった。もしこれが掘立柱建物址であるならば、住居址や墓坑が集中している場所を見下ろす位置にあることから、北村の集落形成にとって重要な意味をもつ施設とみなされよう。

個々のピットの時期は不明だが、あえて埋設土器を代表させれば、この一群はIV期に比定される。

#### ピット群B (図版23)

E区のL-C9～H12からもピットが多数検出された。調査区西側からはSB584が確認されたが、土坑内に柱痕をもつ例があるとともに、SH1140や焼土の位置などから、ほかにも複数の建物址の存在が予想される。ただ、発掘調査段階での土坑相互の観察が不十分のため、あえて建物址を想定することは避けた。時期は不明である。

#### ピット群C・D・E (図版17)

E区のSB551・560の西側に分布するピット群C、M-A16～D20に広がるピット群D、M-M16～O20のピット群Eの中にも、何らかの建物に伴う柱穴らしいものがみられるが、ピット群Bと同様の理由により、建物址は想定しえなかった。

いずれも、帰属時期を明らかにする情報に恵まれない。

## (2) 土 坑

#### SH744・745 (図版38)

E区のL-T16～17に位置し、SH745はSH744・796に切られる。SH744は直径73cmの円形で、SH745も同様ながら南西部にテラスがある。両者とも、底面はしっかりした焼土面で、埋土は焼土ブロックが混在する暗褐色土ないし黒褐色土である。SH744と745で石鏃が1点ずつ出土したほか、目立った遺物はないため、時期不明とせざるをえない。

調査段階では、住居関係の炉址を想定して周辺の精査を行なったが、床面その他関連施設は認められなかった。しかし、底面や埋土の状況から、何らかの火床と思われる。

#### SH959・980 (図版48)

E区のM-H18～I19に位置し、SH758・958・970の底面で検出された。SH959は直径113cmのほぼ円形、SH980も直径143cmの円形を呈する。検出面からの深さはおおよそ110cmと深く、一般的な墓坑と同様には考えられない。SH959から石鏃・磨製石斧が各1点出土した以外、目立った遺物はないが、形態から考えて貯蔵穴と思われる。SH958の下から検出されたことから、V期以前に構築されたことは間違いない。なお、これに類する土坑はSH575、SK2928・3219・3398・3399など数例を挙げ得る程度であり、本遺跡にあっては極めて稀な存在である。

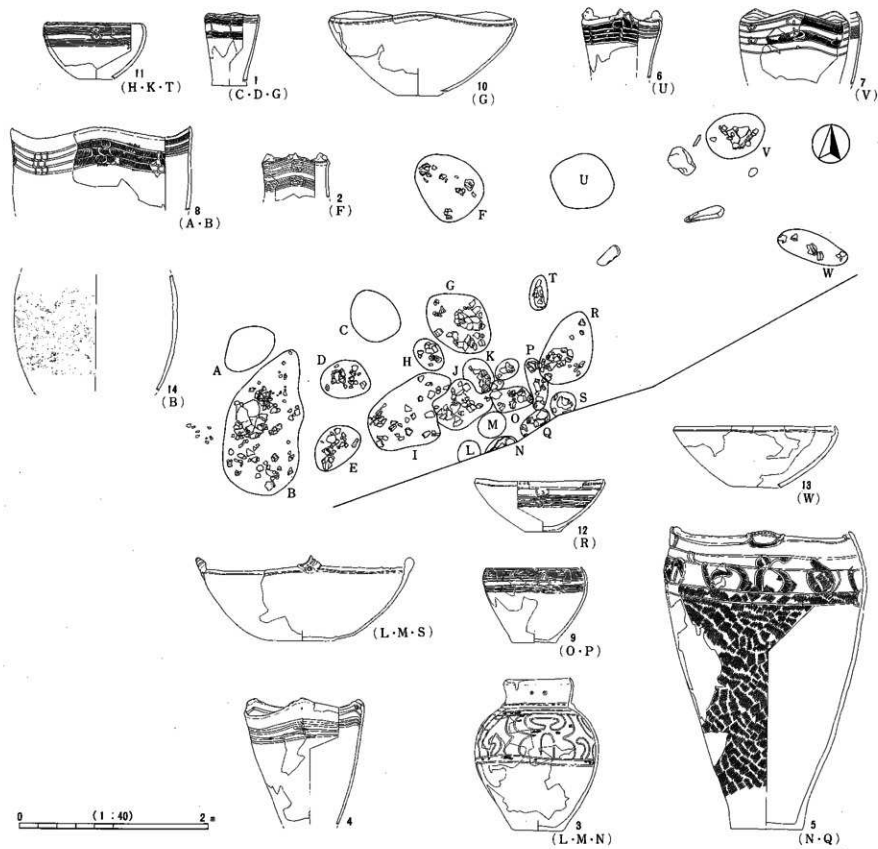


图145 SQ 1 出土遗物分布

## (3) 遺物集中区

B・C区とE区とでそれぞれ3ヶ所づつの遺物集中区を確認した。各集中区とも、多量の土器片を主体として、石器・土製品・骨片が若干混じる程度で、植物遺体はほとんどみられなかった。今回の調査では遺物総量の把握や接合関係など、いわゆる遺物の動態把握に必要な手続きを踏んでいないため、こうした箇所を「捨て場」と認定するに至らなかった。遺物集中区とした所以である。

**SQ 1** (図版6、図145)

C区の南側で確認された。本遺跡における縄文文化層発見の端緒となった遺物集中区である。集中区内にはA～Wまで23ヶ所のブロックが認められ、2個体以上の土器で構成されるブロックは5ヶ所(B・G・L・M・N)で、他はすべて1個体の土器で構成される。また、複数のブロック間で接合した土器は8個体(1・3～5・8～10・A)である。このほか剥片・破片が若干みられた以外、目立った遺物はない。VI期に形成されたものであろう。

**SQ 2** (図版5、図143)

B区の南側で確認された。SQ1に比べて土器の破片は多いが、接合できた個体数は少ない。VI期に比定され、隣接のSH17・18との関係が示唆される。石器類はほとんど出土しない。

**SQ 5** (図版5)

B区の中央やや東寄り、SB102に西隣する。出土土器はほとんど破片で、IV期のものである。SQ1や2に比べ石核や剥片・破片の出土が目立つ。

**SQ501・502** (図版9)

E区の西側で確認された。調査段階で両者は別個の遺物集中区として扱ってきたが、南から北へかけて連続するものである。復元された土器はわずかだが、比較的大きな破片が目立った。石器類については、原石から破片までの製作関連資料も含め、石鏃14、打製石斧36、磨石類22、刃器5、石錐2など道具類が豊富である。IからII期に比定される。

**SQ503** (図版9)

E区のSB573とSB580との間で確認された。SQ501などと同様大きな土器片が目立った。規模は小さいながら石器類も多様である。I期に比定される。

## 〔付〕 長野県北村遺跡出土炭化材の樹種

鈴木三男(金沢大・教養・生物)・能城修一(農水省森林総合研究所)

長野県明科町の北村遺跡から出土した縄文時代後期を主とする炭化材11点の樹種を調査した。試料は柱穴および焼失家屋から出土した柱材および柱材と思われるもの5点、同建築材1点、炉跡の周辺の数物状炭化物3点、配石遺構の炭化材および墓坑底面から出土した炭化材各1点である。なお、一部の材は末炭化部分が残存しており、そこでの観察も行なったが、炭化材は徒手により破断面を作成し、横断、接線、

放射の各面を反射顕微鏡で観察した。その結果、以下に述べる4樹種が同定された(表1)。これらの同定結果の証拠として各標本の顕微鏡写真フィルムが金沢大学教養部生物学教室に保管されている。

今回の同定結果で特徴的なことは、縄文時代に特徴的に利用されているクリ材が本遺跡でも柱材に多用されていることと、炉周辺の敷物状遺物がクリの板材であることが確認されたことである。縄文時代の竪穴住居にクリ材が多用されるのは東日本では最も普遍的であり、当遺跡もその傾向が確認されたことになる。一方、炉周辺の敷物が板材であると確認された例は筆者らが知る限りでは見あたらず、今回の結果は縄文後期の住居内の復元の貴重な資料となる。また、墓坑底面にあった炭化材がカヤ材であったことは副葬品に木製品があった可能性が考えられる。

#### 1. カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 (PL41-1~4)

年輪の明瞭な針葉樹材で早材から晩材への移行は緩やか、晩材部は大変幅狭い。仮道管と放射組織からなり、仮道管の内壁には2本づつまとまったらせん肥厚がある。放射組織は単列、放射柔細胞からなり、分野壁孔は小さなスキ型で、2個ある。これらの形質からカヤの材と同定した。カヤ材は縄文時代では建築材や木製品に比較的良く使われる。

#### 2. クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 (PL41-5~8)

年輪はじめに大道管が数層に並び、そこから順次径を減じて、晩材部では薄壁多角形の小道管が木部柔細胞、道管状仮道管とともに多数集まって火炎状の紋をつくる環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列で同性である。これらの形質からクリの材と同定した。クリ材は心材が極めて硬く、粘りがあり、良質の木材で、建築材、特に柱材や水周りによい。しかし、加工性は難で、大きな薄板材をつくるのは手間がかかる。

#### 3. ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 (PL41-9)

年輪の初めにほぼ1層の大道管が並び、晩材部では薄壁多角形の小道管が多数集まって波状の紋をなす環孔材。道管の穿孔は単一、小道管の内壁には顕著ならせん肥厚がある。放射組織は多列の紡錘形で上下縁に大型の結晶細胞を持つ。これらの形質からケヤキ材と同定した。ケヤキ材は縄文時代以来、漆器容器の木地、建築材、各種器具材に用いられてきている。

#### 4. カエデ属 *Acer* カエデ科 (PL41-10-12)

小道管が単独あるいは数個放射方向に複合して疎らに散在する散孔材。繊維状仮道管が雲紋状の紋をなす。道管の穿孔は単一、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は背の低い紡錘形で同性である。これらの形質からカエデ属の材と同定した。カエデ属には多数の種があるが、炭化材での種の識別はむずかしい。

標本番号	樹種名	遺構名	No	出土状況	時期
EKM-5	クリ	SB102	44	P <sub>3</sub> から出土した柱材	IV
-6	クリ	SB555	1	炉の周囲に敷かれた板材	VI
-7	クリ	"	2	"	"
-8	クリ	"	3	"	"
-9	クリ	SB558	7	床面直上から出土した建築材	V
-10	クリ	"	9	"	"
-11	クリ	SB566	95	"	V
-12	クリ	SB594	54	"	VI
-13	ケヤキ	SH1111	20	配石群の礎間から出土した炭	VI
-14	カヤ	SH1206	4	人骨左隣から出土した炭化材	III
-15	カエデ属	SK3496	5	土坑出土の炭化材	

表12 遺構出土の炭化材の樹種

## 第3節 遺物

## 1 はじめに

本遺跡における土器・石器など人工遺物の量は、遺構・包含層あわせて、コンテナ（54×34×15cm）でおよそ700箱を数える。

本報告書では紙数の関係でこれらすべてを紹介できないため、第1章第3節の「整理の方法」に則って選別を行い、土器928点、石器392点、土製品・石製品など186点を図示する。本文は、土器については遺構単位に、石器・土製品・石製品などについては品目別に記述を行う。観察表は、図示した資料を中心に作成し、全体的な傾向はグラフを用いた。

## 2 遺物各説

## (1) 土 器

## ア 概 観

コンテナにして約400箱、およそ209,000点の土器片が出土した。このうち主体を占めるのは、縄文時代中期末葉から後期中葉にかけての土器である。器種は、深鉢形・鉢形・浅鉢形・壺形・注口形など、当該期に属するほぼすべてのものを含んでいる。

前述の通り本文では、下記のように時期区分している。

Ⅰ期—加曾利EⅢ式並行、Ⅱ期—加曾利EⅣ式並行、Ⅲ期—称名寺式並行

Ⅳ期—堀之内Ⅰ式並行、Ⅴ期—堀之内Ⅱ式並行、Ⅵ期—加曾利BⅠ式並行

各期内の細分や、各期を相互に取り結ぶ系統関係などについては第4部に譲り、ここでは細かな分類をせず、遺構ごとに出土土器の器形・文様の特徴を述べるに留めた。また、土器の部分名称については図146によった。

なお、出土土器のほとんどは遺構の激しい重複の結果破砕されており、しかも該当する遺構との確実な相伴関係を物語る資料はごく限られる。出土状態については、特に記述のない限り埋土中からである。遺構との関係についての詳細は、第2節のそれぞれの遺構説明を参照されたい。

## イ 竪穴住居出土の土器

SB101 (図版71・91、PL42)

1は柄鏡形住居址の張り出し端部土坑内から、押し潰された状態で出土した。口縁に向けて単純に立ち上がる深鉢で、内面には指頭によるオサエないしナゾリがみられるほか、全体的な整形は粗雑である。外面には縦方向の擦痕がある。2は胴部中位の屈曲以下を炉内で使用していた鉢で

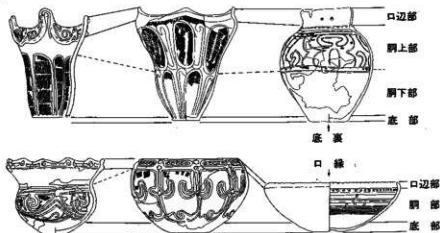


図146 縄文土器の部位名称

ある。底裏に経2本潜り1本越え右1本送りの網代がみられ、胎土中に多量の長石粒が混在している（V期）。3は10単位波状口縁の浅鉢である。口縁は直立し端部を面取りしている。口辺部には口縁の形態に沿って断面三角形の粘土紐を貼りつけ、以下にLR縄文を施している。4～8・10は胴部中位に屈曲をもつ鉢ないし深鉢である。4は波頂部に螺旋状沈線文が、5は対弧文が施され屈曲部に刻み目が施される。6は波底部に連続弧文がみられ、胴部へ向けて鎖状隆線を施す。7は胴上半部に太い棒状工具により波状文を、8は2段の楕円文を描いている。11は胴上半部から中部にかけての破片で、鎖状隆線に「8」字付文がつく。9は荒いLR縄文地に3本単位の沈線を波状に施した深鉢である。内面はへら削りされている。10は胴部中位の屈曲から直線的に開く鉢で、外面が黒褐色を呈している。二山の波頂部から鎖状隆線が垂下し内面には渦巻き文を配する。12はマンガンの発泡が目立つ。13は注口土器の胴部片で、波状に巡らせた隆線上に細かな節のLR縄文を転がしている。外面はナデにより平滑に仕上げられている。14は張り出し端部土坑内で、1と混在していた暗灰色を呈する薄手の注口土器胴部である。4本単位の櫛状工具で胴下端を区画し、胴部中位は連続渦巻き文を展開している。

**SB102** (図版71・91、PL42)

1は床面直上から出土している。胴上半部を欠く深鉢で、胴下半部は垂下する鎖状隆線で4分割し対弧文を施している。表面の風化が著しいが、わずかに縄文の痕跡がみえる。相当乾燥が進んだ段階で縄文を充填したらしい。2は胴下半部を炉に転用した鉢である。外面は赤褐色に、内面は黒褐色に変色している。文様構成は1と類似し、波状沈線で下端を区画したうえ、鎖状隆線で4分割している（IV期）。6は胴部中位がくびれる深鉢。7は注口土器の胴上半部で、上下の区画線内に横位に連続する三角文と入り組み文を配している。両者とも胎土に多量の長石を含み器面の風化が著しい。9は深鉢形の口辺部に注口がつけられている。4・5は内折した口辺部に幅太の沈線をもつ。5の胴部は沈線間を連続刺突が垂下している。4は鉢、5は深鉢になろう。8は朝顔形の精製された鉢で、口縁端部に沈線を引き、横位の胴部区画内に縄文を転がしたうえ、菱形文を重ねている。外面にはミガキがみられる。

**SB103** (図版91)

6は内外面とも黒褐色を呈し胴部がくびれる深鉢で、深く太い沈線で渦巻き文を描き、縄文を相互施文している（Ⅲ期）。2・5は胴部中位がくびれる深鉢。3・4は碗形を呈する。3は口縁部に楕円文を配し、上下1対の刺突文の左右に三角区画文がみえる。1は内折する口辺部に極太な沈線を引いた深鉢で、胴部には沈線が垂下する（IV期）。

**SB104** (図版92)

1・2は朝顔形の深鉢で、口辺部に鎖状隆線と「8」字付文をもつ。胴部は三角形ないし菱形の幾何学文を描いている。両者とも内面は黒褐色を呈す（V期）。3～5は胴部中位が屈折する鉢ないし深鉢である。3は内折した口辺部に沈線が引かれ、外面はナデられている。一方、4・5は胴部中位の「8」字付文下に対弧文が描かれている（V期）。6は注口土器の把手部分。長石が多量に含まれている。7は蛇行する櫛歯条線が引かれた粗製深鉢。8は内折する口縁に楕円区画文を配し、その中に刺突や沈線を加えた鉢である。

**SB108** (図版92)

1・2は内折する口縁に幅太な沈線ないし刺突が加えられている（IV期）。3・5は胴部中位が屈折す

る深鉢であろう（IV期）。垂下する沈線間にLR縄文を施した8も深鉢形を呈する。6は肥厚した口辺部内面に対弧文がみられる鉢である。

**SB110** (図版71・92)

1は床面直上において8とともに押し潰された状態で出土した。口縁にむけて直線的に立ち上がる深鉢で、半截竹管状工具によって縦方向に条線が引かれており、内面には横方向にケズリ痕がみられる（III期）。2は小突起をもつ深鉢の口辺部で、3～5と同様、棒状工具による沈線で帯状部を描出している。3・5はLR縄文が充填される。11・14・15は内折する口辺部に横位の刺突列をもつ。6と7・10は同一個体で9とともに床面直上から出土している。いずれも棒状工具による沈線で帯状部を描出しているが、概して条線は浅くて弱い。7はわずかに口縁下を横走する隆線がみられる。16は重厚な作りの深鉢の口辺部で、胎土に多量の長石および石英を含む。口縁に螺旋状の隆帯をのせるが、口辺部以下は縄文のみである。一方、12はやや薄手で暗褐色を呈する。RL縄文を縦方向に転がして脇をナデている。

**SB551** (図版92)

1は口辺部がやや内向する深鉢で、内面は肥厚する。口辺部には断面三角の隆線が横走し、胴部は隆線による方形区画の上端に勾玉状の刺突を加え、以下条線を縦方向に充填している（I期）。8は単純な綾杉文。2・3・9は沈線区画内に短沈線を充填している。ただ、9の描線は指でナゾったごとく浅くて弱い。4・6・7はいずれも沈線区画内にLR縄文が縦走する。

**SB552** (図版93)

1・2・8・9は、口辺部に向かってほぼ直線的に開く深鉢である。8・9は、口辺部に鎖状隆線を一ないし数条巡らし、凹点を基準にして縦に短隆線が切る。1は胴上部に沈線で楕円形の、2は矩形のモチーフを描き、縄文を充填している。8・9などのように、口辺部内面にも凹点や数条の沈線がみられる（V期）。10もほぼ同形態の深鉢であるが、小突起を有し、縦の短隆線は頂部を越えて内面に及んでいる。鎖状隆線の直下には幅広な帯縄文を施す（V期）。3・7は胴部中位でくびれ、口縁部に向かって立ち上がる鉢である。7は内折した口辺部に沈線文と刻みをもち、8は胴上半部の無文部に鎖状隆線を配している。4～6は同一個体の大形深鉢である。口縁はおそらく4単位の波状を呈する。大ききの割りには器壁が薄い。口辺部には緻密なLR縄文を横位に施したうえ4条の沈線を巡らし、波頂部には小さく紡錘形のモチーフを下げて変化をつけている。口縁は面取りし、内面にも沈線を一条巡らせている（VI期か）。

**SB553** (図版93)

1・2は口辺部に向かって直線的に開き、口縁で内折する浅鉢である。外面は無文。内面にはやや幅広い沈線を数条巡らし、ところどころに「の」字文を配している。4・5は外面に帯縄文のある深鉢で、内面にも数条の沈線をもつ。7は碗形を呈する。3は注口土器の胴部中位、8は格子目状文をもつ半精製の深鉢である（VI期）。

**SB554** (図版93)

1は口縁を面取りした深鉢。沈線の内外に縄文はみられない。2・3は胴部中位で屈曲する鉢で、内折する口辺部に沈線と刺突文がある。4は2・3と同形態の胴下部である。5は一見複雑なモチーフだが、波頂部に円文を配し、口縁に沿って横長の楕円区画文がある。1条の沈線を挟んで胴部に磨り消し縄文を



描いている (IV期)。

**SB555** (図版71・72・93~95、PL42)

1は口辺部に向かって直線的に開き、口縁で内折する深鉢胴上半部で、炉脇の床面直上から出土している。3・4は同形態の下半部である。1は二山の小突起の両側面に刺突を穿ち、小突起間を沈線で結んでいる。胴上半部には、横走する3条の沈線を巡らしたうえ、LR縄文を充填している。この沈線は、波頂下およびその中間で縦沈線により階段状に区切られる。また、内面にも数条の沈線が施されている (VI期)。2も床面直上から出土した。内外面とも良く研磨された鉢で、底裏には経2本滑り1本越え左1本送りの網代がみられる。5は台付鉢で脚部に穿孔がある。6~22・44は、1や3・4とはほぼ同形態の深鉢である。16・22は口縁に小突起をもつ。6~9の胴部には、注口土器の胴部にみられる繊細な沈線や2条の沈線を絡ませた鎖状沈線が施されている。10~11は口辺部の鎖状隆線下に帯縄文をもつもの。13・16~18・22は、内面にも刺突文や沈線文などがみられる。19は浅鉢になるかもしれないが、外面が無文で内面に鋸歯文が施されている。23~27は口辺部で内曲する鉢である。胴上半部には数条の沈線を巡らせるが、26・27のように幅広い沈線間に縄文を充填させたものもある。内面には文様がない。これに対して、28・29の浅鉢は外面に文様がなく、内面に帯縄文が施される。28の内面には「S」字文が貼付けられる。32・33は注口土器の口辺部、30・31・34~36・46は胴部、38~41・43は注口部である。また、37・42も注口土器の把手部であろう。45は胴部中位でくびれる鉢で、口辺の屈曲部にみられる縄文地の楕円文は縁帯土器系統の特色をもつ。47・48は壺の形態をとるのであろうか。48は頂部に逆「の」字文がある。50は沈線下に格子目状沈線をもつ半精製の深鉢である。

**SB557** (図版82・95、PL48)

1・4・10は丸い胴部に続いて直立ないし外反する口辺部の鉢である。1は口辺部に太い沈線で円文を配し、その間を横あるいは斜めの沈線で結んで縄文を充填している。4・10は口辺部に「8」字の橋状把手をもつ。10は胴部に刺突文がみられ、三十稻場系統の特色を示す (III期)。2はおそらく4単位の大突起を有する深鉢で、内折する口辺部には刺突を連続させる。胴部は曲直線間に縄文が充填されている。5~8・11・12は胴部中位で緩やかにくびれる深鉢の胴上半部、9は屈曲をもつ深鉢の胴下半部である。垂下する沈線間に刺突を配したのもや、これが鎖状隆線に置き換わっているもの、その他、ワラビ手状文や対弧文・磨り消し縄文など、胴部に描かれる文様は多様である。口辺部には一様に沈線か刺突文がみられる (IV期)。13・16は口縁に向かって直線的に立ち上がる単純な器形の深鉢である。13の胴部には条線が蛇行垂下している。14も同様な深鉢である。口辺部から垂下した沈線間に縄文を充填させている。

**SB558** (図版72・96、PL42)

1は胴部中位で屈曲する小形の鉢で、文様はない。2は胴部中位で緩やかにくびれる深鉢。3も深鉢だが逆に胴部はやや膨らむ。4は口辺部で「く」字に内折したのち、口縁に向かってやや外反しながら立ち上がる鉢である。いずれもIII期に比定されるが、中でも3は最古に、4は最新に位置づく。6~9・11・14は胴部中位で屈曲する鉢で、口辺部には横位の沈線文のほか対弧文・刺突文・螺旋状沈線をもつ。胴上半部には鎖状隆線が垂下し、胴部中位のくびれに「8」字浮文ある鎖状隆線が巡る。10・12・15~17は、口縁に向かって単純に開く深鉢である。口辺部に一ないし数条の鎖状隆線があり、内面にも沈線が巡る。胴上半部には沈線で幾何学的なモチーフを描いたのち、縄文を充填している (V期)。18は注口土器の胴上半部、19は同じく把手である。

## SB559 (図版72・96・97、PL42)

1は胴部中位で緩やかにくびれ、口辺部に向かって直線的に開く大形の鉢である。口辺部がやや肥厚し、口縁はややとがっている。胴部中位には2条の沈線を巡らせたうえ「8」字浮文を貼付し、胴下半部は縦方向に直曲線を配して、縄文を充填している(V期)。3・5・6・8・9・11・12・15~18も1と同様、胴部中位でくびれ口辺部に向かって直線的に開く鉢ないし深鉢である。3の口辺部には対弧文がみられる。4の浅鉢は口辺部内面に凹点と横位の太沈線を巡らして、以下に隆線で渦巻き文を配している。13は口縁に向かって内湾している鉢で、胴部には縄文が施されている。2は浅鉢形注口土器の注口部、19は壺形注口土器の胴上半部である。

## SB560 (図版72・78・97、PL43)

1は炉の南側から出土した埴甕No.1、3は炉の北側の埴甕No.2である。1は胴部中位で緩やかにくびれてから口辺部へ向かって開く深鉢、3は底部から胴部中位に向けて開き口辺部に至って内湾する深鉢である。3の胴部は指頭により浅くナゾったような沈線で、懸垂文や区画文を描いた中を綾杉文で充填している。底裏には経2本潜り4本越え左1本送り網代がみられる(II期)2の底裏には経2本潜り1本越え左1本送り網代ともに、広葉樹の葉脈も印されている。5~8・10もこれらと同系統である。9は波状口縁に沿って隆線を巡らせ、以下にRL縄文を施している。11・12には平口縁の直下に隆線を巡らし、以下に、12は簡略化された勾玉文を、11は沈線区画内縄文を施している。13・16は沈線区画内に縄文を充填しているが、無文部が目立つ。15・17は逆に、無文部と縄文施文部との間隔がほとんど等しいため、ネガ・ポジの変換が容易である。14・18は2本の沈線内に刺突を連続させ、19は隆線上に刺突をもつ。7~19はIII期。

## SB561 (図版72・97)

1・2は口縁に向かってやや外反ぎみに立ち上がる鉢である。いずれも炉内に敷かれていた。1は4単位の波状口縁、2は平口縁である。外面は無文。やや肥厚させた口辺部内面には縄文を施したうえ、刺突を起点として、左右に対弧文・多条沈線・楕円文を配している(V期)。3は、4・5とともに胴部中位で屈曲し口縁に向かって開く鉢で、波頂部を穿孔し、内外面とも周囲に渦巻き文を描いている。6・7は口縁に向けて単純に立ち上がる深鉢である。6の口辺部には5条の刻み隆線がみられる。

## SB562 (図版74・98、PL44)

1は張り出し部の埴甕で、この中から2が出土した。1は胴上部で緩やかにくびれ、口縁に向かってやや内湾ぎみに立ち上がる大形深鉢である。外面には粗雑な縄文が全面に施されている。胴下部の膨らみから上は、2次の焼成を受けて黒色の煤が付着している(III期)。2・8は太沈線で描かれた直曲線の間を、交互に縄文を充填させた深鉢である。11・14は同一個体で、隆線による区画内に縄文を充填している。これは隆線にかかっている。10はこの区画を細沈線で行なっている。15・16はかなり簡略化された勾玉文と懸垂文が一体化してしまったもので、懸垂区画の内外に、やはり間のあいた綾杉文を充填している。13は胴上部に向けて直線的に開き、口辺部で「く」字に内折する鉢で、口辺部の沈線間にLR縄文と刺突列がある。

## SB563 (図版98・99)

1・2は簡略化された勾玉文や綾杉文ある深鉢。4は口辺部の微隆線間に2列の刺突がみえる。5は口縁直下の微隆線以下に磨り消し縄文が描かれている(III期)。6は胴部中位で膨らみ、口辺部に向かって

内曲するが、口縁に至って外反する深鉢形の注口土器である。胴上部には横方向の橋状把手が付く。9は口縁に向かって直線的に立ち上がる深鉢で、胴上半部の幅広い帯縄文間に「U」字の沈線を垂下させ、両側の対弧文との間に縄文を充填している。

**SB566** (図版73・99・100, PL43)

1・4・5は胴部中位でくびれ、口辺部に向けて直線的に開く鉢ないし深鉢である。いずれも床面直上から出土している。1は胴下半部を懸垂文で分割し、懸垂文相互を斜めの多条沈線が結んでいる。4は斜沈線で結ばれていた渦巻文が簡略化されて、横「S」字の文様になっている。5は帯縄文間を懸垂文あるいは対弧文が分割している(V期)。3・6は口縁に向けて単純に立ち上がる深鉢である。19~23・26~30・36~38も同様の器形であろう。3の口縁は3単位の波状を呈している。口辺部には2ないし3条の刻み隆線が巡り、縦の短隆線によって区切られる。胴上半部は、3が上下の沈線間に三角形を重畳させており、4は三角形の帯縄文を交互に連続させている。5・6は口辺部内面にも沈線が巡っている。7・10は、口縁に向けて単純に開く鉢である。7の胴上半部には多条の沈線が巡り、これを縦短沈線が階段状に区切っている。8は口縁に3単位の小突起があり、その下の口辺部には、盲孔を中心にして重環文を配し、左右に3本沈線に挟まれた斜め短沈線を連続させる。胴部にも4本単位の弧状沈線多用し、空白部を斜め短沈線をもつ楕円文などで埋めている。24・25は胴部中位で屈曲する鉢の口縁から胴上半部、31~33は、口縁に向けて内湾する鉢である。また、34・39~41は口辺部内面しか文様がなく、浅鉢になろう。35は口縁に沿って刺突列が並び、42は口辺部の微隆線に沿って刺突をもつ。43は壺形土器の頸部付近で、断面かまぼこ形の隆線上に刺突がある。2は注口土器の把手部、45・46は注口部である。

**SB570** (図版74・100)

1は口縁に向かって直線的に立ち上がる深鉢、2は胴部がやや膨らみをもつ深鉢の、いずれも胴下半部である。4は注口付浅鉢の突起部で、内面にも文様がある。5はSB561の3と同類型。6・10~12は口縁に向かって直線的に立ち上がる深鉢、7・9は胴部中位で屈曲し口縁に向かって開く鉢ないしは深鉢である(V期)。14は口辺部の刻み隆線以下が無文の粗製深鉢である。13は注口土器の把手部であろう。

**SB571** (図版100・101)

1・4・7~13は、口縁に向かって単純に立ち上がる鉢ないし深鉢である。胴上半部には数条の沈線あるいは帯縄文を巡らせるほか、内面にも沈線がみられる。外面の帯縄文は縦の短沈線で階段上に区切られるが、8のように横方向の帯縄文と融合した曲線文で区切られるものもある(VI期)。2は口縁に向けてやや内湾する鉢、3・5・6は浅鉢である。14は注口土器の胴部、15は壺形になろう。16は胴部中位のくびれに刺突列がみられる。17は口辺部の沈線下に格子目状文を施した半粗製の深鉢である。

**SB572** (図版74・101, PL44)

1は埋甕で典型的なI期の土器である。胴部中位で緩やかにくびれ、口辺部に向けて内湾ぎみに立ち上がり、口縁で直立する深鉢である。口縁は4単位の小波状を呈する。口辺部は、口縁の形態に沿って指距による浅広な沈線を巡らせている。胴上半部には、楕円区画文と変形「U」字文を交互に配し、楕円形区画文内にLR縄文を充填している。胴下半部は、逆「U」字文とワラビ手状懸垂文を交互に配して、逆「U」字文内の上部に縄文を施している。4も小波状を呈する深鉢で、口辺部文様帯内に横位の区画文をもつ。7は口縁を内側に折っている。口辺部には隆線で渦巻き文を配し、これから延びた横位の隆線区画

内には縦沈線を充填させている。

**SB573** (図版101・102)

1は深鉢の波頂部で、隆線による渦巻き文下に綾杉文がある(Ⅰ期)。2は口辺部に横位の区画文をもつ深鉢、3・4ははや内折した口辺部以下に縄文が施されている(Ⅰ期)。7は両耳壺の把手部である。6・8は胴部中位でややくびれる深鉢で、6は環状突起があり、8は波頂部に穿孔をもつ(Ⅲ期)。9は胴部中位で屈曲し口辺部に向かって開く鉢で、内折した口辺部に盲孔をもつ沈線が引かれている。10も胴部中位でくびれる深鉢である(Ⅳ期)。12は壺、15は鉢であろう。

**SB574** (図版102)

1は口辺無文部を隆線で区画し、以下に縄文を施した両耳壺である(Ⅱ期)。6は平口縁に沿った隆線下に縄文がみえる。2・3の綾杉文は比較的整っているが、4には簡略化された勾玉文があり、5ではそれが刺突化している。

**SB578** (図版102)

1・2ともに内折した口辺部に、凹点もしくは幅広い沈線を横位に巡らせている(Ⅳ期)。3は胴部中位で緩やかにくびれ、口縁に向かって開く深鉢の胴上半部であろう。

**SB580** (図版74・102・103、PL45)

1は口辺部に向かって内湾ぎみに開く深鉢である。口辺部や胴部の区画文や懸垂文は、指頭状の浅い沈線である。胴部の区画文内には雨垂状の列点文が充填されている(Ⅱ期)。3～13は、胴部中位あるいは上部で緩やかにくびれ、口辺部が内湾ぎみに立ち上がる深鉢である。3・4は平口縁で口辺部の横位区画文内に縄文を充填させているが、9は口辺部文様帯を欠き、13になると胴部の縦位区画もない。一方、5～8・10～12は口縁が小波状を呈する。8・10はわずかながら口辺部文様帯を残すが、7・11・12は胴上半部の文様が口辺部に押し上げられている。5・6は口縁に沿って隆線を巡らせ、5は直下にLR縄文を横に転がしたのち、以下を縦に転がしている。6は隆線直下からすぐにLR縄文を縦に施している(Ⅰ期)。14・15は胴部中位で強くくびれ、口辺部に向けて内湾しながら立ち上がる深鉢で、尖塔状の大突起に特徴がある。この大突起の内外には穿孔がみられ、口縁直下を巡る隆線が突起の頂部に向けてブリッジを作っている。16は2本単位の隆線による「J」字、あるいは渦巻状のモチーフ間に、縄文を充填している。また17・18の場合は、縄文の代わりに綾杉文を施している。20は「U」字あるいは逆「U」字の単位文内に縄文を充填させており、21～23は帯縄文化している。

**SB581** (図版103・104)

1は胴部で膨らみ、口縁部に向けて強く内湾する鉢である。胴部を上下に帯縄文で区切り、区画内に小渦巻き文が垂下するとともに、下端の帯縄文の下にも小「J」字文が付いている。中津系統の特色を示している(Ⅲ期)。2～4・20は2本単位の沈線による帯状部に、3・20は縄文を、4は列点文を充填している。5～7・15は、胴部中位で強くくびれ、口縁に向かって大きく開く深鉢である。口縁は波状を呈し頂部に穿孔がある。8の口辺部は内折し、2本沈線間に刺突が並ぶ。15は隆線で胴上半部と口辺部を分け、口辺部には縄文を施したうえ2条の刺突列がある。8～10・12・13は直線的に開きながら、口辺部で「く」字に内折する鉢で、中に注口が付く場合がある。文様は内折した口辺部に集約され、楕円区画内に列点を